

こ う ね
高 根 遺 跡

—平成3年度発掘調査報告書—



1992.3

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書**33**
A Report on the Archaeological Research
in Miyako City, No.33

高根遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

岩手県宮古市教育委員会
The Miyako Board of Education
Miyako, Iwate, Japan

序 文

岩手県宮古市は、陸中海岸国立公園のほぼ中央部に位置する風光明媚の地であります。古来より海、山、河の自然に恵まれており、貝塚をはじめとする縄文時代から中・近世に至るまでの数多くの遺跡が確認されています。

遺跡は、私たちの先人から受け継いで来た貴重な文化遺産であり、正しい理解のもとに後世の人々に伝えてゆくのが、私たちに課せられた重要な責務と考えております。しかしながら、近年、遺跡をとりまく情勢は、宮古市はもとより全国的にもきびしいものとなり、各種開発事業の代償として数多くの遺跡が消滅しつつあります。

本書は、社会福祉法人若竹会による「わかたけ学園」建設工事に先だち、止むを得ず破壊をまぬがれない建物建設の範囲内について、記録保存を前提として実施した、高根遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本遺跡においては、昭和63年度にもやはり緊急発掘調査として第1次の調査を行っており、今回の調査は、第2次調査となります。調査の結果、縄文時代中期前葉期の堅穴住居跡などの遺構や土砂流出の自然災害の痕跡が検出されました。遺物も縄文時代中期前～中葉にかけての土器、石器、土製品などが出土しており、第1次調査の結果ともあわせ、高根遺跡の集落についての概要が明らかになりました。

縄文時代中期前葉～中葉における集落の在り方をはじめ、当該期における遺構・遺物についての数多くの貴重な資料が得られたものと思っています。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に際しましては、社会福祉法人若竹会（理事長 及川新）の全面的なご協力、ご支援を賜わり、その他、地元の関係者各位に対し記して謝意を申し上げます。

そして、本書が、多くの方々に活用され遺跡の保護と理解並びに学術研究の一助となれば、幸いです。

平成4年3月

宮古市教育委員会

教育長 佐藤勇逸

例 言

1. 本書は岩手県宮古市大字山口地内に所在する高根遺跡の平成3年度に実施した第2次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は社会福祉法人若竹会（理事長 及川新）の依頼を受け、宮古市教育委員会（教育長 佐藤勇逸）が主体となり実施した。
3. 発掘調査及び本書の作成は鎌田が担当し、高橋、阿部がこれを補佐した。
4. 調査の座標は任意に設定したもので、磁北よりN-13°30'-Eである。
5. 高さは標高値をそのまま使用した。
6. 土層の観察に際しては『新版標準土色帖』（1967 小山正忠・竹原秀雄）を参考とした。
7. 本書における遺構・遺物の表現は次の通りとした。



8. 発掘調査並びに本書作成にあたり、次の方々からの御教示、御指導をいただいた。記して感謝申し上げます。(敬称略、順不同)
相原 康二（岩手県教育委員会文化課） 岸 昌一（宮古市教育委員会市史編さん室）
高橋 信雄（岩手県教育委員会文化課） 竹下 将男（宮古市教育委員会市史編さん室）
熊谷 常正（岩手県教育委員会文化課） 斉藤 英樹（宮古市文化財保護審議委員）
中村 英俊（岩手県教育委員会文化課）
小田野哲憲（岩手県埋蔵文化財センター）
高橋 義介（岩手県埋蔵文化財センター）
9. 本文中における引用文献は次の通り略記した。(いずれも宮古市教育委員会刊行)
1983～86 『宮古市分布調査報告書』 武田将男→「分布調査1～4」
1986 『宮古市遺跡分布図 昭和63年度版』 武田将男→「分布図86」
1987～91 『崎山遺跡群I～V 昭和61年度～平成2年度発掘調査概報』
高橋憲太郎→「崎山遺跡群I～V」
1989 『高根遺跡 昭和63年度発掘調査報告書』 鎌田祐二→「高根89」
1989 『トロノ木I遺跡 第1次～第7次発掘調査報告書』
高橋憲太郎→「トロノ木I 89」
10. 本遺跡の調査においては、一部、その概要などが公表されているが、喰い違いがある場合には、本報告書を以って正しいものとする。

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 調査経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要旨	1
3. 調査体制	2
II 遺跡をとりまく環境	4
1. 遺跡の位置と立地	4
2. 周辺の遺跡	4
III 調査内容	8
1. 遺構・遺物の検出状況	8
2. 基本層序	8
3. 検出した遺構・遺物	12
IV 調査のまとめ	113
1. 遺構と土砂流出跡について	113
2. 高根遺跡の集落について	113
3. 土器について	114
4. 石器、石製品、土製品について	116
5. 調査のまとめ	116

挿 図 目 次

第1図	位置図	3
第2図	高根遺跡と周辺の遺跡	5
第3図	地形分類図	6
第4図	調査区と周辺地形図	7
第5図	全体図（礫検出状況）	9
第6図	全体図（遺構配置図）	10
第7図	層序図	11
第8図	第1号竪穴住居跡	13
第9図	第1号竪穴住居跡床面ピット断面図	14
第10図	第1号竪穴住居跡炉跡	15
第11図	第1号埋設土器平面図、断面図	16
第12図	第1号竪穴住居跡出土土器①	18
第13図	第1号竪穴住居跡出土土器②、第1号埋設土器	19
第14図	第1号竪穴住居跡出土土器③	20
第15図	第1号竪穴住居跡出土土器④	21
第16図	第1号竪穴住居跡出土石器①	22
第17図	第1号竪穴住居跡出土石器②	23
第18図	第1号土壌跡	24
第19図	第2号竪穴住居跡	25
第20図	第3号竪穴住居跡	27
第21図	第2号竪穴住居跡出土土器	28
第22図	第3号竪穴住居跡出土土器	28
第23図	第4号竪穴住居跡	30
第24図	第4号竪穴住居跡出土土器	31
第25図	第5号竪穴住居跡	32
第26図	第6号竪穴住居跡	34
第27図	第6号竪穴住居跡出土土器	35
第28図	第7号竪穴住居跡及び周辺のピット	37
第29図	第7号竪穴住居跡出土土器①	38
第30図	第7号竪穴住居跡出土土器②	39
第31図	第3号、第4号、第6号竪穴住居跡出土石器	39
第32図	第6号、第7号竪穴住居跡出土石器	40
第33図	竪穴住居跡以外ピット出土遺物	42
第34図	調査区東南部ピット群	43
第35図	調査区東南部ピット群断面	44

第36図	第2号埋設土器平面図、断面図	45
第37図	第2号埋設土器	46
第38図	調査区北東部ピット群	47
第39図	土砂流出跡	49
第40図	土砂流出跡断面	50
第41図	土砂流出跡(M1)出土遺物①	53
第42図	土砂流出跡(M1)出土遺物②	54
第43図	土砂流出跡(M2)出土遺物③	55
第44図	土砂流出跡(M3)出土遺物④	56
第45図	土砂流出跡(M1)出土遺物⑤	57
第46図	土砂流出跡(M1、M2、M3)出土遺物⑥	58
第47図	土砂流出跡(M1)出土遺物⑦	59
第48図	南西区遺構外出土遺物①	66
第49図	南西区遺構外出土遺物②	67
第50図	南西区遺構外出土遺物③	68
第51図	南西区遺構外出土遺物④	69
第52図	南西区遺構外出土遺物⑤	70
第53図	南西区遺構外出土遺物⑥	71
第54図	南西区遺構外出土遺物⑦	72
第55図	南西区遺構外出土遺物⑧	73
第56図	東南区遺構外出土遺物⑨	75
第57図	東南区遺構外出土遺物⑩	76
第58図	東南区遺構外出土遺物⑪	77
第59図	北西区遺構外出土遺物⑫	79
第60図	北西区遺構外出土遺物⑬	80
第61図	北西区遺構外出土遺物⑭	81
第62図	北西区遺構外出土遺物⑮	82
第63図	北西区遺構外出土遺物⑯	83
第64図	北西区遺構外出土遺物⑰	84
第65図	北西区遺構外出土遺物⑱	85
第66図	北西区遺構外出土遺物⑲	86
第67図	北西区遺構外出土遺物⑳	87
第68図	北西区遺構外出土遺物㉑	88
第69図	北東区遺構外出土遺物㉒	90
第70図	北東区遺構外出土遺物㉓	91
第71図	北側中央区遺構外出土遺物㉔	92
第72図	北側中央区遺構外出土遺物㉕	94
第73図	北側中央区遺構外出土遺物㉖	95

第74図	北側中央区遺構外出土遺物⑳	96
第75図	北側中央区遺構外出土遺物㉑	97
第76図	遺構外出土遺物㉒	98
第77図	北東区遺構外出土遺物㉓	99
第78図	北東区遺構外出土遺物㉔	100
第79図	北側中央区遺構外出土遺物㉕	101
第80図	北東区遺構外出土遺物㉖	102
第81図	北東区遺構外出土遺物㉗	103
第82図	北東区遺構外出土遺物㉘	104
第83図	北東区遺構外出土遺物㉙	105
第84図	遺構外出土遺物㉚	106
第85図	遺構外出土遺物㉛	107
第86図	遺構外出土遺物㉜	108
第87図	遺構外出土遺物㉝	109
第88図	扁平円礫の計測について	110
第89図	扁平円礫計測図	111
第90図	扁平石器計測図	112
第91図	第1次・2次調査遺構配置図	115

写真図版目次

- 第1図版 調査区の状況、同左（遺構集中区）
第2図版 土砂（礫）流出状況、土砂流出跡
第3図版 土砂の流出跡と竪穴住居跡、土砂の流出状況（東南区）
第4図版 土砂の流出状況（中央部）
第5図版 第1号～4号竪穴住居跡（完掘）、第1号竪穴住居跡（完掘）
第6図版 第1号竪穴住居跡（土層断面）①、同左②
第7図版 第1号竪穴住居跡石囲炉、同左炉内の土器片出土状況
第8図版 第1号埋設土器（断面）、同左（完掘）
第9図版 第1号土壙跡（土層断面）、同左（完掘）
第10図版 第3号竪穴住居跡（土層断面）、同左（完掘）
第11図版 第4号竪穴住居跡（土層断面）、第6号竪穴住居跡（完掘）
第12図版 第2号埋設土器（完掘）、同左（断面）
第13図版 南西区土器出土状況①、同左②
第14図版 第1号竪穴住居跡出土土器（第12図1）、同左（第12図2）
第15図版 第1号竪穴住居跡出土土器（第12図3）、同左石器出土状況（第16図120）
第16図版 遺構外出土土器（第48図10）、同左（第49図11）
第17図版 遺構外出土土器（第48図1）、同左（第60図207）
第18図版 遺構外出土土器（第56図140）、同左（第62図246）
第19図版 遺構外出土土製品（第86図）、遺構外出土土製品（第87図）
第20図版 遺構外出土石製品（第87図582）、発掘体験学習風景（山口小学校児童）

付表目次

- 第1表 竪穴住居跡以外のピット計測値一覧表……………41
第2表 遺構外出土土器分類表……………61

I 調査経過

1. 調査に至る経過

高根遺跡は、宮古市街地の北西部に位置し宮古市の遺跡コードL G 23-1253、岩手県の遺跡コードL G 23-1264として登録された周知の遺跡である。当遺跡においては、昭和63年（1988）年5月に老人保健施設建設に先立ち緊急発掘調査が実施されており、多数の遺構・遺物が出土している。

周知の遺跡

さて、この度、平成2年12月に社会福祉法人若竹会（理事長 及川新）より前述の老人保健健康施設の北側に社会福祉施設「わかたけ学園」を建設したいという届出がなされた。これを受け宮古市教育委員会は、申請者と協議を重ねた結果、記録保存を前提とした緊急の発掘調査を実施することで協定を取り交わし、平成3年4月8日より宮古市教育委員会が主体となり、調査を開始した。

緊急発掘調査

2. 調査要旨

昭和63年度の調査を第1次調査とし、今回の調査を第2次調査とする。

(1)第1次調査

調査地点 宮古市大字山口第11地割字赤畑

第1次調査

調査原因 老人保健施設「桜ヶ丘」建設（社団医療法人新和会 理事長 及川新）

調査面積 1500㎡

調査期間 昭和63年5月12日～同年8月4日

調査担当 高橋憲太郎、鎌田祐二（主担当）、盛合義信

検出遺構 遺跡の南側にあたり、フラスコピットや集石を伴う土壇跡など土壇跡112基、屋外石囲炉2基を検出している。縄文時代中期前～中葉（大木7～8式期）にかけて形成されたものである。

検出遺物 遺物の大半は、縄文時代中期のものである。土器以外には、石器やドーナツ状の形状を呈する土製品1点が出土しているが、量的には少ない。

報告書等 『高根89』が刊行されている。

『高根89』

(2)第2次調査

調査地点 宮古市大字山口第11地割字赤畑64番地1

第2次調査

調査原因 社会福祉施設「わかたけ学園」建設（社会福祉法人若竹会 理事長 及川新）

調査面積 613㎡

調査期間 平成3年4月8日～同年7月20日

調査担当 高橋憲太郎、鎌田祐二（主担当）、阿部豊

検出遺構 第1次調査地点より北側に約10mに位置する部分で、第1次調査同様縄文時代中期前～中葉（大木7～8式期）に伴う竪穴住居跡7棟、埋設土器を伴う土壇跡2

基、土壌跡、柱穴状の小ピット多数のほか、背後の山地帯より流出したと考えられる大～小の花崗岩の角礫を大量に含む溝状の大規模な土砂の流出跡などを検出した。

検出遺物 遺物の大半は、縄文時代中期の土器、石器である。土器は、中期前～中葉（大木7～8式期）を主体とするが、わずかながら胎土に植物繊維を含む前期の土器が出土している。石器は、石鏃などを中心とする剥片石器や敲打磨石を中心とする礫石器類が出土している。土器、石器以外では、土製円盤や斧状の土製品、垂飾品と思われる石製品が出土している。

3. 調査体制

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	佐藤勇逸
調査協力	社会福祉法人若竹会	理事長	及川新
調査総括	宮古市教育委員会社会教育課長	大森	翼
事務総括	〃	〃	係長 山崎 吉章
事務担当	〃	〃	主任 坂下 昇
調査担当	〃	〃	主事 高橋憲太郎
〃	〃	〃	〃 鎌田 祐二（主担当）
〃	〃	〃	〃 鶴田 均
〃	〃	埋蔵文化財調査員	阿部 豊

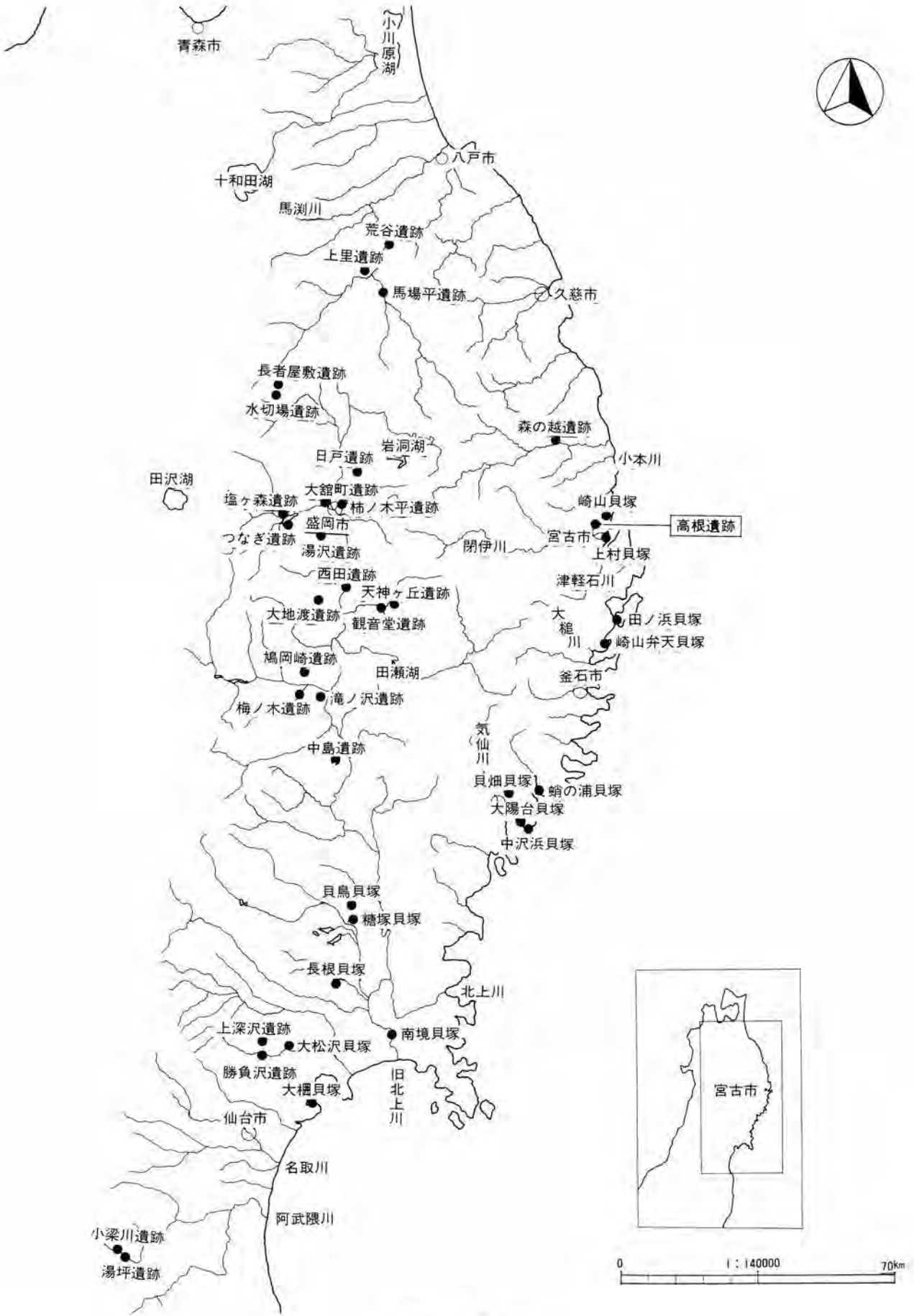
なお、調査にあたっては次の各位の多大なるご協力をいただいた。（敬称略、順不同）

《発掘調査》 木村博 刈屋昭三 佐々木清 今津東一 斎藤貞子 藤谷晶子 館崎禮子
菅原テルミ

《整理作業》 館崎禮子 藤谷晶子 吉田昭 木村博 刈屋昭三

発掘体験学習

また、当遺跡発掘調査期間中の4月30日には、宮古市立山口小学校6年生児童98名と担任の教諭らによる発掘体験学習を実施している。中には、黒曜石製の石器や実測可能な土器を発見する子もおり、児童らの遺跡や自分達の住む地域の歴史や文化財への関心が高まり、今後の文化財保護行政の在り方のひとつとして貴重な経験であったと思っている。



第1図 位置図

II 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の位置と立地

本州最東端

宮古市は岩手県沿岸部のほぼ中央部に位置し、東は太平洋に面している。市域は総面積338.47㎡をはかり、北上山系に源を発する閉伊川と宮古湾奥部に注ぎ込む津軽石川の2大河川が存在する。市域東部には北方向に突出する重茂半島があり、本州最東端部にあたる。

高根遺跡は、市中心部の北西部に位置し閉伊川の支流である山口川流域に所在する。山口川は、市街地に入るまでの間は川幅も狭く山地帯を削り取る様な比較的急流となっており、その流域には小規模な崖錐性の扇状地や山地帯にせまる様に緩やかな斜面を形成しているが、いずれも面積的には大きくなく、南北に細長くなっている。即ち、標高400~200m前後の山地帯より急激に極く比高差を有す狭い部分に数多くの遺跡が川沿いに立地している。高根遺跡も同様な立地条件で山口川と山地帯の間の南北に細長く狭まい緩斜面に立地する。昭和63年度の第1次調査は、この内でも南側の低い面を調査しており、今回は、その北側にわずかに広がっている台地状の扇状地部分の一部の調査である。

2. 周辺の遺跡

赤畑遺跡

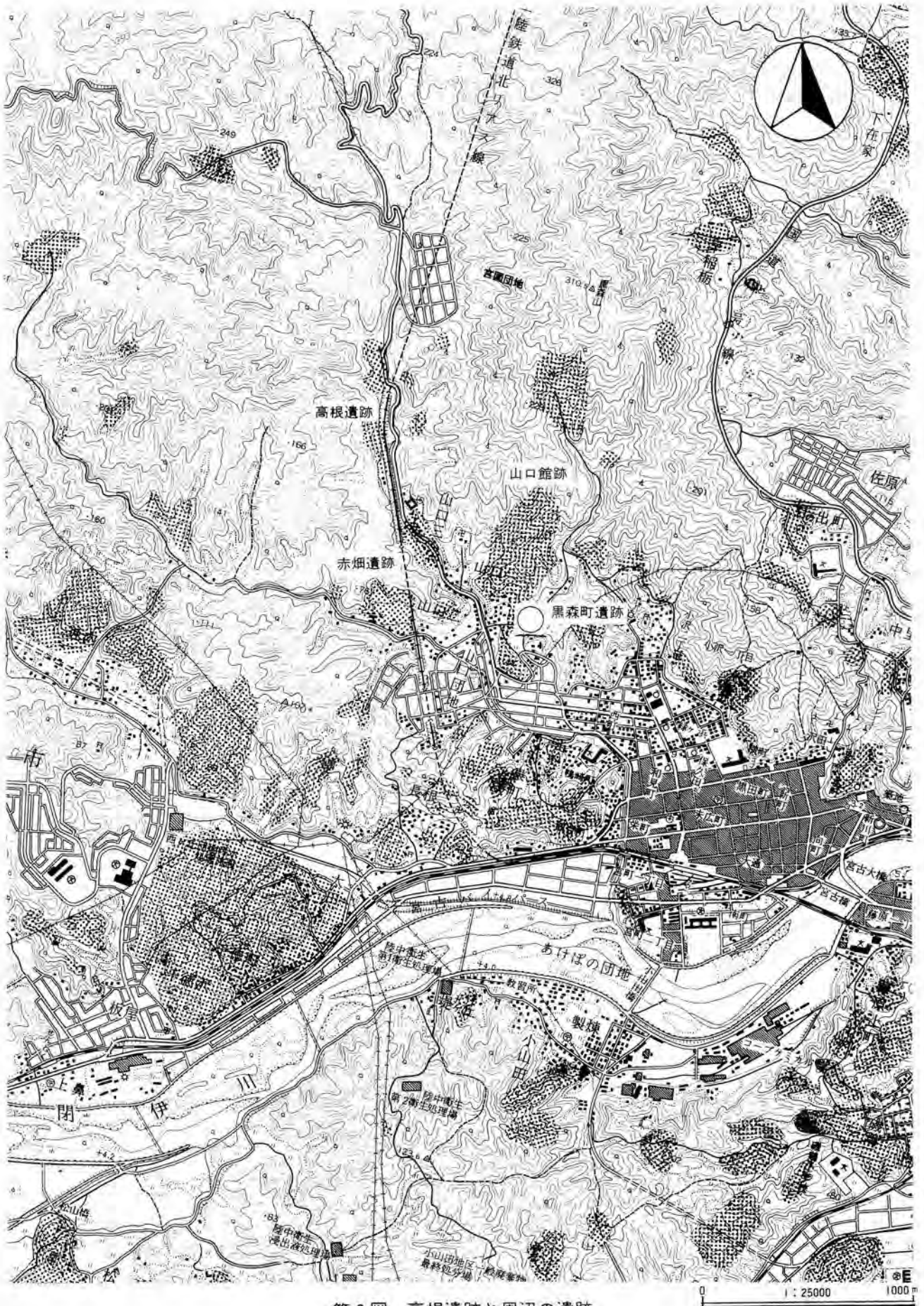
高根遺跡の周辺には、10数ヶ所の遺跡の存在が確認されているが、このうち、本遺跡の南に位置する赤畑遺跡は、昭和62年、63年の2ヶ年にわたり県道改良工事に先だつ発掘調査が県埋蔵文化財センターにより実施されており、『赤畑87、88』が刊行されている。それらによれば中世に所属すると考えられる竪穴住居跡2棟、土壙跡や溝跡などの遺構のほか、多量の縄文時代の土器片（早~晩期で中期が主体）、石器や土師器、鉄滓等の遺物が出土しており、付近に当該期の遺構の存在を想定している。

山口館跡

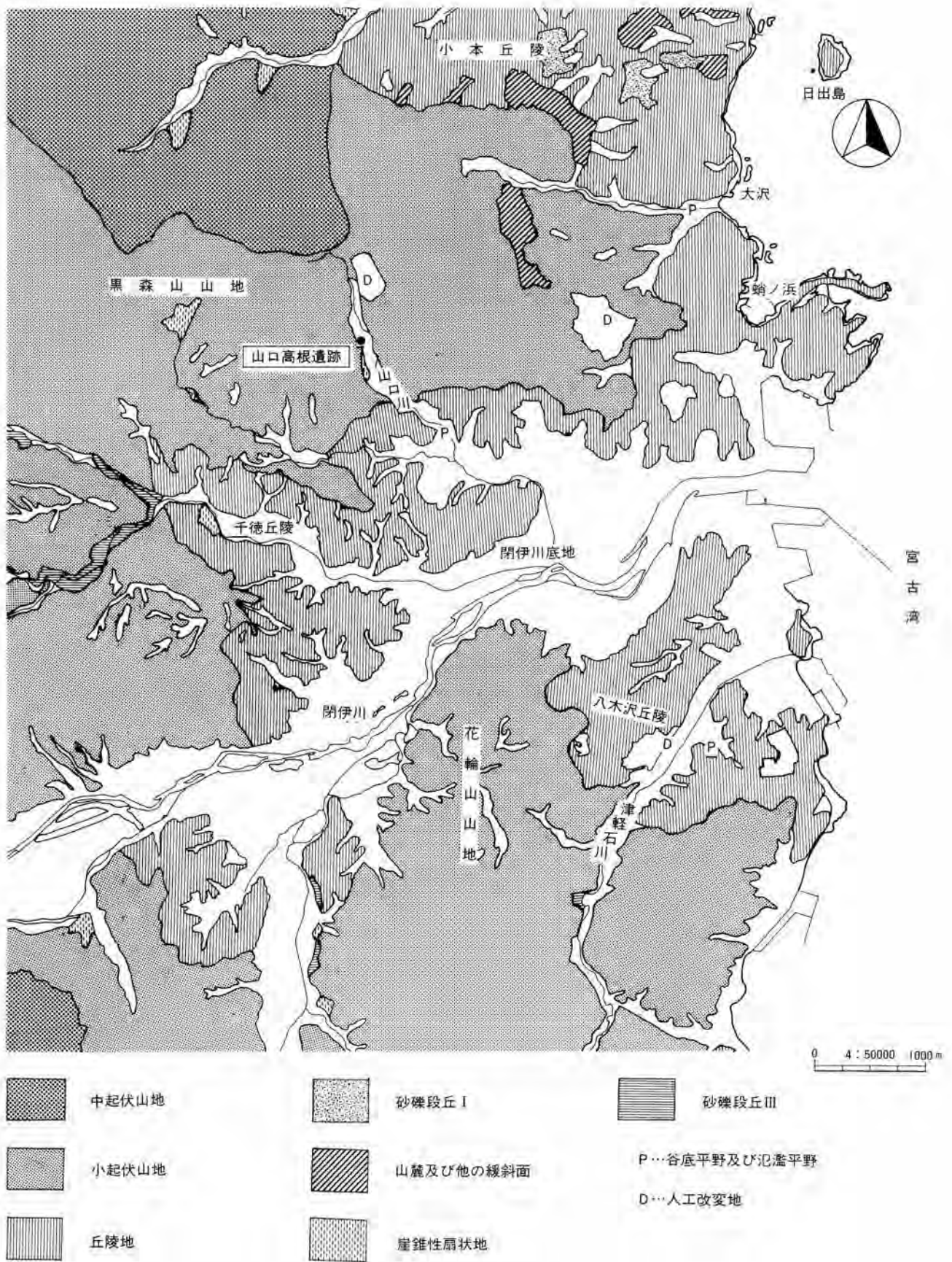
山口川流域で最大の遺跡は、山口館跡で南北朝~戦国時代の館跡で比較的平場などの保存状況が良好である。

黒森町遺跡

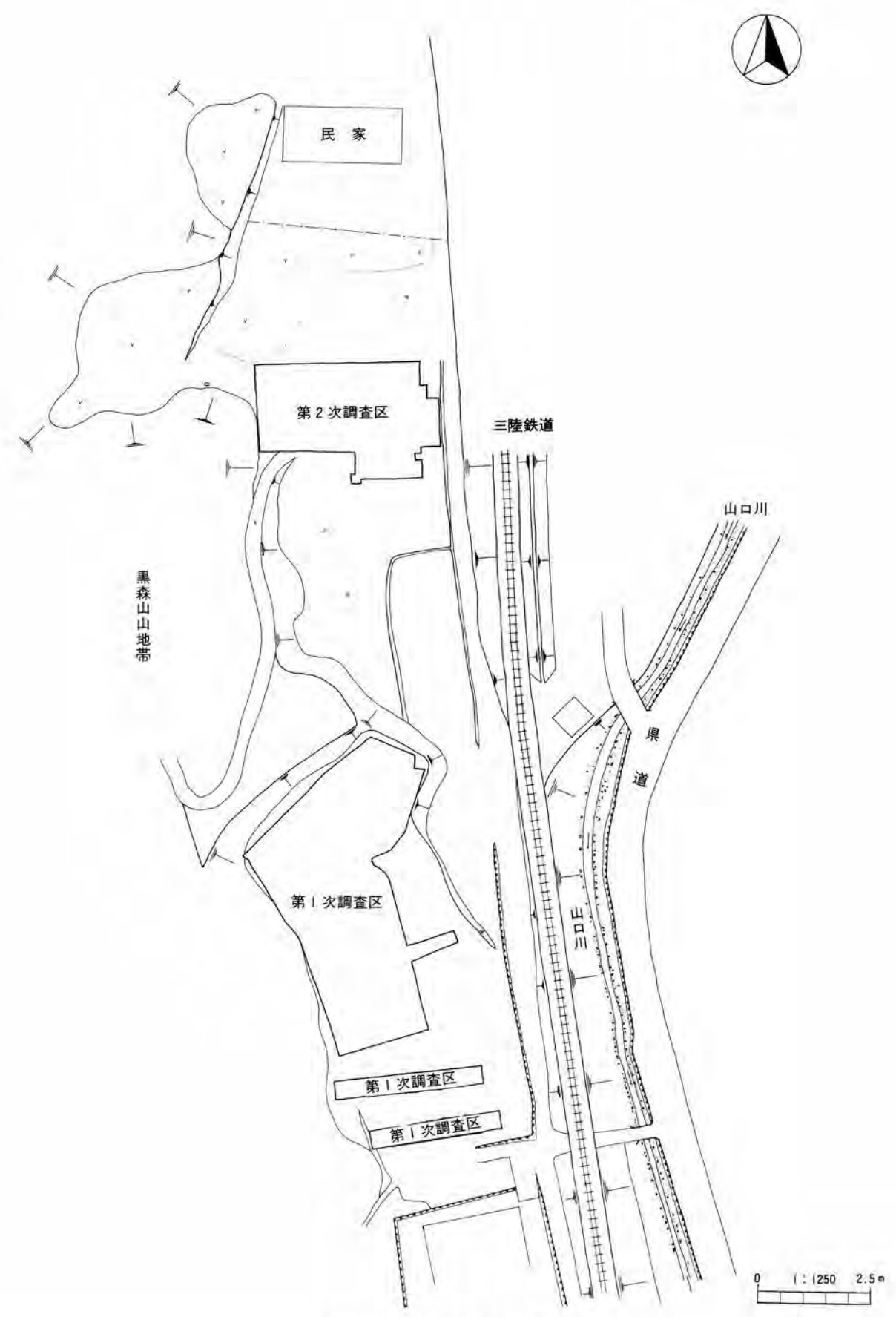
これ以外にも、本遺跡の周辺には多くの遺跡が存在するが、分布調査などの結果をみても畑地となっている所では遺物の散布状態が極めて濃い遺跡が知られている。時期的には、上流域では縄文時代の遺跡が多く下流に下るに従い、古代・中世・近世の遺跡が存在する。特に、今年度は、黒森町遺跡の発掘調査で江戸時代中~末期の墓塚跡や鑄造関係の炉跡などの遺構や多量の陶磁器類が出土している（今年度調査報告書刊行予定）。



第2図 高根遺跡と周辺の遺跡



第3図 地形分類図



第4図 調査区と周辺の地形

III 調査内容

1. 遺構・遺物の検出状況（第5図～第6図）

今回の調査は、建物敷地部分のみを対象としたもので東西約3.5m、南北約2.5mと東西に長いほぼ長方形の調査区である。調査区のほぼ中央ラインに十字に直交する土層観察用のベルトを残し、調査区壁の土層観察と合せ基本層序とした。

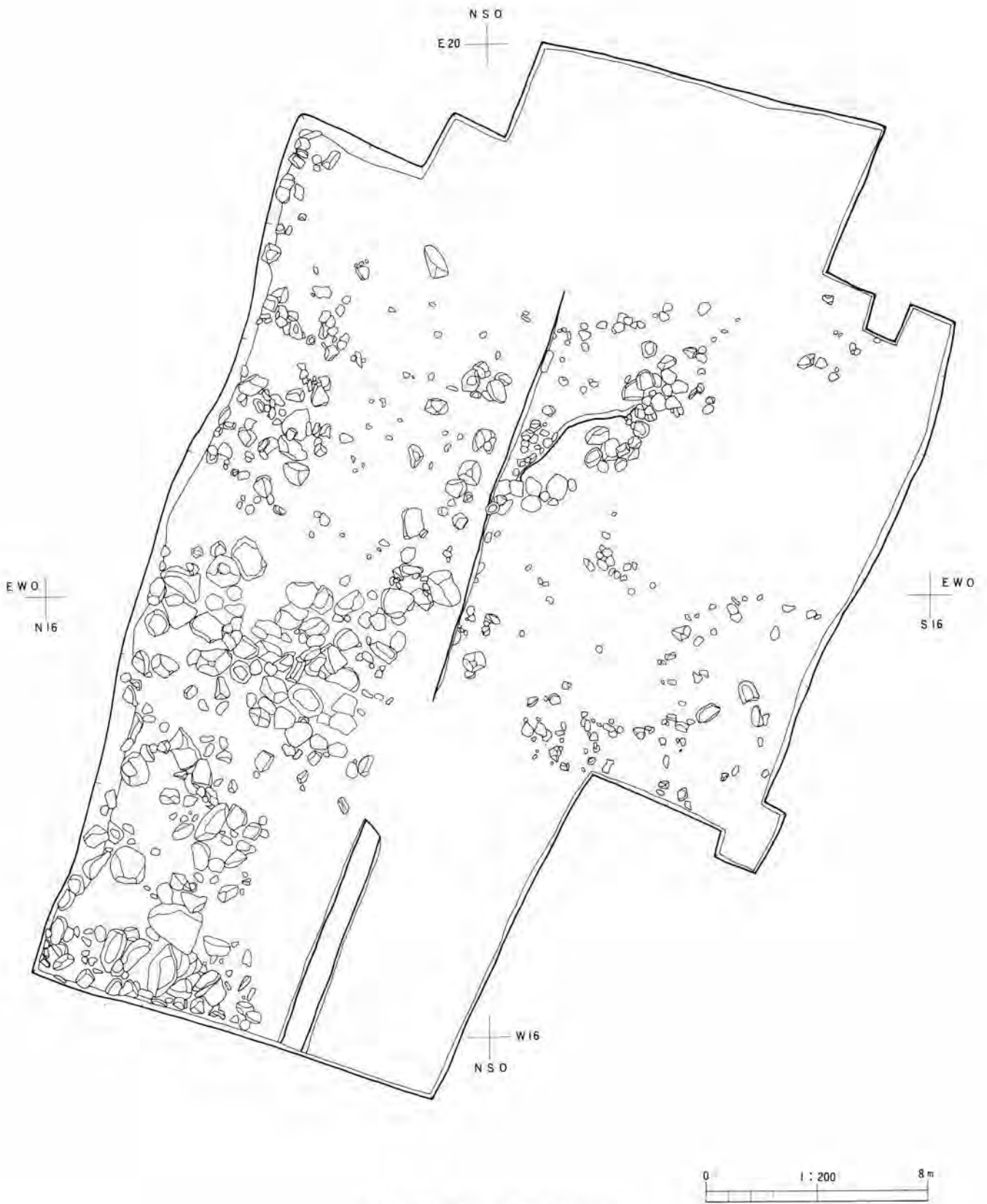
調査区の北西から南東側にかけて、調査区を対角線状に分断するように大規模な土砂の流出跡と考えられる溝状の落ちこみが確認され、竪穴住居跡などの遺構は、この土砂の流出により破壊をまぬがれた北東側と中央南西側に検出された。また、南西から西側にかけては自然に落ちこんでおり遺物包含層が形成されている。微地形的にみれば、調査区の西側の山裾は谷筋となり調査区の中央から東側が尾根筋となり、東端部は急激に傾斜し山口川に至るものである。

遺物は、調査区の北西から中央部にかけては土砂の流出跡の砂礫と混在しており、北東から東側にかけては土砂の流出跡の影響は少なくなっているが、堆積土層も薄く遺物量も多くない。南から南西側にかけては、比較的良好な状態で出土しているが、やはり角礫などが混在する。遺構の埋土からも遺物は多く出土しているが、切り合いや攪乱が激しく二次的な堆積状況を呈しているところも多い。

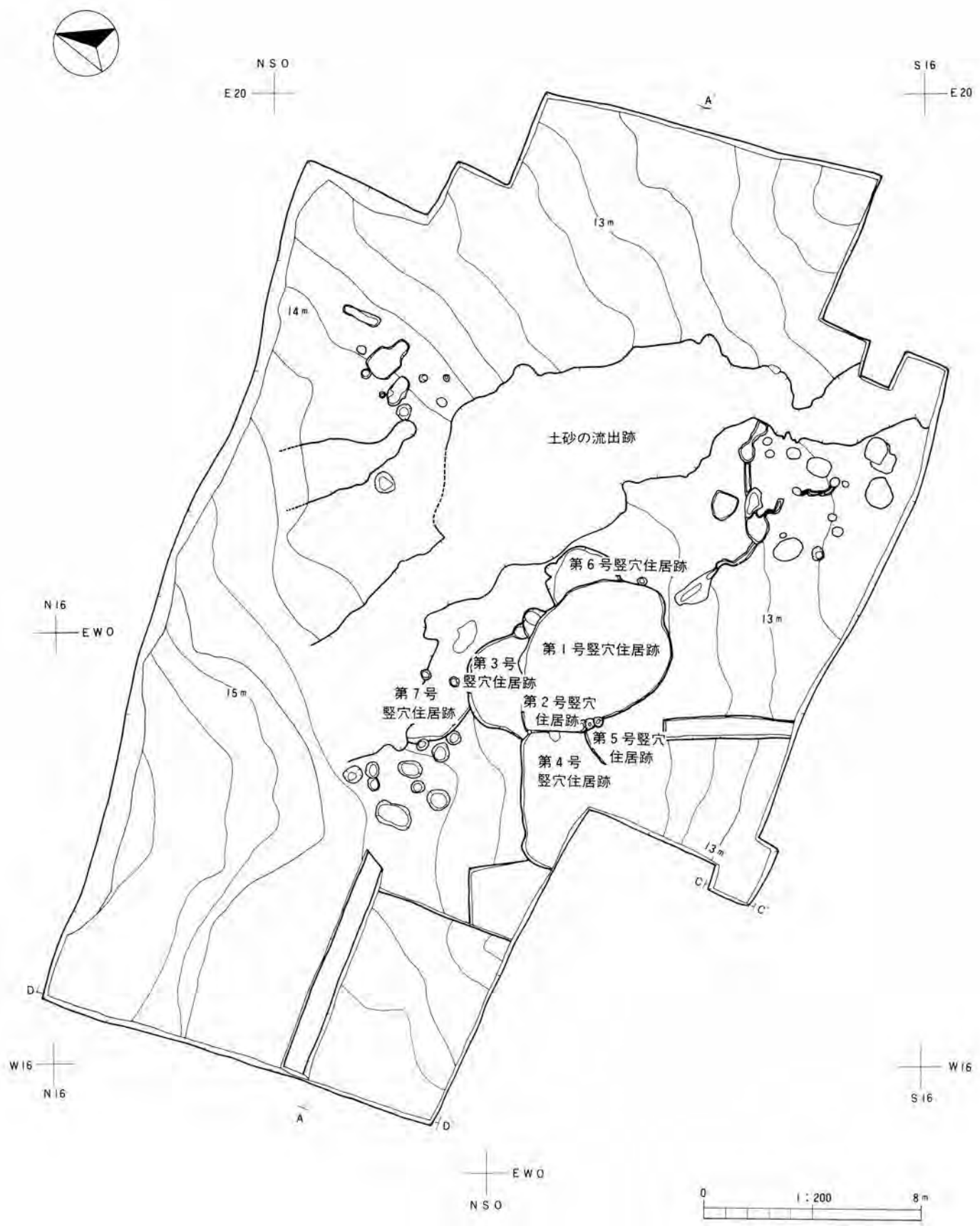
2. 基本層序（第7図）

調査区内の層序は、土層観察用に設定したベルト及び調査区壁の土層観察に基づくものである。基本的には大きくI層～IV層に大別される。

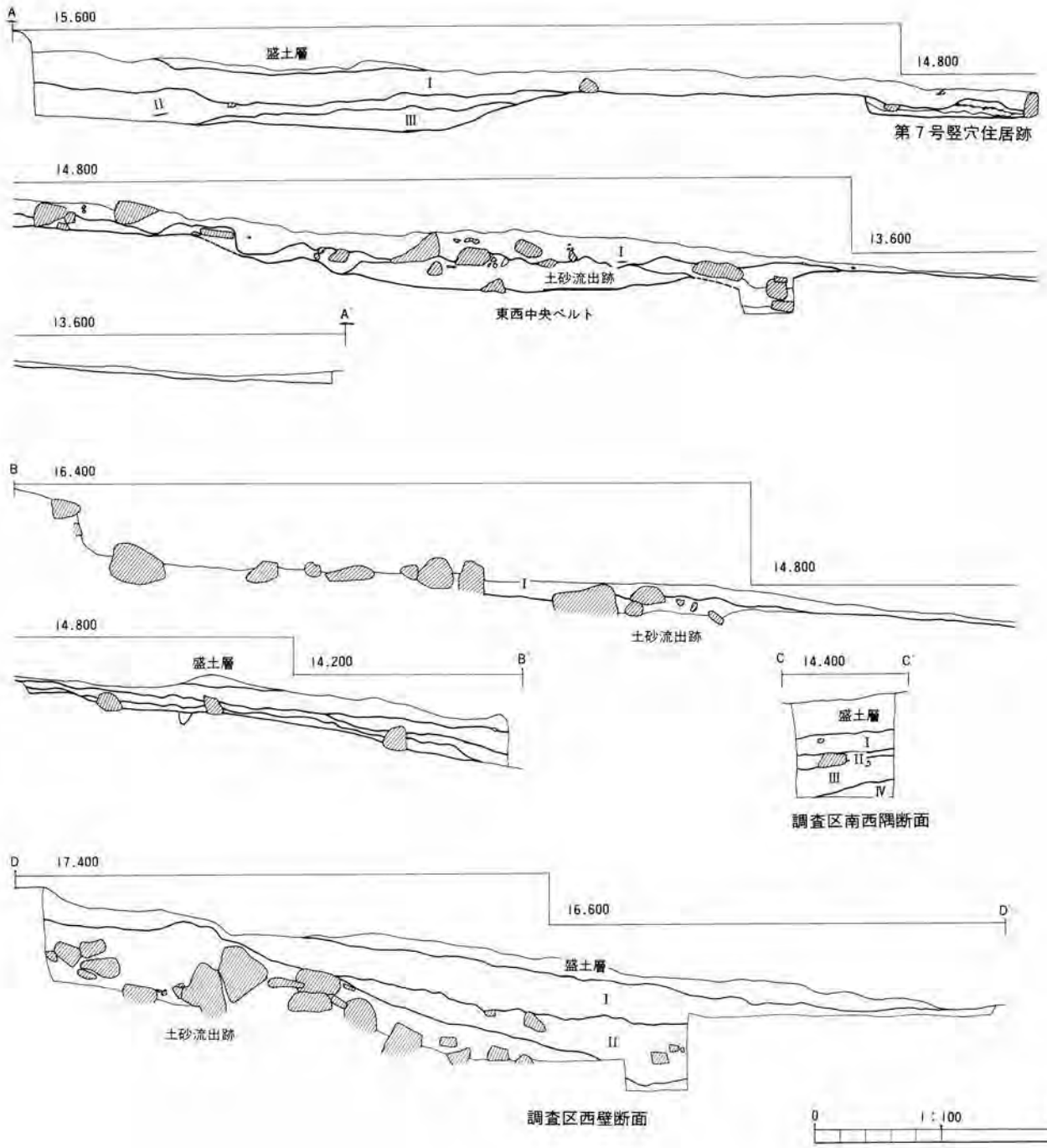
- I層 I層 整地・盛土層。今回の調査対象区は、近隣する病院やその他施設職員の車両駐車場として長年利用されており、そのため軽い整地並びに碎石などの盛土がなされている。調査区の北から南に向って厚くなる。遺物が含まれているが整地によりかくらんされている。極小片が多い。
- II層 II層 黒土層。前述のとおり、北から南側にかけて整地（削平）されており、また、樹木その他による攪乱も顕著である。非常に固くしまっており、土器などの遺物も包含するが細片が多い。調査区の中央から東側はII層以下が地山（IV層）となり、竪穴住居跡などの遺構は、II層下の地山（IV層）面で検出した。
- III層 III層 黒褐色土層。調査区の南西から西側に堆積する。シルト質の土層で固さ・しまりは中程度である。層厚50cmあり、調査終了後の整理作業の段階で検討してみると土器の出土状況などからIII a、III bの2層に分けられた可能性が高く、本報告書ではIII a、III b層の遺物として掲載している。
- IV層 IV層 褐色土層。調査区の南西区で確認されるものでそのまま調査区外の南側に堆積していくものと思われ、今回はその上部の一部のみが確認できたものである。
- V層 V層 黄褐色土の地山層。



第5図 全体図 (礫検出状況)



第6図 全体図（遺構配置図）

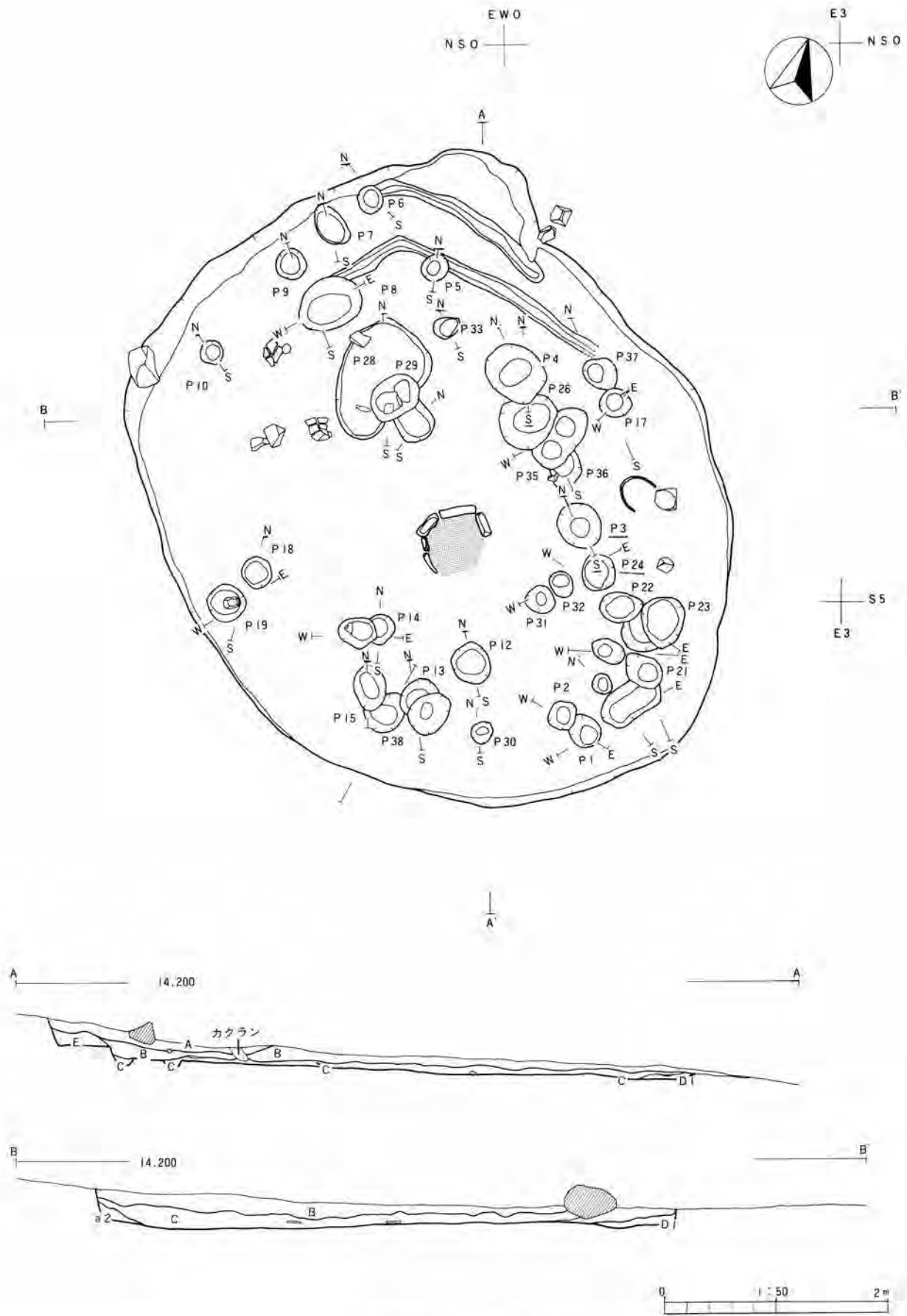


第7図 層序図

3. 検出した遺構・遺物

第1号竪穴住居跡（第8図～第17図）

- 重複** 調査区の中央部、やや南側に検出した。第2号～6号竪穴住居跡と重複しているが、これらすべてを切るものである。
- 平面形** 平面形は、南北に長い楕円形状を呈する。北東壁側に床面より一段高くなる小さな張り出し部分が認められた。規模は、長軸方向で5.9m、短軸方向で4.8mをはかる。壁は、南から南東側の一部で壁が確認できなかったが、床面よりほぼ垂直に立ち上がり北壁から西壁付近で壁高約0.3mをはかる。
- 埋土** 埋土は、A～Eの5層に大別される。A層は、北側から中央部にかけて堆積する暗褐色土を基本とする層で褐色の砂質土を粒状に少量混入する。固くしまっており焼土塊が含まれる。B層は、竪穴の中位に堆積するやや砂質の強い暗褐色土を基本とする。固いがしまりは中程度で褐色土塊の混入が認められる。C層は、床面のほぼ全域を覆うもので、シルト質の黒褐色土を基本とする。固さ・しまりはいずれも中程度で、褐色の砂質土塊や炭化物粒を多量に含む。D層は、壁際に堆積するもので2層に細分される。D1層は、東壁際に堆積するものでやや暗い暗褐色土を基本とする。D2層は、西壁際に堆積するものでやや明るい暗褐色土を基本とする。どちらも固さ・しまりともに中程度以下となる。E層は、北東壁の張り出し部分から床面の一部に堆積するもので、やや明るい黒褐色のシルト質土を基本とする。固さ・しまりは中程度以下である。
- 床面** 床面は、ほぼ平坦だが南壁側へゆるやかに傾斜している。また、中央部に位置する炉跡の西側一帯にかけては黄褐色土を大量に混入した粘質のある貼り床が認められた。この貼り床下からは、第1号土壇跡が検出している。床面上には、北壁側に2重の周溝跡が確認されたが、時期差があるのかは不明である。
- 柱穴** 柱穴および柱穴状のピットは、床面上から多数検出したが重複する竪穴住居跡のものも含まれていると考えられる。P2・P9・P19・P17が主柱穴に相当する。それらの柱間寸法は、P2・P17が2.8m、P17・P9が3.1m、P9・P19が3.1m、P19・P2が3.2mをはかる。これ以外にも柱痕跡があるものや柱穴の可能性のあるものは、P3・P4・P13・P20・P25・P29・P32・P35・P24である。
- 炉** 炉は南側が開放する石囲炉で竪穴の中央部に位置する。炉内のP40は焼土を切る新しい時期のものである。炉の構築方法は、1.45m規模の不整楕円形の掘り方内にK1層をつめながら花崗岩の炉石を埋設している。炉石は強い燃焼を受け非常にもろくなっている。また、炉の火焼面上では第10図のように炉石に沿う形でほぼ1個体分の深鉢形土器片（第12図1）が並べられていた。土器自体は炉使用に伴う焼成を全く受けていないため、この状態は炉廃棄直後の状態と考えられる。
- 土器埋設** 炉の中心点から真東に約1.6mの地点（床面上）に土器を埋設したピットを検出した。埋設されていた土器（第13図24）は口縁部と底部を欠く縄文施文（LR縦回転）の深鉢形土器である。検出状況などからすると、当住居跡に伴うものと考えられる。
- 北東壁側に床面より約0.15m高くなる小さな張り出しは、埋土状況より当住居跡に伴う入口



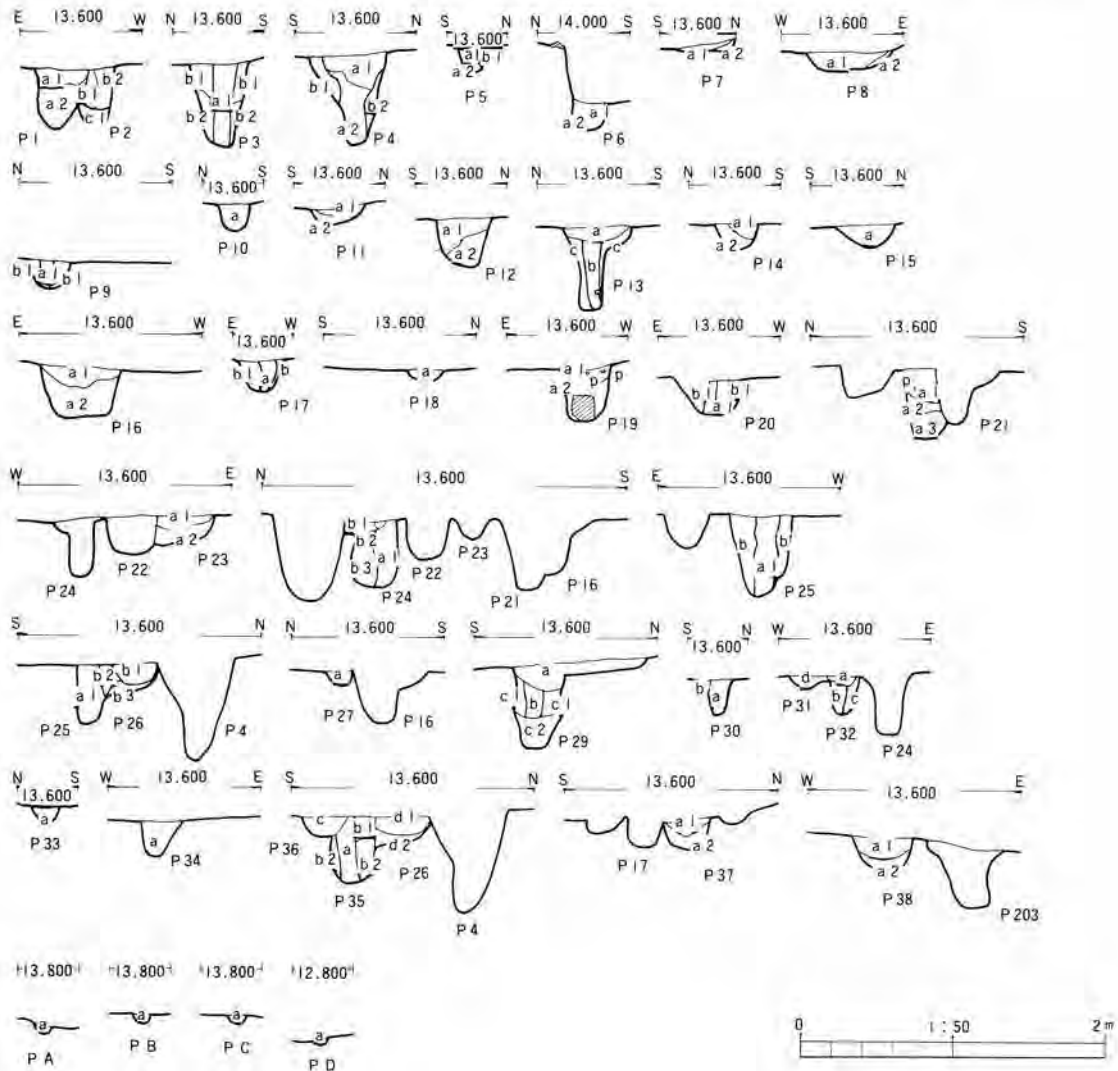
第8図 第1号竖穴住居跡

状の施設などの可能性が考えられる。

遺物 遺物は、炉内のほか、床面及び床面上のピットや埋土中より多数出土している（第12図～第17図）が、遺構の切り合いが著しいこと、特に南半部分では埋土も薄く壁の立ち上がりも確認できないなど攪乱が多くまぎれこみも含まれているものと考えられる状況である。

土器 1は炉内に並べられていたもので、底部から口縁部にかけてゆるやかに外傾する。口縁に突起を1個もち突起の脇には2個1対の刻目を伴う山形の小突起を配すが、これが両脇に付くのかは口縁部を欠き不明である。口縁部はやや肥厚する複合口縁となり上下2段の短沈線状の刺突列を巡らす。複合口縁下には沈線による大波状の連弧文を施す。胴部の地文は縦方向の綾絡文を施文する。2、3は床面上から出土した。2は口縁部がわずかに内傾する深鉢形土器で、1条の平行沈線で口縁部と胴部を区画し、この沈線上には小楕円形の貼付文が4単位伴う。3は器形的には1と類似するもので地文の縦方向の羽状縄文を施文後に口縁部に「∩」字状の貼付文が4単位つく。

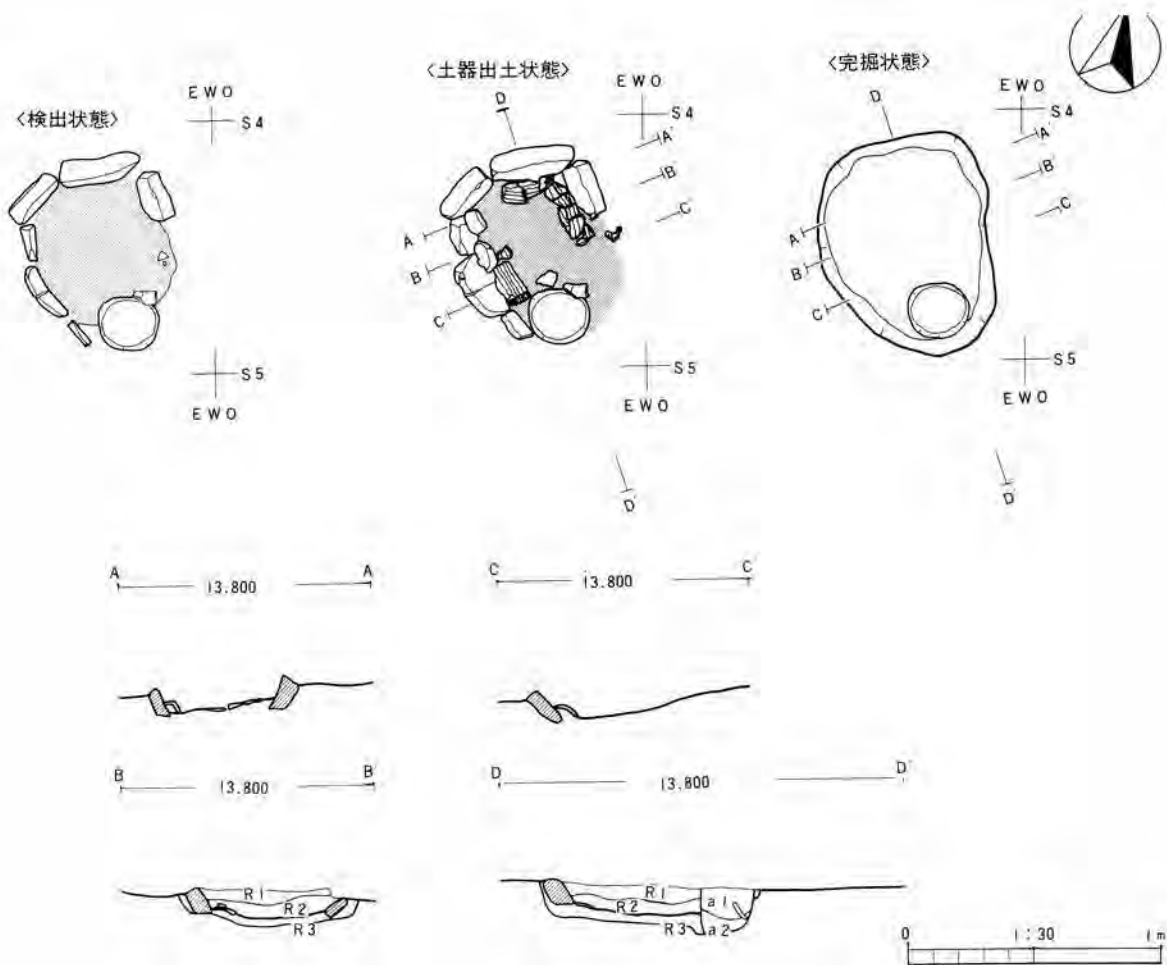
4～12は床面及び床面上のピットなどから出土したものである。4は口縁部が肥厚する山形口縁を呈するもので、直立ないしわずかに外傾する。口縁頂部に刻目を施し沈線及び刺突列が



第9図 第1号竪穴住居跡床面ピット断面図

施文される。5は口縁部が外反するもので、横位の原体圧痕文を施文する。6は胴部に結束する羽状縄文を施文する。7は口縁部が内湾するもので、隆沈線で施文される。8は短沈線で三角形容を描き頂下に三角形の刺突を施す。9は口縁部が肥厚するもので、口縁上面に粘土紐を波状に貼付する。10は口縁部が外反し口縁部は無文で頸部にわずかに小波状の沈線が見られる。11は口縁部が外傾するもので、平行する原体圧痕文が施される。

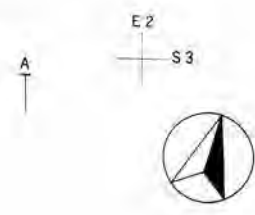
13~23、25~32はC層から出土したものである。13は口縁部が内湾気味に大きく外反する山形口縁となる。山形口縁に合せ圧痕文を施文後に頂部より刻目と側面に圧痕を伴うY字状の隆帯を貼付する。14は胴部下端から底部の破片。15は口縁部に短い圧痕列を巡す。16は口縁が短く外反するもので、横位の圧痕文を施す。17は楕円形区画内に圧痕文を施文する。18、19は横位の圧痕文を施す。19は口縁部が内湾するもので、口縁部は斜位に以下は横位に縄文(RL)を施文している。21は「ハ」字状の貼付文を施す。22は複合口縁部となるもので、肥厚部には縄文を施文し刺突を伴う隆帯が巡る。23は縄文施文後に横位の原体圧痕文を施す。25は胴部か下部から底部で細かい縄文(LR縦回転)が施文される。26は口縁部上端に刺突を施す。27~30は胴部片で、27は刻目を伴う太い粘土紐を貼りつけるもの。28は縦位の原体圧痕文を側面に伴う隆帯と曲線状の圧痕文を施文する。29は山形沈線を施文後に隆線を施す。30は網目状撚糸文を施文する。31は台形状に突起する口縁となる。32は沈線で曲線文を施文する。



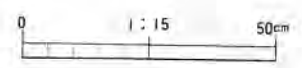
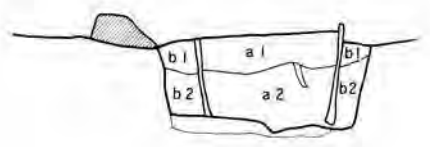
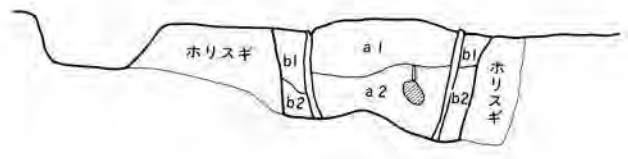
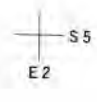
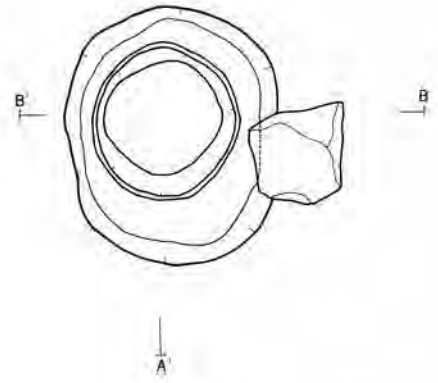
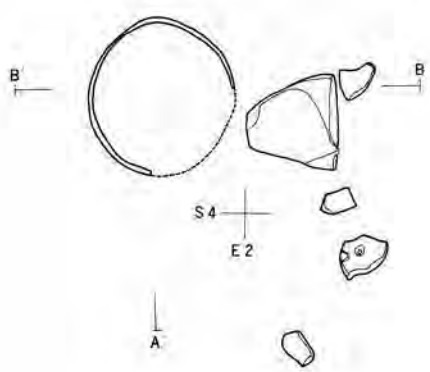
第10図 第1号竪穴住居跡炉跡



〈検出時〉



〈完掘状態〉



第11図 第1号埋設土器平面図、断面図

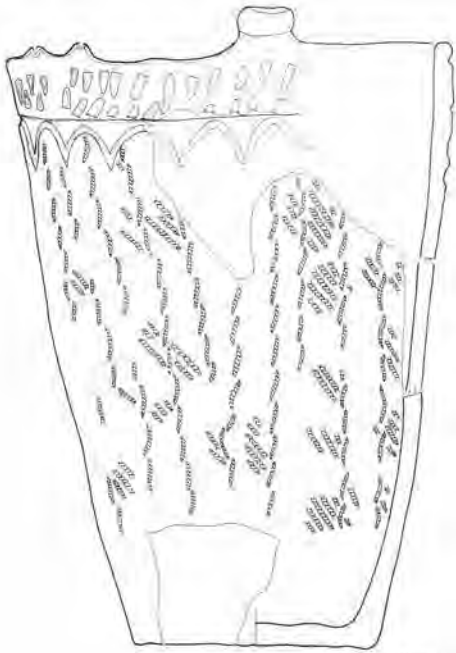
33～92はB層から出土した。33～35はいずれも肥厚する口縁部となる。33は口縁部上端に刻目を施し隆線で文様を描く。34は肥厚下に原体圧痕文を施す。35は縄文（LR横回転）のみの施文。36は隆沈線と大波状の沈線を描く。37、38は原体圧痕文が施される。39は太い波状沈線が施される。40、41は同一個体で口縁部に小突起をもち、口縁部には沈線と円形刺突列と鋸歯状の沈線文が施文される。42、43は複合口縁となるもので、縄文のみの施文。44～51は口縁部が内湾する。44～46は隆沈線文で文様が施文されるもの。47は沈線文。48、49は縄文のみの施文。50は横位の平行する原体圧痕文を施文する。51は短原体圧痕を施す。52～55は隆線で施文される。56は肥厚部が無文となる。57～61は大ないし山形口縁となるもので、頂部にC字状、S字状文を伴う。60は円孔が見られる。63～67は胴部の破片。63～66は粘土紐の貼付で文様を描く。67は隆沈線で楕円形区画をつくり、区画内に沈線文を施文する。68は縄文施文後に隆線で渦巻文を描く。69は縄文を施文した隆帯が見られる。70は圧痕文を側面に伴う隆線で文様を描くもの。71～73、76～84は口縁部が直立ないし外傾するものである。71は平行沈線間に刻目を施す。72は肥厚する口縁部上端に円形の刺突列を施す。73は口縁部上端に粘土紐を鋸歯状に貼りつけるもの。74は口縁部上端に平行する2条の原体圧痕文を施文する。75は縦位に半截竹管による連続する刺突列を施す。76は口縁部上端に刻目施文後に隆線を貼りつける。77は波状口縁を呈し、口縁部上端に刺突列を配し内面にも波状に粘土紐を貼付する。78は平行沈線間に刺突を施し、その直下に鋸歯状に原体圧痕文を施文する。79は刻目を伴う隆帯が施文される。80は口縁部上端に隆沈線が見られる。81は肥厚する口縁部上端が剥落したもの。82は無文だが口縁内面が肥厚する。83は肥厚部に縄文を施文する。84は長方形状の口縁突起部。85は隆沈線で円形文を描く。86は刺突を伴う隆線が貼付され、その上部に細い沈線を波状に施文する。87は原体圧痕文、88は細い沈線文を施文する。89は山形口縁となるもので、口縁部上端に刻目を伴う隆帯を貼付する。90は縄文のみの施文。92は平行する横位の原体圧痕文が施文される。

93～113はA or E層、A層、埋土中より出土した。93～96は口縁部が内湾する。93は隆沈線で区画文をつくる。94～96は隆沈線で文様を描くもの。97は口縁部が外傾気味となるもので、隆沈線文を描く。98は口縁部の突起部で内外面に渦巻文を描く。99は沈線を伴う隆線で文様を構成するもので、口縁部上端には曲線状の貼付文が施文される。100は丁寧に調整された隆沈線文を施す。101は原体圧痕文施文後に隆線沈線で施文する。102は縄文施文後に平行沈線を施し、その間に半截竹管による刺突列を施文する。103・105は隆沈線文。104は隆線で区画文を形成するものか。106は口縁部上面に指頭圧痕を施す。107は縄文のみの施文。108は隆沈線で区画文を形成する。109は網目状撚糸文を地文とするもの。110は隆沈線文が施されるもの。111は縄文のみ。112は圧痕文が施される。113は圧痕文を側面に伴う隆帯が貼りつけられる。

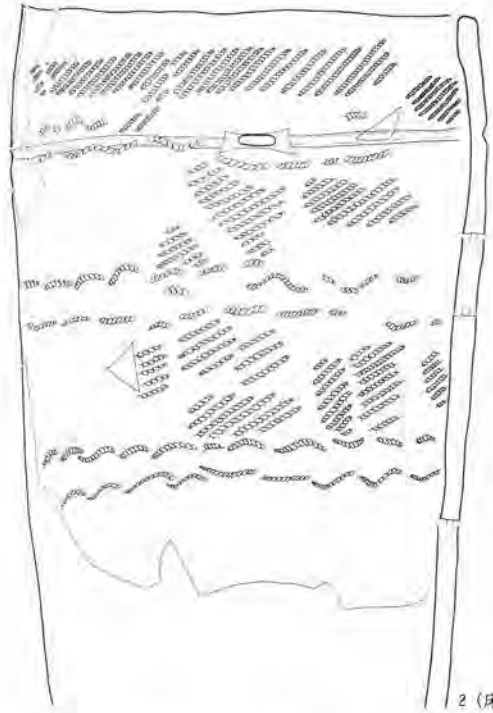
114～130は石器である。

114～126は剥片石器。114～118は石鏃である。114、115はB層、116はC層、117、118は床面出土の石鏃である。114は有基の三角形鏃で115は基部がわずかに内湾する。116は石鏃の範疇には属さないかとも考えられたが、一方の側縁部から基部にかけて明らかに石鏃を意図したような調整剥離と考えたので石鏃とした。117は基部が短く抉入する縦長の二等辺三角形鏃である。118は平基の三角形鏃で両面に第1次剥離面を残している。119は縦形の石匙である。120は床面もしくはP28の上面から出土した全長12.5cm、最大幅4.5cmをはかるもので、両面ともに調整剥

石器



1 (炉迹内出土)



2 (床面)



3 (床面)



4 (床面)



5 (床面)



6 (床面)



7 (周溝埋土)



8 (周溝埋土)



9 (床面P13埋土)



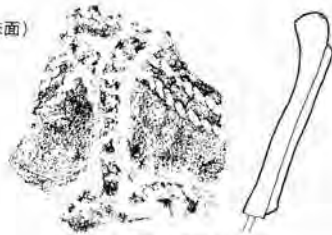
10 (床面P19埋土)



11 (床面P20埋土)



12 (床面P16埋土)



13 (C層、SE区)



14 (C層、NE区)



15 (C層、E区)



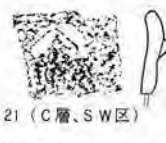
16 (C層、E区)



18 (C層、SE区)



20 (C層、SW区)



21 (C層、SW区)



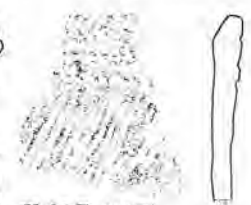
17 (C層、E区)



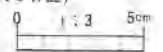
19 (C層、SE区)



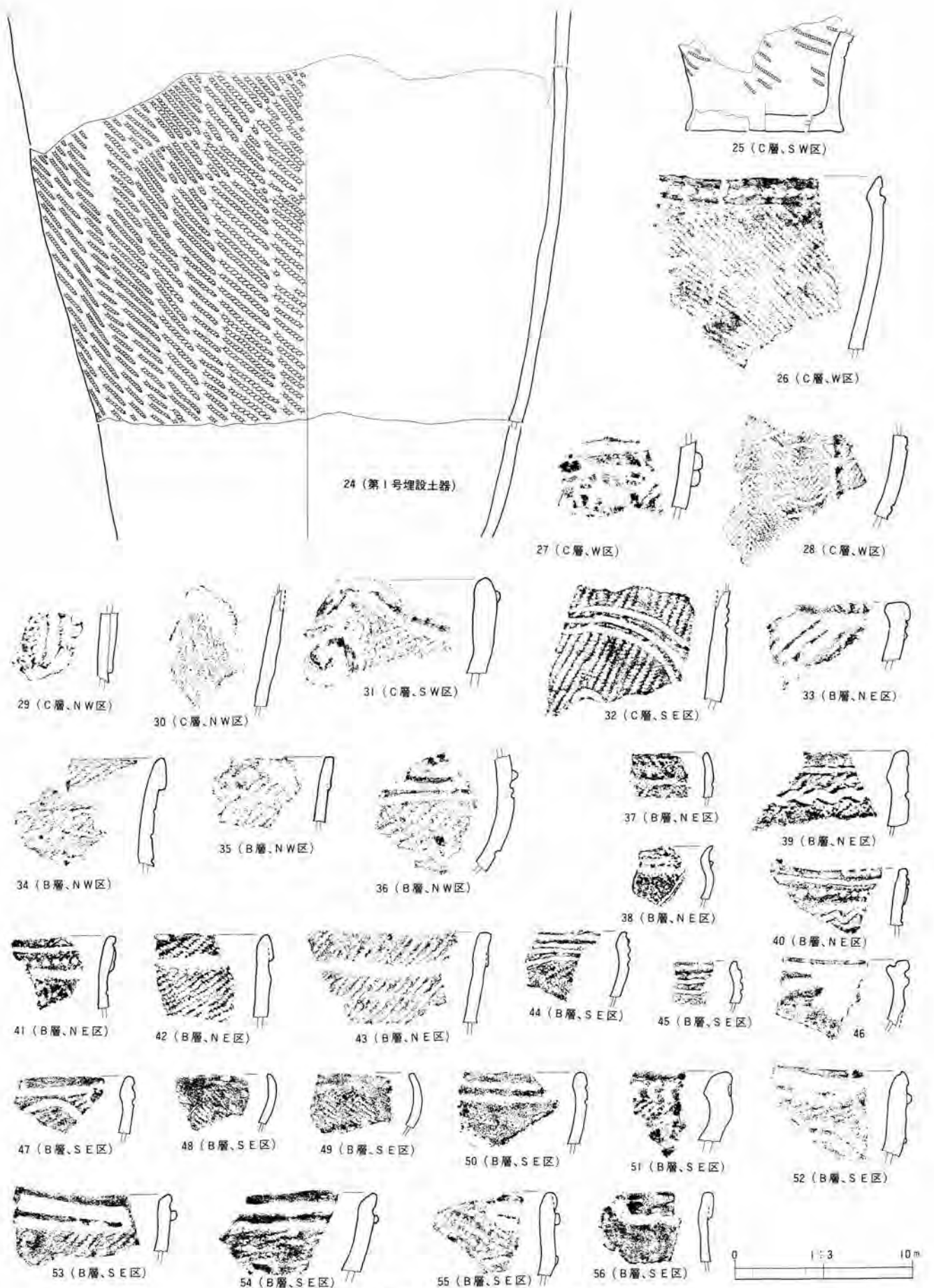
22 (C層、SW区)



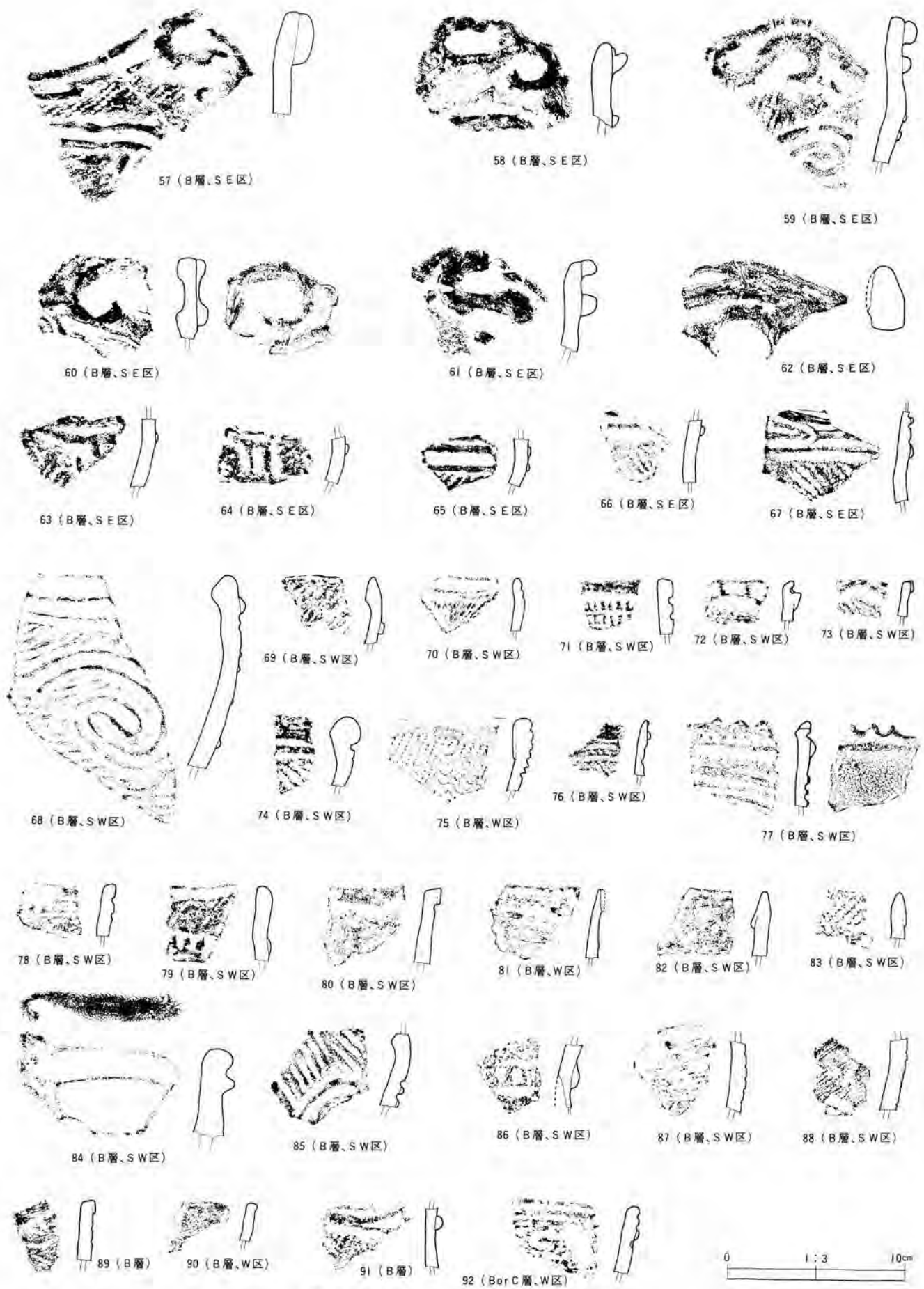
23 (C層、SW区)



第12图 第1号竖穴住居迹出土土器①



第13图 第1号竖穴住居跡出土土器②、第1号埋設土器



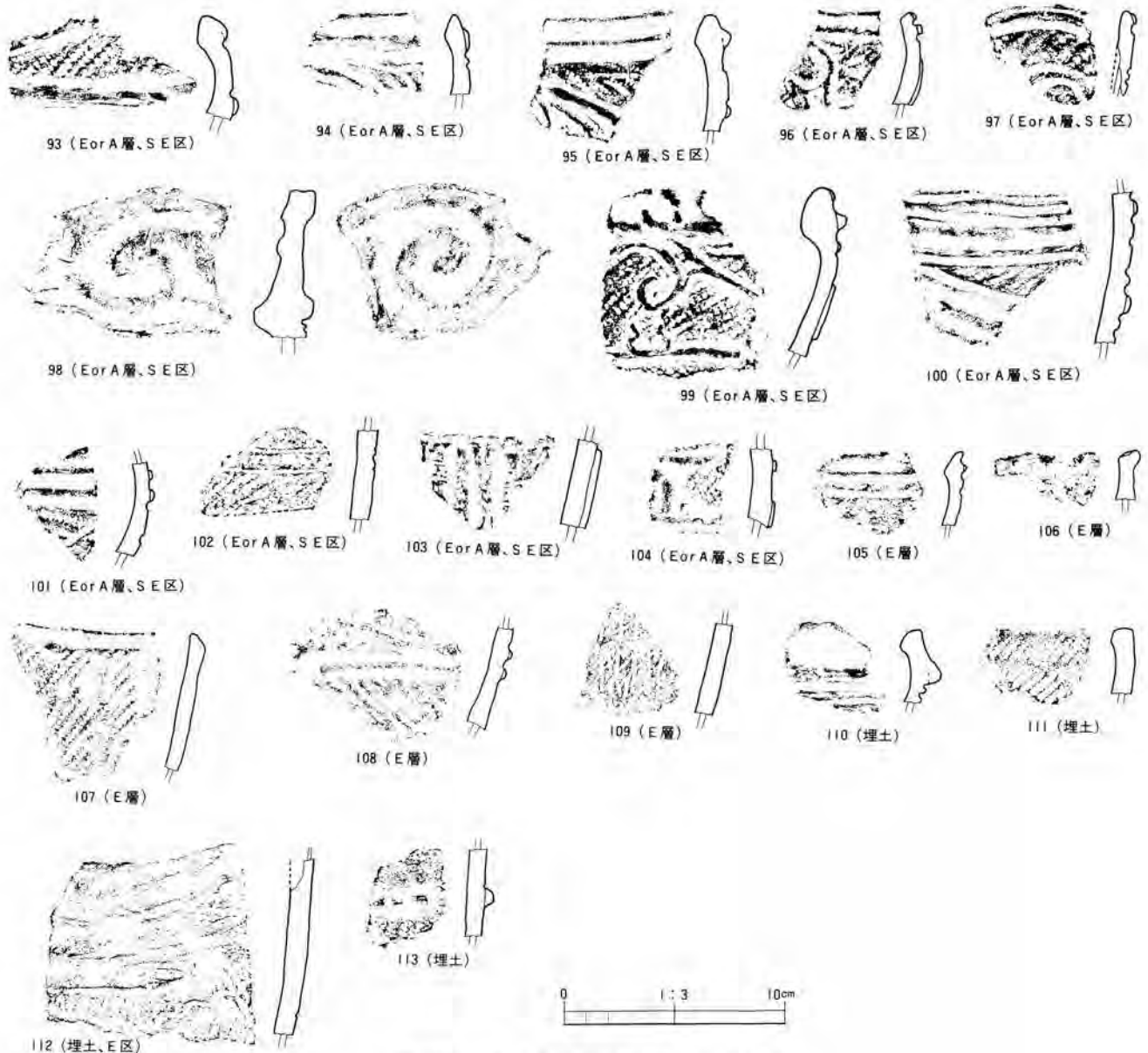
第14图 第1号竖穴住居跡出土土器③

離された石匙あるいは尖頭器と思われるものである。121は縦長の剥片で、つまみ部を欠く石匙と思われる。122は楕円形状の両面丁寧に調整剥離されたもので、サイドスクレイパーの類である。123は黒耀石の剥片である。124は先端部から側縁部を両面から調整剥離を加え先端部が尖がるもの。125は側縁部に細かい剥離を施した削搔器の類か。126は自然面を一部に残したものでやはり削搔器の類か。

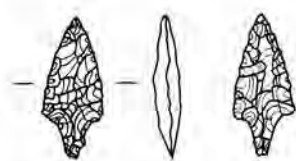
127~130は自然礫を利用した礫石器。127は調整磨面（B面）を有する特殊磨石で、機能磨面（A面）は1.3cm幅である。128、129は長軸の一方の縁部を使用した敲打磨石で、129は使用によると考えられる敲打痕が認められる。130は磨製石斧の刃部片で、全面に整形時によるものと考えられる擦痕が認められる。

以上が、第1号竪穴住居跡から出土した遺物であるが、これ以外に図示できなかったが、床面のピットP9の埋土上部（ほとんど床面近く）より小指の先大の琥珀の原石（未加工）が出土している。

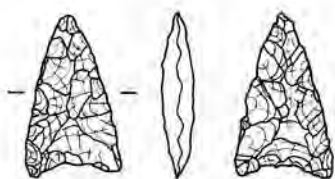
琥珀原石



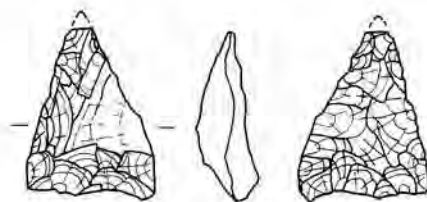
第15図 第1号竪穴住居跡出土土器④



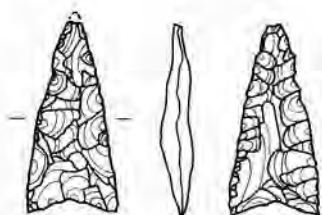
114 (B層, NE区)



115 (B層, NE区)



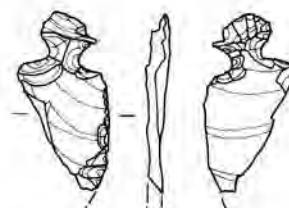
116 (C層, NE区)



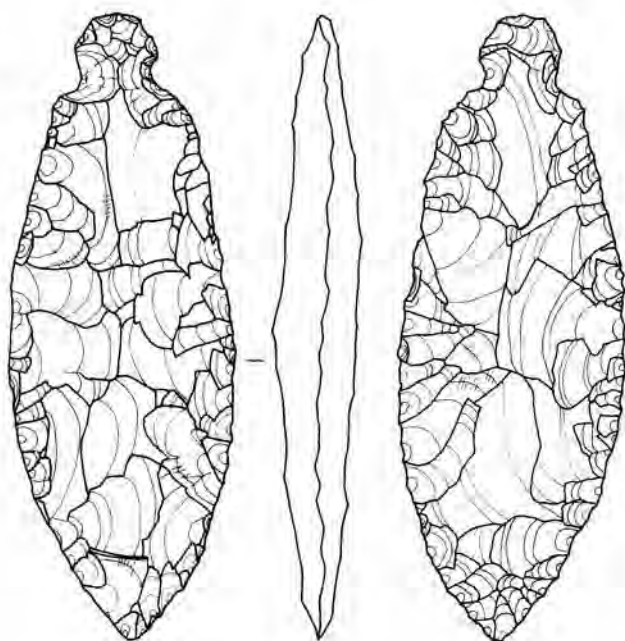
117 (床面)



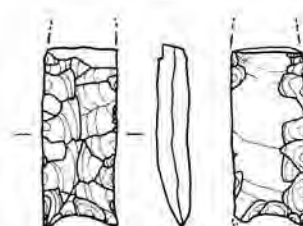
118 (床面)



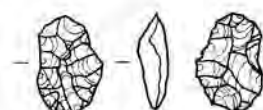
119 (P9)



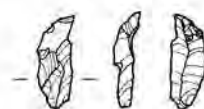
120 (床面)



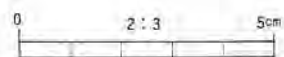
121 (床面)

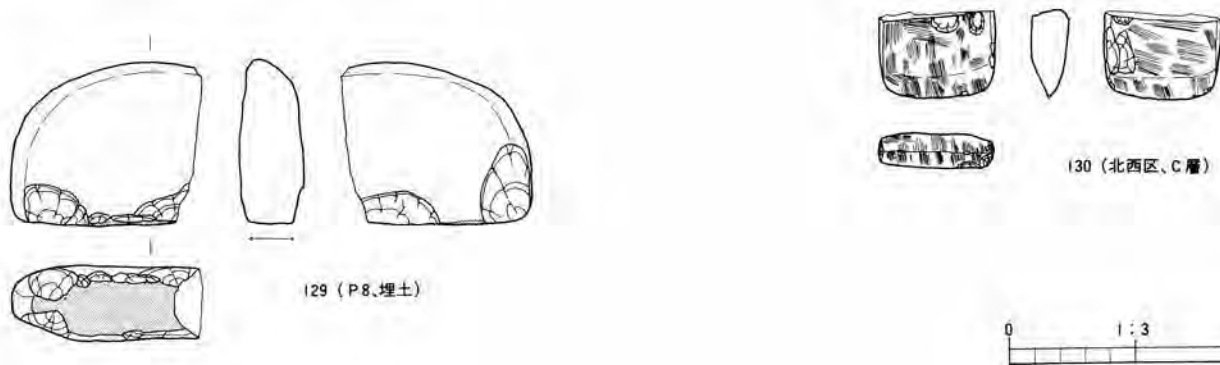
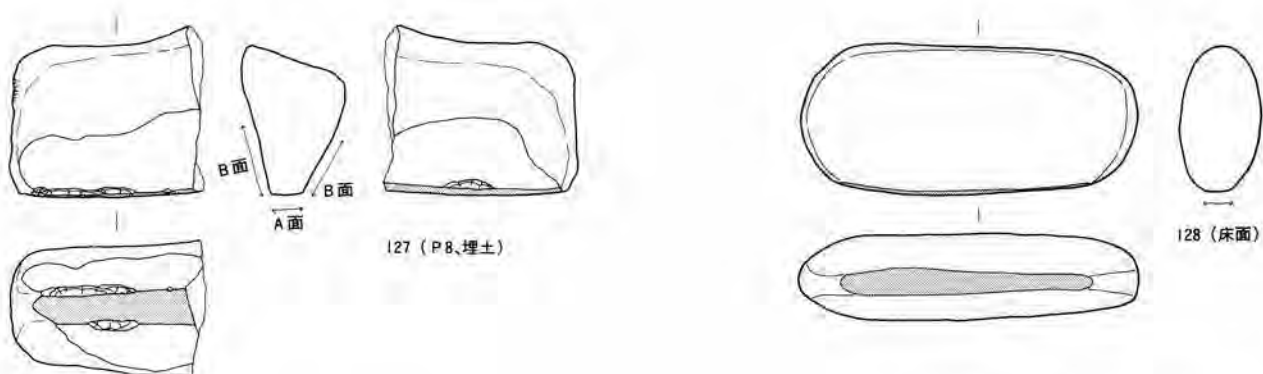
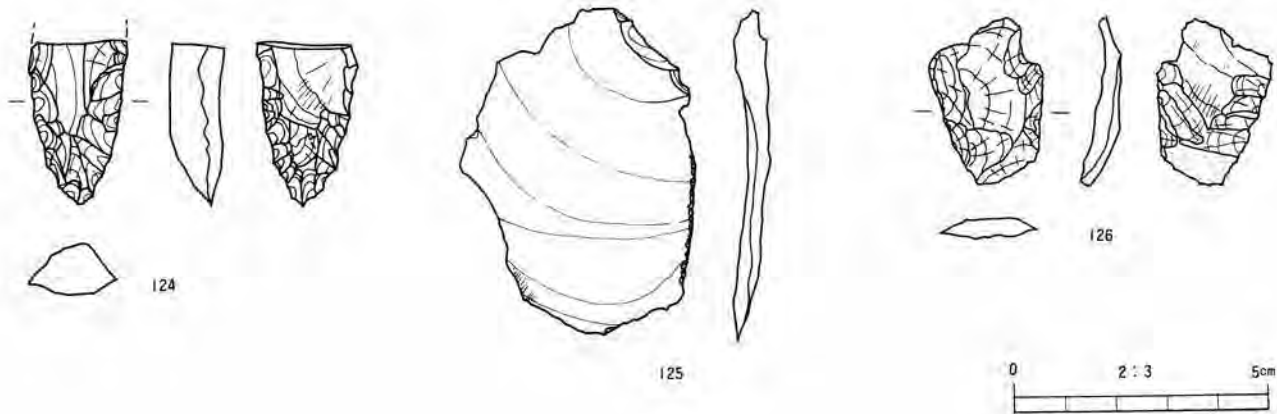


122 (床面, S W区)



123 (P17, 埋土)





第17图 第1号竖穴住居跡出土石器②

第1号土壌跡 (第18図)

第1号竪穴住居跡の貼り床下で検出し、第1号竪穴住居跡炉の西に位置する。

平面形

平面形は、やや不整ながら長方形状を呈する。規模は、長軸方向で2.4m、短軸方向で1.9mをはかり、第1号竪穴住居跡床面より深さ0.25mである。壁は、ほぼ直に立ち上がる。

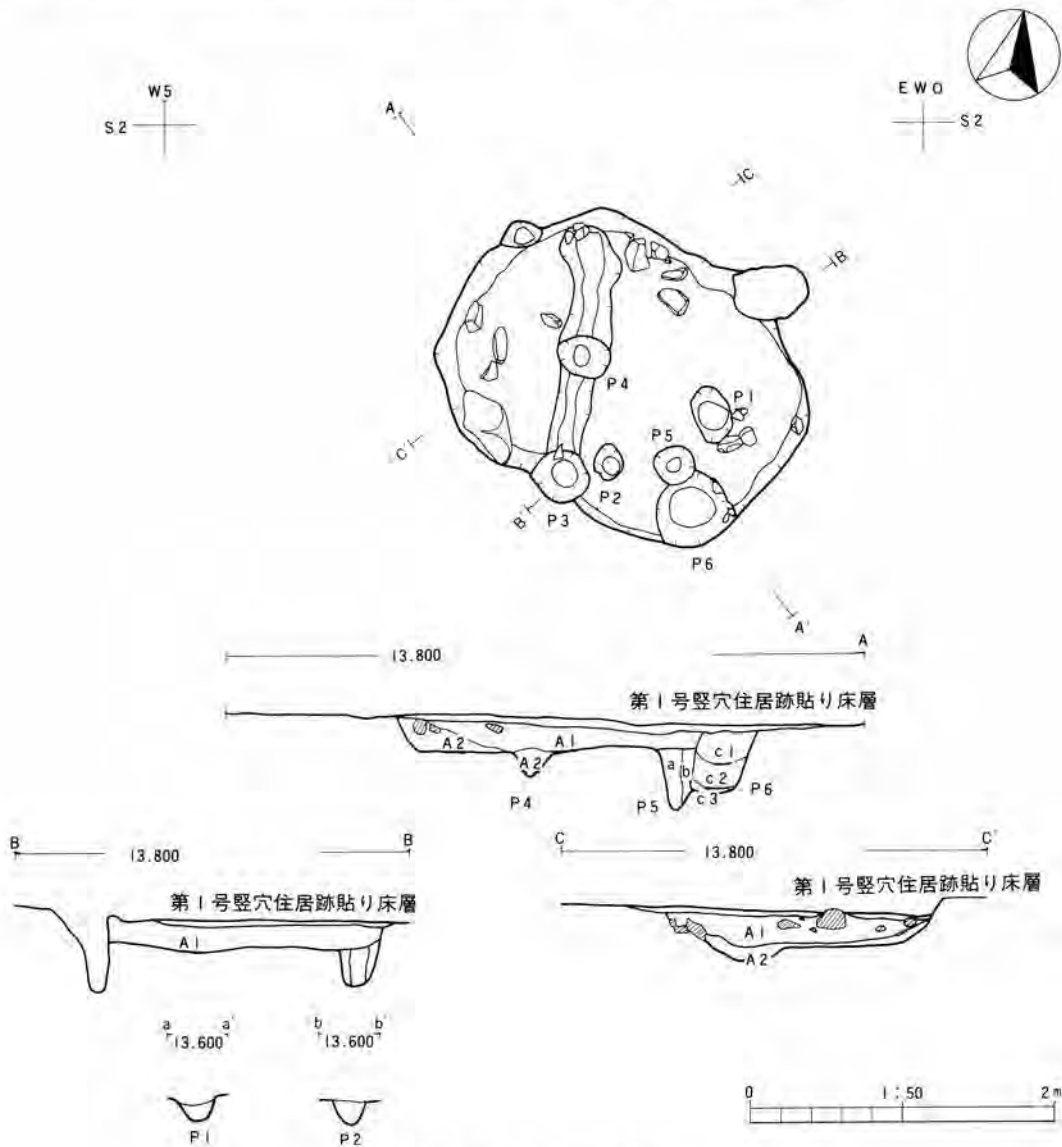
埋土

埋土は、A層から成りA1、A2層に細分される。A層上部に堆積するのは、住居跡の貼り床層である。A1層は、黒褐色のシルト質土を基本とする。固くしまっており、花崗岩礫や風化礫粒塊が多量に含まれている。A2層は、暗褐色から黒褐色のシルト質土を基本とするもので、A1層よりは大きな花崗岩礫が混入する。土器片などの遺物は、ほとんど包含しない。

底面

底面は、凹凸が顕著であるが高さ的にはほぼ平坦である。

底面上では、柱穴状のピットのほか北西から南壁中央に至る小溝を検出した。P3、P5は柱痕跡が確認できる柱穴で当土壌に伴うものである。P1、P2、P4は柱痕跡は確認できなかった。P6は当土壌同様住居跡の貼り床下で検出したものだが、土層観察の結果、当土壌跡よりも新しい時期のものであった。小溝については、A2層が堆積し当土壌に伴うものであるが、土壌内を区画するものとも考えられるが、その目的などは不明である。



第18図 第1号土壌跡

第2号竖穴住居跡（第19図）

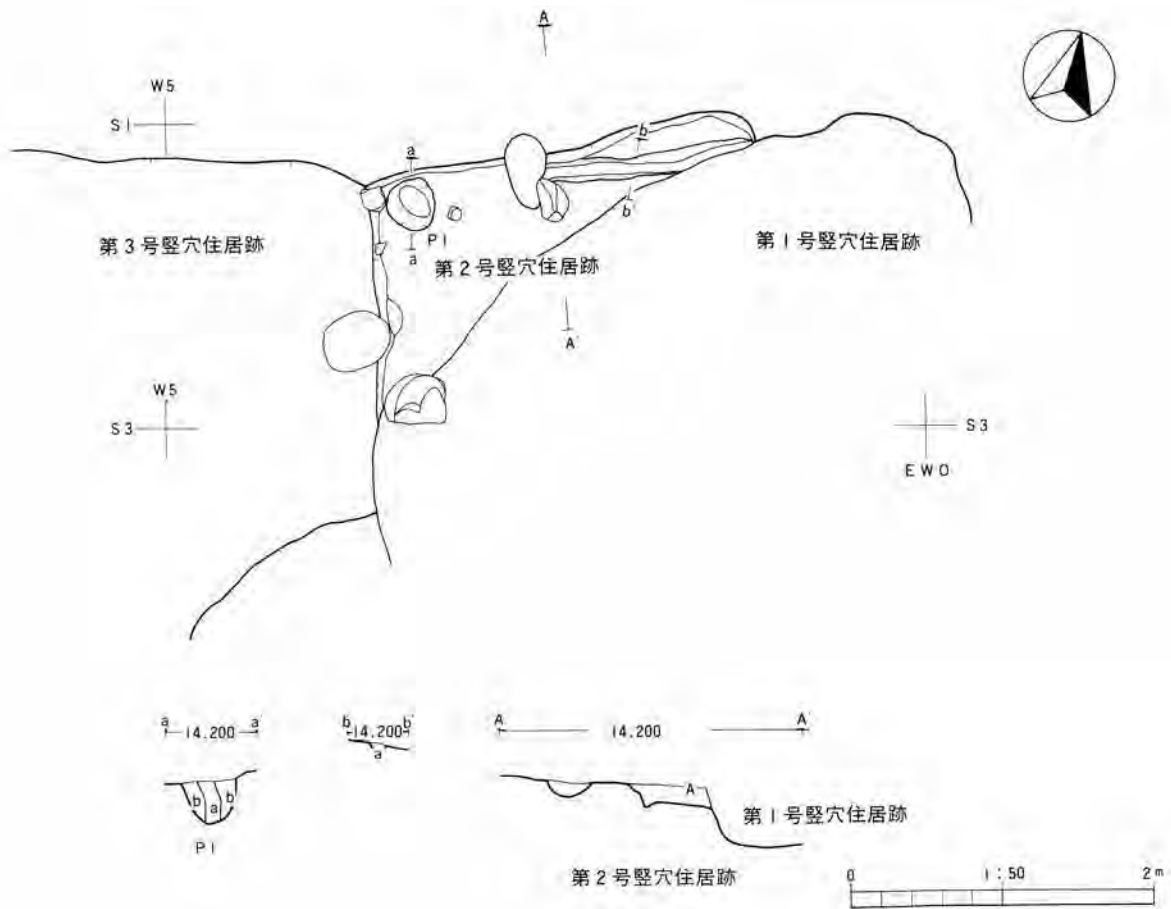
第1号竖穴住居跡にほとんど切られ、北壁の一部を残すのみである。第1号、3号、4号、
竖穴住居跡と重複するが、第1号に切られ第3号、4号を切る。

平面形、規模については不明であるが、北西隅の状態から方形状を呈するものと推測される。
埋土は、黒褐色のシルト質土を基本とし褐色の砂質土を塊粒状に比較的多量に混入する。固
くしまっており土器などの遺物のほか花崗岩礫を含んでいる。

床面は、一部しか残存しないが地山面をそのまま利用した平坦面である。

わずかに残った床面上では、柱穴跡や周溝跡が確認された。柱穴跡は、北西隅にP1を検出
しただけである。柱痕跡が認められ主柱穴を構成するひとつと考えられる。また、北壁沿い
には、幅0.15m、深さ0.05mの周溝が確認された。いずれにしても、第1号竖穴住居跡の床面と
の比高差が0.3m程であるためほとんど破壊されてしまったものと考えられる。

当竖穴住居跡より出土した遺物は、少なく第21図の1～11である。いずれも埋土中からのも
のである。1～3は口縁部が内湾するものである。2、3は同一個体で頸部に1条の隆線を巡
らし口縁部文様帯を区画する。口縁部文様帯は隆沈線で楕円形の区画文を形成するものである。

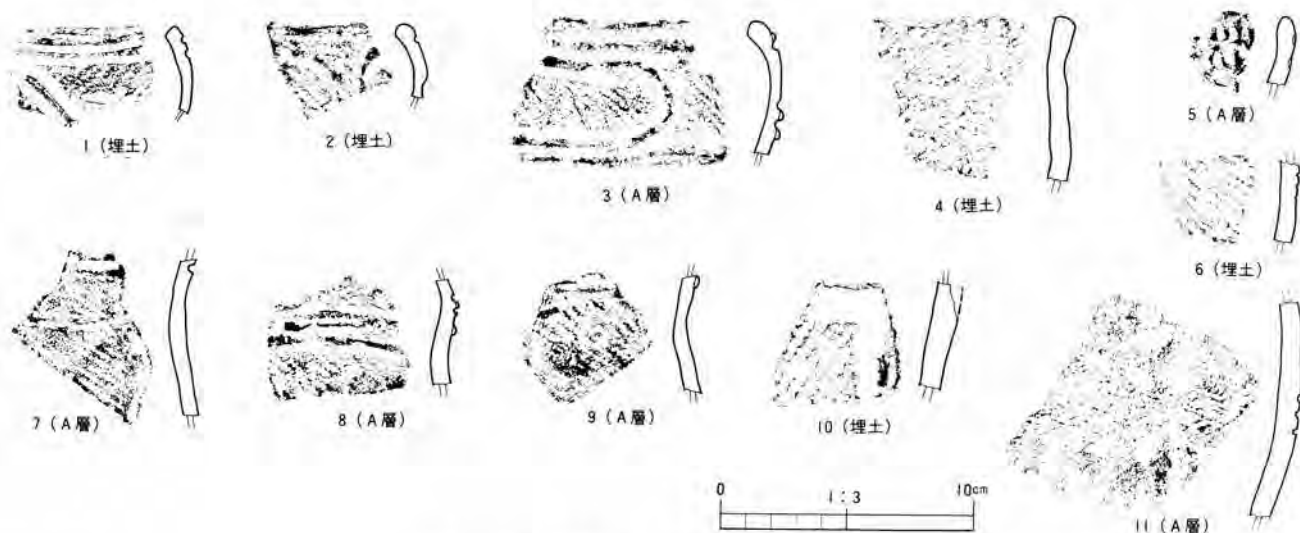


第19図 第2号竖穴住居跡

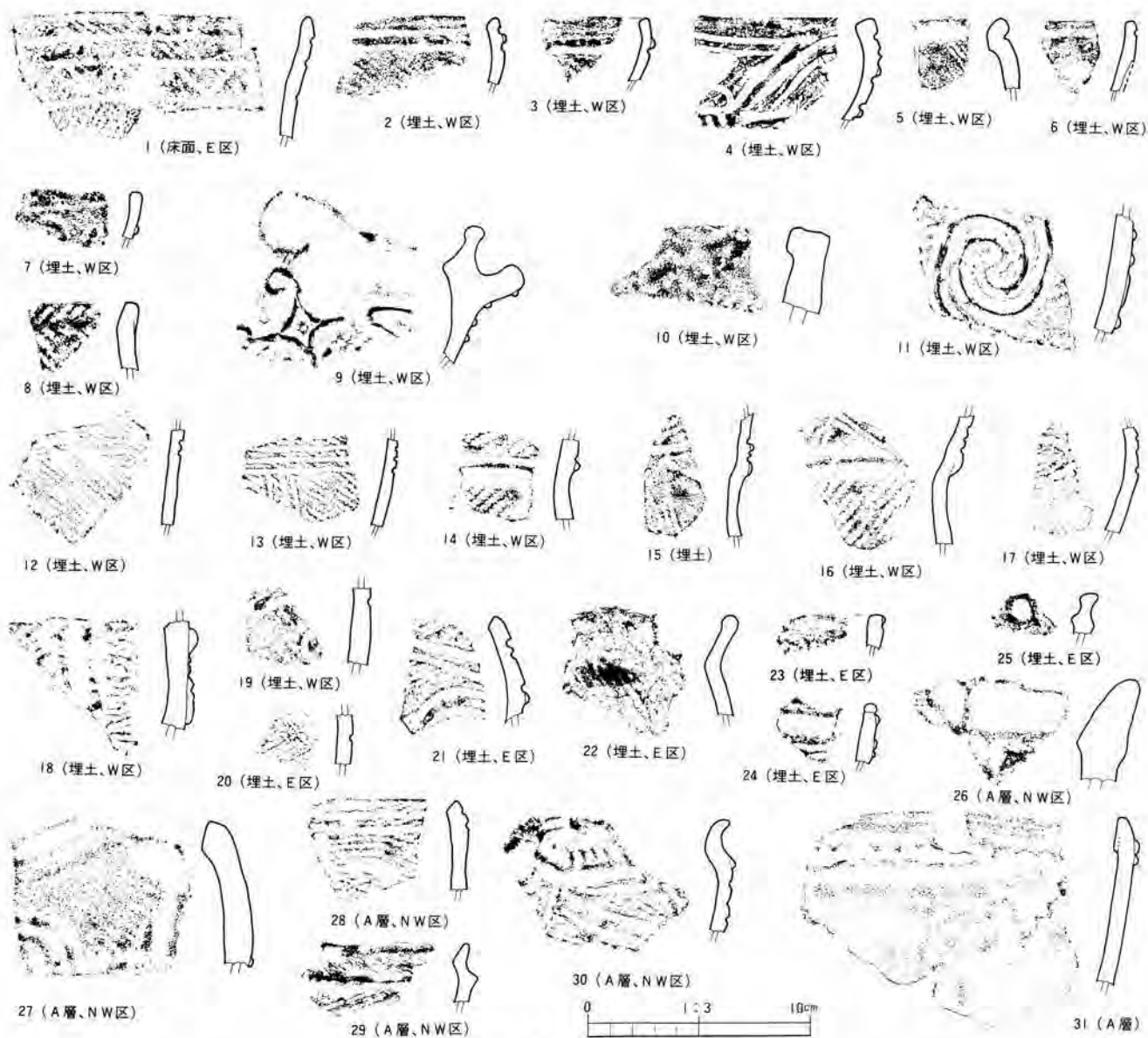
4は口縁部上端が肥厚するもので、横位の波状沈線文が施文される。5は上下2段の刺突列を施す。6～11は胴部片。6は縄文施文後に細い平行沈線を施している。7～9は2、3の胴部片と思われるもので、隆沈線文が施されている。11は横位の撚糸圧痕文が施文される。

第3号竪穴住居跡（第20図）

- 重複** 第1号・2号・4号竪穴住居跡と重複するが、これらのいずれにも切られるものである。南側半分以上が切られており全容は不明である。
- 平面形** 平面形は、西壁側がやや不整な円形ないしは楕円形状になるものと推定される。規模は、東西3.7m、南北2.0m以上をはかる。壁は、床面からほぼ直に立ち上がり北壁側で壁高0.2mをはかる。
- 埋土** 埋土は、A層、B層に大別される。A層は2層に細分される。A1層は、やや暗らい暗褐色土を基本とし褐色の砂質土を少量混入する。固くしまっており土器片や炭化物粒を含む。A2層は、暗褐色土を基本としA1層より褐色土塊を多く混入する。やはり固くしまっている。B層は、褐色の砂質土を基本とし暗褐色土や明褐色土を塊粒状に混入する。固いがややしみに欠ける。
- 床面** 床面は、地山面をそのまま使用しており平坦である。第2号竪穴住居跡床面との比高差は0.1m、第1号竪穴住居跡とは0.4mをはかる。
- 柱穴** 柱穴状の小ピットは、床面上に多数検出したが、柱痕跡が確認できたのはP1・P5・P8・P9・P10・P30である。柱穴の配置などを考慮すると支柱穴に相当すると思われるのはP1・P30で、P9は第2号竪穴住居跡に伴う可能性もある。
- 土器** 遺物は、土器（第22図）、石器（第31図）が出土している。第22図1は口縁部がやや外反するもので床面上から出土した。横位の原体圧痕文施文後に山形状に原体圧痕文を施文している。2～20は竪穴西側、21～25は東側、26～30は北西側の埋土中より出土した。2～4は口縁部が内湾し隆沈線が施されるもので、4は上下の隆沈線を連結して区画を構成する。5は口縁部上端が短く外反する。6、7は外傾しながら口縁部が内湾気味となる。6は口縁部上端に横位の原体圧痕文を施文する。7は隆沈線で文様を施すものか。8は口縁部上端が外反する。9は口縁部が肥厚する複合口縁となるもので、肥厚部には横回転のLR縄文、以下には縦回転のLR縄文と回転方向を変えて施文している。9は山形口縁となるもので波頂部がS字状となる。口縁部の文様は細い粘土紐の貼付により菱形文などをつくる。10は台形状を呈する口縁の突起部。11～20は胴部の破片である。11は細い粘土紐の貼付により渦巻文を描くもの。12、13は沈線が施文されるもの。14～16は隆沈線で口縁部と胴部を区画する。17は楕円状の原体圧痕文を施文する。18は鋸歯状の沈線施文後に刻目を伴う太い粘土紐を縦位に貼付している。19は短い原体圧痕文に曲線状の隆沈線が伴うもの。20は結束部を有する羽状縄文を施文する。
- 21は口縁部が内湾するもので横回転のLR縄文施文後に隆沈線が施される。22～24は口縁部が直立ないしは外傾するもの。22は口縁部上端に原体圧痕文を施す。24、25は波状口縁を呈するもので隆沈線が施される。25は波頂部に指頭圧痕を施す。
- 26は口縁部上端に楕円形の区画をつくる。隆線に原体圧痕文が伴う。27は隆沈線で文様を施すもの。28は口縁部上端に2条の平行する原体圧痕文を施す。29は口縁部上端の長楕円形の



第21图 第2号竖穴住居跡出土土器



第22图 第3号竖穴住居跡出土土器

第4号竪穴住居跡（第23図）

第1号～3号、5号竪穴住居跡と重複するが、第1号・2号には切られ、4号竪穴住居跡を切る。5号竪穴住居跡については新旧関係を把握できなかった。

重複

南西側は調査区外、東側は切られ、また南側は確認できず全容は不明である。平面形は、ほぼ方形状を呈するものと考えられる。残存規模で東西5mをはかる。

平面形

埋土は、土砂流出に伴うと考えられる角礫が多数混在する。A層からなる。A1・A2層に細分される。A1層は、やや暗い黒褐色土を基本とし褐色土塊を多量に混入する。固くしまっており角礫を多く含む。A2層は、黒褐色土を基本としやはり褐色土塊を多量に混入する。固くしまっており角礫を多く含む。

埋土

床面は、角礫による凹凸が著じるしくしかも、わずかながら段差が確認された。竪穴中央部付近の焼土は、A2層中に混入するものである。

床面

柱穴及びピットは8個検出したが、具体的な配置などは不明である。

遺物は、前述のとおり攪乱が著じるしい出土状況である。当竪穴住居跡から出土したのは第24図1～29が土器片、第31図2が石器である。

第24図1～8は床面上で検出したピット埋土から出土したものである。1、2は肥厚した口縁部上端の区画内に短い原体の圧痕列を施文する。3は突起状に肥厚する口縁部を呈するもので、短原体の圧痕文を伴う貼付文を施こし、隆沈線で文様を描く。4、5は同一個体で、口縁部上端に原体圧痕による楕円形区画を形成する。6、7は木目状撚糸文を施文するもの。8は底部片で底面に網代痕が確認される。

土器

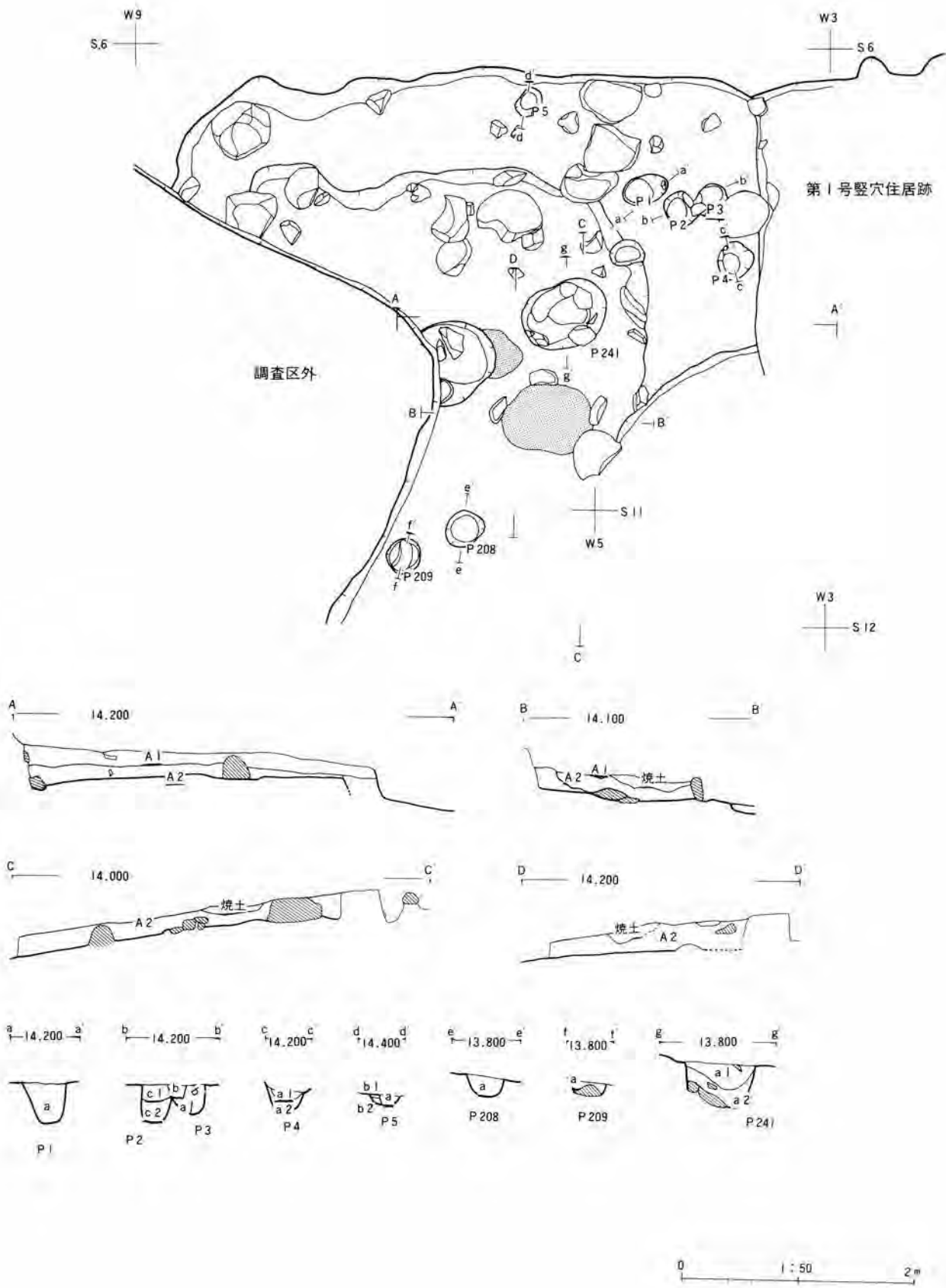
9～16はA2層中より出土したもの。9は波状の沈線が施文される。10は隆沈線で文様を描く。11は横回転のLR縄文を施文する。12は胎土に植物繊維を混入する前期初頭のものである。13は網目状撚糸文、15は木目状撚糸文を施文するもの。14は刻目のある隆帯を伴うもの。16は平行沈線下に鋸歯状の沈線を施文するもの。

17～22はA1層中より出土したもの。17、18は口縁部が内湾するもの。17は隆沈線で連結文をつくるものか。18は口縁部上端に平行沈線施文するもの。19は口縁部がわずかに内湾するもので、縄文のみの施文である。20は口縁部が外反し横位の平行する原体圧痕を施文する。21は口縁部上端が肥厚するもので縦回転のRL縄文が施文される。また、肥厚部直下には小波状の沈線文が施文される。22は隆沈線で口縁部と胴部を区画する。

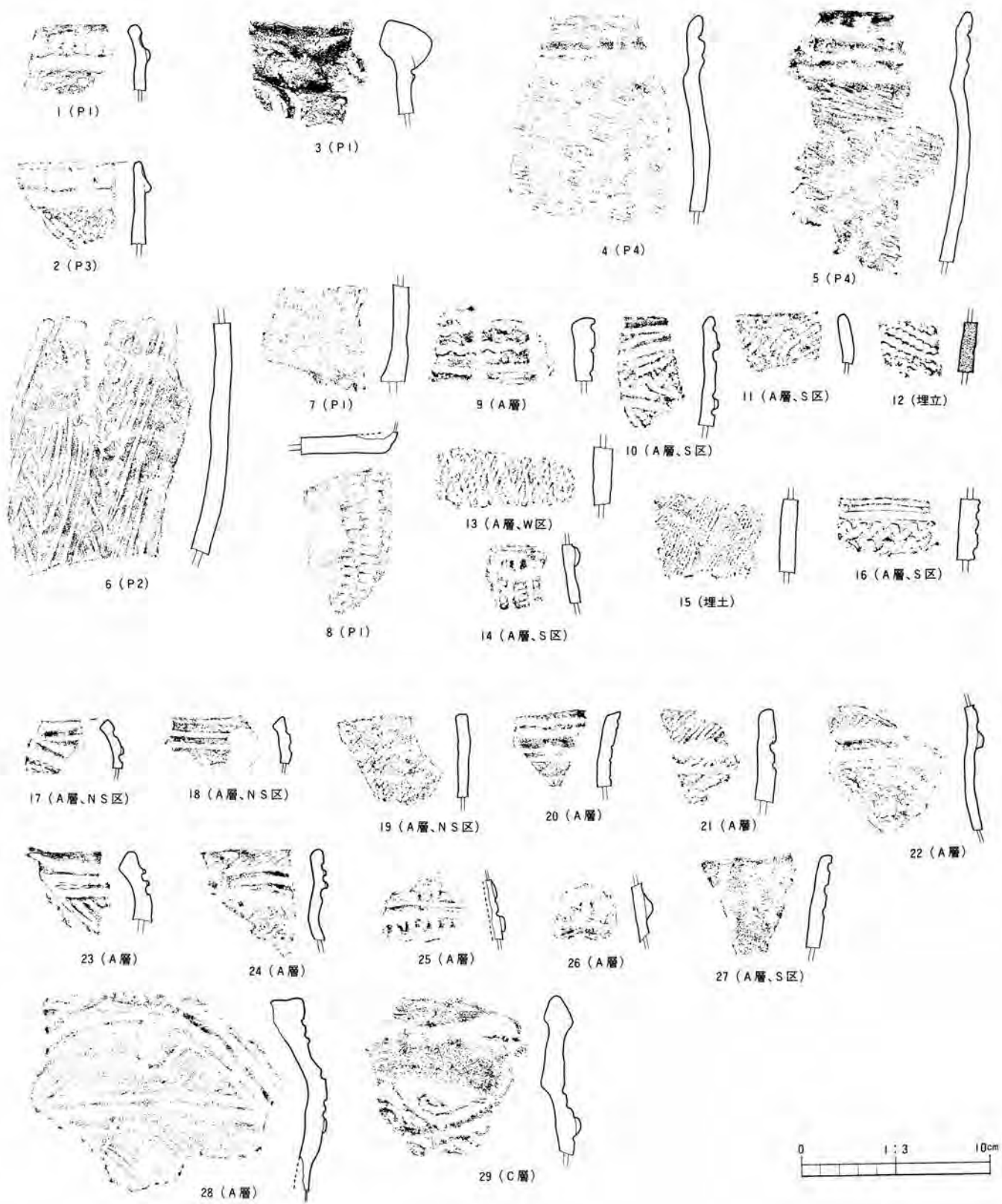
23は口縁部が内湾するもので隆沈線で文様を描く。24は隆沈線で楕円形の区画をつくり連結部にボタン状の突起を貼付する。25、26は刺突を伴う隆帯を貼付する。27は3列の半截竹管による刺突を施すもの。28は口縁部が内湾するもので隆沈線で口縁部と胴部を区画し、口縁部のみ文様を描く。文様は隆沈線で連結文をつくり沈線で渦巻文を描く。29は台形状の突起部で頂部がS字状文となる。文様は原体圧痕を側面に伴う隆線を描く。

第31図2はA層より出土した剥片石器で鋭角な側縁部を機能面とした削搔器類である。

石器



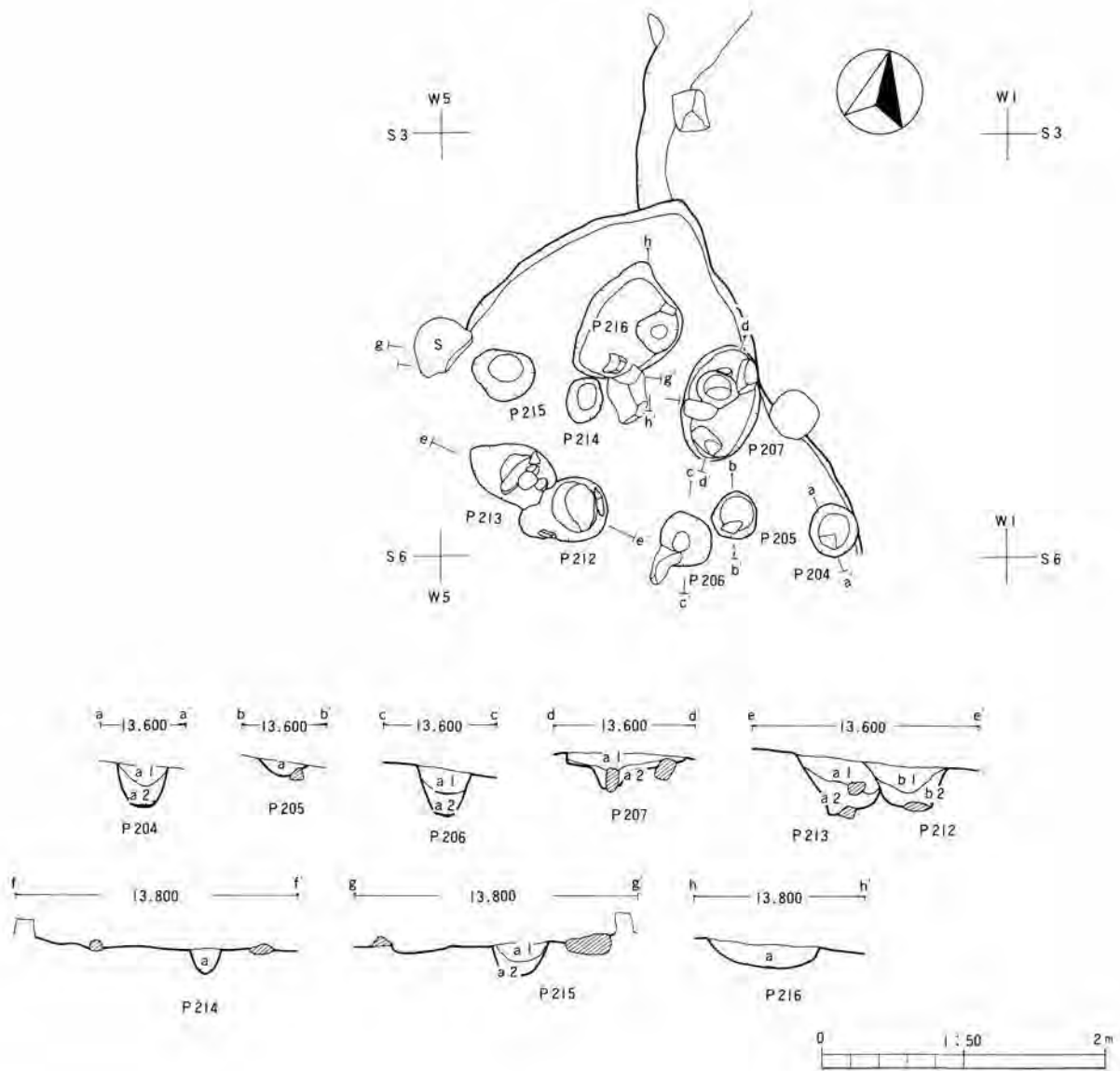
第23図 第4号竖穴住居跡



第24图 第4号竖穴住居迹出土土器

第5号竖穴住居跡（第25図）

- 重複** 第1号、5号竖穴住居跡と重複するが、第1号よりは古い時期のものだが、5号竖穴住居跡については新旧関係を把握できなかった。西側不明確で全容は不明である。
- 平面形** 平面形は、ほぼ方形を呈するものと考えられる。
- 埋土** 埋土は、第5号竖穴住居跡の範疇と考えていたため確認しなかった。
- 床面** 床面は、角礫による凹凸が著じるしく南側に傾斜する。
柱穴及びピットは数個検出したが、具体的な配置などは不明である。
遺物は、出土していない。



第25図 第5号竖穴住居跡

第6号竪穴住居跡（第26図）

第1号竪穴住居跡と重複するが、土層断面観察の結果、第1号竪穴住居跡よりも古い時期のものである。また、その平面形・規模・炉跡の欠如などから竪穴住居跡とならないとも考えられるが、ここでは竪穴住居跡として記述する。

重複

平面形は、不整ながら円形を呈する。規模は、径2.5mをはかるものである。

平面形

埋土は、A層・B層に大別される。A層は2層に細分される。A1層は、黒色に近い黒褐色土を基本とするもので固くしまっている。A2層は、黒褐色土を基本とするものでやはり固くしまっている。褐色土を塊粒状に少量混入する。B層は、暗褐色土を基本とするもので固くしまっている。褐色土を小塊状に多く混入する。

埋土

床面は、中央部がやや低くなる平坦面で、さほど固くしまっていない。

床面

柱穴及びピットは、床面壁際や竪穴外に数個検出したが詳細は不明である。

遺物は、埋土中より出土している。

第27図1～7はB層から出土したもの。1は、やや内湾する口縁部片で平行沈線文を施文する。2は口縁部がわずかに外反するもので、その屈曲部に隆線を巡らし胴部と区画する。口縁部には円形の刺突列を施文する。3は波状口縁を呈するもので、その波状に合せ口縁部上端に楕円形の区画を形成する。4、5は胴部片とともに隆帯で貼り付け文を施文する。6は口縁部上端に隆沈線を施文する。7は横位の撚糸圧痕文を施文する。

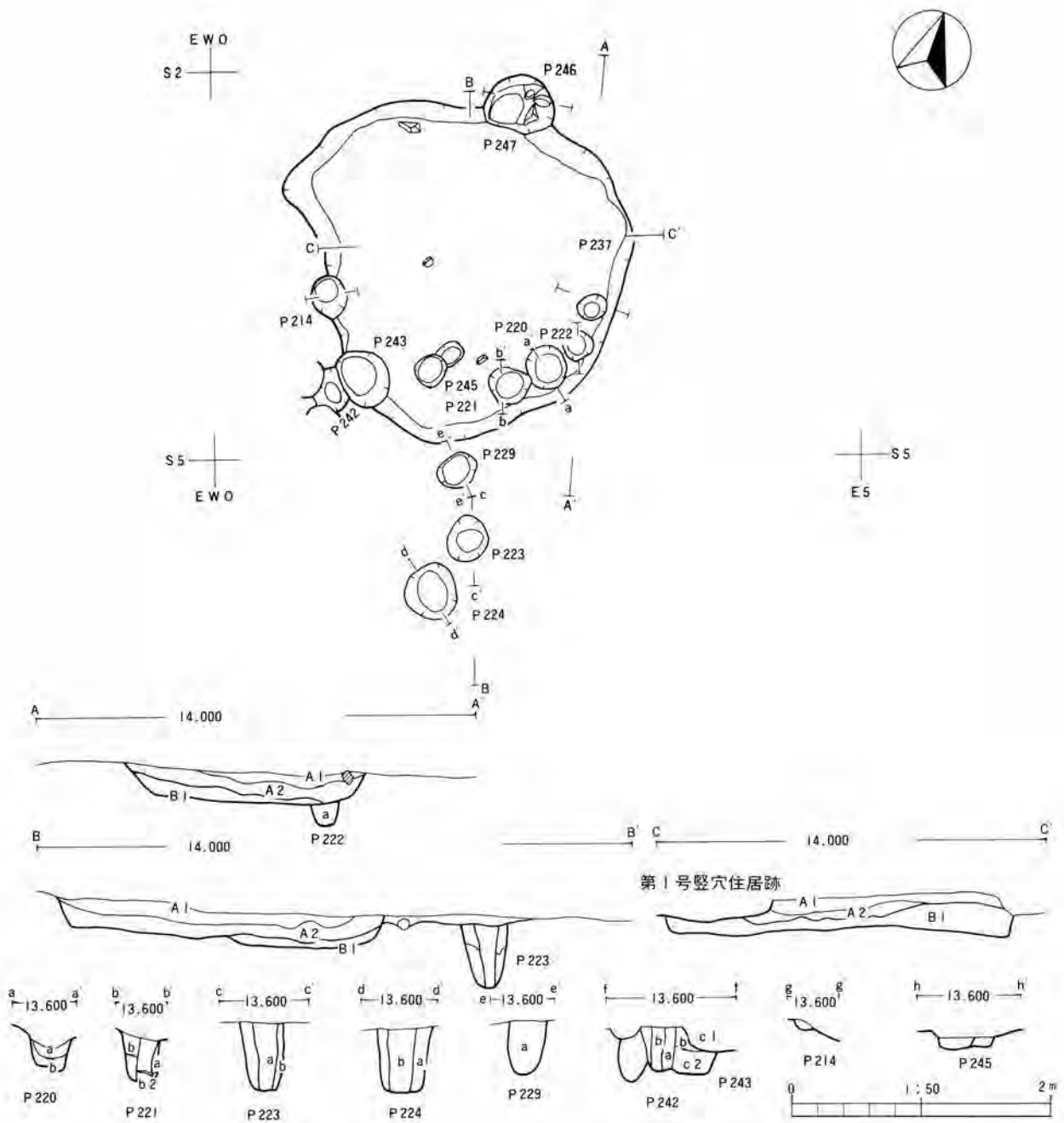
土器

8～17はB～A層から出土したもの。8は口縁部の突起で円孔を有する。9、10は横位の原体圧痕文を施文するもの。11は平行沈線文を施文する。12は縄文のみの施文である。13は縦位の沈線、14は短い原体圧痕列を伴う隆帯を施すもの。15～17はいずれも地文のみ施文する胴部片で、15は縦回転のLR縄文、16は結節縄文、17は網目状撚糸文を施文する。

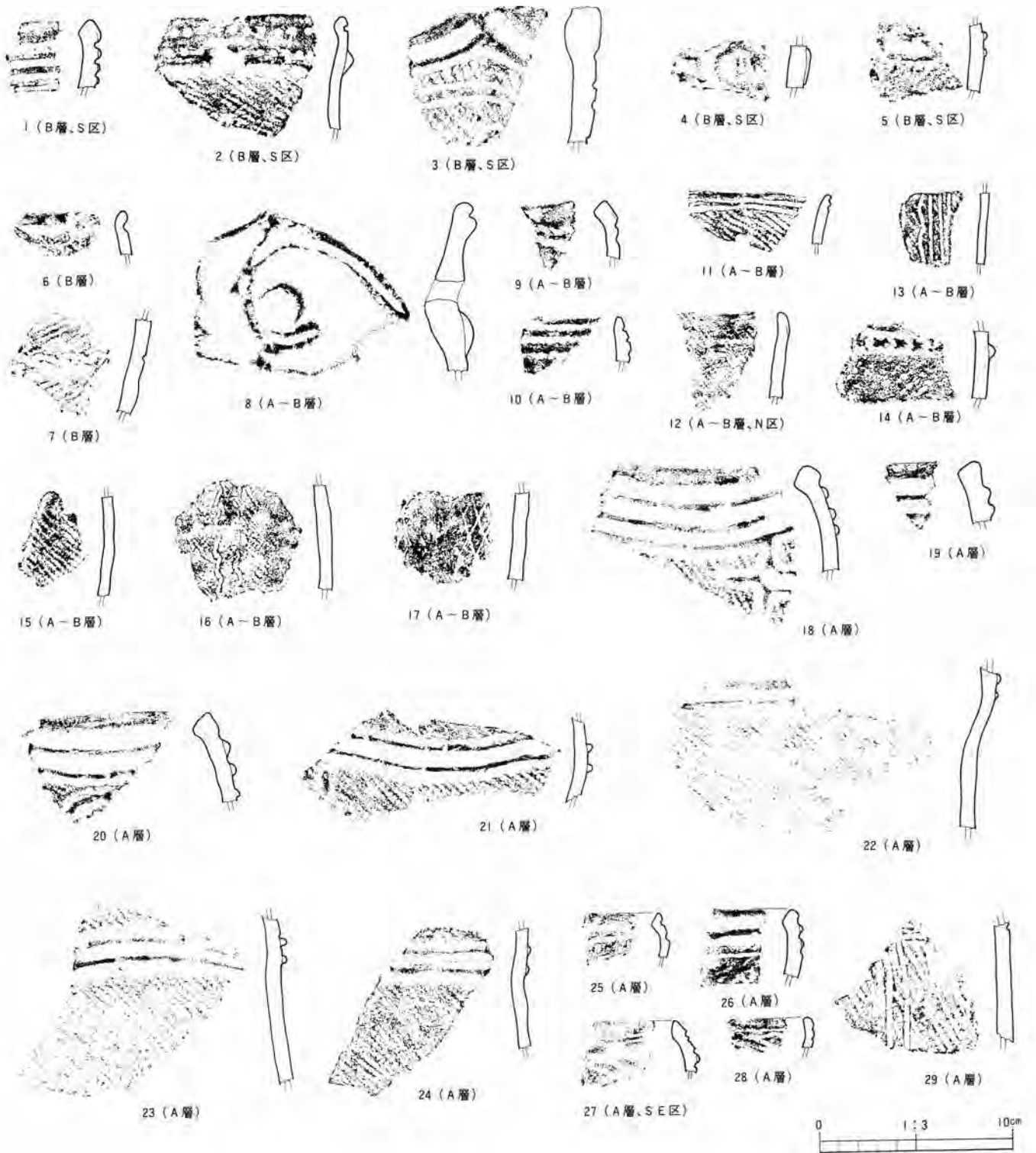
18～29はA層から出土したもの。18～24は接合できなかったが同一個体と思われるもので、口縁部が内湾し頸部に隆線を巡らし胴部と区画する。口縁部文様帯は上端に隆沈線を巡らし隆線で文様を描く。

第31図3は縦長の剝片を利用したスクレイパーである。側縁部から下端部にかけて細かい調整剝離を加えて機能部としている。第32図7、8は横長の楕円形礫を使用した敲打磨石である。7の側面には一部敲打痕が観察される。

石器



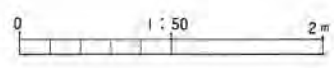
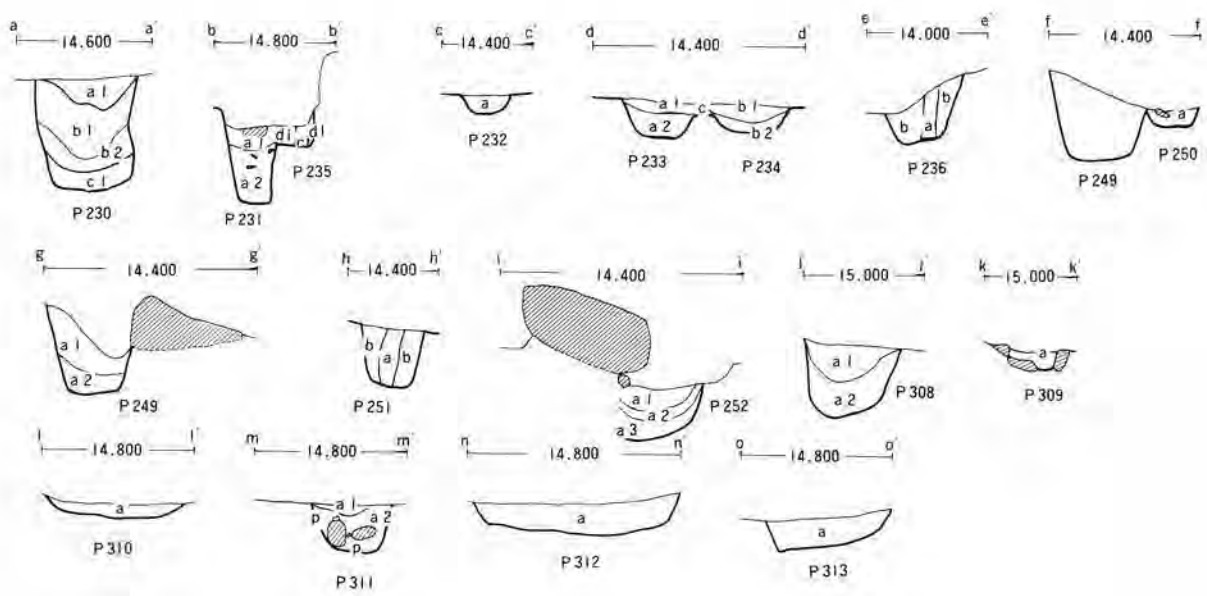
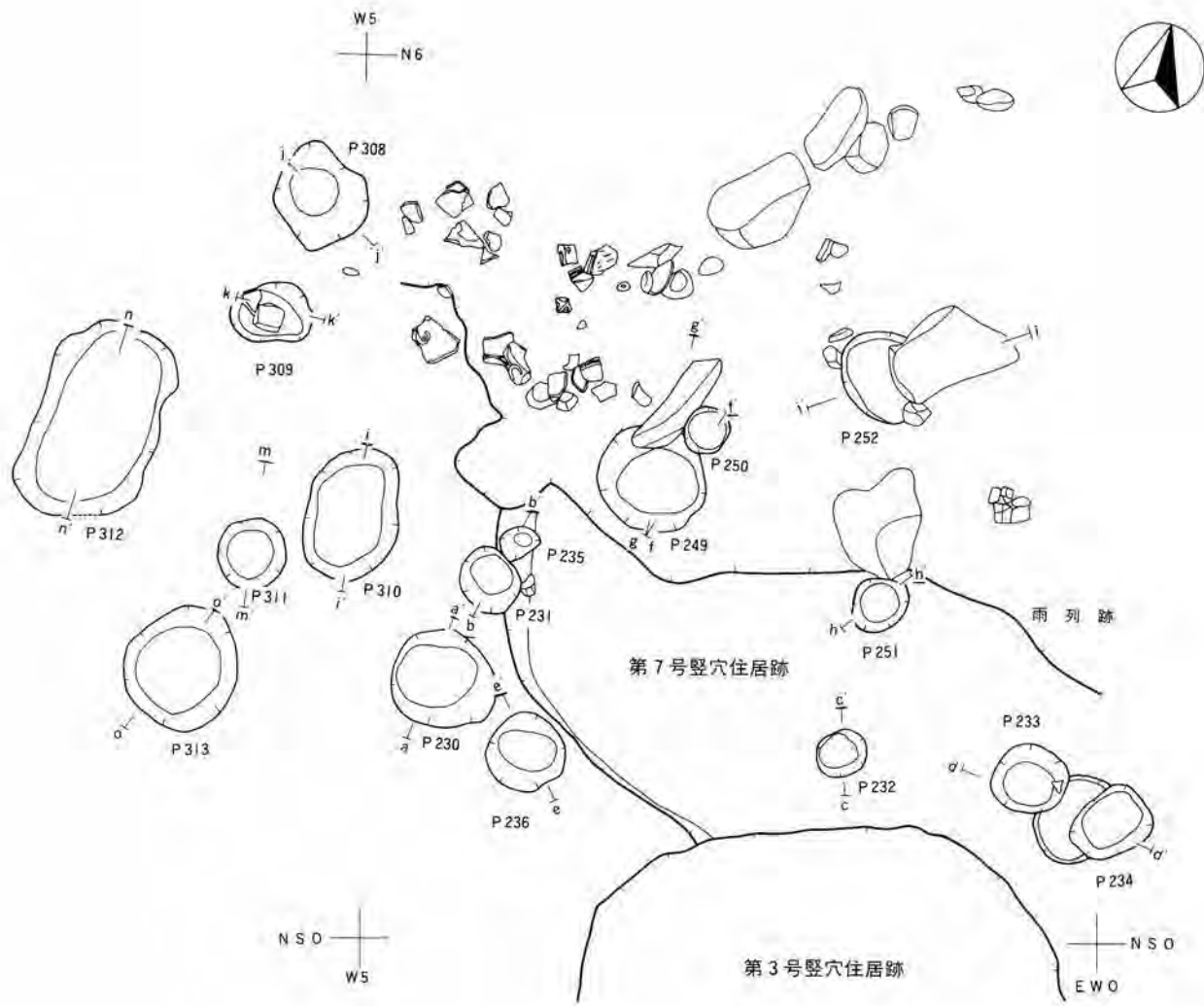
第26图 第6号竖穴住居跡



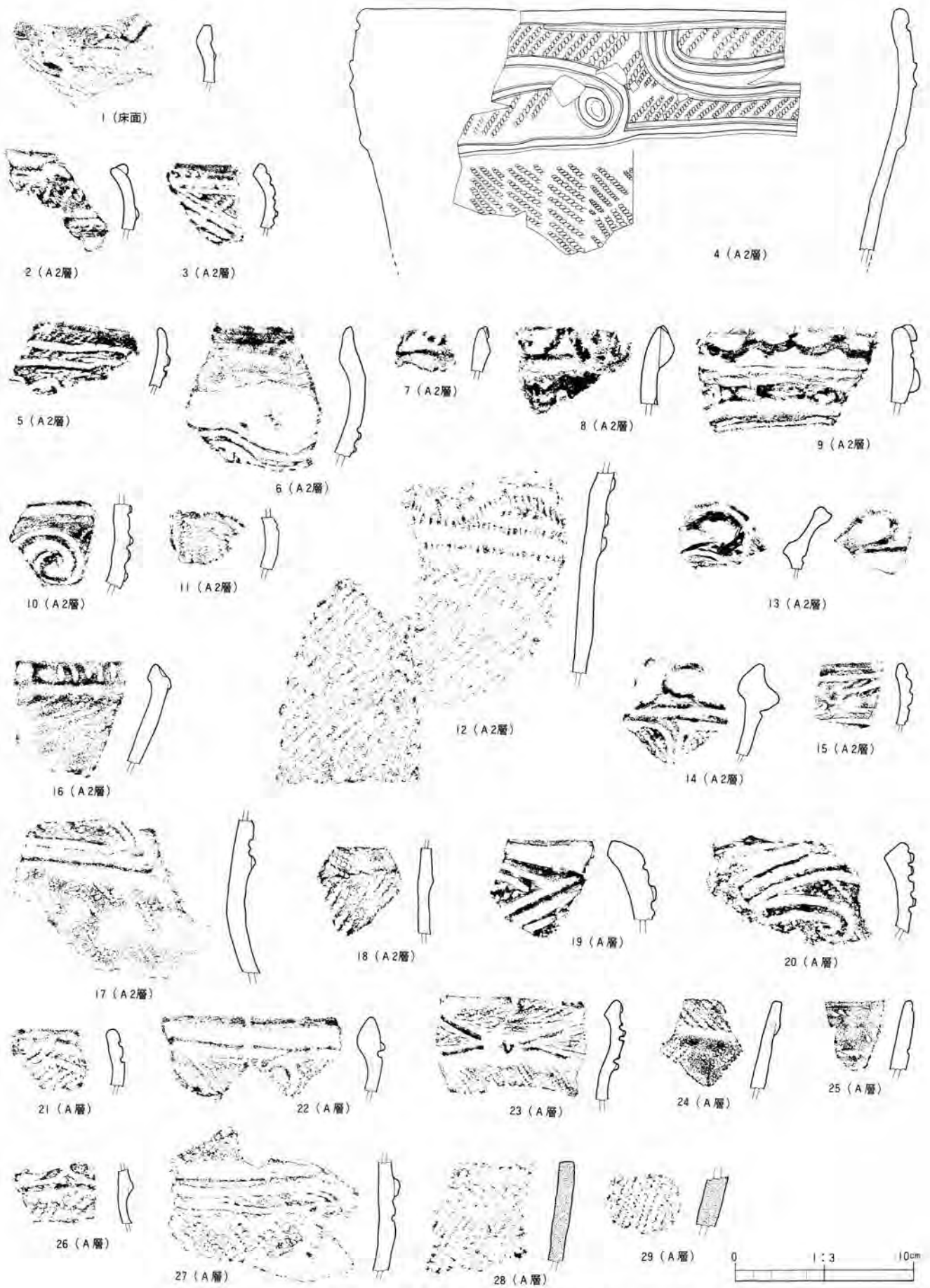
第27图 第6号竖穴住居跡出土土器

第7号竪穴住居跡（第28図）

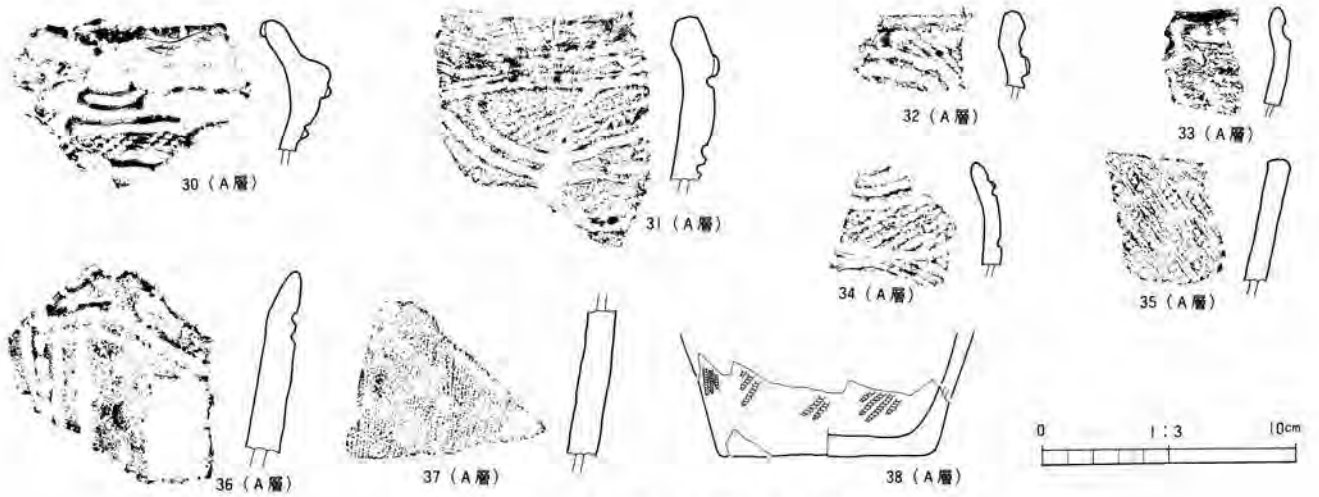
- 重複** 第3号竪穴住居跡と重複しこれに切られる。また、北側は土砂の流出跡により大半が破壊されている。
- 平面形** 平面形は、楕円形もしくは円形状を呈するものと推定されるが、規模なども不詳である。
- 埋土** 埋土は、A層から成り3層に細分される。いずれも黒褐色土を基本とするもので固さしまりは中程度である。A3層はやや褐色土に近くなる。また、各層とも土砂の流出の影響を受けており多量の砂礫を混在する。
- 床面** 床面は、地山面をそのまま使用している平坦面である。
柱穴及びピットは、床面や竪穴周囲に検出した。このうち確実に当住居跡に伴うものはP251、P232である。
第7号竪穴住居跡から出土した遺物は、第29図～第30図（土器）、第32図（石器）であるが、攪乱状態が顕著である。
- 土器** 第29図1は唯一床面上から出土したもので、波状口縁を呈する。波頂部にのみ波状の粘土紐の貼付文を施す。
2～12は床面に近いA層下部から出土したものである。2～6は口縁部が内湾するもの。2は隆線で上下を区画する。3は隆沈線で連結文を描くものか。4は口縁部のみを文様帯とするもので、隆沈線により楕円形区画や円文を描く。5は隆沈線を施すもの。6は口縁部が無文となり、その直下に大波状の沈線文が施文される。7～9は口縁部が直立ないしはわずかに外傾する。7は口縁部上端に刻目を伴う粘土紐を波状に貼付する。8は口縁部上端が肥厚し、その上に山形状に粘土紐を貼付する。9は口縁部上端に粘土紐を波状に貼付し指頭圧痕を伴う隆帯や沈線を施文している。10は隆沈線で渦巻文を描くもの。11は原体圧痕文を施文する。12は口縁部下部から胴部にかけての破片で、頸部に隆線を巡らし口縁部と胴部を区画する。口縁部には隆帯で文様を展開する。隆帯には原体圧痕文が側面に伴う。
13～18はA層下部から出土したものである。13は口縁部の波頂部分。14は口縁部上端に楕円形の区画をつくる。15は隆沈線で文様を描く。16は口縁部上端に横長の楕円形の区画をつくり、その内部に刻目状の短沈線を施文するもの。17は口縁部に隆沈線で区画文を形成するもの。18は羽状縄文を施文している。
19～29はA層から出土したものである。19～22は隆線や沈線で連結文などを描くもの。23は口縁部上端に細い粘土紐を貼付する。隆沈線の連結部にボタン状の凸突起がつく。24は複合口縁となるもので、肥厚部には横回転、以下には縦回転と回転方向を変えたR L R縄文を施文する。25は原体圧痕文を施文する。26、27は隆沈線で文様が施されるもの。28、29は胎土中に植物繊維を混入する前期のもの。28は口縁直下より羽状縄文を施文する。29は所謂「びっちり縄文」を施文するもの。
30～38はA層上面の当住居跡を検出する際に出土したものである。30は隆沈線で楕円形の区画文をつくるもので、口縁部上端内面にも粘土紐を貼付している。31は口縁部上端を無文とし沈線で区画文を描くもの。32は隆沈線が施されるもの。33は口縁部上端の横長の楕円形区画内に短原体圧痕列を施文する。36は山形口縁を呈するもので、沈線で文様を描く。縦位の沈線間には刺突が施されている。37は木目状撚糸文を施文する。38は底部片。



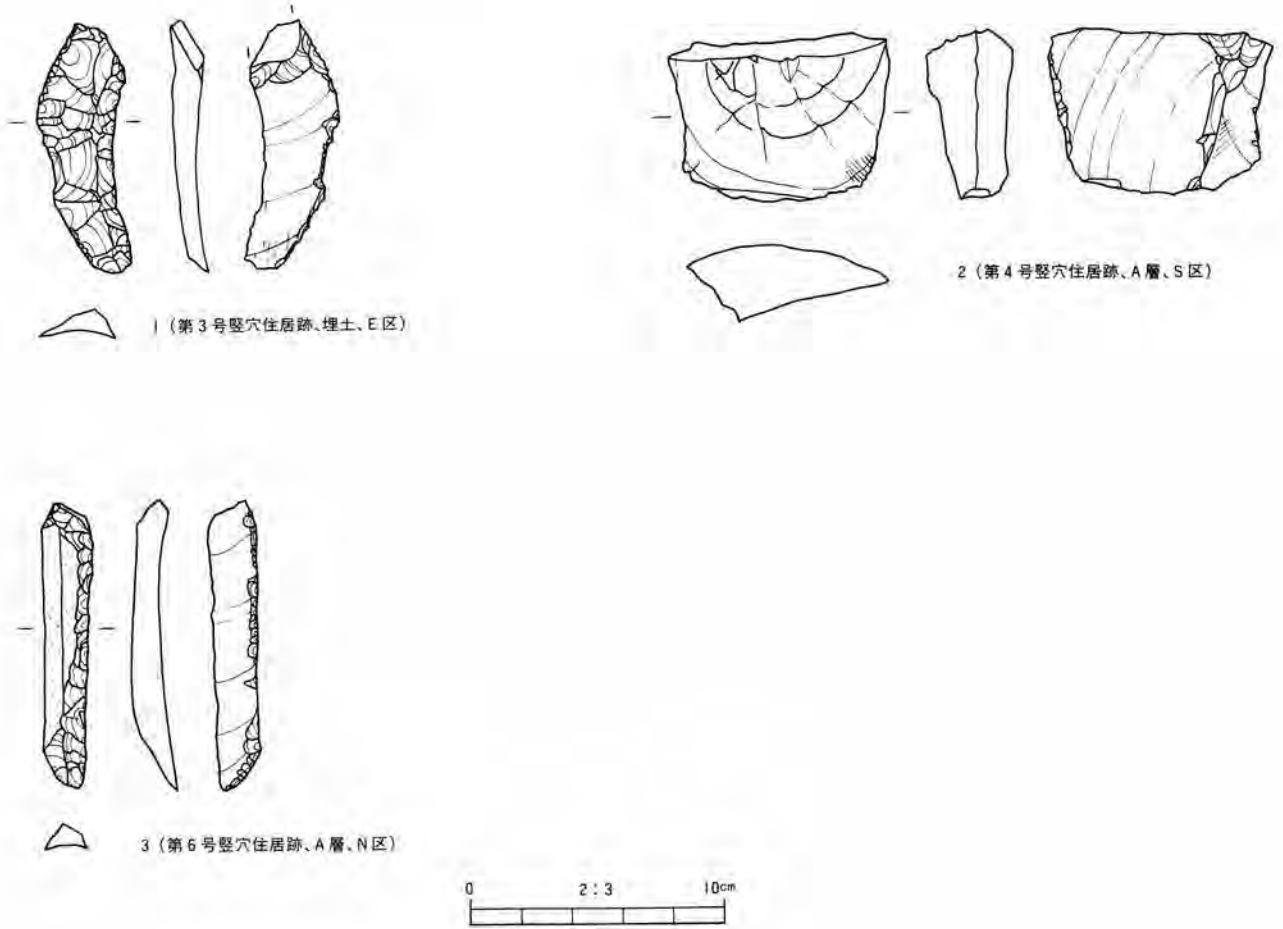
第28図 第7号竖穴住居跡及び周辺のピット



第29図 第7号竖穴住居跡出土土器①



第30图 第7号竖穴住居跡出土土器②



第31图 第3号、第4号、第6号竖穴住居跡出土石器

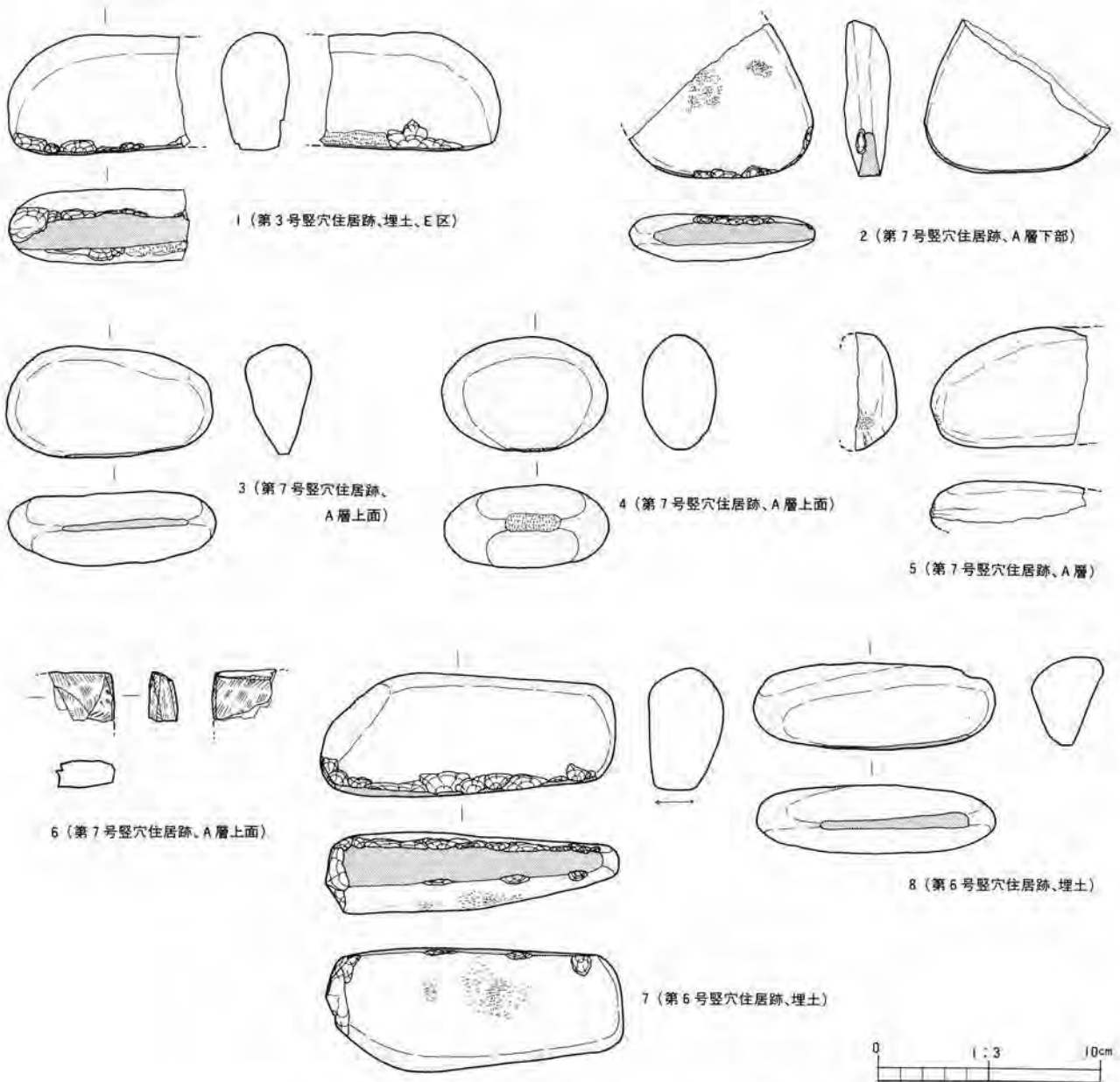
石器

第32図 2～6は当住居跡より出土した石器。いずれも自然礫を利用した礫石器である。2、3はともに長軸方向の一側縁を使用した敲打磨石である。2は長軸方向の一側縁から一部短軸方向の縁部にまで磨面が形成されている。4、5は側縁部の一部に敲打痕が認められる敲石。6は磨製石斧の基部片。全面に整形時による擦痕が観察される。

第33図は第3号、4号、7号竪穴住居跡周辺の土壌跡やピットの埋土から出土したもの。1～10は剥片石器、11、12は礫石器である。

1～8は石鏃である。8は先端部を欠くもの。1、2は基部がわずかに内湾するもの。3、4は基部がえぐれるもの。5～8はほぼ平基となるもので、このうち7は石鏃ではなく尖頭器の類となるものか。9はつまみ部分を有する石錐で機能部の先端を欠く。10は側縁から先端部にかけて調整剥離を加えた削器の類である。

11は横長の自然礫の下端部を使用した敲打磨石である。機能磨面の両側には細かい剥離が認められる。12は敲打石器の破損品。機能磨面の両側にはやはり使用による剥離が残る。



第32図 第6号、第7号竪穴住居跡出土石器

図版番号	ピット名	形状	規模	深さ	出土遺物等	図版番号	ピット名	形状	規模	深さ	出土遺物等
第26図	P 220	円形	0.35×0.30	0.25		第34図	P 114	円形	0.23×0.20	0.25	
"	P 221	楕円形	0.28×0.34	0.42		"	P 115	楕円形	0.30×0.28	0.18	
"	P 222	円形	0.23×0.24	0.17		"	P 116	楕円形	0.22×0.15	0.11	
"	P 223	楕円形	0.35×0.32	0.52		"	P 117	楕円形	0.40×0.55	0.34	
"	P 224	楕円形	0.44×0.40	0.50		"	P 118	円形	0.26×0.25	0.12	
"	P 229	楕円形	0.28×0.31	0.40		"	P 119	楕円形	0.25×0.20	0.10	
"	P 237	円形	0.20×0.23			"	P 150	楕円形	0.83×1.08	0.11	第33図-10
"	P 242	楕円形	0.35×0.38	0.34		"	P 151	楕円形	0.60×0.83	0.15	第33図-4
"	P 243	楕円形	0.43×0.40	0.35		"	P 152	楕円形	0.32×0.40	0.30	
"	P 245	円形	0.25×0.25	0.15		"	P 153	円形	0.30×0.30	0.19	
"	P 214	楕円形	0.33×0.28			"	P 154	楕円形	0.36×0.54	0.10	
第28図	P 230	楕円形	0.67×0.71	0.72		"	P 155	楕円形	0.35×0.44	0.14	
"	P 231	円形	0.45×0.42	0.64		"	P 157	楕円形	0.94×0.42		第33図-5
"	P 235	楕円形	0.20×0.26	0.23		"	P 158	円形	0.18×0.20	0.13	
"	P 236	円形	0.54×0.55	0.42		"	P 159	円形	0.18×0.20	0.10	
"	P 249	円形	0.73×0.74	0.60		"	P 160	楕円形	0.20×0.23	0.12	
"	P 250	円形	0.30×0.30	0.12		"	P 161	楕円形	0.28×0.30	0.18	
"	P 252	楕円形	0.62×0.35	0.35	第33図-7	"	P 162	楕円形	0.35×0.24	0.13	
"	P 308	楕円形	0.70×0.65	0.50	第33図-9	"	P 163	楕円形	0.30×0.22	0.03	
"	P 309	楕円形	0.40×0.55	0.18		"	P 164	楕円形	0.30×0.25	0.07	
"	P 310	楕円形	0.94×0.60	0.15		"	P 165	楕円形	0.77×0.80	0.30	
"	P 311	円形	0.48×0.47	0.30		"	P 166	楕円形	0.18×0.00	0.07	
"	P 312	楕円形	1.28×0.78	0.25		"	P 167	楕円形	0.18×0.31	0.10	第33図-12
"	P 313	円形	0.88×0.78	0.22	第33図-1	"	P 168	楕円形	0.30×0.31	0.22	
第34図	P 100	楕円形	0.97×1.14	0.20		"	P 169	楕円形	0.49×0.25	0.07	
"	P 101	楕円形	0.40×0.35	0.19		"	P 171	楕円形	0.24×0.21	0.22	
"	P 102	楕円形	0.31×0.28	0.20		"	P 172	楕円形	0.21×0.15	0.05	
"	P 103	楕円形	0.26×0.23	0.10		"	P 173	楕円形	0.18×0.23	0.10	
"	P 104	円形	0.25×0.24	0.14		"	P 174	楕円形	0.96×1.12	0.35	
"	P 105	楕円形	0.35×0.33	0.20		第38図	P 301	楕円形	1.73×1.05	0.11	
"	P 106	楕円形	0.85×0.68	0.12		"	P 303	円形	0.34×0.36	0.30	
"	P 107	円形	0.50×0.45	0.31		"	P 304	楕円形	0.35×0.27	0.25	
"	P 108	楕円形	0.40×0.28	0.14		"	P 306	楕円形	1.14×0.56	0.07	
"	P 109	楕円形	1.17×0.80	0.15	第33図-2	"	P 307	楕円形	0.28×0.34	0.18	
"	P 110	楕円形	1.21×0.88	0.45		"	P 314	円形	0.20×0.21	0.09	
"	P 111	楕円形	0.98×1.05	0.21		"	P 315	円形	0.21×0.22	0.10	
"	P 112	楕円形	0.22×0.18	0.25		"	P 316	楕円形	0.18×0.22	0.22	
"	P 113	円形	0.22×0.20	0.15		"	P 317	円形	0.57×0.56	0.18	

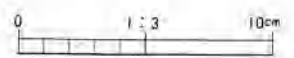
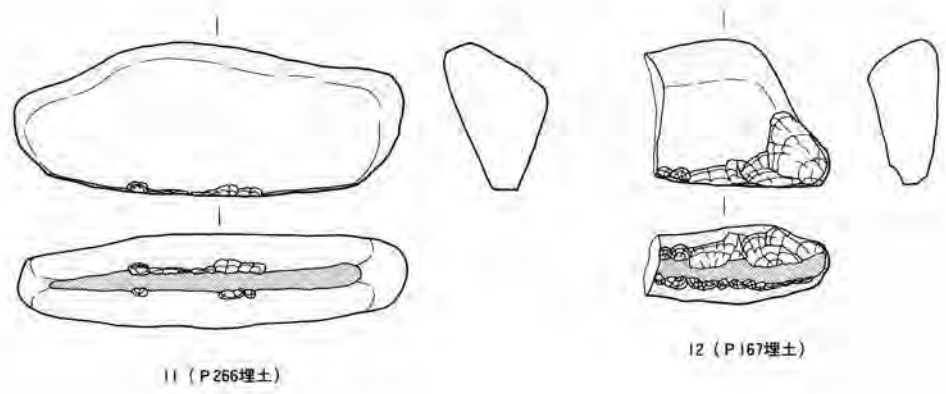
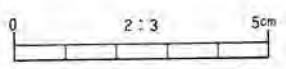
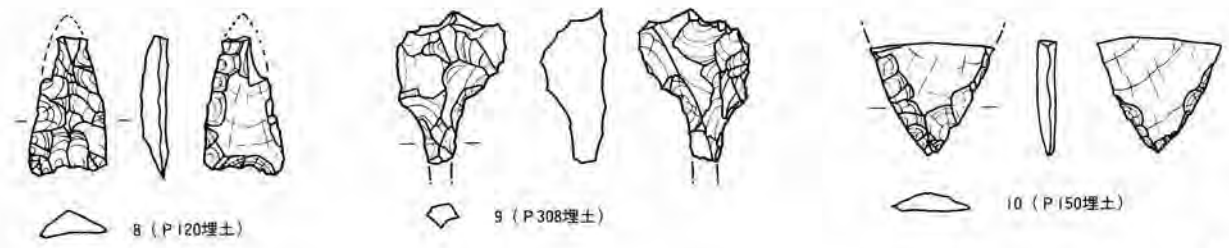
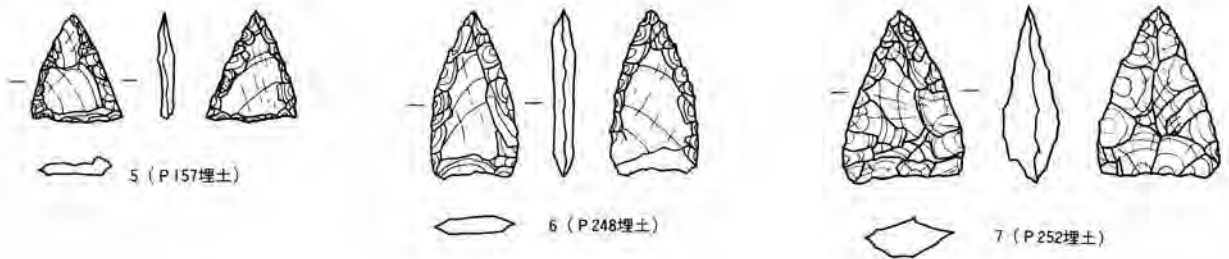
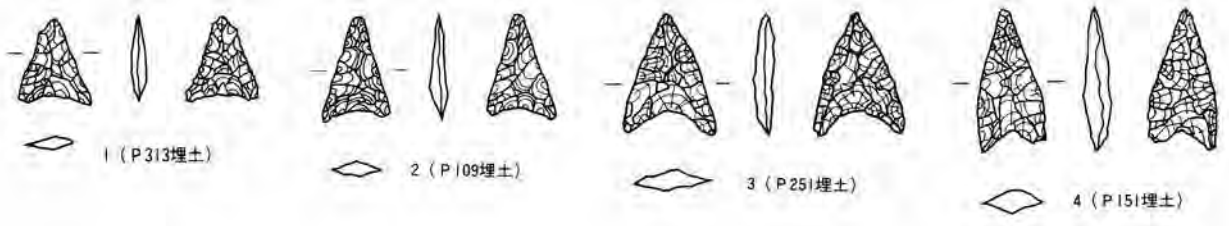
第1表 竪穴住居跡以外のピット計測値一覧表

竪穴住居跡以外のピット（第34図～第38図）

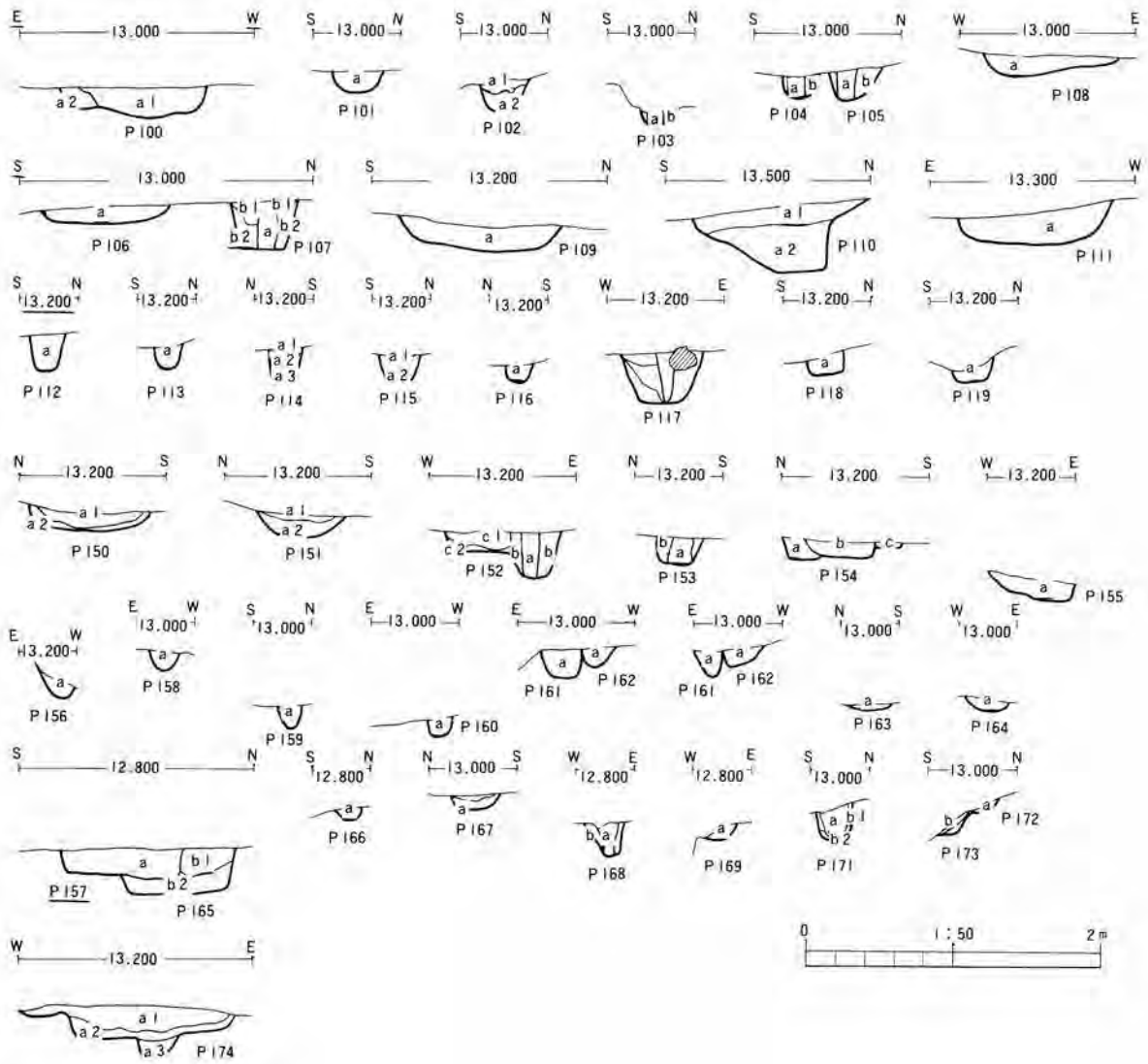
今回の調査では、竪穴住居跡の床面以外からも多数のピットや土壌跡を検出しているが、余りにも数が多いので個々の記述については省く。41ページにそれらの形状や規模などについての一覧表を掲載した。

これらの中には、明瞭な柱痕跡が認められるものもあり柱穴跡として考えられるものもあり、住居跡を構成するものであった可能性も考えられる。

土器・石器などの遺物を埋土中に含むものもあったが、いずれも極小片ばかりで量的にも少量である。

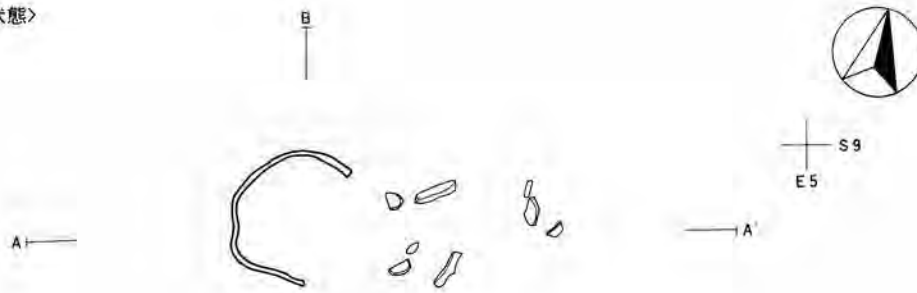


第33図 竪穴住居跡以外ピット出土遺物

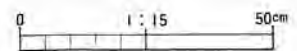
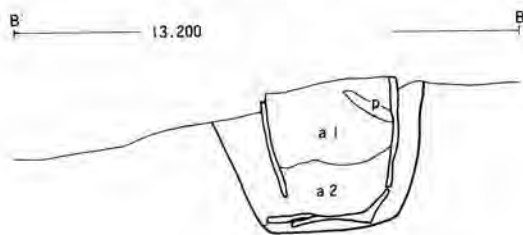
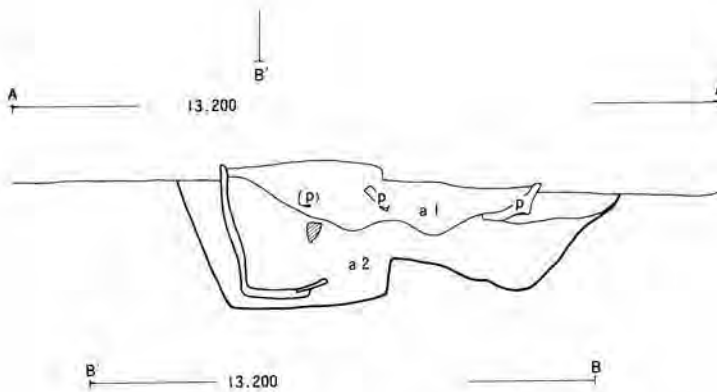
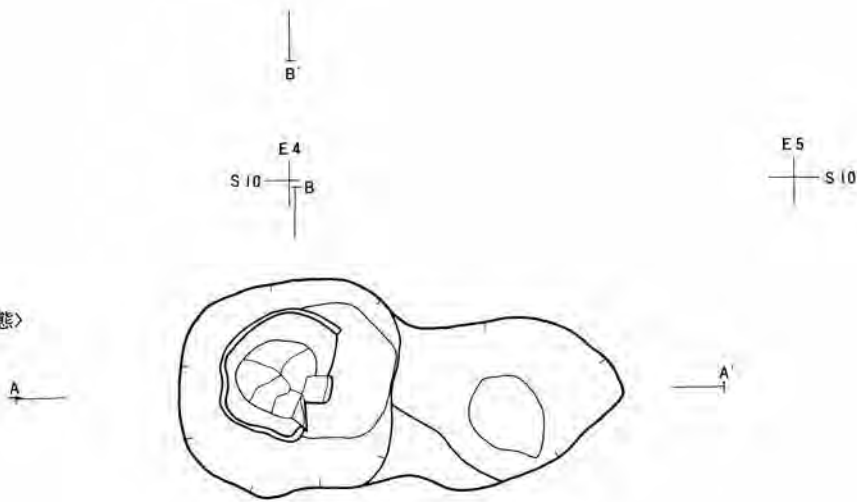


第35図 調査区東南部ピット群断面

<検出状態>



<完掘状態>

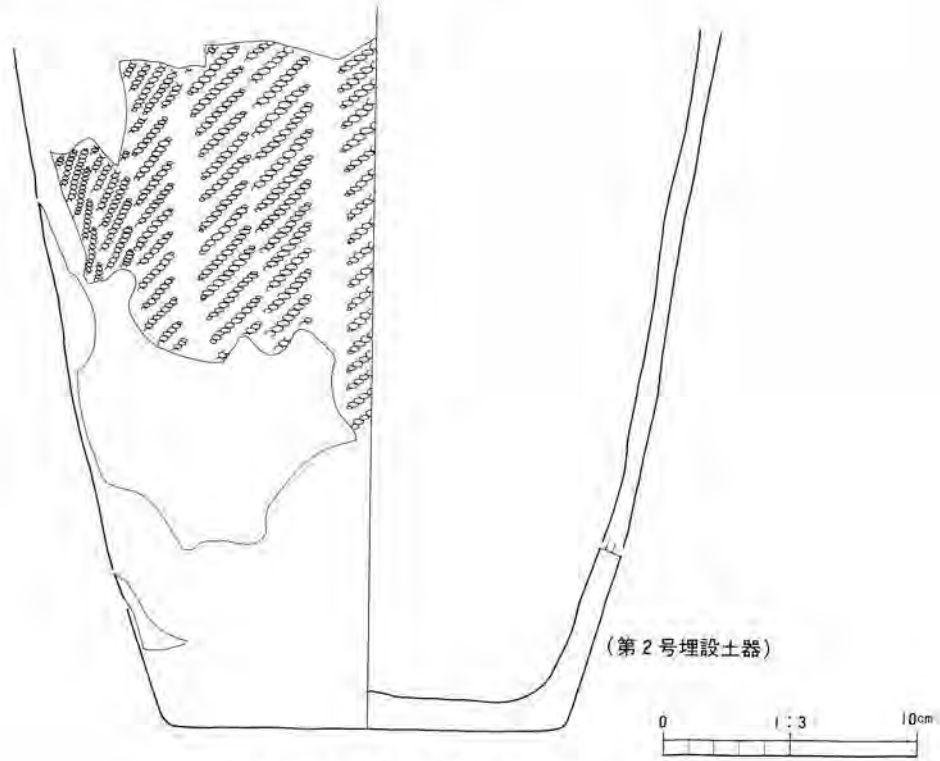


第36図 第2号埋設土器平面図、断面図

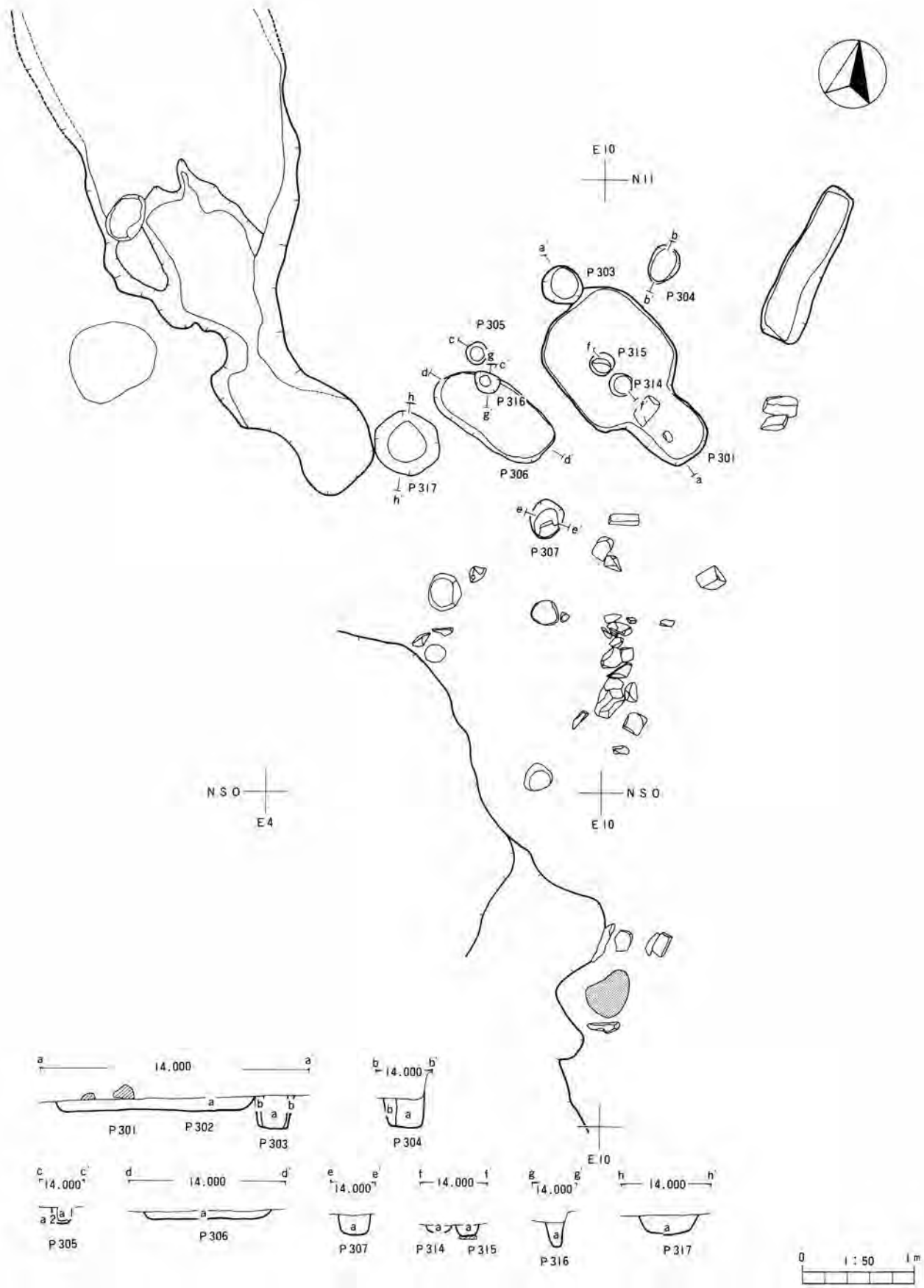
第2号埋設土器（第34、36、37図）

調査区の東南部に検出したもので、検出面はV層上面である。土器は、底部を下にした正立状態で埋設されていた。口縁部を欠く深鉢形土器である。土器よりも一回り大きなピットを掘り込み、その中に埋設しており、ピットの東側部分が大きく掘られている。検出時には、第36図の上段図の様に東側に土器が散乱した状態で、掘り下げた結果、土器の東側を破壊した様な状況である。

土器はRL縦回転の縄文を施文したもので、周辺にあった口縁部片もこの土器のものと考えられるが、接合できなかった。



第37図 第2号埋設土器



第38図 調査区北東部ピット群

土砂流出跡（第39図）

花崗岩

今回の調査区の北西隅から南東隅に斜めに横切るようなかたちで検出した。調査区の中央部より北西側は人力ではとても移動させることが不可能な花崗岩の角礫から垂角礫が大量の砂礫とともに堆積しており、しかも平面形や深さ、規模が一定しない、土層の堆積状況などから人工的なものとは判断されず自然のもたらした土砂の流出跡と断定した。前述のとおりとても人力では動かせない大量の礫のため調査区の北西側は調査不能であった。また、この土砂の流出跡の影響は周辺部にまでかなりおよぼしており、相当大規模なものであったと推定される。

この土砂流出跡は、第7号竪穴住居跡や土壙跡、ピットを破壊していることや各竪穴住居跡埋土に砂礫が混在していることなどから、これらよりは新しい時期のものと考えられる。

平面形

平面形は一定しない。規模も調査区外の状況が把握できないので（特に北側）不明であるが、第5図の礫の出土状況を見てもわかるとおり、大礫は調査区の北西側からほぼ中央部付近でと滞まっているようである。なお、調査区の西に隣接する山地帯には今回検出したような花崗岩礫が多数見うけられる。

深さは危険が伴い最後まで掘れなかったが、調査区の中央部付近で1 m以上であった。

埋土

埋土を見てみると、中央部付近より北西側（第39図A-A'、B-B'ライン付近）は、大～小規模の角礫、円礫を伴う明褐色の砂土（B層）で、基本層序II層以下で検出される。そして、所々には流出をまぬがれた黒褐色土（C層）が島状に残っている。これより南東側では（E-E'ライン付近）、底面にのみ砂土が堆積し（C層）、上部には黒褐色土（A層）から暗褐色土（B層）が堆積する。

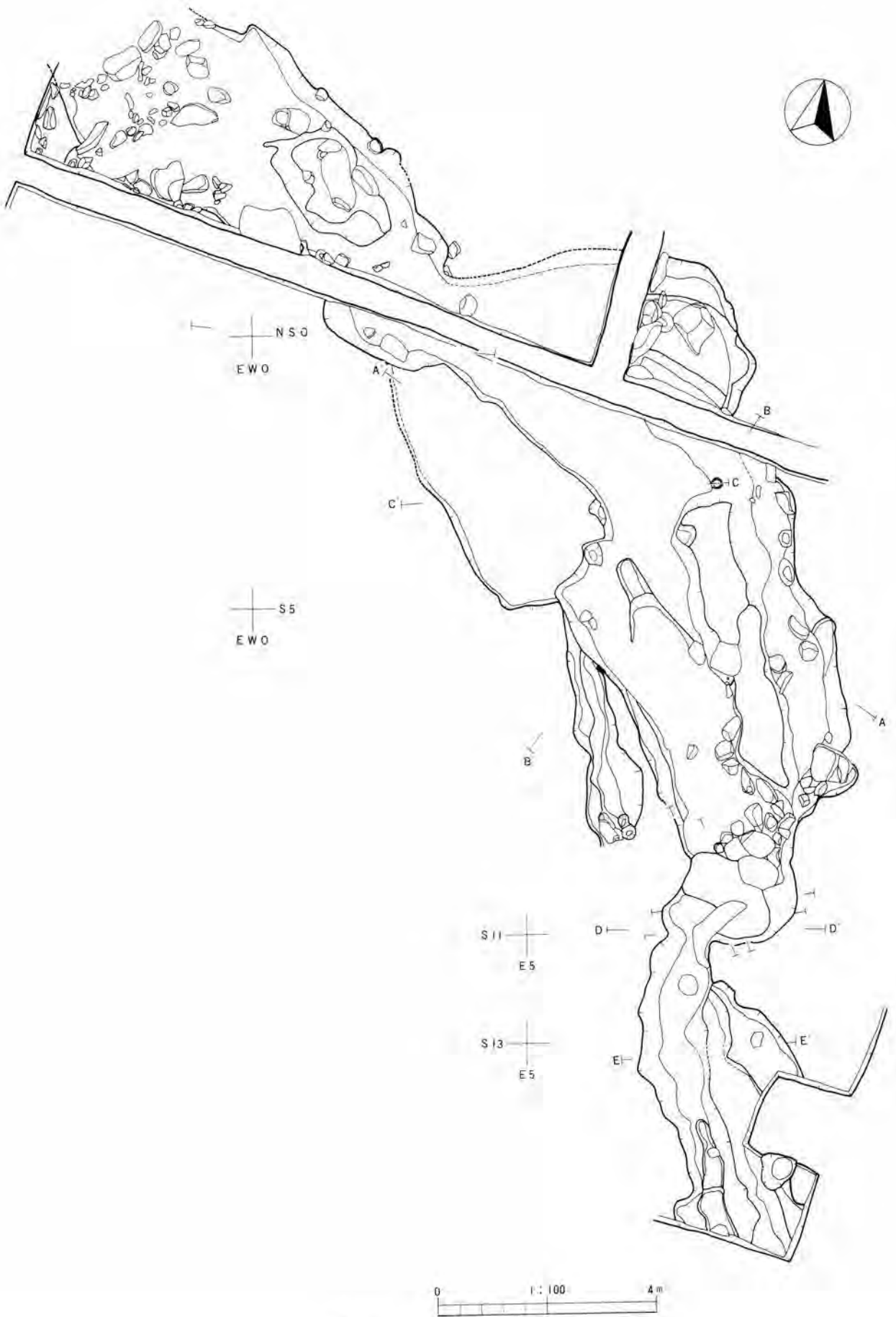
底面及び壁は、かなり凹凸が著しい。

遺物は多量の砂礫とともに多数含まれていた。調査の段階で中央から北西側をM1、中央部付近をM2、東南部をM3として遺物を取り上げたので、ここではM1～3に分けて記述する。

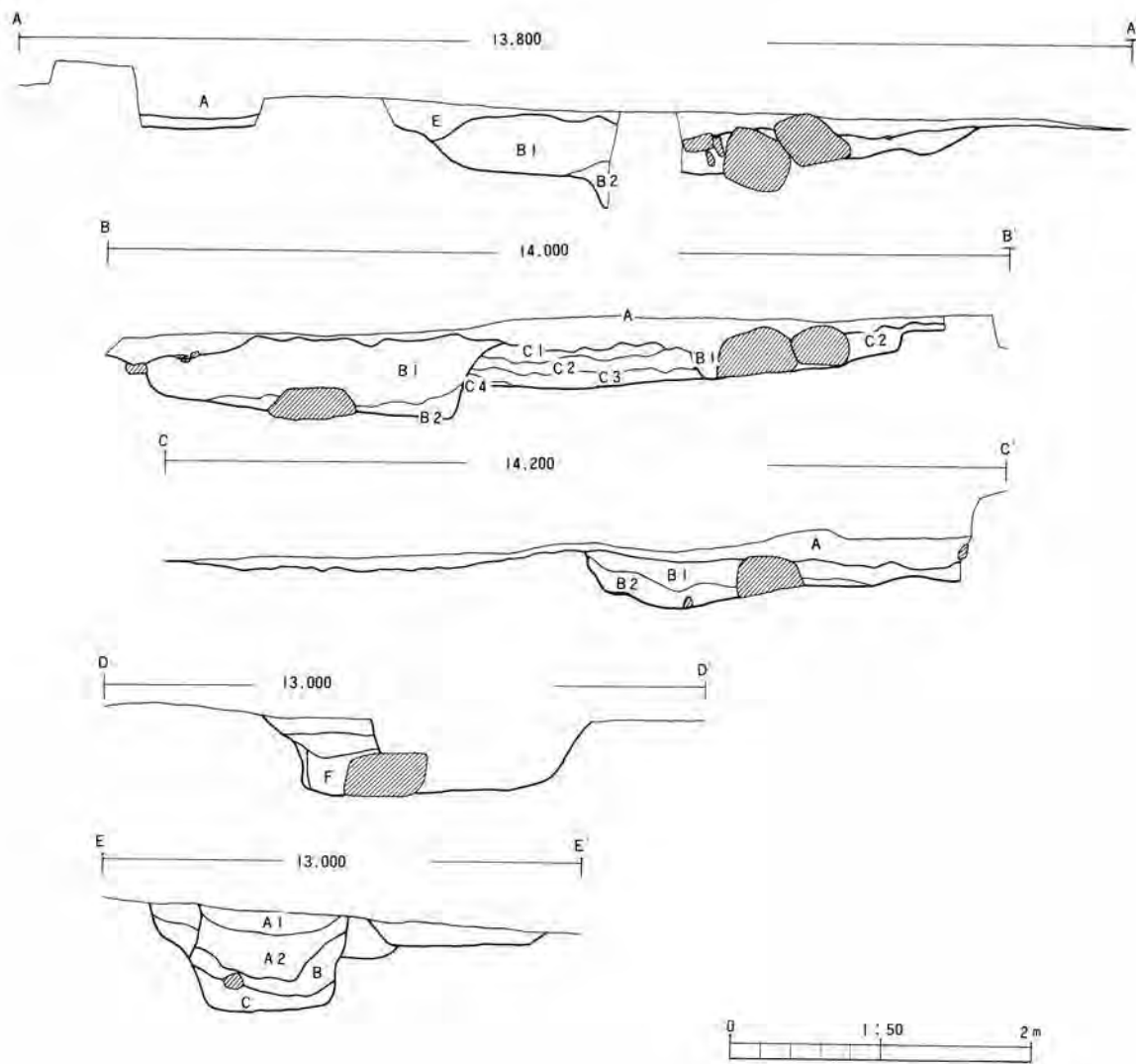
第41図、42図はM1地区より出土したものである。

M1土器

1～28は角礫、円礫を伴う明褐色の砂土（B層）からのもので、1は口縁部がわずかに内湾し胴部が膨らむ深鉢である。山形口縁を呈し、台形状の頂部は肥厚する。口縁部の文様は沈線と刻目により施文されており、突起部にも刻目を入れる。頸部に刻目を伴う隆帯を巡らし胴部と区画している。胴部には結束する縄文を施文している。2～22は口縁部が直立ないしは外傾・外反する深鉢である。2は楕円形区画の連結部にブリッチ状の突起がつく。刻目を伴う隆帯と沈線で文様を描く。3、4は隆沈線による楕円形区画をつくり、その内部に3は短沈線状の刻目を、4は原体圧痕文を施文する。5は平行沈線施文後に刺突を伴う隆帯で文様を描くもの。6は口縁部上端に刻目を施し側面に原体圧痕文を伴う隆帯で文様を構成する。7は波状の沈線文が施される。8は平行沈線間に半截竹管による刺突列と原体圧痕文を伴う隆帯で施文される。9～12は口縁部上端に横位の原体圧痕文を施文するもので、12は沈線による連弧文が施される。14は口縁部上端に波状の粘土紐の貼付されている。15は頸部に短原体圧痕文を伴う隆帯を巡らし口縁部と胴部を区画している。口縁部は無文で胴部には絡文を施文する。16は口縁部上端に原体圧痕文、頸部に一条の沈線を巡らし、口縁部は横位、胴部は縦位の羽条縄文を施文する。17は沈線を矢羽根状に施す。18は複合口縁となるもので口縁部上端に横回転のLR縄文を施文する。19は口縁部に胴部とは回転方向を変えた縄文を施文し、口縁部文様帯を意識している。



第39图 土砂流出跡



第40図 土砂流出跡断面

20は指頭圧痕の伴う隆帯を貼付する。21は複合口縁となるが無文である。22は浅鉢となると考えられるものである。口縁部上端に細い粘土紐を波状に貼付する。23～26は胴部の破片である。23、25は沈線、24は隆沈線で文様を描く。26は縦位の隆沈線で区画文をつくるもので一部磨り消しが伴う。27は口縁に突起がつくもので、平行沈線文を施文し無文部を形成している。後期に伴うものか。28は口縁部上端が無文となるものである。

29～34は明褐色の砂土（B層）の上部の黒褐色土層（A層）から出土したもの。29は波状口縁となるもので口縁部上端に原体圧痕文を施文し波頂下より側面に原体圧痕を伴う隆帯を垂下させる。30は口縁部上端に平行する原体圧痕文を、31は横位の原体圧痕下に波ない山形状の沈線を施すもの。32は隆線と沈線、刺突で施文する。33は刺突を伴う隆帯と縦位の沈線、34は刻目を伴う隆帯と沈線間に刺突を施文する。

35～37は黒褐色土層（A層）上面から出土したもの。35は口縁部が短く外反するもので、原体圧痕文が施文される。36は隆沈線で区画文をつくるものか。37は網目状捺糸文を施文する。

38～54は埋土中から出土したもの。38は口縁部上端が肥厚し、沈線による楕円形区画が見られる。39は沈線による施文。40は縄文のみの施文。41は短原体圧痕列、42は口縁部上端に刻目状沈線を施文する。43は複合口縁となるもので、縦回転のR L縄文施文後にV字状の沈線を施文する。44は山形口縁部に斜位に原体圧痕文を施文する。45は刻目を伴う太い隆帯を貼付するもので、内面には渦巻文を描く。46は波頂下から波状の粘土紐を貼付する。47、48は複合口縁となるもので、47には縄文施文後に貼付文が施される。49は口縁部が外反するもので平行する原体圧痕文を施文する。50は縦位の側面に原体圧痕の伴う隆帯が貼付される。51、52は胴部から底部片の実測図。53、54は胎土中に植物繊維を含む「びっちり縄文」を施文するもの。

第43図55～82はM2地区より出土したものである。

55～67は角礫、円礫を伴う明褐色の砂土（B層）から出土した。55は隆沈線により渦巻文を描く。56は刺突を伴う隆帯と沈線を施文する。57は口縁部が外反するもので頸部に刺突を伴う隆帯を巡らす。口縁部の文様は細い沈線と刺突により施文される。58、59は隆沈線で文様を描く。60、61は隆沈線で施文する。63は口縁部上端に蛇行する粘土紐を貼りつける。64は口縁部上部に隆沈線を施す。65は鋸歯状の沈線文を施文する。66は複合口縁となるもので、肥厚部に横位の原体圧痕文、胴部には横位の綾絡文を施文する。67は横回転のL R縄文施文後に縦位に粘土紐を貼付する。

68～70は黒褐色土層（A層）から出土したもの。68、69は隆沈線で施文する。70は波状口縁を呈するもので、原体圧痕文により区画文を描く。

71～82は埋土中から出土したもの。71は縦位に区画文を描くものと思われる。72は隆帯で区画された口縁部上部に沈線により長形状の区画をつくり、その連結部に刺突を加わせる。73は口縁部上端に平行する隆沈線を施文する。74は隆線により楕円形区画をつくる。75は山形口縁を呈するもので、頂部は長形状の突起となる。頸部に隆沈線を巡らし胴部と区画する。口縁部の文様は沈線で施文され渦巻状となる文様が見られる。76は複合口縁部に明瞭にわかれる楕円形文をつくる。77は波状口縁を呈するもので、沈線文が施されている。78は口縁部下部に文様を施文するもので、沈線と半截竹管による連続する刺突列を施す。79は口縁部上端に隆沈線による楕円形から長形状の区画をつくるものか。80～82は胴部片。81は刻目を伴う隆帯を

M2土器

貼付し、ボタン状の小突起が伴う。82は木目状の撚糸文を施文する。

M3土器

第44図83～89はM3地区より出土したものである。

83～89は底面近くの砂土層（C層）より出土したものである。83、84は複合口縁となるもので、肥厚部に83は横回転のRL縄文、84は短原体圧痕文を施文する。85は波状口縁となるもので、口縁部上端に楕円形区画をつくる。内面にも渦巻文を貼付している。86は口縁部上端が肥厚し楕円形区画をつくり、沈線で施文する。87は口縁部上端に刻目を施し沈線で施文する。88は口縁上端に横位の原体圧痕文とその下に山形状の沈線文を施文する。89は原体圧痕を側面に伴う隆帯下に連弧状の沈線文を施文する。

90、91は暗褐色土（B層）より出土したものである。90は口縁部が外傾するもので頸部に円形刺突を伴う隆帯と小波状沈線を巡らす。口縁部は無文である。91は胴部片で縦位の綾絡文を施文するもの。

92～102は上部の黒褐色土（A層）から出土したものである。92は口縁部上端に楕円形区画を形成するもの。93は口縁部上端に横位の原体圧痕文と連弧状の沈線文を施文する。94は複合口縁となるもので肥厚部に縦位の蛇行する粘土紐の貼り付けが施される。95、96は口縁部が内湾するもので、95は沈線で楕円形の区画文を描く。96は短原体圧痕文を伴う。97は口縁部上端に隆沈線を施すもの。98は隆沈線で文様を描く。99は口縁部がわずかに外反するもので、縄文のみの施文である。100は内湾する口縁部の下部から頸部の破片で、口縁部に隆沈線による連結文を施文する。101は口縁部上端に原体圧痕文と沈線による連弧文を施文する。102は刺突列下に刻目を伴う隆帯を巡らす。103は胎土中に植物繊維を含むもので、羽状縄文を施文する。

104～106は黒褐色土（A層）上面から出土したものである。104は口縁部上端に隆沈線を巡らしたものである。105は大波状口縁を呈するもので、波頂部に渦巻文を施す。口縁部の文様は隆沈線による区画文を描く。頸部は無文となる。106は口縁の突起部片。

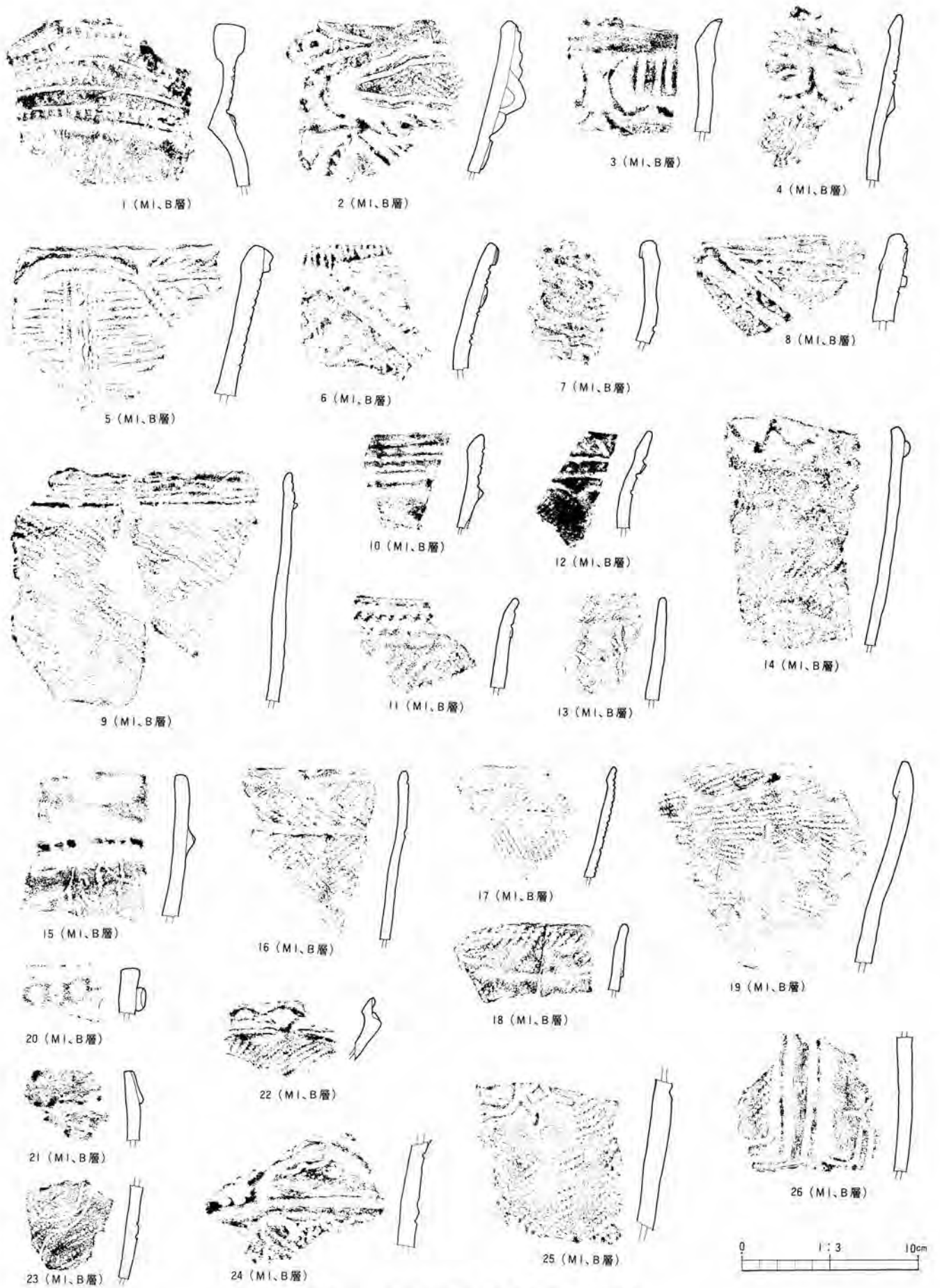
107、108はA層から出土したものである。107は隆沈線で文様を描く。108は口縁部が短く外反するもので、口縁部は無文で頸部に円形刺突を伴う隆線が巡る。

石器

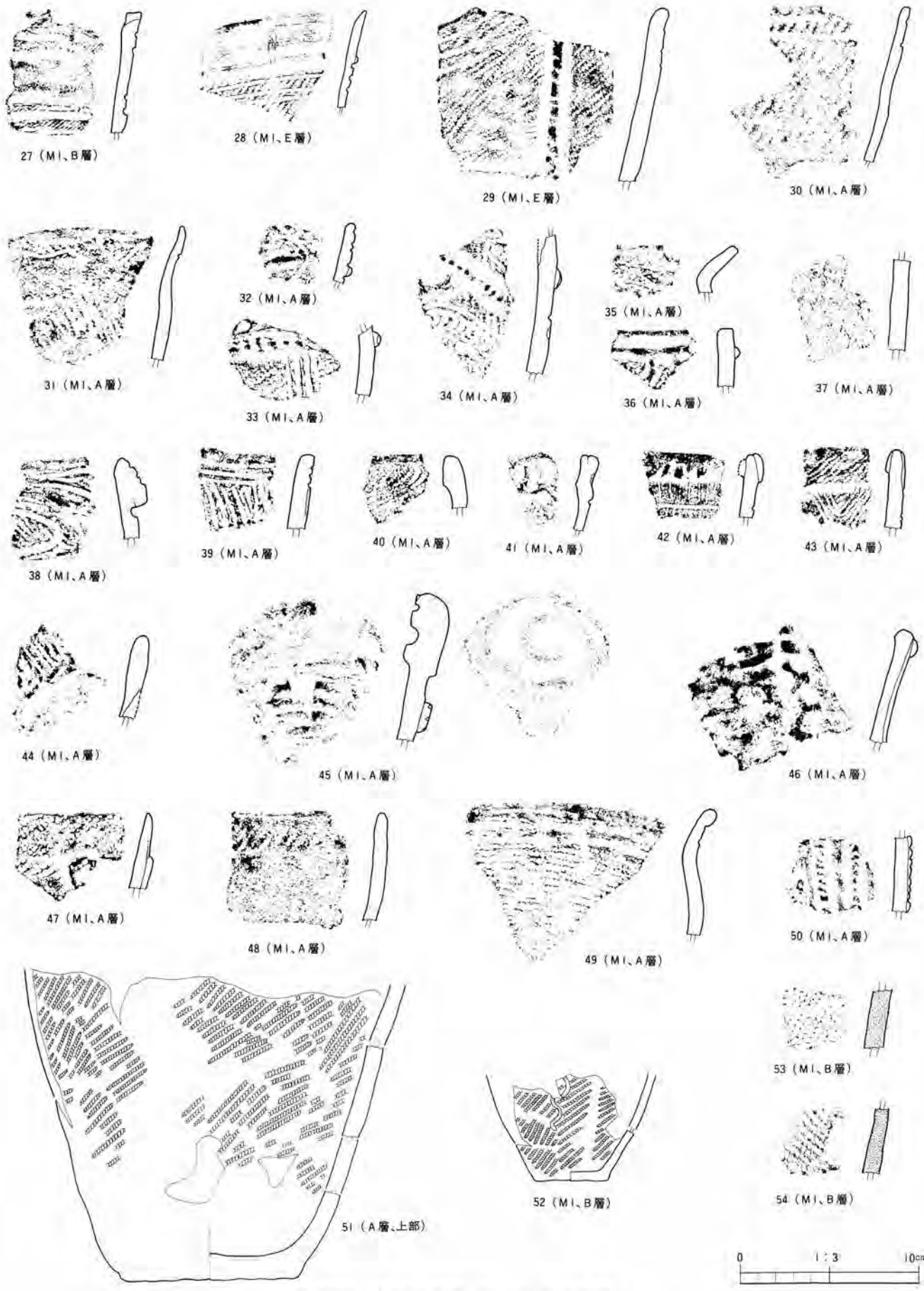
第45図109～132はM1～3から出土した石器である。109～118は剥片石器、119～132は礫石器である。

109～113は石鏃である。109、113は基部が深く抉れる。112は砂岩系のもろい石質のもので摩滅が著しい。114は小形の筥状石器と思われるが両刃状に加工している。115は楕円形状をしたものでスクレイパーの類か。116、117は一部に自然面を残すもので先端部から側縁部の一部を使用した削搔器類である。

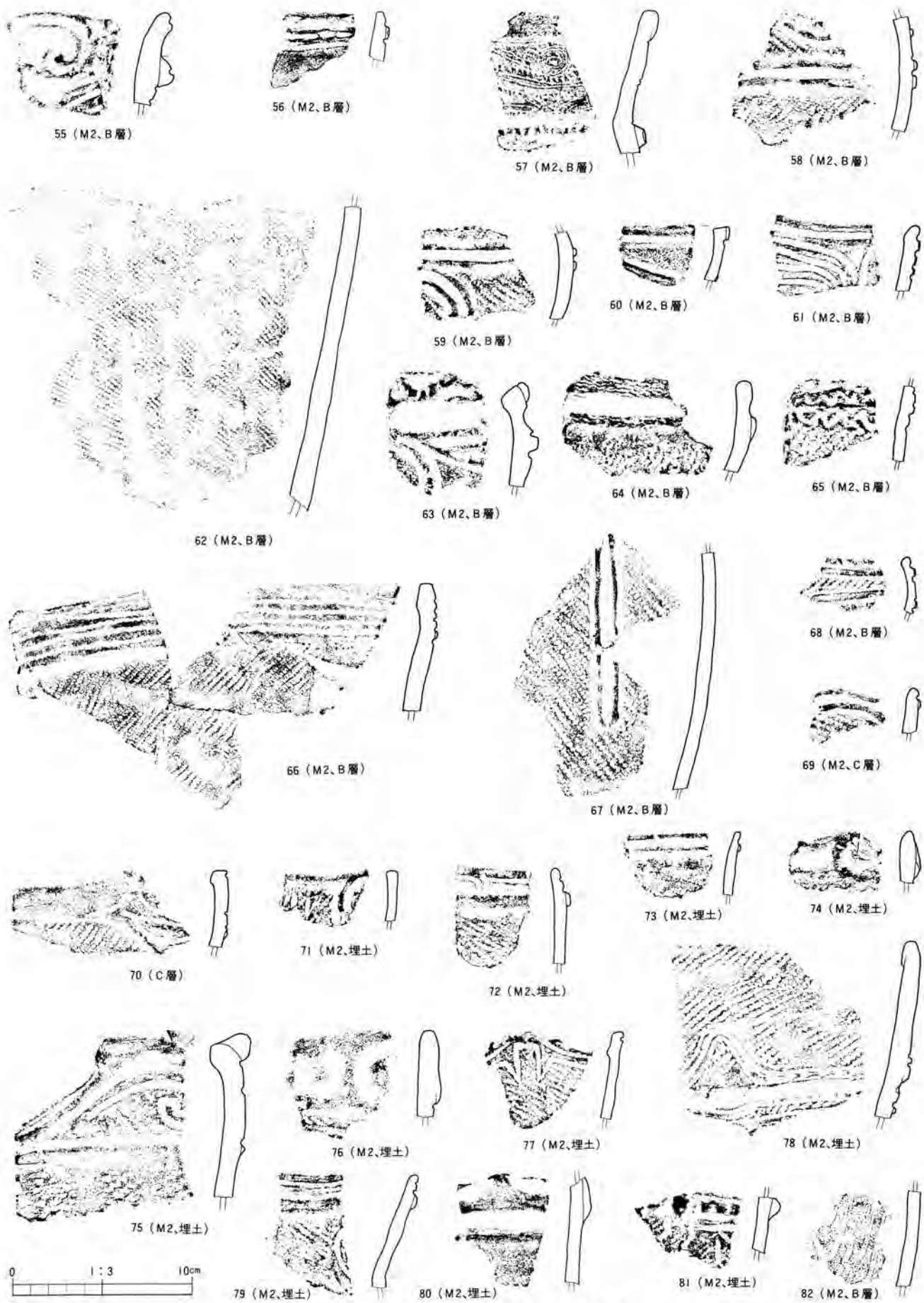
119～129は側縁部の長軸方向側の一辺を使用した敲打磨石である。119は敲打磨面がなくなる程の剝離が伴う。102、123、127には敲打磨面以外にも敲打痕が認められる。131は敲打痕だけが認められるもの。132は背面を自然面のままに残した打製の石斧である。



第41図 土砂流出跡 (MI) 出土遺物①



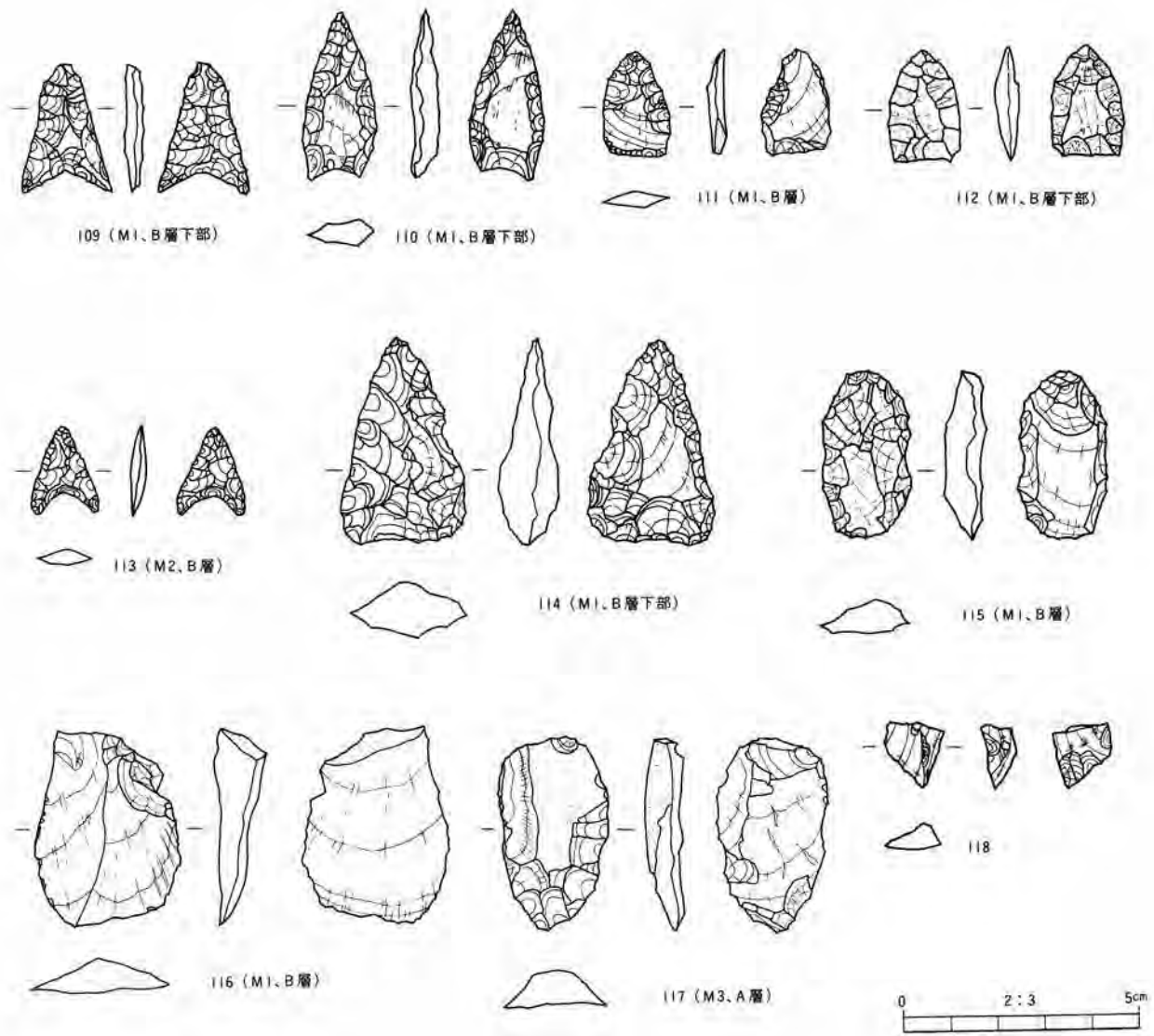
第42図 土砂流出跡 (MI) 出土遺物②



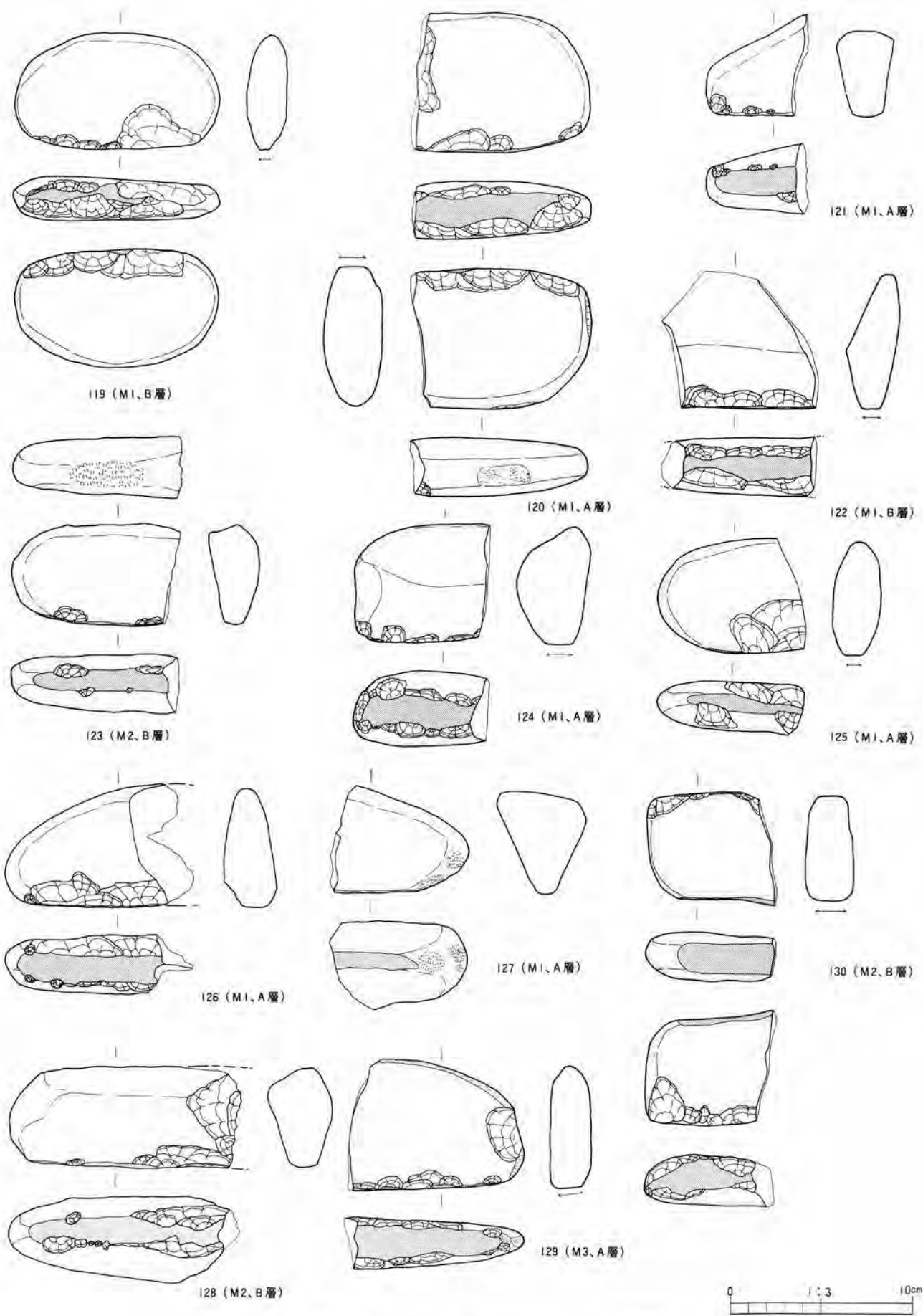
第43図 土砂流出跡 (M2) 出土遺物③



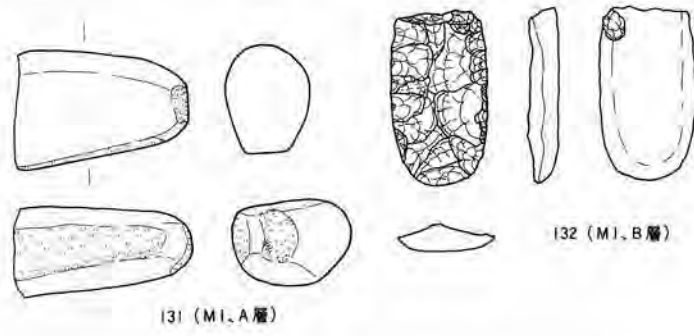
第44図 土砂流出跡 (M3) 出土遺物④



第45図 土砂流出跡 (M1) 出土遺物⑤



第46図 土砂流出跡 (M1、M2、M3) 出土遺物⑥



第47図 土砂流出跡（M I）出土遺物⑦

遺構外出土遺物（第84図～第87図）

今回の調査により出土した遺物は、竪穴住居跡や土壌跡、ピットなどの遺構から出土したものは少なく、その大半は遺構以外から出土している。これらの大半の遺物は、土砂の流出跡の影響により相当攪乱されており遺物包含層としてとらえられるものかは疑問が残る。ただし、この土砂の流出跡の影響がほとんど受けなかった調査区の南西地区に限っては、遺物包含層として把握できる可能性も考えられる。

今回の調査により出土した遺物は、遺構内外を問わず時期的には数片の小破片を除き、その下限は中期中葉（大木8b～9式期）のもので、上限は前期初頭期のものがわずかに出土するだけで、大部分のものは中期前葉～中葉（大木7～8式）のものである。

これらの土器は、器形や文様要素、モチーフなどにより分類できるが、層的には前述のような状況であるため、ここでは大別に滞める。

分類基準

分類の基準は上位より群類とし、その土器の有する属性に基づき従来より提唱されている土器型式に相当させただけのものである。

ここでは、本来的にはあまり意味をなさないと思われるが、調査区の中央部に設定した十文字の大ベルトにより区分される地区毎に記述する。遺構外の遺物については土器、石器とも通し番号とした。

第I群土器 縄文時代前期初頭に所属する土器である。量的にはわずかであり詳細は不明である。上川名II式～大木1、2式に伴うものと思われる。

胎土中に植物繊維を含むもので、すべて深鉢と推定される。口縁部片をみても直立ないしはわずかに外反するものである。文様要素としては、羽状縄文や前々段反撚、前段多条の所謂「びっちり縄文」や口縁部上端に不整撚糸文を施文するものがある。

第II群土器 縄文時代前期に所属する土器である。第I群土器同様に量的にはわずかであり詳細は不明である。大木3式～大木6式のいずれかに伴うものと思われる。

胎土中に植物繊維を含まないもので、すべて深鉢と推定される。

第III群土器 縄文時代中期初頭から前葉に所属する土器である。

a類土器 大木7a式に相当するものである。器種は深鉢と浅鉢がある。器形も口縁部が外反するもの、直立するもの、やや内湾するものがあり、胴部も外傾気味に直線的になるものや膨らむものなどがあるが、後者の例は少ない。また、第52図55のように所謂金魚鉢形になると思われるものは稀である。口縁は、平縁、4波状の大波状やゆるやかな波状を呈するものがある。文様帯も、口縁部以外の胴部にまで施文されるものもある。

文様要素の主体は、半截竹管及び棒状工具による沈線文である。口縁部には太い隆帯を垂下させ4分割するものや三角形に区画するものなどがある。モチーフは、半截竹管及び棒状工具による連続刺突、山形文、鋸歯状文、弧状文、刻目文、平行沈線文などで構成されている。

図版番号	第Ⅰ群土器	第Ⅱ群土器	第Ⅲa群土器	第Ⅲb群土器	第Ⅳa群土器	第Ⅳb群土器	第Ⅴ群土器	第Ⅵ群土器	第Ⅶ群土器	第Ⅷ群土器
第12図		4		8,10,22	①~③、5、9、11、12、15~19、21、23	7,13				6,14,20
第13図				29,35,39,40~43	②⑤、26~28,34,37,38、44,45,50~52	33,36,46,47,53~56	31,32			②④、30,48,49
第14図				71~73,75,76,78~80、82,83,89	70,77,86,87,92	63,64,67,69,74	57~62,84	68,85		65,66,81,88,90,91
第15図				102	112,113	101,103,104	96,97,99,105,110	93~95,98,100,108		106,107,109,111
第21図				4,5		7~9	1~3			6,10
第22図		20		8,18	1,17,19,22,28~31	6,12,13,24~26	2~5,7,9,11	14~16,21,27		10,23
第24図	12			9,14,16,21,27	1,2,4,5,10,20,25,26	3,25,29	17,18,22~24,28			6~8,11,13,15,19
第27図				2,11,13,14	4,5,7	1,3,6,9,10,25,26,28	8,18~24,27,29			12,15,16,17
第29図	②⑧、29			24	1,7~9,12,16,25	11,23	2,3,6,13~15,17、19~21	④、5,10,22,26,27		18
第30図				36		33	30~32,34			35,37,③⑧
第37図										①
第41図			1,2,5	7,8,12,15,17,18,21	3,4,6,9~11,14,16、20,22	13,23~25		26		19
第42図	53,54			33,34,43,46,48	29~32,35,41,42,44、45,47,49,50		38	28,36,39		②⑦、37,40,51,⑤②
第43図	57		78	56,65,77,79	66,70,75,76	55,63,64,67,72~74、81	68,69,80	58~61,71		62,82
第44図	103			83,84,88~90,93,94、101	86,102,108	85,87,92,95,96	100,104,105	97,98,106,107		91,99
第48図	9	4	2,3,7,⑩	5,6,8	①					
第49図			⑪	12~14						
第50図			19,25	15~17,22,27,28	18,20,23,②④					21,26
第51図	36,51	34	31,37,39,41,43	29,30,32,33,35、44~47	38,40,42,48~50					52,53
第52図			60,70,71,76~78	54~58,63,64,66~69、74,75,79,80	59,61,62,65,72,73					
第53図	94,95	103	81~85,92,97,100,101	86~90,98,99,105	91,96					93,102,104,106
第56図			138		131,135,136,⑭	132~134,⑮、144~146	129,130,142	⑰	143	137,147,148,⑱
第59図			195,196	190	185,186,189	187,188	174,176,179	175,177,178、180~184,191~193		194
第60図					⑲			197~203,⑳、㉑		㉒
第61図							228~230,236~238	212~218,223~227、231~235,239~244	219~222	
第62図				254~258	245~253,259,260,㉓			262~265,267,268,269		261
第63図					271		277	270,276		272~275,280
第69図						345~347	333,334,342~344	323~332,335~341		
第70図						⑳	357,358	348~351,354,355		352,353,㉔、㉕
第72図							379~385,387、399~402	375~378,386、388~398		
第73図					420,421	408~419,422,423	403,405~407	404		
第74図			443,444		436~438,441,442	424~427,439	470,471	452,460	428~435,445~450	440
第75図								451,453~459,461、464~468,472		469
第76図								474~479		
第84図				558,559			535,536,537,557	538~556		
第85図					561~565			566~568		560

※ ○印は実測土器

第2表 遺構外出土土器分類表

b類土器 大木7 a式～7 b式に相当するものである。器種、器形はa類土器とほぼ同じであるが、文様要素として原体圧痕文が加わってくる。

また、口縁部上端が肥厚し複合口縁を呈するだけのものや口縁直下より網目状摺糸文のみを施文しているものなどもこの中に含めた。

第Ⅳ群土器 縄文時代中期前葉に所属する土器である。

a類土器 大木7 b式に相当するものである。器種、器形はa類土器とほぼ類似するが、口縁部が大きく外反するものは少なく口縁に突起が付くものがみられる。口縁部が肥厚し複合口縁を呈するものが多い。文様帯は、口縁部以外の胴部にまで施文されるものは少なく、胴部の地文も斜縄文以外に結束縄文、綾絡文、木目状や網目状の摺糸文が施文されている。

文様要素の主体は、原体圧痕文、隆線文で刺突文、刻目文や貼り付け文などが伴う。モチーフは、原体圧痕文を主体とした山形状、曲線状、隆線による孤状の区画の形成がみられ区画内には刺突列や短原体圧痕列などが施文されたり、隆線の側面に原体圧痕文が伴うものが多い。

b類土器 大木7 b式～8 a式に相当するものである。器種、器形はa類土器とほぼ類似するが、口縁部がキャリバー状に内湾する器形のものが出現してくる。

文様要素として口縁部に隆沈線による曲線文や連結文などが加わってくる。

第Ⅴ群土器 縄文時代中期中葉前半に所属する土器である。

大木8 a式に相当するものである。全体の器形が判明するものがなく、詳細は不明だが口縁部が内湾するものがほとんどである。

文様要素の主体は、隆線、沈線、貼付文である。モチーフは、口縁部の上下をただ隆沈線で区画しただけのものや波状の曲線文や連結文などがある。

なお、破片資料ばかりのため後続する大木8 b式と判別できないものについては、大木8 b式として分類している。

第Ⅵ群土器 縄文時代中期中葉に所属する土器である。

大木8 b式に相当するものである。キャリバー形を呈する深鉢や口縁部が外反し胴部が膨らむものや浅鉢などがあり、基本層序Ⅰ、Ⅱ層を中心に出土しており量的にも多い。遺構の埋土からは出土するが遺構に伴うものではない。

隆沈線を主体として渦巻文や曲線文などを施文する。

第Ⅶ群土器 縄文時代中期後葉に所属する土器である。

大木9式に相当するものである。調査区の北西区の一部から少量出土しているだけである。隆沈線による縦位の区画文を施文するものである。

第Ⅷ群土器 上記第Ⅲ群から第Ⅶ群土器のいずれかに所属する土器であるが、胴部片や底部片、小破片のため明確な所属時期が不明である。ただし、このうち第42図27、第56図149の2点だけは、縄文時代中期以降のものと思われるもので後期に所属するものか。

以上の分類はあくまでも大別であって、当然のことながら器形、器種や施文技法などにより細分可能なものと考えられる。しかしながら、今回の出土状況を考えると層位的なまとまりを見出し難いことは認めざるを得ない。ただし、調査区の南西区に限ってみれば大木7a式～7b式土器がまとまって出土している傾向がうかがえ、検出遺構との関連が考えられる。

以下、多量に出土した資料の中から抽出したものを掲載し、個々の施文などについての記述を行うこととし、それが何群の何類に所属するものかについては、第2表に掲載している。筆者の認識不足のため非常に複雑なものとなっている。なお、この第2表には遺構、土砂流出跡から出土したものも入っている。

①南西区（第48図～第55図）

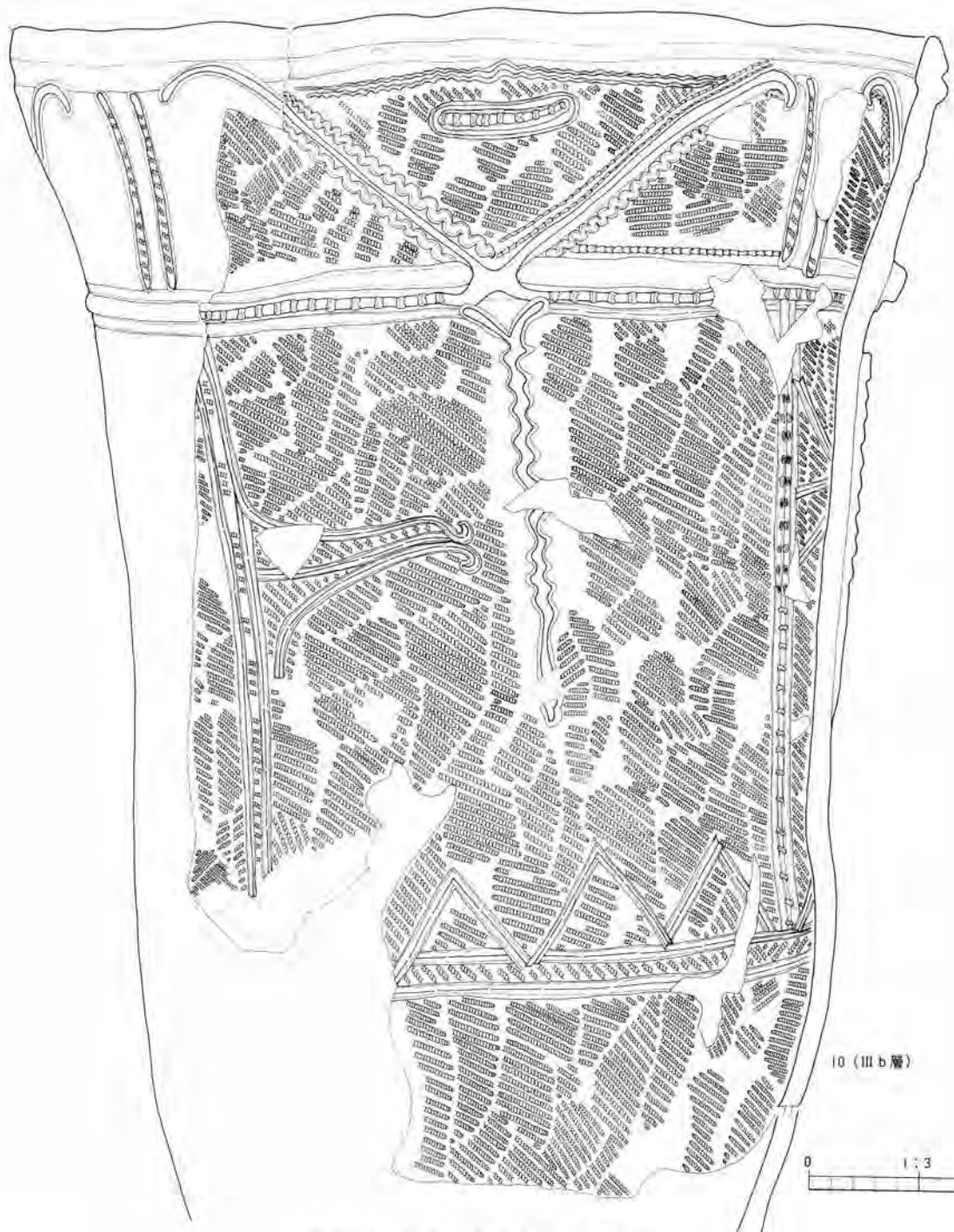
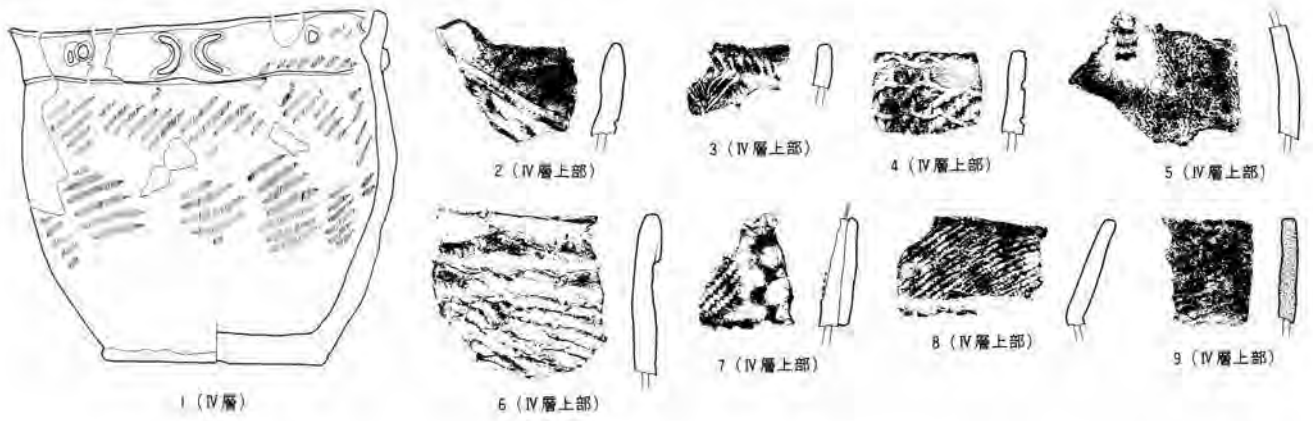
1～9は基本層序Ⅳ層から出土したものである。1は口縁部がわずかに外反するもので、口縁部のみ文様帯を有する。文様はX字状やボタン状の貼付文で、胴部には無節のL縄文を施文する。2は口縁に突起をもつもので沈線文で施文される。3も沈線で施文される。5は刻目を伴う隆帯の貼付文が見られる。6は口縁部が肥厚し口縁下には無節の縄文が施文されるもの。7は蛇行する粘土紐を貼付する。8は沈線で口縁部を区画する。9は胎土中に植物繊維を含むもの。

10～106は基本層序Ⅲ層から出土したものであるが、出土状況を見ると10～55はまとまって出土しており、しかもⅢ層とした層位の下部であり56以下のものはその上部からのものであり、10～55はⅢb層、56～106はⅢa層から出土したものとす。

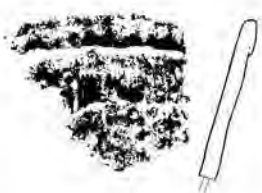
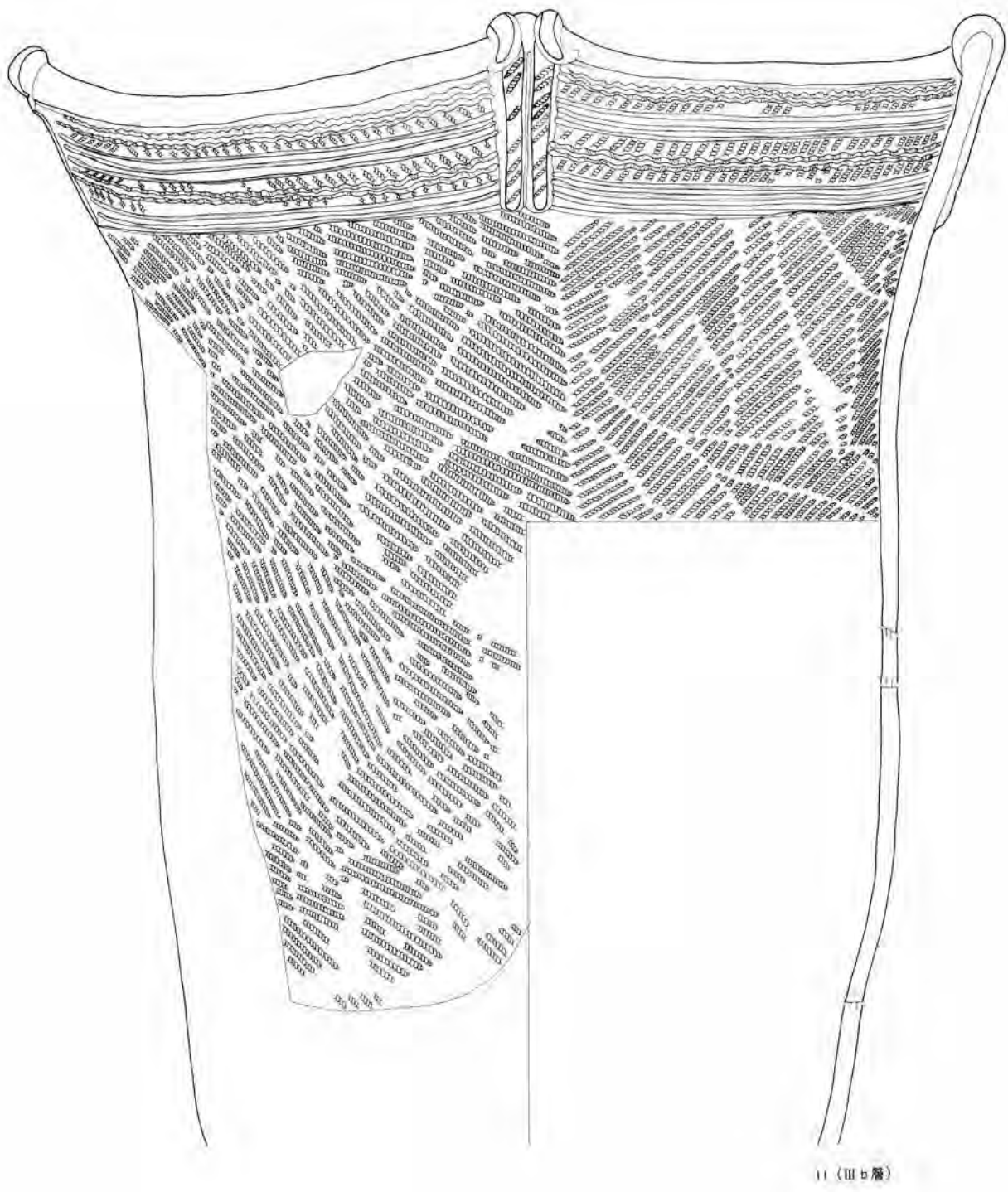
10～21は写真図版13のように同位置からまとまって出土したものである。10は口縁部が外反し胴部の下半がわずかに膨らむ平縁の深鉢である。頸部には刺突を伴う隆帯を巡らし口縁部と胴部を区画している。文様帯は口縁部と胴部に分れる。いずれも縦位の貼付文で4区画されており、口縁部の文様は波状沈線や半截竹管による連続刺突を伴う隆帯で三角形の区画をつくり、刺突を囲む楕円形の半截竹管による沈線文を施文する。胴部の文様はちょうどわずかに膨らむ部分に半截竹管による平行沈線と山形の沈線文を巡らし、その内側に蛇行する粘土紐の貼付や沈線で施文している。胴部の地文は縦回転のLR縄文で地文施文後に文様を施している。11は10と類似した器形であるが、胴部が膨らまず直線的である。口縁も4波状を呈する。波頂部は外面にはX字状、内面にはの字状の貼付文が施されている。文様帯は口縁部のみで胴部は地文のみである。口縁部の文様は波頂下より垂下する2本の縄文を伴う隆帯で4区画し、その間には棒状の工具による小波状沈線と平行する沈線文が施文される。地文は口縁部から胴部まで縦回転のRLとLRの縄文が施文されており、口縁部はその後に文様を施している。12～23は破片である。12、13は口縁部が外反する複合口縁となるもので、12は無文、13の肥厚部は無文で垂下する隆帯が施文される。14は口縁部上端が外削するもので刺突列を施し、波状に原体圧痕文を施文する。15は口縁部の肥厚部に短沈線状の刻目と鋸歯状の沈線文を施している。17～20

は原体圧痕文や刻目を伴う粘土紐で施文するものである。22～36はまとめて出土した10～21の周囲から出土したものである。22、23は口縁部がやや内湾するもの。24は口縁部が外反し胴部がゆるやかに膨らむものである。口縁部は波状を呈し肥厚し特に上端部は明瞭である。波頂下から4分の1周毎に2本1対の縦位の隆帯が貼付される。25は横位の結束する縄文施文後に2条の平行沈線を施文する。26は縄文のみの施文である。27、28は口縁直下より網目状の撚糸文を施文する。29～31は口縁部が大きく外反するものである。いずれも屈曲する頸部に刺突を伴う隆帯や蛇行する粘土紐を巡らす。口縁部の文様は29、30は無文、31は波頂部下から垂下する隆帯により区分し、その間に沈線で施文する。32～36は胴部片。32、33は沈線を施す。35は丁寧にみがかれているもので浅鉢になるものと思われる。36は胎土中に植物繊維を含むもの。37～55はⅢb層から出土したものである。37～40、47は口縁部がやや内湾し、41～45は口縁部が直立するもの。37、39、41、43は沈線、38、40、42、46は原体圧痕文が施文され39、47の口縁部上面には刺突が施されている。48は肥厚する口縁部突起部で刻目を伴う隆帯を「の」字状に施文する。46、49～51は口縁部が外反するものである。49、50は原体圧痕文と刻目文で施文し、波頂下より隆帯を垂下させている。49の隆帯には縄文が伴っている。51は口縁部に不整撚糸文を施文するもの。54は口径と底径にあまり差のない浅鉢で無文であるが口縁部を複合口縁としている。55は無文の胴部から底部の破片である。

56～106はⅢa層から出土したものである。58～60、63、65は口縁部が内湾気味となる。58は口縁部上端が肥厚する複合口縁となるもので台形状、59は「X」字状の貼付文を施文する。60は口縁部上面に刻目を施す。63は口縁部内面に粘土紐を貼り付けており、外面は沈線を施している。65は口縁部上面に粘土紐を突起状に貼り付けている。56、57、61、62、64、66～69は口縁部が直立ないしは外傾するものである。56、57は口縁部上端が肥厚するもので、57は頸部に刺突を伴う隆帯を巡らし、口縁部文様帯と胴部を区画する。口縁部の文様は垂下する隆帯を施文している。61は原体圧痕文、64は結束部を有する横位の羽状縄文を施文するもの。66は指頭圧痕文、67は波頂下に円形の刺突文、68は2列の刺突列、69は沈線を伴う隆帯に刺突を加えている。70～73、75～80は口縁部が外反するものである。70は刻目を伴う隆帯に沈線による渦巻状の文様を描く。71は平行沈線間に鋸歯状の沈線、刺突が施される。72は粘土紐の貼付文、73は口縁部内面に蛇行する粘土紐を貼付する。75は条痕状の細い沈線で施文している。76は沈線で施文後に波頂下から垂下する隆帯を貼付している。波頂部の内面は渦巻状を呈する文様が施されている。77、78は粘土紐の貼付文が施される。79、80は同一個体で原体圧痕文と刺突で施文する。80～93は口縁部が直立する。81は口縁部上端と頸部に隆帯を巡らし、その間に平行する沈線を施すもの。82は頸部に指頭圧痕を伴う隆帯を巡らし、口縁部には雑な波状の沈線を施文している。83、84は地文施文後に太い波状の沈線と平行沈線を施すもの。85は82と類似するもので、口縁部に平行沈線を施す。86～90は複合口縁となるもの。92は斜位の平行沈線と沈線による円文を描く。94、95は胎土中に植物繊維を含むもの。96～106は胴部の破片である。96～98は粘土紐の貼付により文様を描くもの。99は原体圧痕文、100、101は沈線文を施文する。105は頸部の屈曲部にブリッジ状の突起が付くものである。



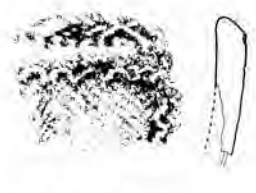
第48図 南西区遺構外出土遺物①



12 (III b層)



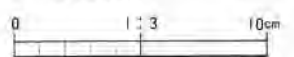
13 (III b層)



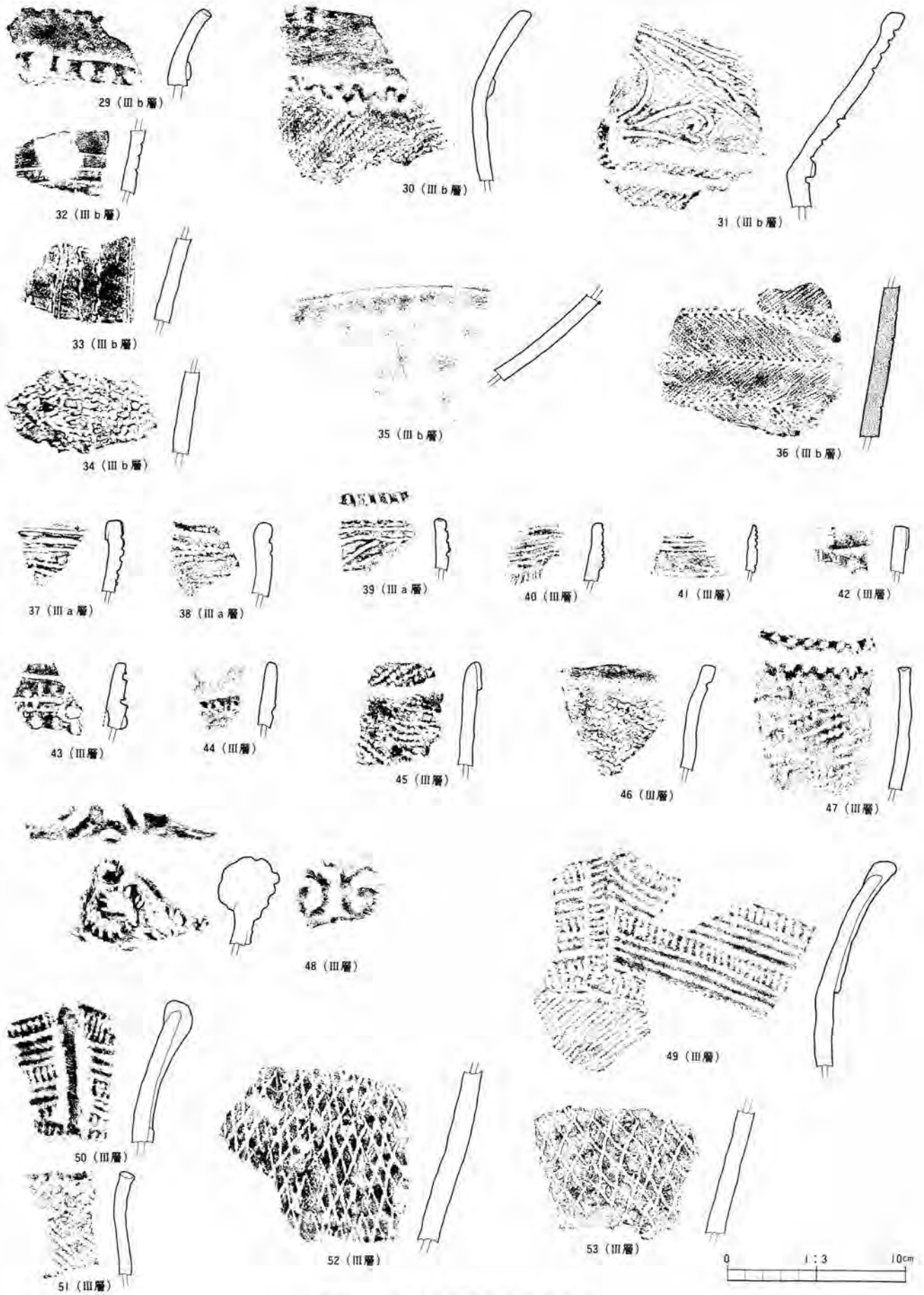
14 (III b層)



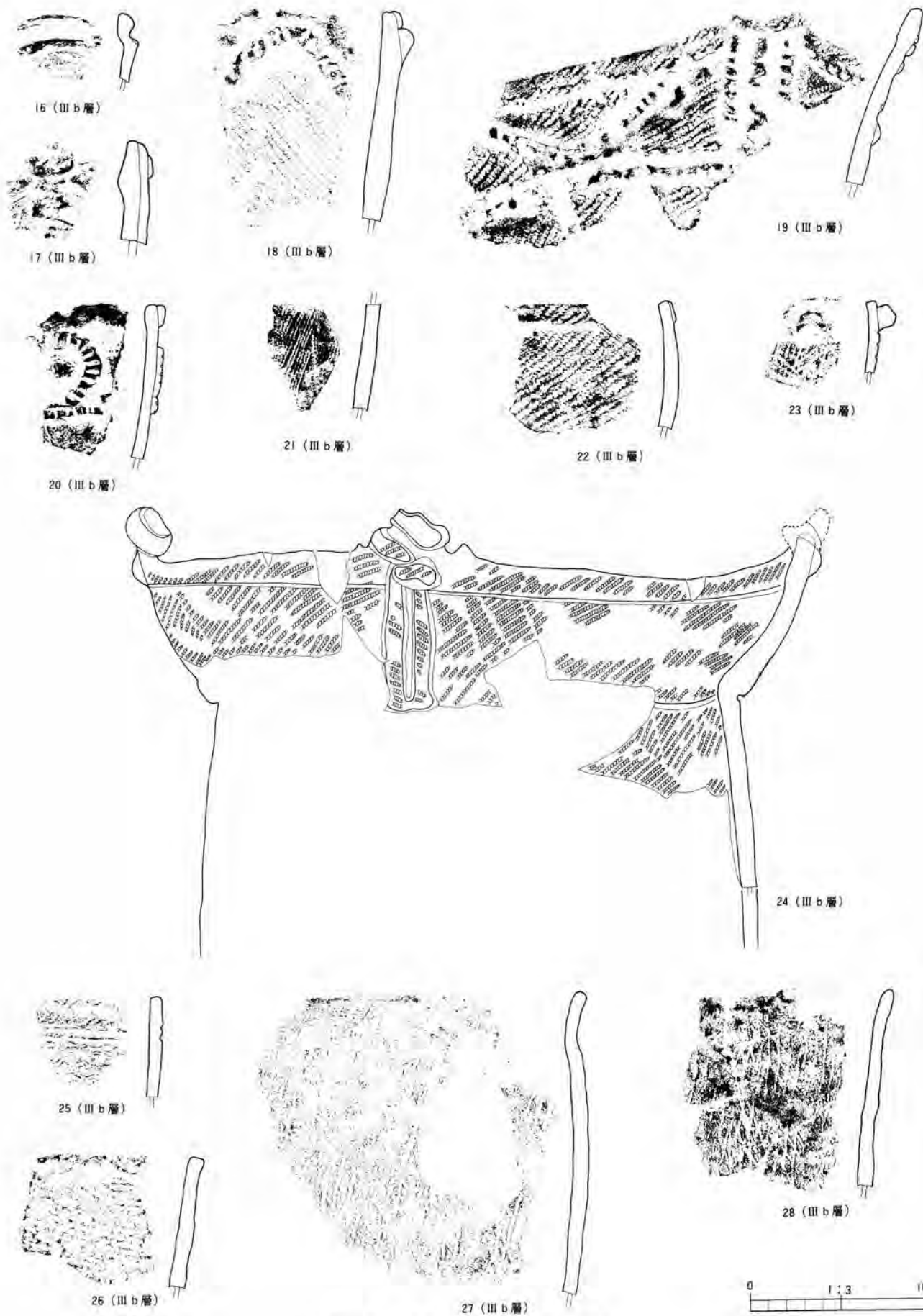
15 (III b層)



第49図 南西区遺構外出土遺物②



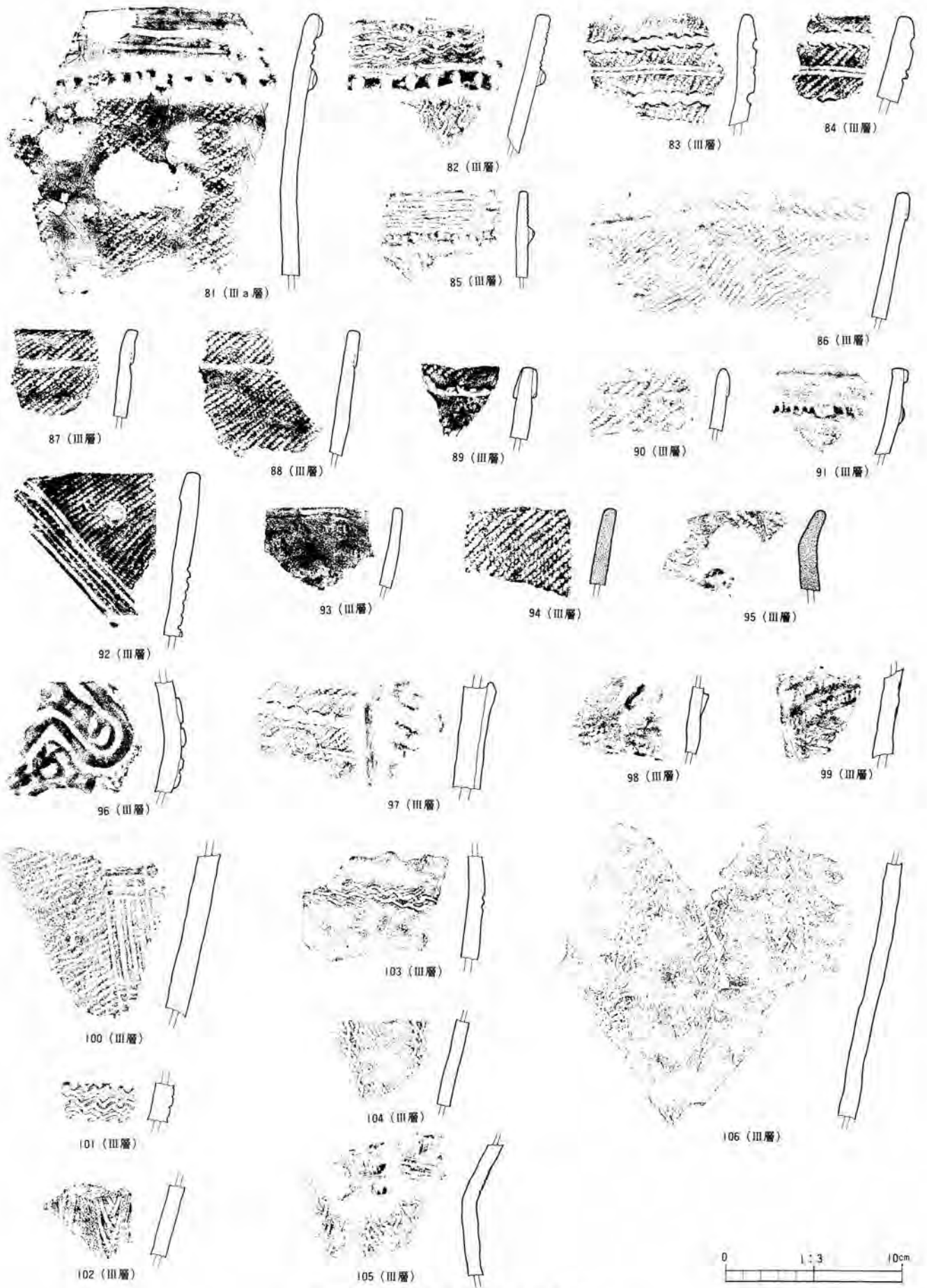
第50图 南西区遺構外出土遺物③



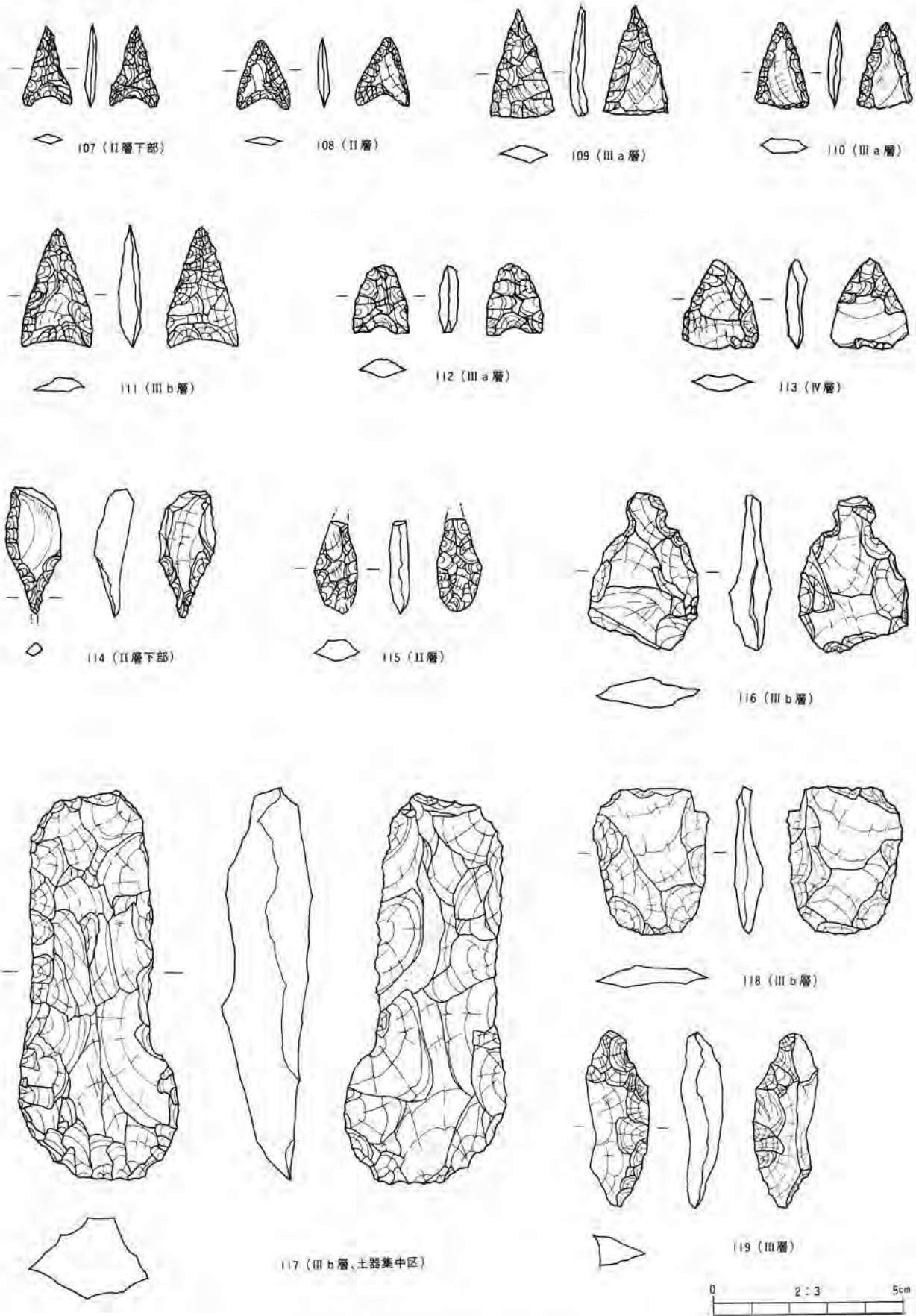
第51图 南西区遺構外出土遺物④



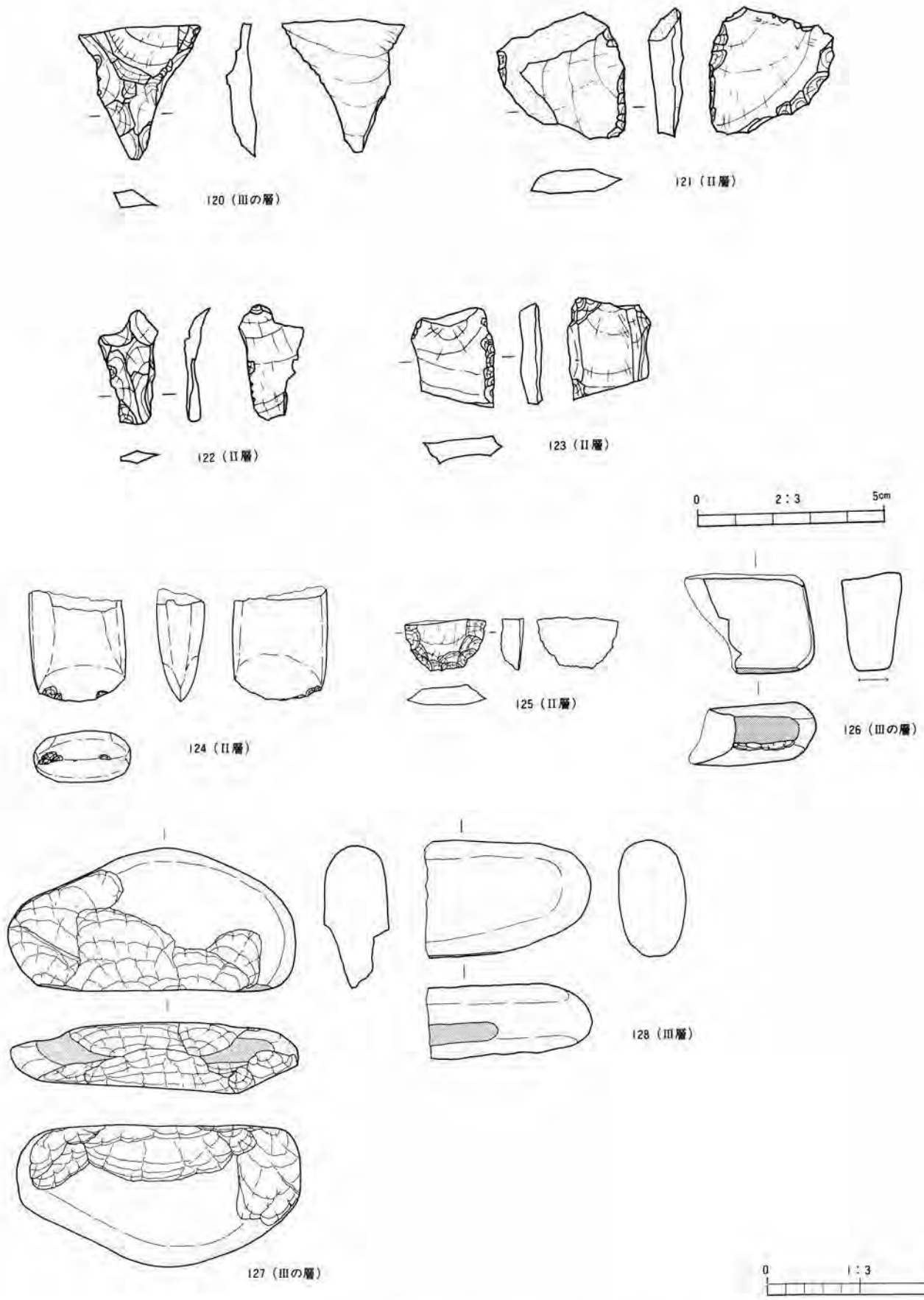
第52図 南西区遺構外出土遺物⑤



第53图 南西区遺構外出土遺物⑥



第54図 南西区遺構外出土遺物⑦



第55図 南西区遺構外出土遺物⑧

第54図～第55図107～128は南西地区より出土した石器である。107～123は剥片石器であり、124～128は礫石器である。

107～113は石鏃である。107、108、111、112は基部が抉れるもの。109、110、113は平基となるものである。114は石錐である。115は表裏面ともに丁寧な剥離が施されており先端部を欠いているが、刺突機能を有するものと考えられ114同様石錐と思われる。116は石匙である。縦形を呈するものである。117、118は筥状石器もしくは打製石斧の類である。119～123は不定形なもので側縁部などを機能面とした削搔器類である。

124は磨製石斧の欠損品。125は背面に自然面を残した打製石斧である。126～128は楕円形の長軸方向側縁部の一方だけを使用した敲打磨石である。127は機能面がほとんど残らない程の剥離が見られる。

②東南区（第56図～第58図）

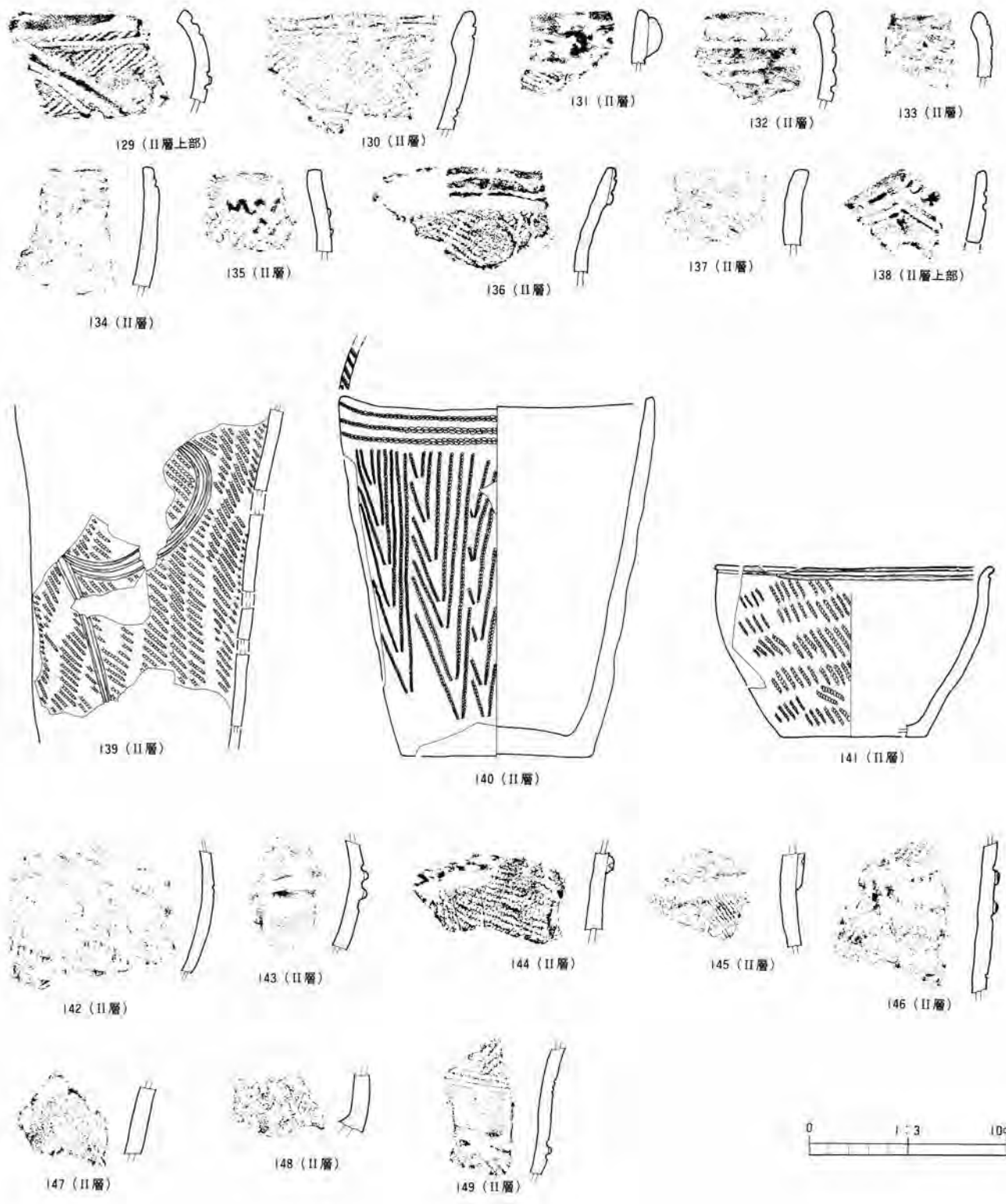
基本層序II層以下がV層の地山となり、ここに掲載したのはすべてII層出土の遺物である。堆積土層が厚くないため遺物の出土量も他の地区に比べると少ない。

129～149は土器、150～173は石器である。

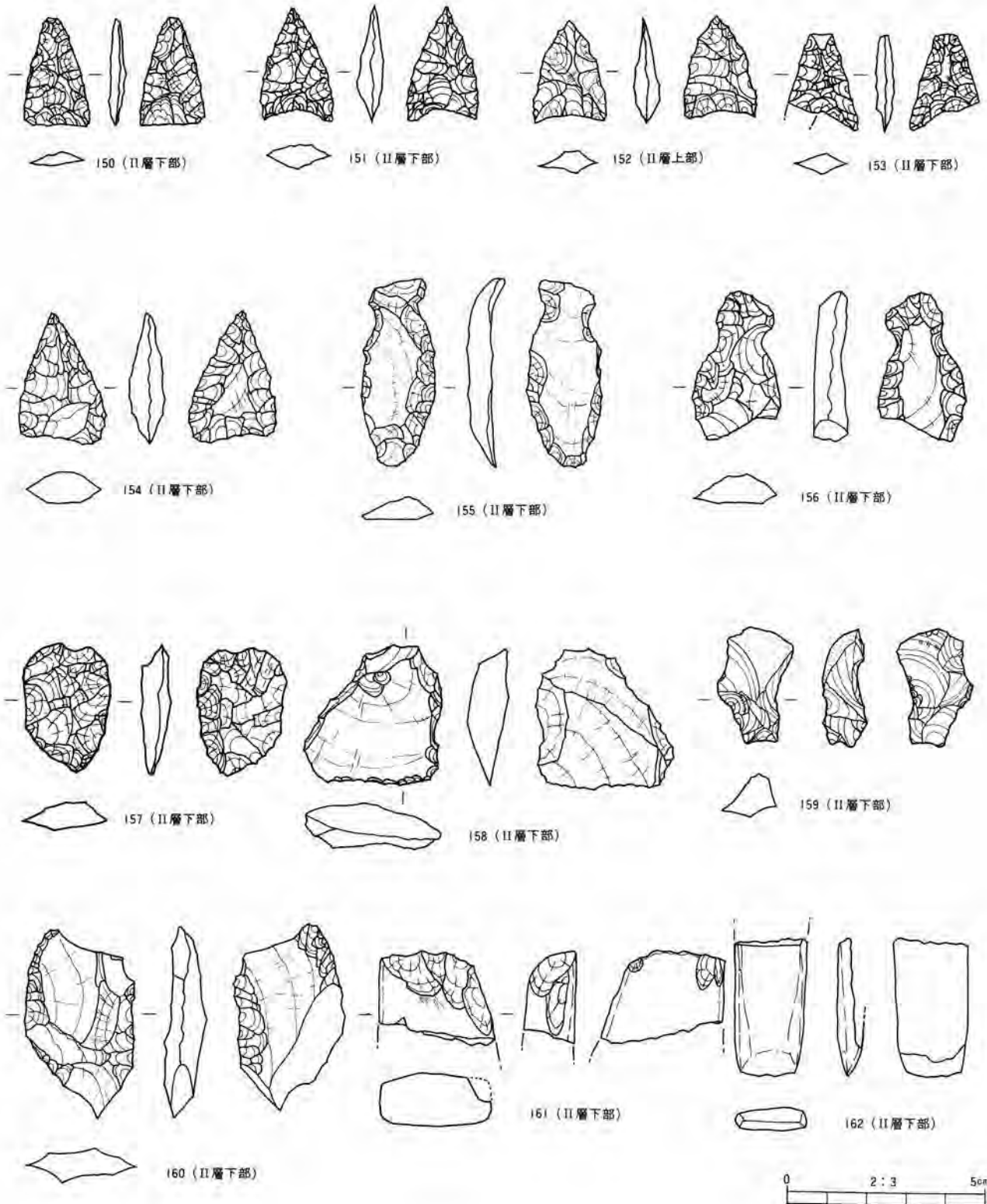
129は口縁部が内湾するもので隆沈線で文様を描く。130は沈線で施文する。131は原体圧痕文で楕円形区画をつくり、その連結部に「X」字状の突起を貼付している。132～134、136は横位の原体圧痕文を施文するもの。135は波状に粘土紐を貼付するもの。137は縄文のみの施文である。138は山形状口縁を呈するもので、刺突と沈線を施している。139は深鉢の胴部で縦回転のLR縄文施文後に沈線で文様を施している。140は底部から口縁部まで直線的に外傾する深鉢で、口縁部上端に3条の平行する原体圧痕文を施し、胴部には木目状の撚糸文を施文している。また、口縁部上面にも縄文を施文している。141は浅鉢で口縁部が内湾する。口縁部上端に隆沈線を巡らす。地文は横回転のRL縄文を施文している。142～149は胴部の破片である。142は沈線文、143は隆沈線文、144、146は刺突や圧痕を伴う隆帯が施されるものである。145は複合口縁部となるもので雑な鋸歯状の沈線文が施文されている。147、148は網目状の撚糸文を施文するもの。149は磨り消し部を有するものである。

150～160は剥片石器である。150～154は石鏃で、153は基部が深く抉れるものである。155、156は石匙である。ともに縦形となるものである。157、158、160は削搔器の類である。159は黒曜石の剥片である。

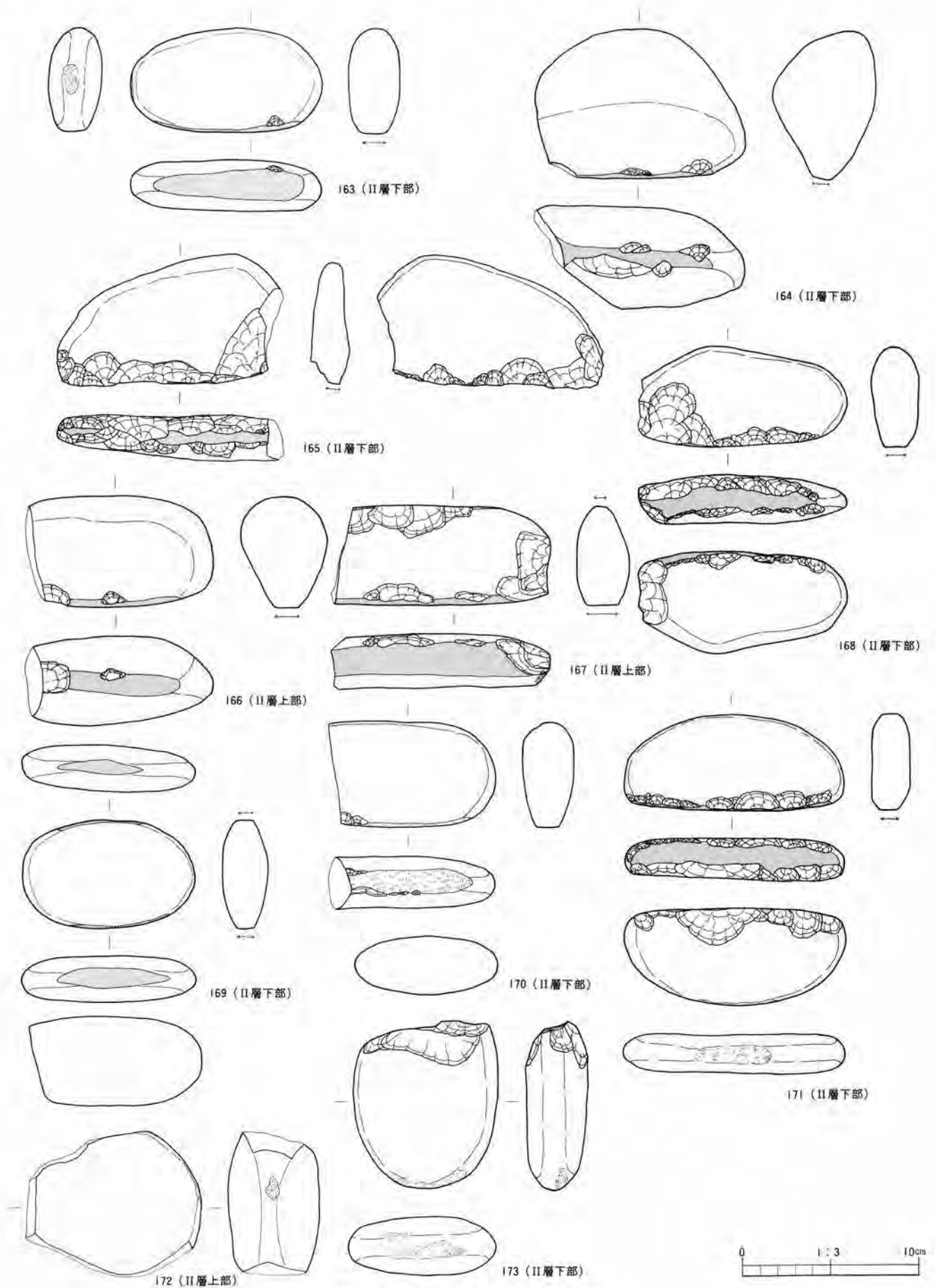
161～173は礫石器である。161、162は磨製石斧の欠損品である。162は小形のものである。163～168、171は楕円形の長軸方向の一方の側縁部を使用した敲打磨石である。163、171は敲打磨面部以外にも敲打痕が観察される。169は両方の側縁部に敲打磨面を有するもの。170、172、173は側縁部に敲打痕を認める敲石である。



第56図 東南区遺構外出土遺物⑨



第57図 東南区遺構外出土遺物⑩



第58図 東南区遺構外出土遺物①

③北西区（第59図～第68図）

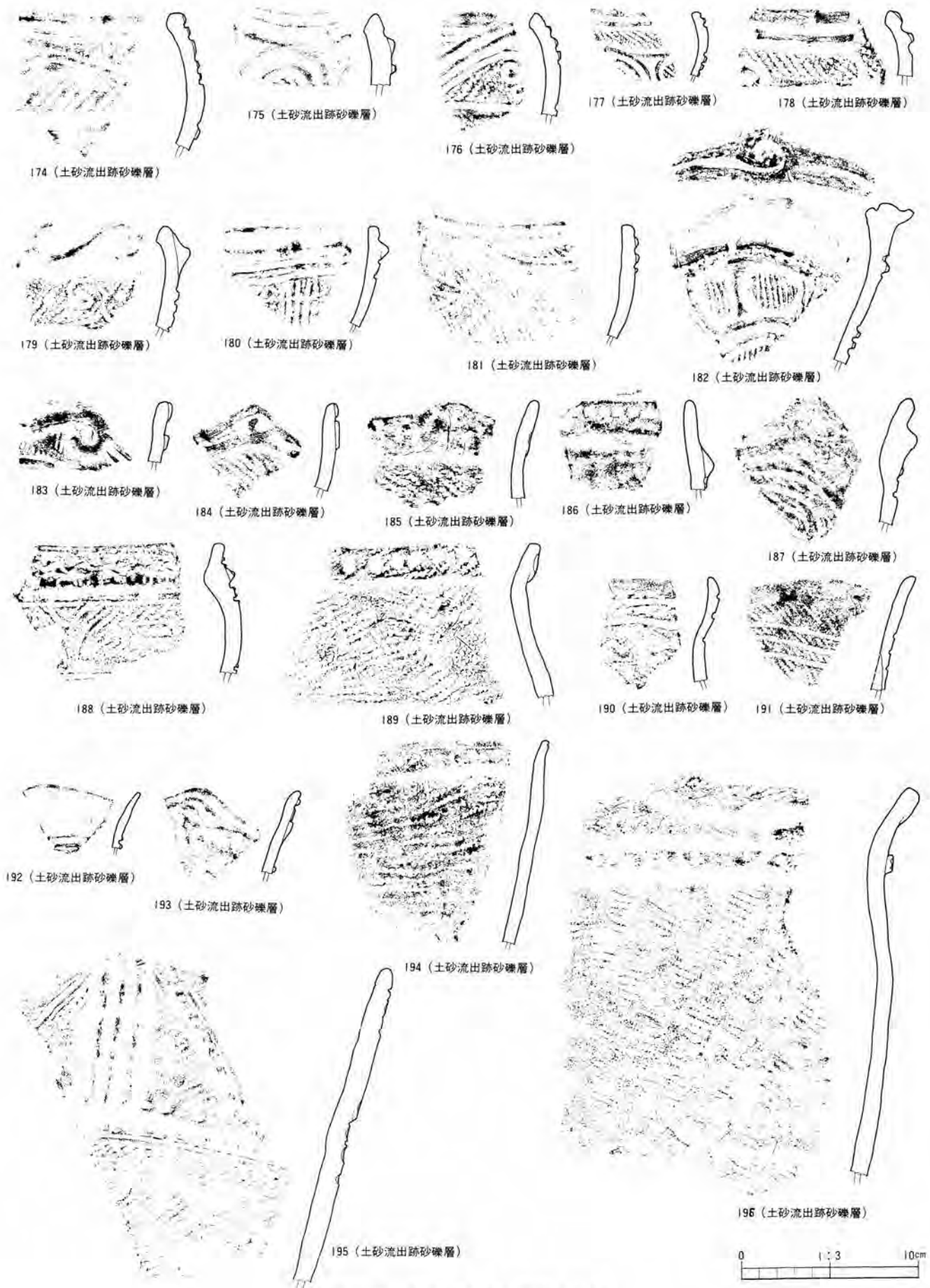
土砂の流出跡による影響が最も大きく大礫が密集状態にあり、ほとんど調査不能であった。遺物は多量のこれらの砂礫とともに出土しており、礫と礫の隙間などから検出した。

174～280は土器、281～322は石器である。

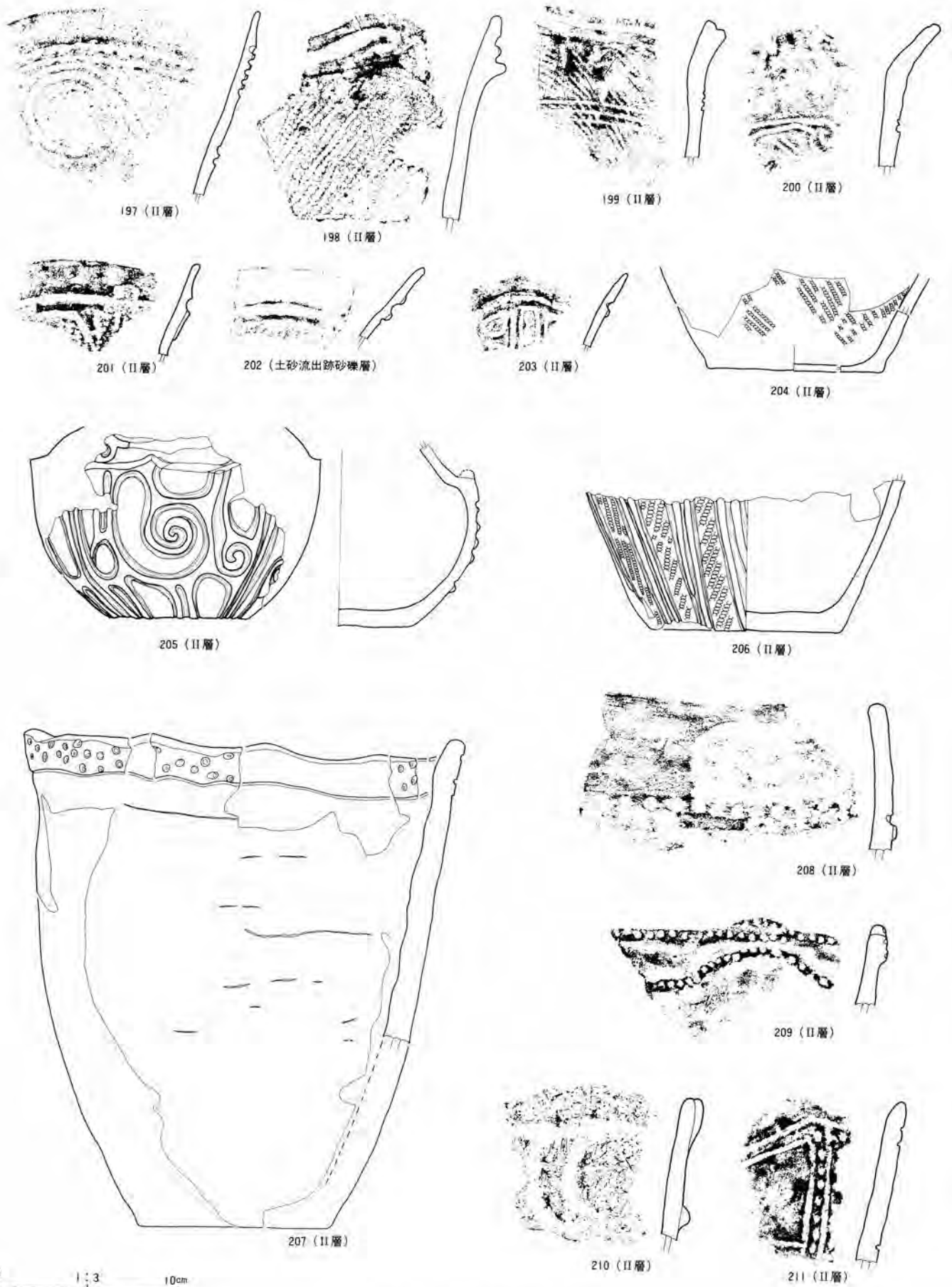
174～196は砂礫とともに出土しており、本来的には既述した土砂流出跡に伴うものであるが、既述した土砂流出跡のM1地区よりも更に北西側の遺物である。174～179は口縁部が強く内湾するキャリバー形を呈するものである。いずれも隆沈線により区画文などを描き、179は波頂部にS字状文をつくる。180～182は口縁部がゆるやかに内湾するものである。182は山形状口縁を呈するもので頂部に渦巻文を施す。口縁部の文様は隆沈線による円形の区画文を描く。185は口縁部上端に短原体圧痕列を施す。186は同様に円形の刺突列を施している。188は口縁部上端に沈線と刻目を伴う隆帯を巡らし、その下に曲線から円状に沈線で文様を施文している。189は胴部が大きく膨らむものである。190は平行沈線と鋸歯状沈線文を施すもの。191は縄文施文後に沈線を施している。192、193は口縁部が外反し胴部が膨らむ壺形の土器の口縁部片と思われるもの。194は口縁部上端に細い横位の沈線と斜位の刻目状沈線を施文するもの。195は隆帯と半截竹管による沈線と連続刺突で施文する。196は頸部に刺突を伴う隆帯を巡らせるものである。

197～275はII層から出土したものである。197～203は口縁部が外反するものである。197は口縁部上端を無文とし沈線で渦巻文を描くもの。198は頂下に渦巻文を施文する。199は縄文施文後に沈線を施している。また、口縁部上面にも沈線を施している。200～203は口縁部が無文となり、頸部以下に隆沈線で文様を施文するもの。204、206は胴部下部から底部の実測図。205は口縁部が内湾するもので隆沈線で渦巻文や区画文を描くもので縄文は施文されていない。207は口縁部がわずかに外反する深鉢で、口縁部上端が肥厚し円形の刺突を施文している。胴部は無文である。208、209は円形刺突を施した隆帯を貼付している。210は隆帯により楕円形状の区画をつくる。211は平行沈線間に刺突を施すもの。212～242は口縁部が内湾するもので、212～222は隆沈線により縦位の区画文をつくるもの。223～242は隆沈線で文様を施文するものである。243、244も隆沈線で渦巻文を描く。245～261、263は口縁部が外傾ないしは外反するものである。245は刺突を伴う隆帯を巡らせるもの。246は小波状口縁を呈するもので、口縁部上端に2条の平行する原体圧痕文を施文する。247～252は原体圧痕文で文様を施文するもの。253は側面に原体圧痕が伴う隆帯で文様を描く。254は矢羽根状に刻目を施すもの。255も縦位に刻目を施す。256は円形の刺突と沈線を施している。257は短い原体圧痕列下に山形から連弧状の沈線を施文する。258は刺突を伴う隆帯のその上部に鋸歯状の沈線や刺突文を施文する。259は隆帯で形成した区画内に原体圧痕文を施文している。260は口縁下に横位の原体圧痕文を施す。261は羽状縄文を施文しているもの。263は口縁部上端に細沈線を施文する。262、264～271、276～280は胴部の破片。262～269は隆沈線で渦巻文や曲線文を描くものである。271は胴部が大きく膨らむ。272～275は底部片である。

276～280は砂礫とともに出土したものの。



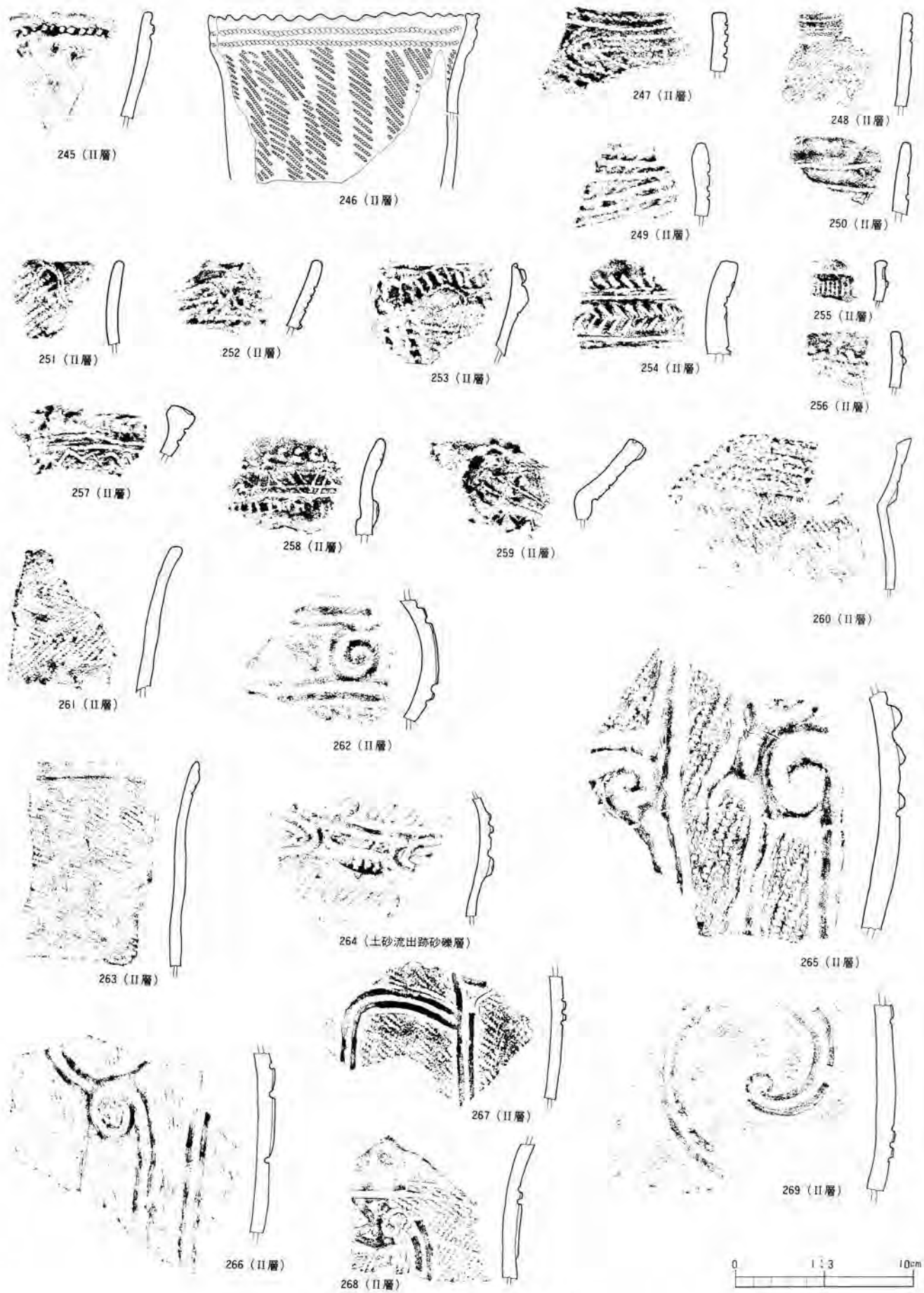
第59図 北西区遺構外出土遺物⑫



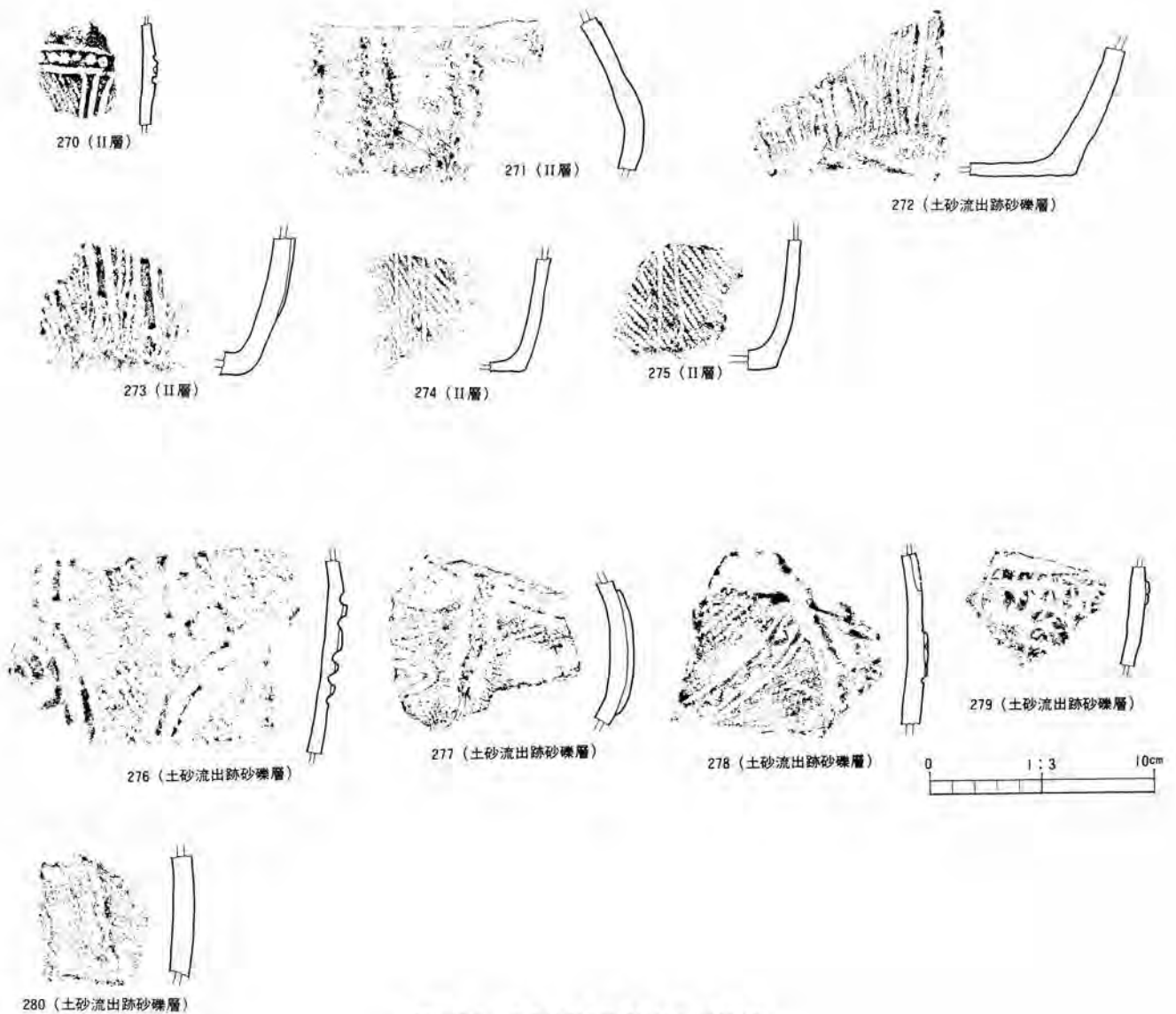
第60図 北西区遺構外出土遺物⑬



第61図 北西区遺構外出土遺物⑭



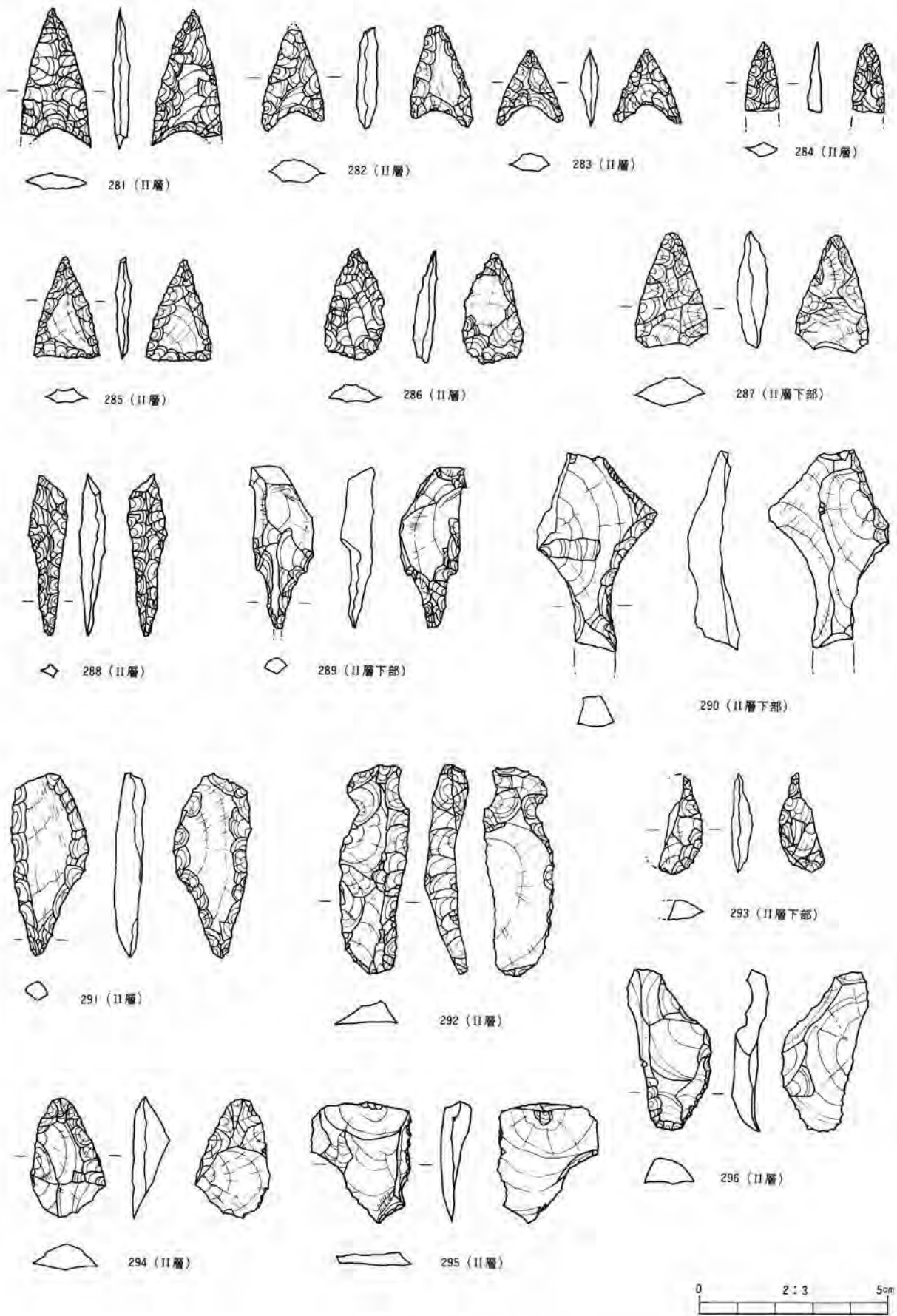
第62図 北西区遺構外出土遺物⑮



第63図 北西区遺構外出土遺物⑬

281～299は剥片石器、300～322は礫石器である。

281～287は石鏃である。281～283は基部が大きく^へく^れる形態となる。特に283は双脚状を呈する。285～287は平基となるもの。288～291は石錐である。288は基部の両面ともに剥離を加えている。289は機能部分を中心に細かい剥離を施している。291は削搔器の可能性も考えられる。292、293は石匙である。294～296はスクレイパー類である。297、298は片刃状に仕上げた所謂筥状石器の範疇にはいるものか。299はピエス・エスキーユである。300～309、311～313、315、316はひとつの側面部だけを314は両側縁部を使用した敲打磨石である。磨面に剥離が伴うものとそうでないものや別の箇所^に敲打痕が認められるものなどがある。316は磨面部に稜線が認められる複数の磨面を形成するものである。317～320は調整磨面（B面）を伴う特殊磨石である。321は側面部が尖がった山状になっているもので、砥石か。322は石刀となるものか。



第64図 北西区遺構外出土遺物⑰

④北東区（第69図～第83図）

東南区同様、基本層序II層以下がV層の地山となり、ここに掲載したのはすべてII層出土の遺物である。

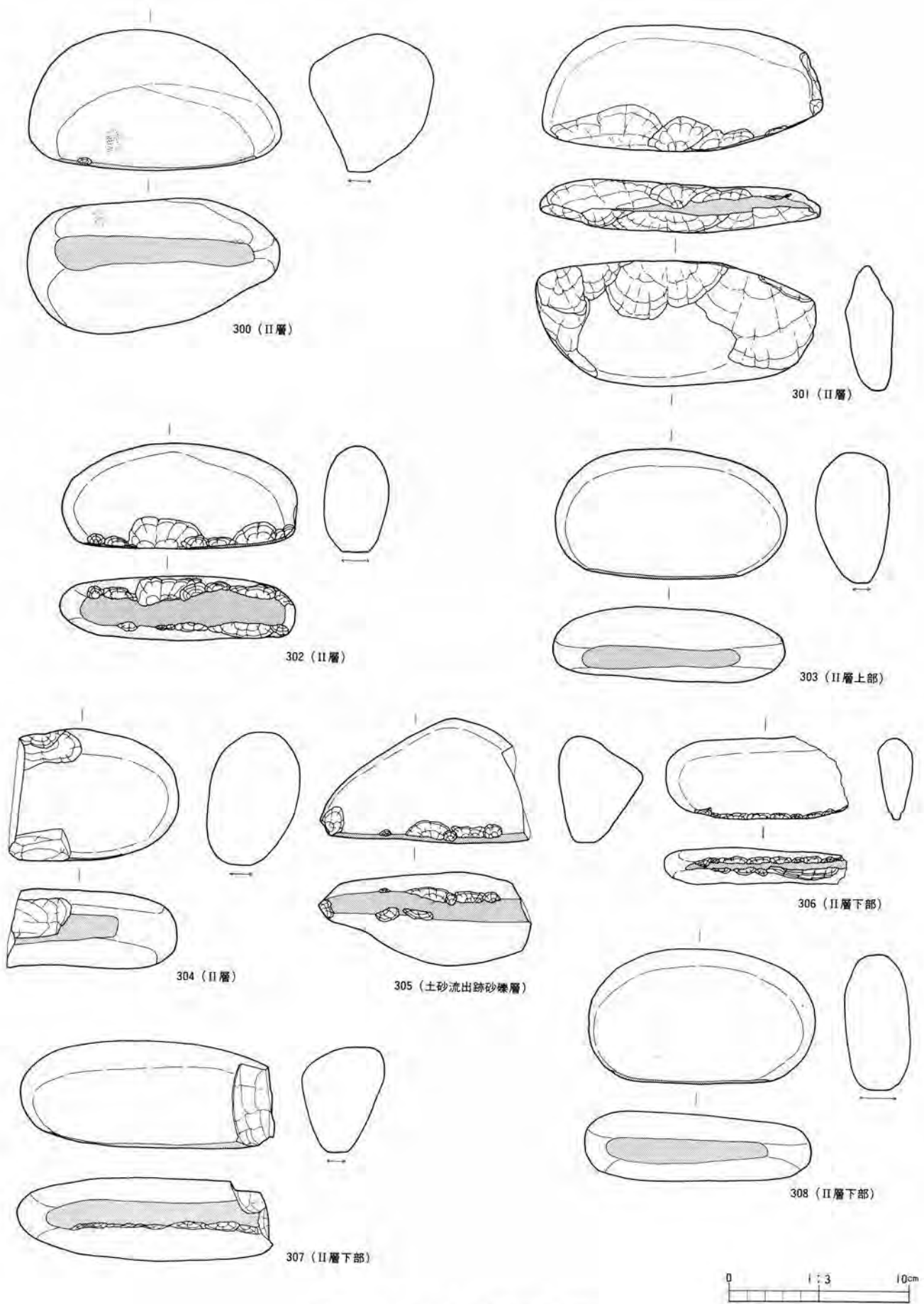
323～361は土器、362～374は石器である。

323～340は口縁部が内湾するものである。323～329は隆沈線で渦巻文や区画文を描いている。330、331は同一個体片で長方形の区画内に2段の刺突列を施文し、区画の連結部に円状の隆沈文を施す。333は沈線で楕円形区画をつくるもの。334は頸部が無文となるもの。335～337は刺突や刻目を施すもの。338～340は渦巻文を描く。341～346は口縁部上端に区画をつくるものか。345は隆帯の上部に刺突列を施文する。346は沈線間に刺突を施し、波状の沈線を施文しているもの。347は側面に原体圧痕を伴う隆帯で楕円形区画をつくり、その連結部にボタン状突起を貼付する。348は円形刺突を伴う太い粘土紐を巡らせている。349は縄文施文後に隆帯を円形状に貼付している。350、351は口縁部が無文となるもの。352は口縁部上端が肥厚する。353は縄文のみの施文である。354～358は胴部片である。354は縦位の区画文をつくる。359、360は底部片。361は浅鉢で口縁部にブリッジ状の把手が付くもので、短沈線状の刻目が施文されている。

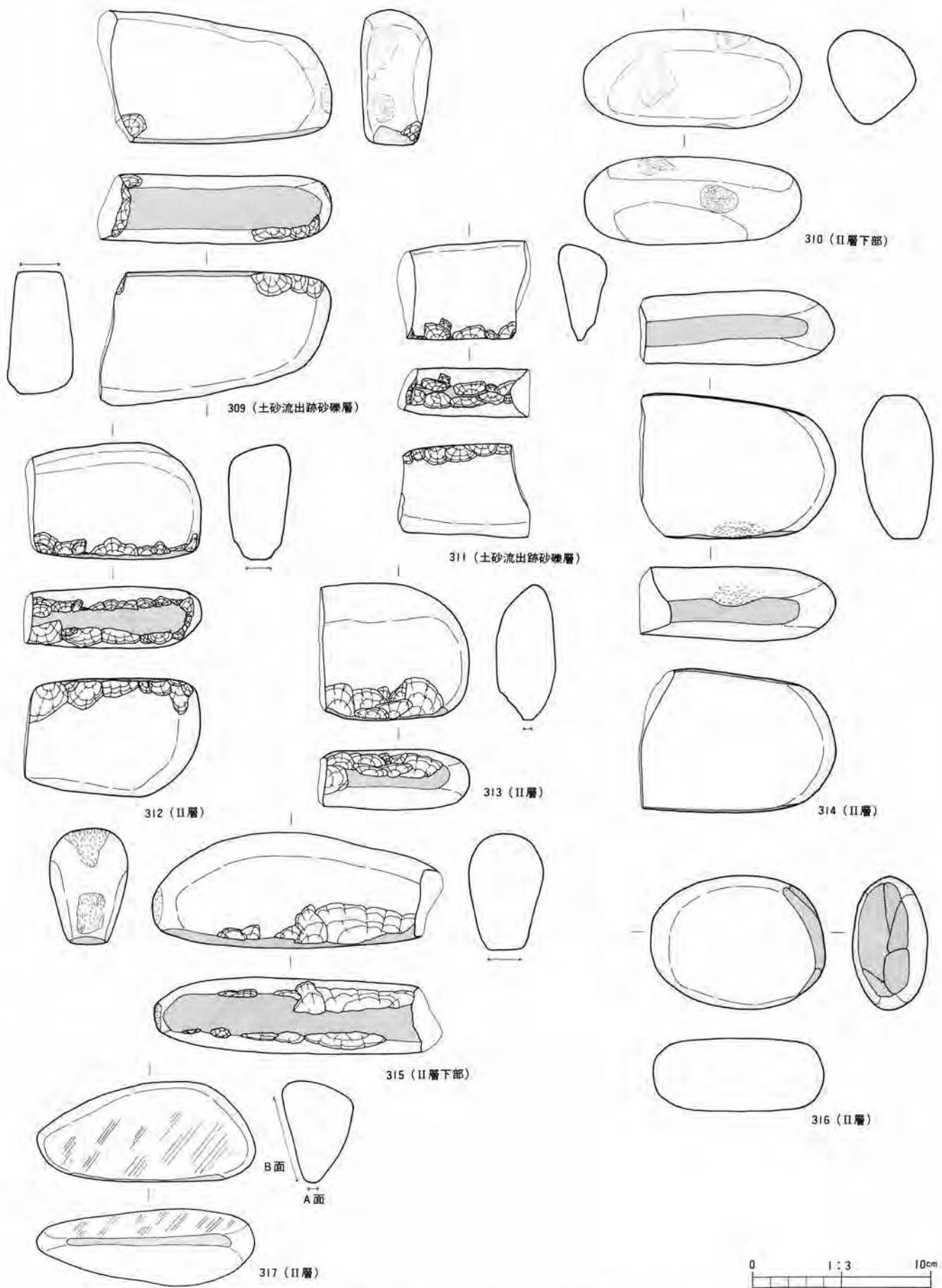
362～367は石鏃である。362、364、365は基部が抉れるものである。365、366は長軸の長い二等辺三角形を呈する。368は棒状の形態を呈し、石錐ないしは刺突具と思われるものである。369は黒曜石製のピエス・エスキューである。370、371は石匙である。372～374は削搔器類と思われる。



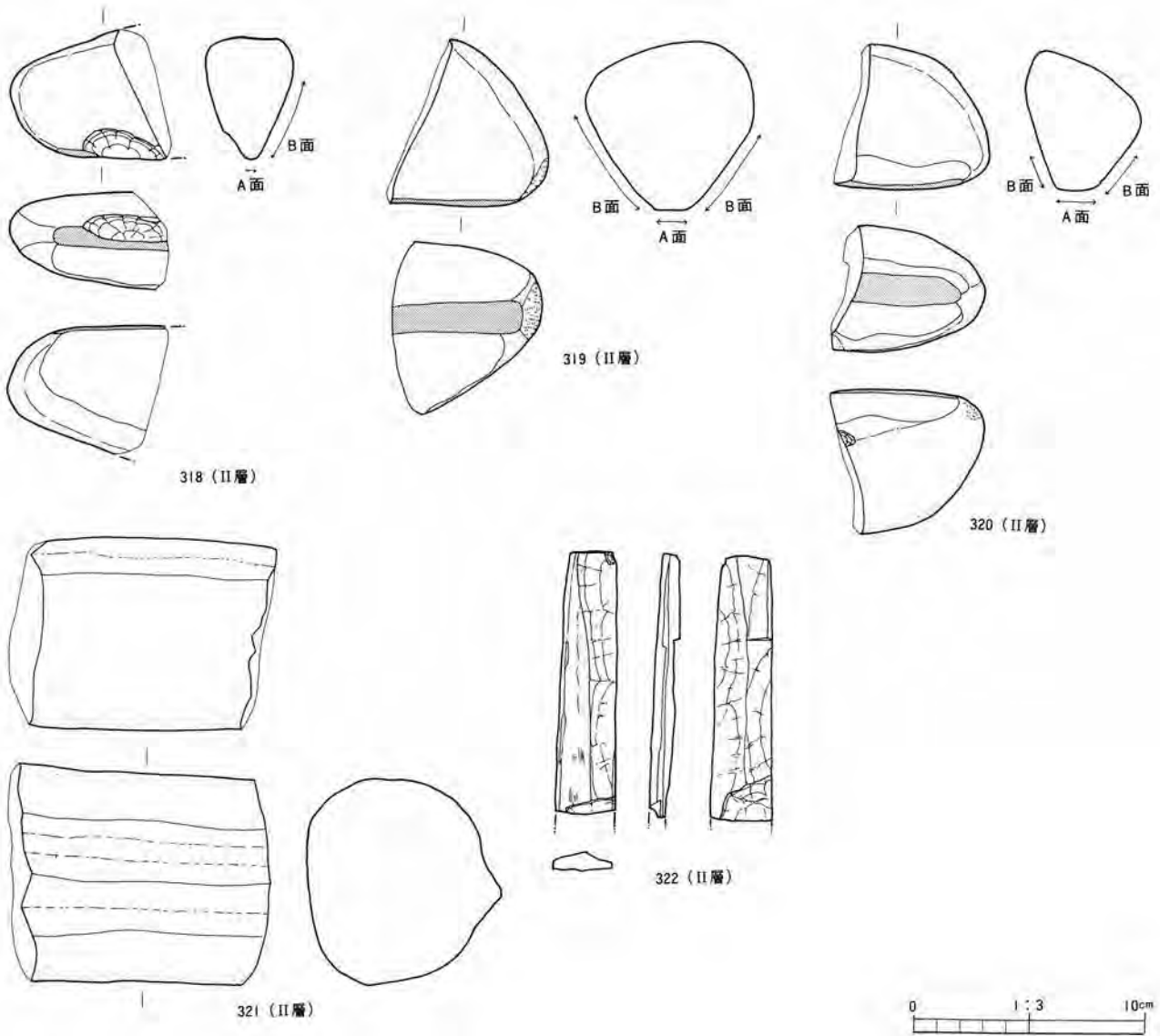
第65図 北西区遺構外出土遺物⑬



第66図 北西区遺構外出土遺物⑱



第67图 北西区遺構外出土遺物⑳



第68図 北西区遺構外出土遺物②

④北側中央区（第71図～第75図）

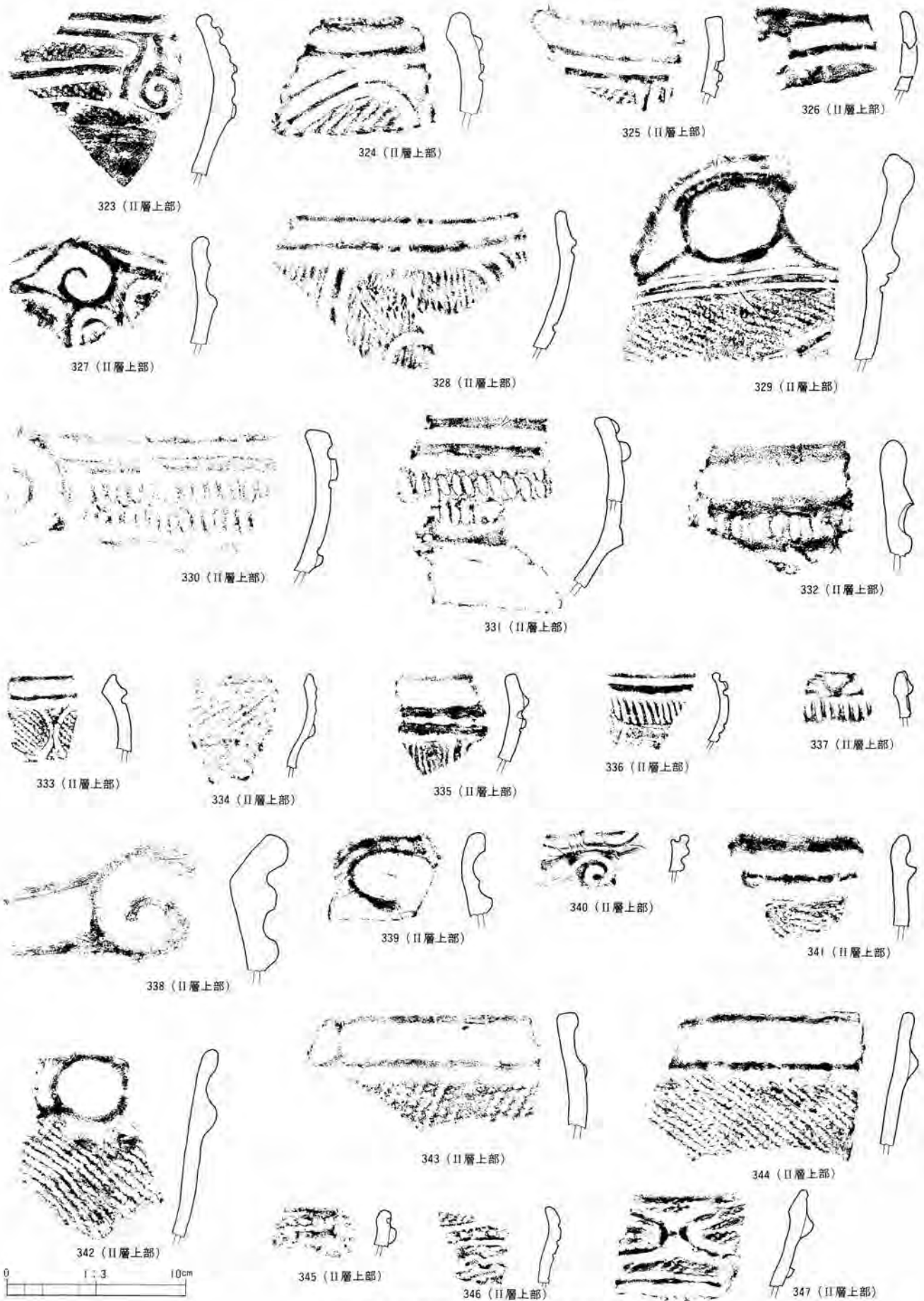
北西区と北東区の間付近から出土したものである。土砂の流出跡による影響が大きく大礫が散在している。やはり基本層序Ⅱ層以下が土砂の流出跡の砂礫層となっている。掲載した遺物はⅡ層から出土したものである。

375～479は土器、480～534は石器である。

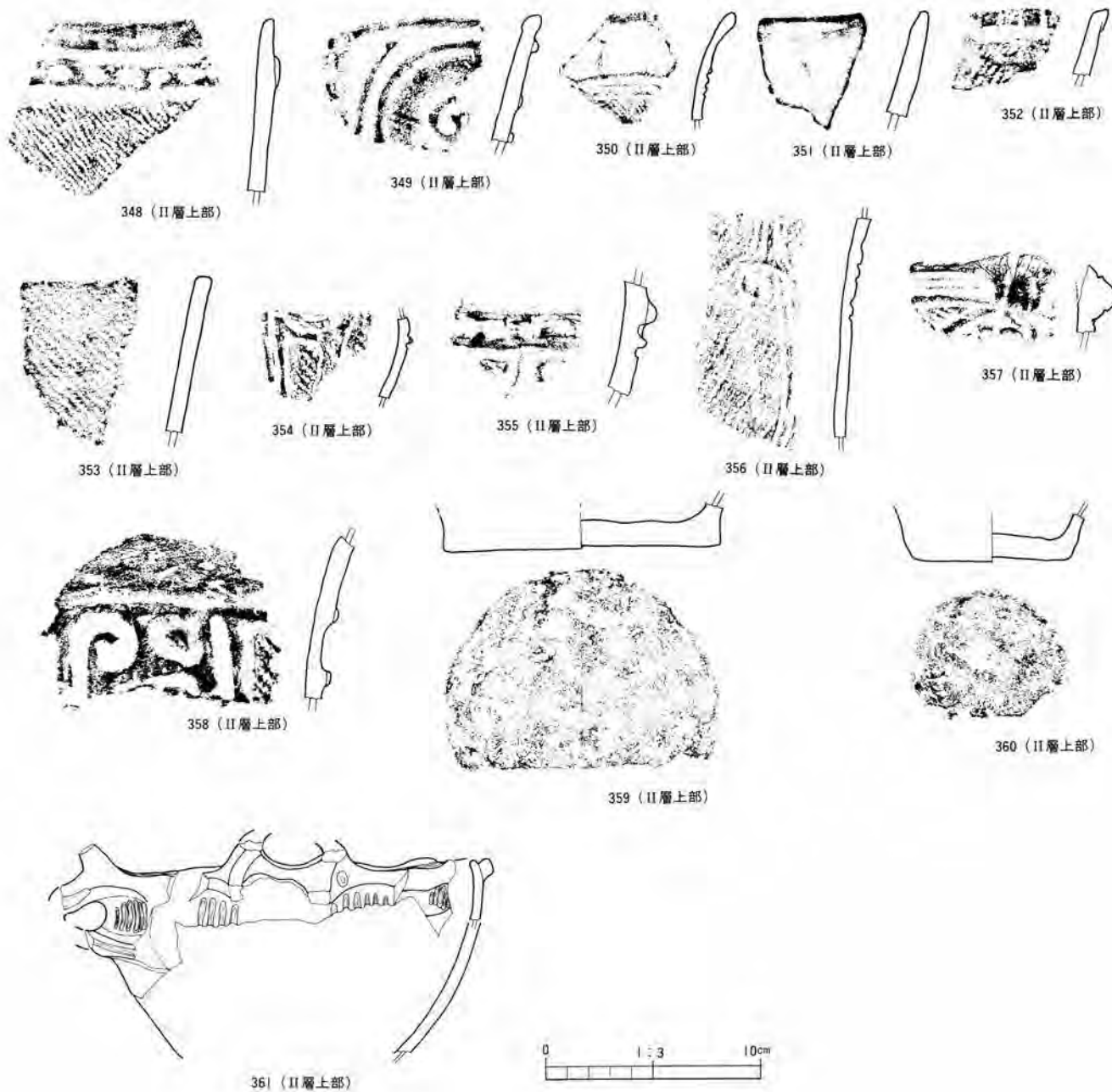
375～404は口縁部が強くないしはゆるやかに内湾するもので、隆沈線や沈線により渦巻文や曲線文などの文様を描く。405～423も口縁部が内湾するものだが、隆線や刺突などにより施文している。405は隆線による楕円形区画をつくりその内部に短原体圧痕列を施している。406は平行沈線の上部に短い原体圧痕列を施す。407は楕円形区画内に沈線状の刻目を施している。408は小突起が付く。409は短い原体圧痕列下に沈線により文様を描く。410は口縁部上端に刺突列を施している。411は側面に原体圧痕を伴う隆帯で楕円形の区画をつくっている。412は沈線間に刺突を施している。413は連弧状の沈線が施文される。414は楕円形の区画内に短原体圧痕文を施している。415は原体圧痕文を伴う隆帯で文様を施文する。416は口縁部上端が肥厚するもので粘土紐を波状に貼り付けている。417も口縁部上端に太い粘土紐を波状に貼付し、大連弧状の沈線を施文している。418は口縁部の肥厚部が無文となる。420は原体圧痕に刺突が伴うもの。421は口縁部上端に横位の原体圧痕文を施しその直下に短原体圧痕列と波状の沈線を施文している。422は口縁部上端に刻目を施すもの。423は原体圧痕を伴う隆帯を貼付している。424～444は口縁部が外反ないしは直立するものである。425はブリッジ状の把手が付く。428～431は波状口縁を呈するもので波頂部に渦巻から円文を施文している。432は平行沈線間に刺突列を施す。433～435は口縁部が大きく外反する。436～438は原体圧痕文を施文するもの。438の口縁部肥厚部は無文である。439は曲線状の沈線を施す。440は口縁部上端に縄文、441は刺突列、442は波状の粘土紐を施している。443、444は沈線により文様をえがいている。445～450は口縁部がやや内湾するもので隆沈線を主体に区画文や渦巻文を施文している。457～473は胴部の破片である。457～463は隆沈線文を主体に文様を描く。467、468は突起状の貼付文を施している。469は縦位の原体圧痕文を施文する。470、471はボタン状の貼付文を施す。472は胴部が大きく膨らむもの。

474～479は実測できたもの。474は注口部を有する浅鉢で、隆沈線による区画文などが施文されている。475も浅鉢と思われるものでブリッジ状の把手を有する。隆沈線で区画された口縁部の文様は2列の刺突列を施文している。476は小形の土器。隆沈線で施文している。477は胴部が膨らむ深鉢で、口縁部は無文で頸部には平行沈線間に刺突を巡らし、胴部には沈線で文様を施文している。478も477に類似するが口縁部に最大径を有するものと思われる。胴部の文様は隆沈線で渦巻文などをえがいている。479は胴部下半から底部片で縦回転のLR縄文が施文されている。

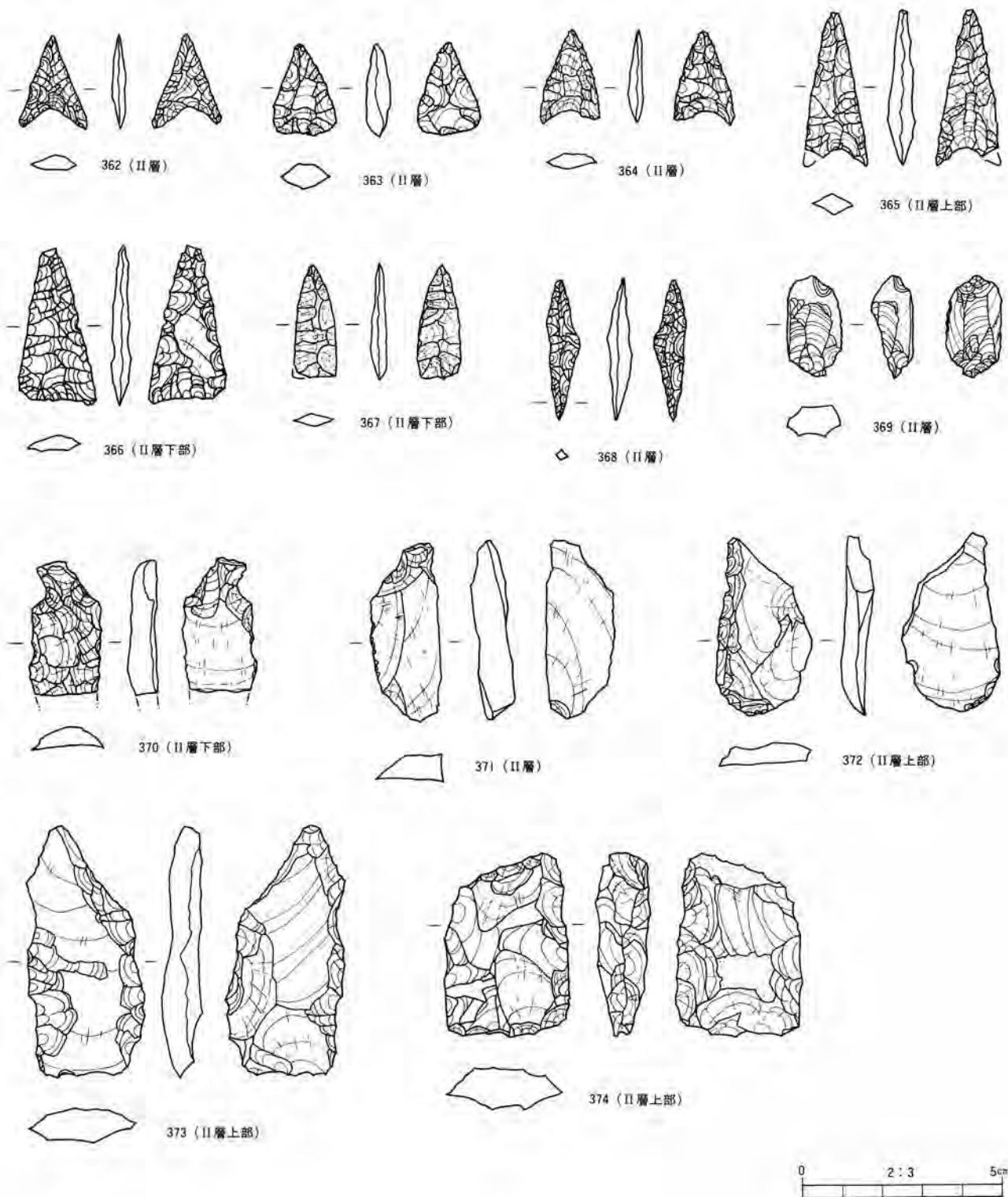
480～497は剥片石器である。480～484は石鏃である。480、481は基部が平基となり、482～484は凹基となるものである。480は摩滅が著しい。485は石匙である。刃部が円形状を呈する。486～493、495、496は縁部に剥離を施して機能部とした削搔器類である。494は全面を研磨仕上げしているもので側縁部に剥離が認められる。497は「く」字状の形態を呈するものでスクレイパー類か。



第69図 北東区遺構外出土遺物②



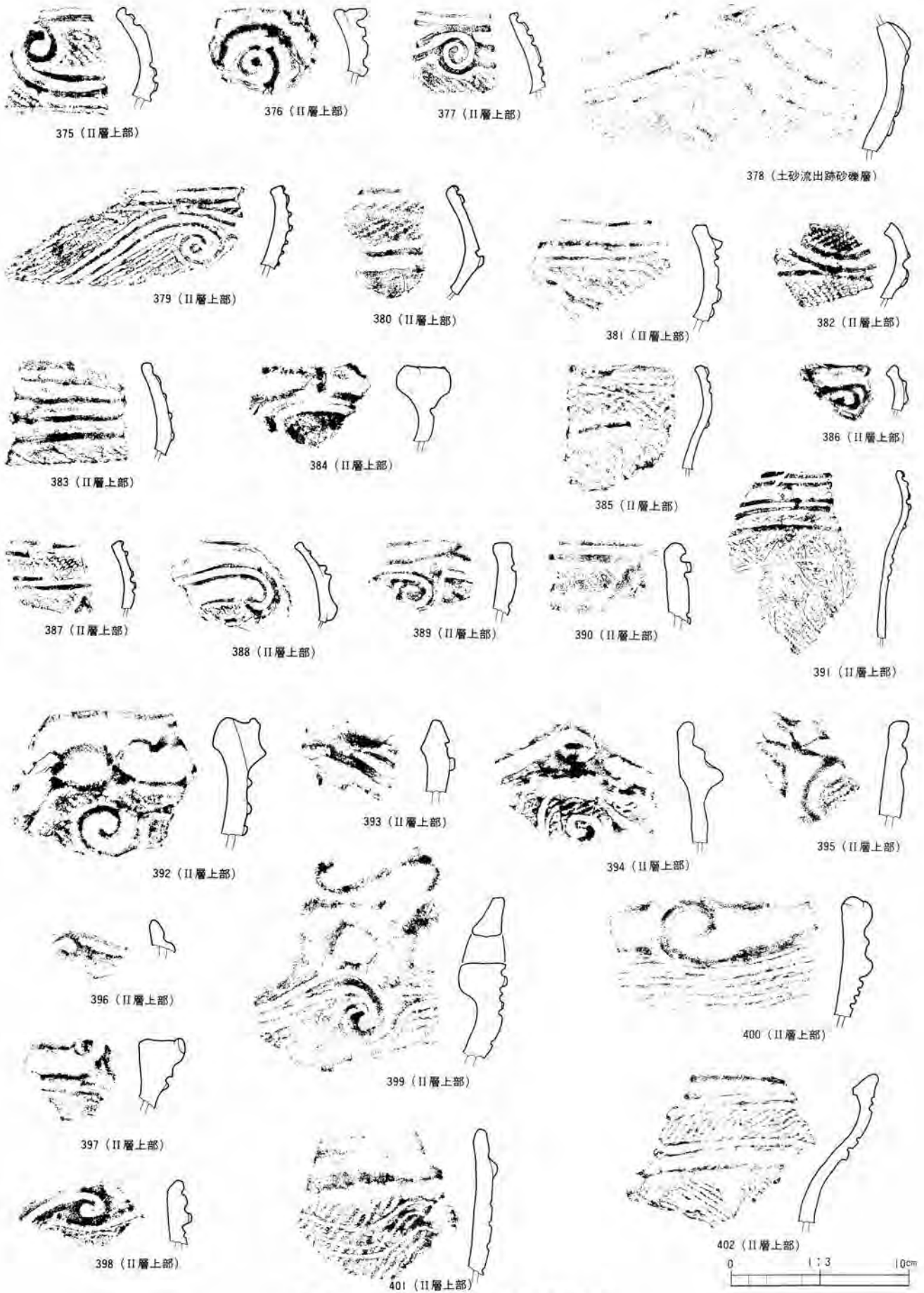
第70図 北東区遺構外出土遺物②③



第71図 北側中央区遺構外出土遺物②

498～534は礫石器である。498～500、503～505、507、509～512、515は敲打磨石である。503は短い方の縁部に機能部をもつ。507、509は機能磨面を2面有するものである。501、502、508は調整磨面（B面）をもつ特殊磨石である。506は磨製石斧の基部片で全面を研磨仕上している。

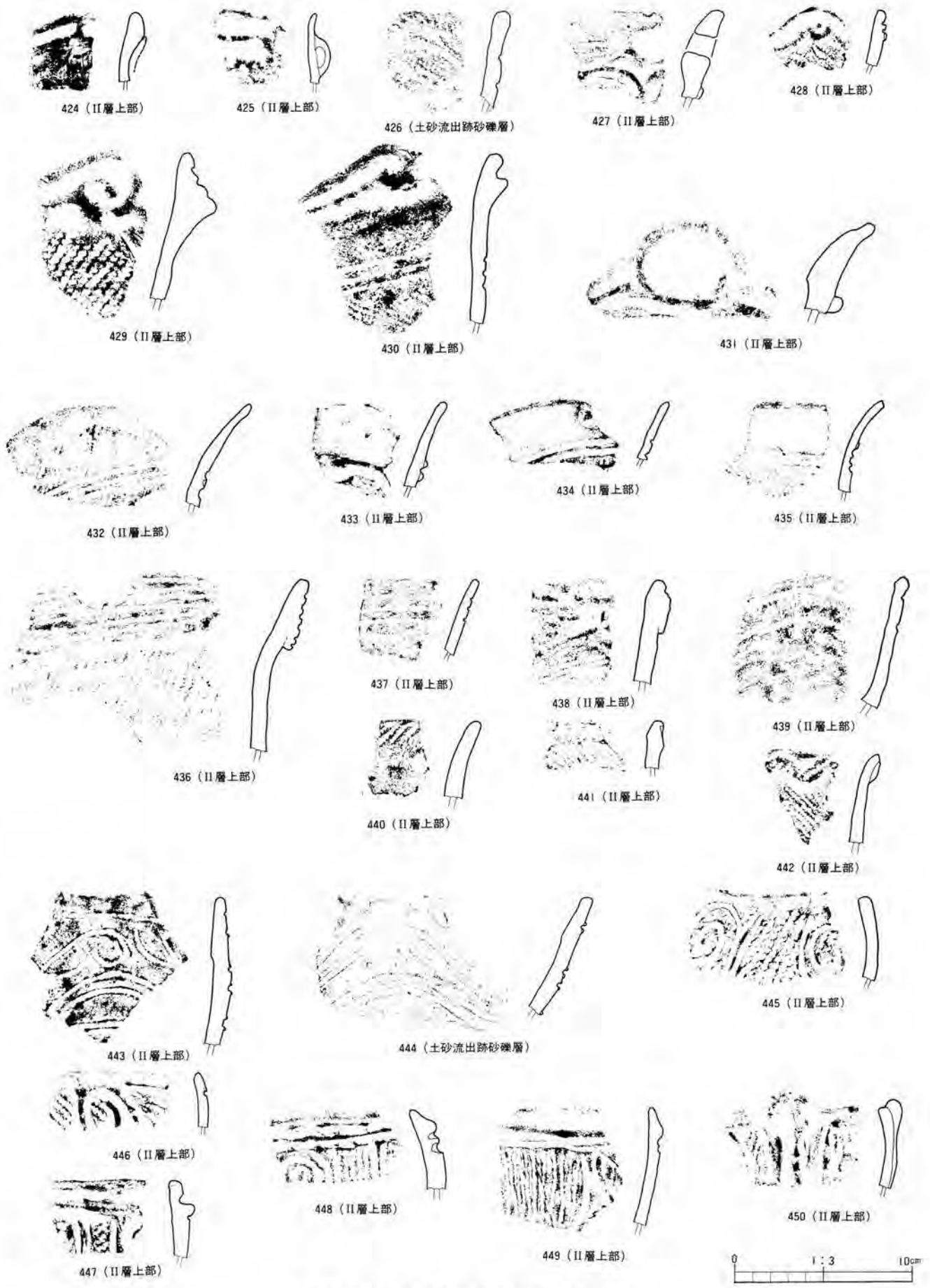
515を除く513以下は北東区から出土したものである。513、514、516～521は敲打痕の認められる敲石である。522～531は敲打磨石である。532は楕円形礫の長軸方向の側縁部に敲打によると考えられる剥離を有するもので、短い方の縁部には磨面が認められた。また、平坦部には擦痕が観察された。533、534は磨製石斧の破損部である。



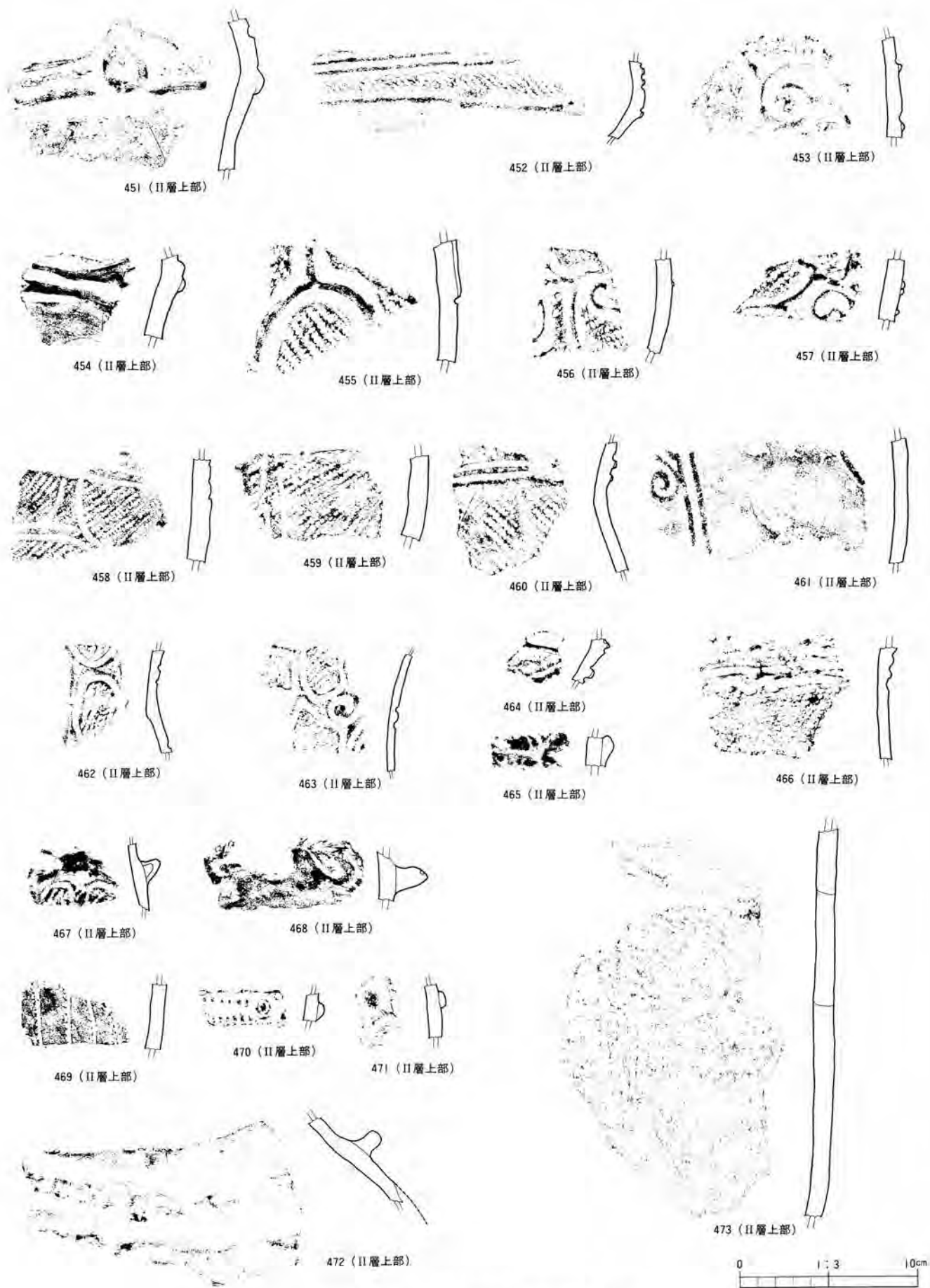
第72図 北側中央区遺構外出土遺物²⁵



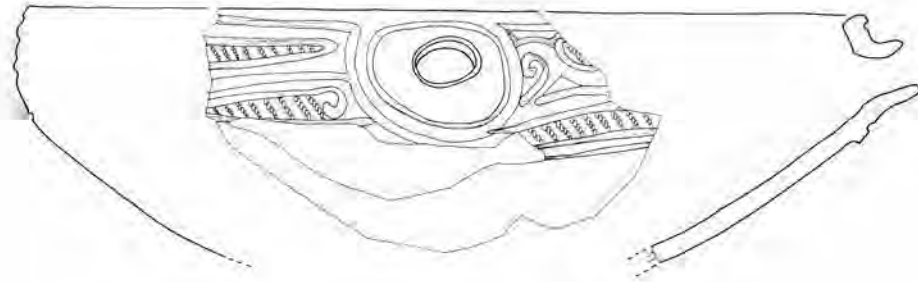
第73図 北側中央区遺構外出土遺物②⑥



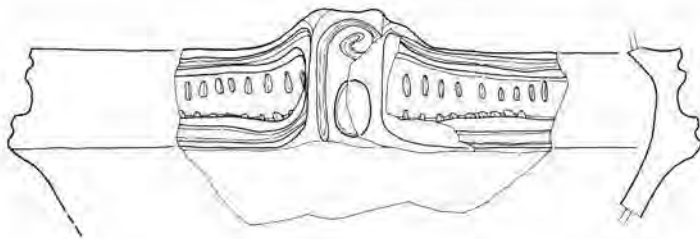
第74図 北側中央区遺構外出土遺物②



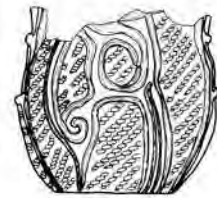
第75図 北側中央区遺構外出土遺物②



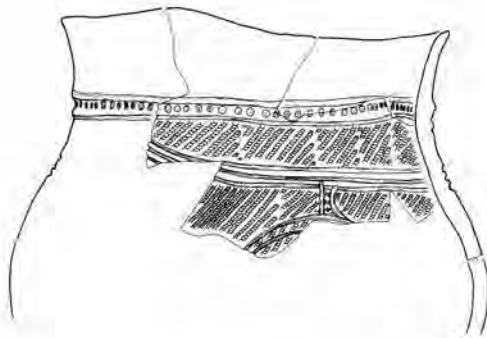
474 (II層上部)



475 (II層上部)



476 (II層、E区)



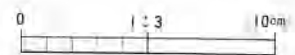
477 (II層上部)



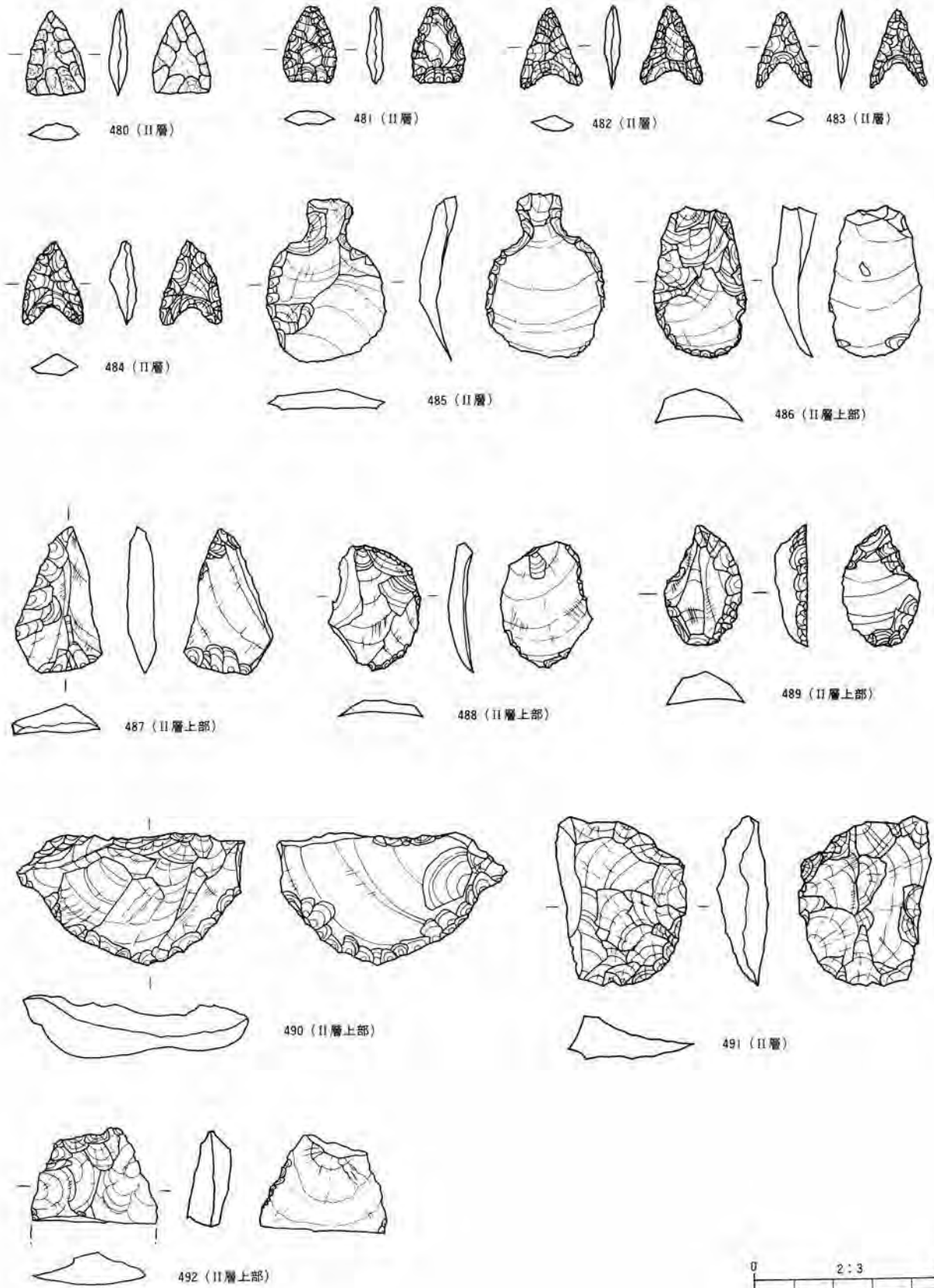
478 (II層上部)



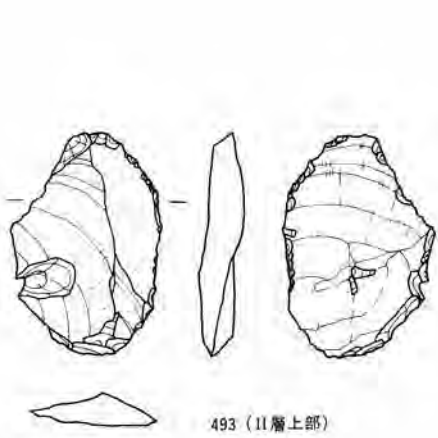
479 (II層上部)



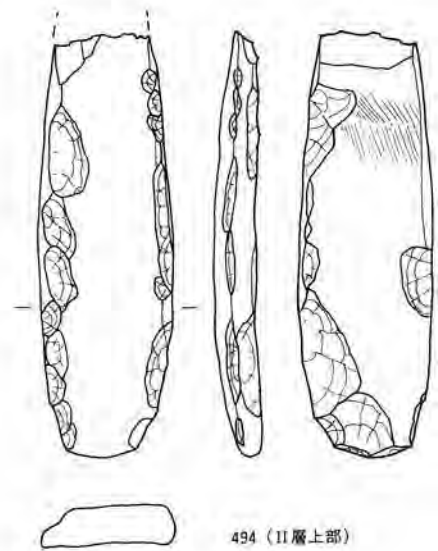
第76図 遺構外出土遺物②



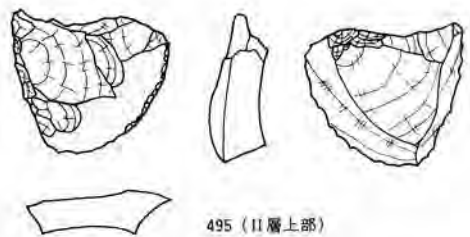
第77図 北東区遺構外出土遺物③



493 (II層上部)



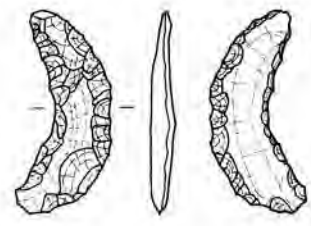
494 (II層上部)



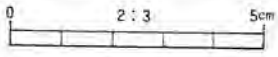
495 (II層上部)



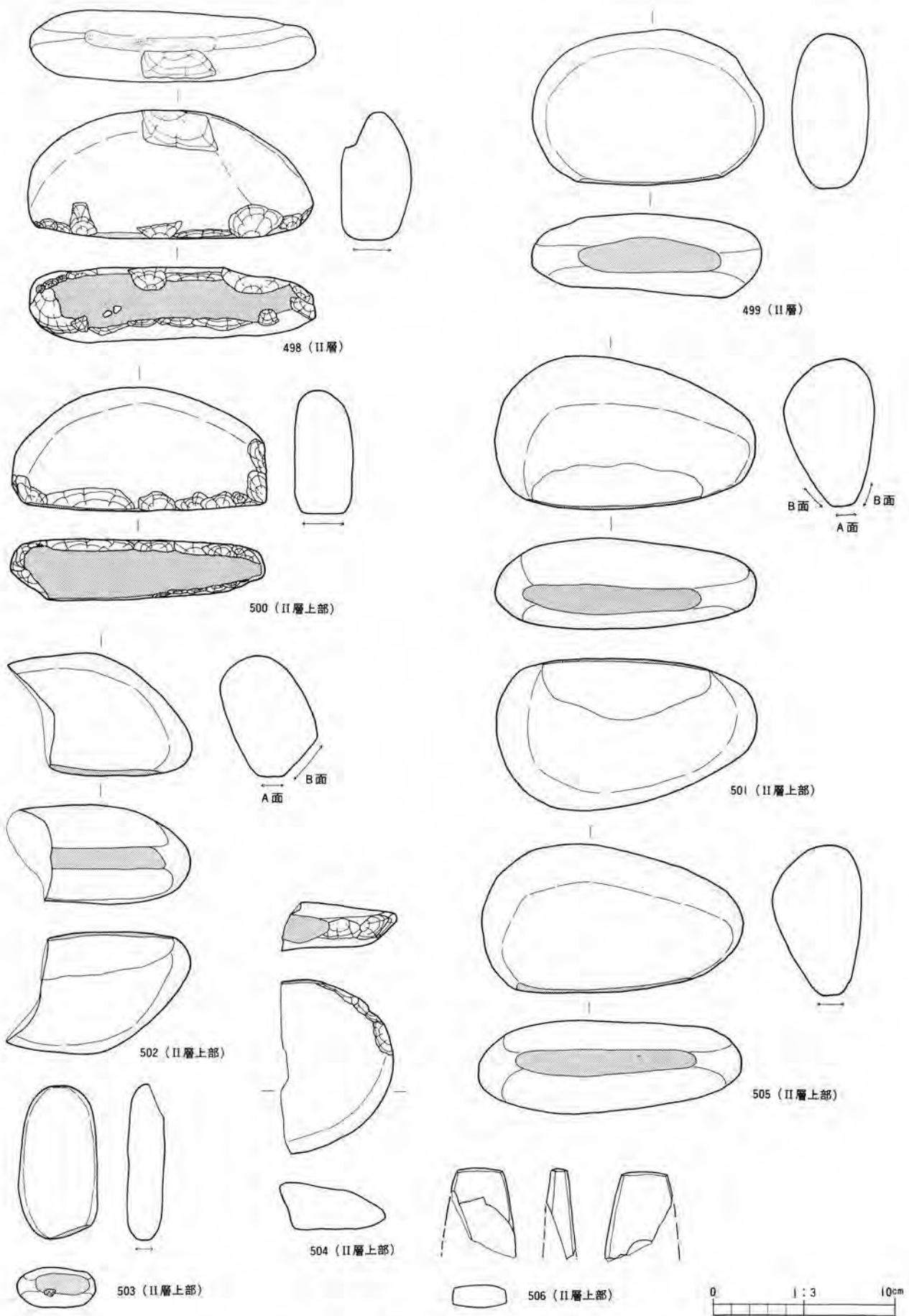
496 (II層上部)



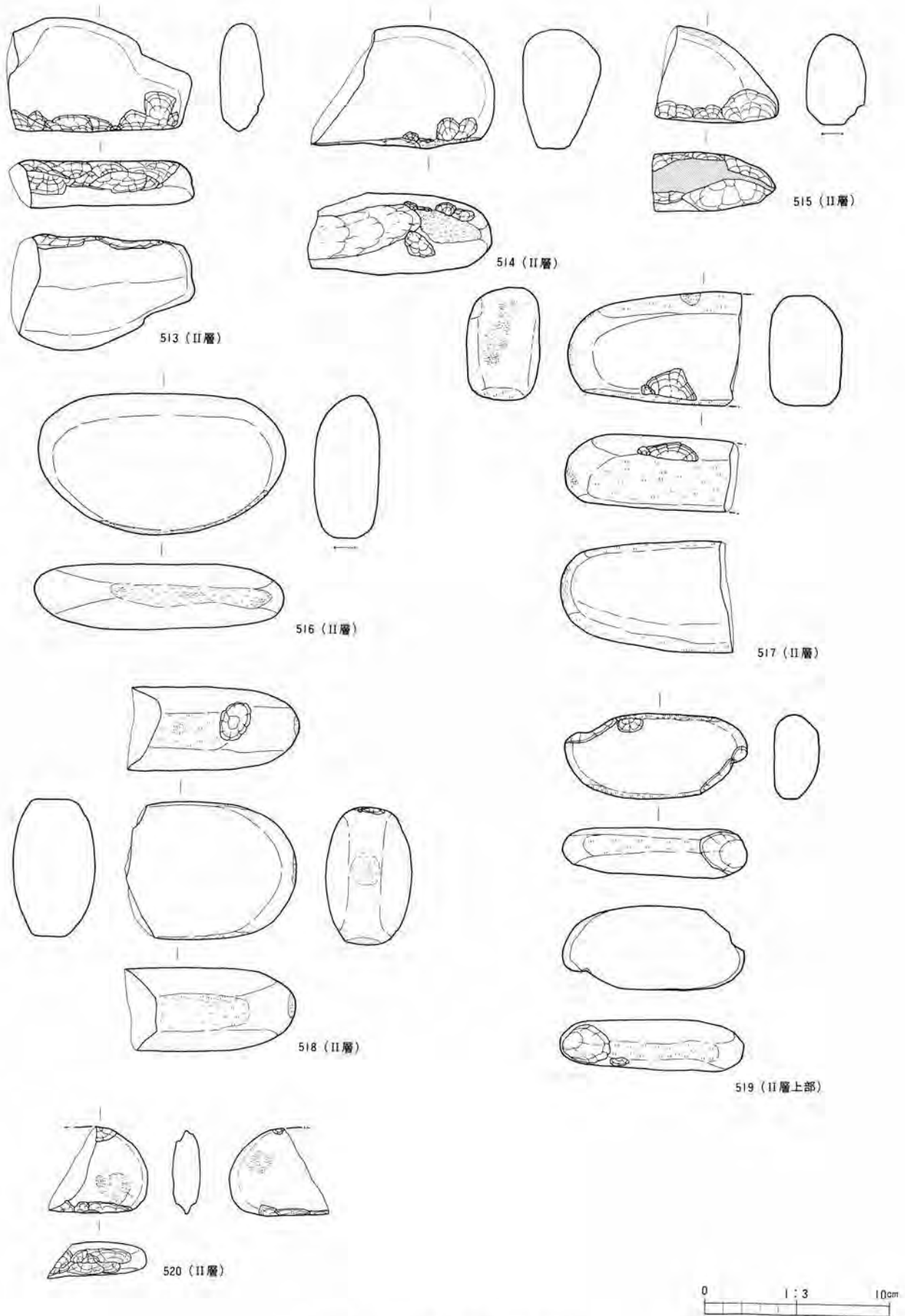
497 (II層上部)



第78図 北東区遺構外出土遺物③



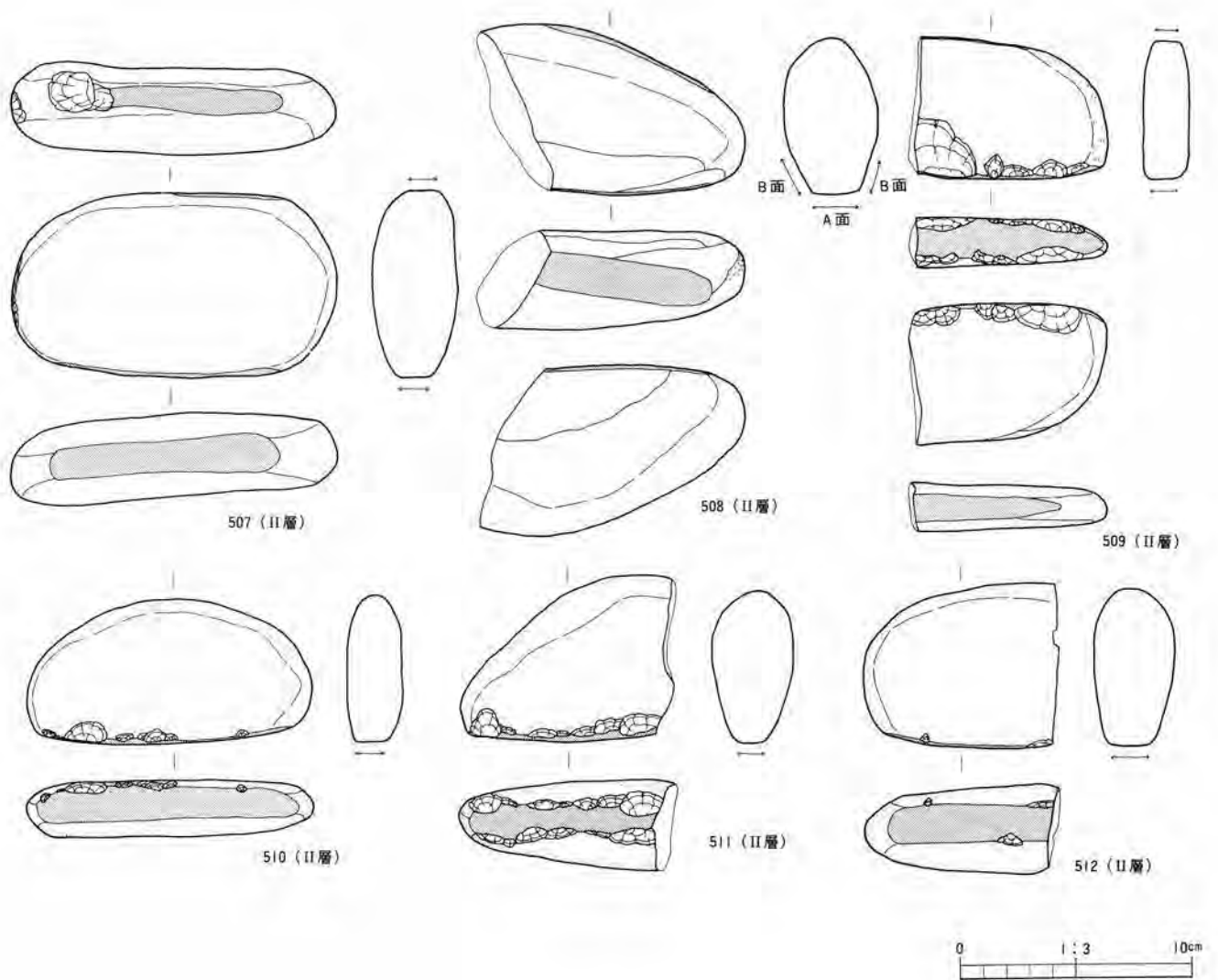
第79図 北側中央区遺構外出土遺物③



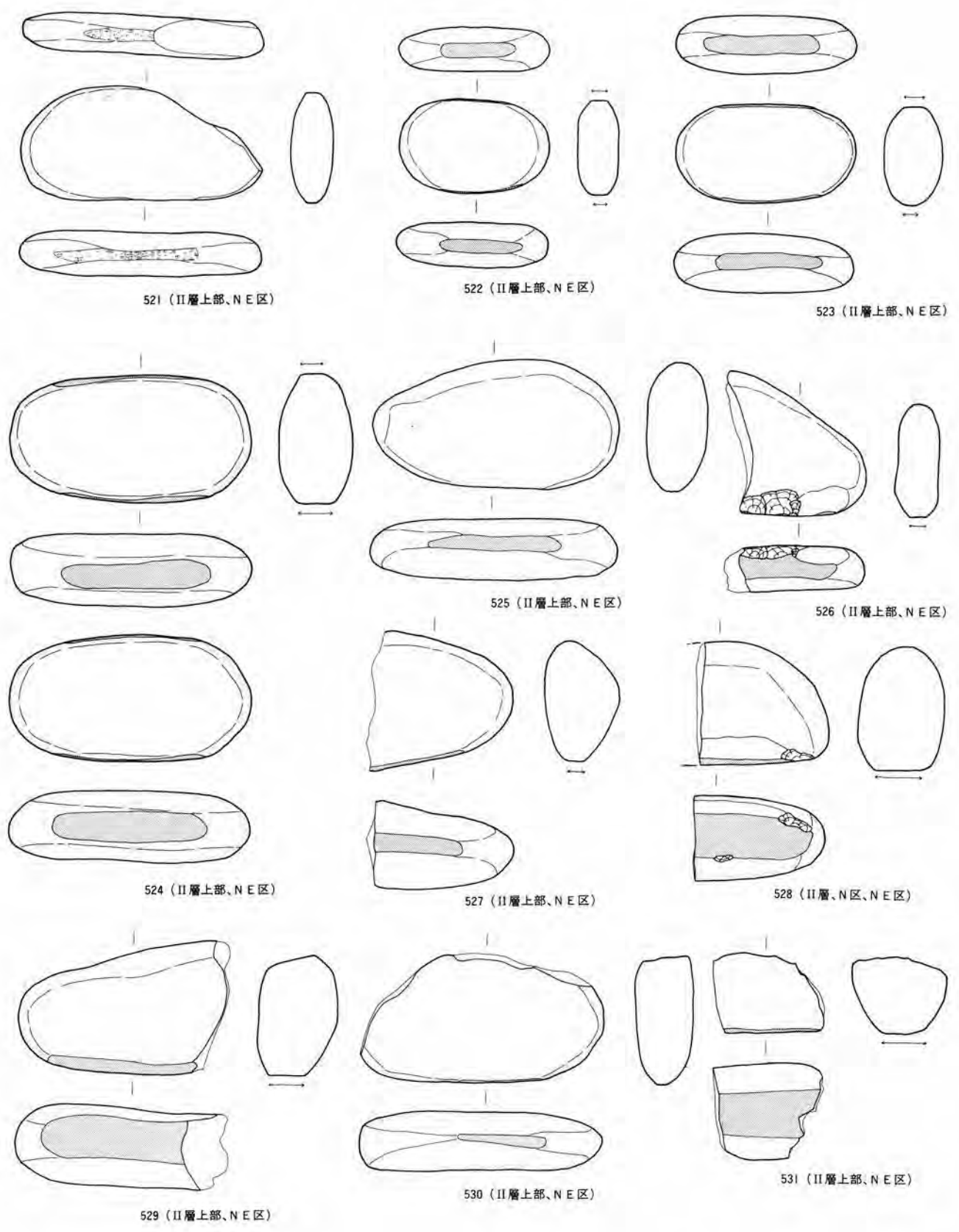
第80図 北東区遺構外出土遺物③③

第84図、85図は基本層序I層から出土したものだが、基本層序でも記した通りこの層自体が整地・盛土層で攪乱されているもので、ここではその一部を掲載するだけとする。

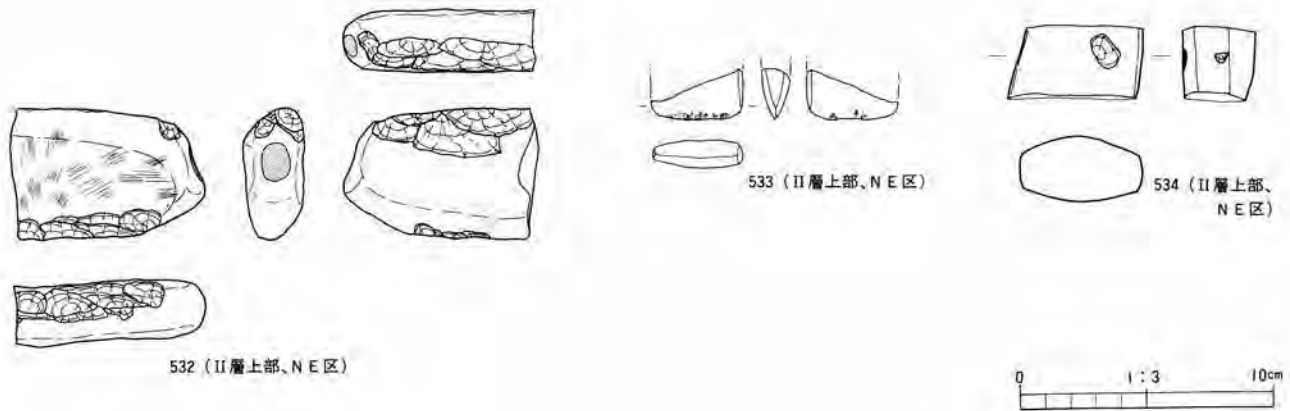
535～548は隆沈線を主体として文様を施文するものである。545～548は刺突が伴っている。549～553は口縁部上端に隆沈線を施しただけのもの。554、555は沈線が施文されている。556、557は波状口縁部の波頂部。558は口縁部が肥厚するもの。559は肥厚する口縁部に波状沈線文を施文している。562、563は沈線で文様を描くもので同一個体である。564は口縁部が外反するもので、刺突を施した隆帯で文様を施文している。



第81図 北東区遺構外出土遺物③4



第82図 北東区遺構外出土遺物③



第83図 北東区遺構外出土遺物③⑥

土製品及び石製品（第86図～87図）

第1次調査では、ドーナツ状の形態を呈する土製品が1点出土しただけであったが、今回は土製品が13点、石製品1点出土している。すべて遺構外からの出土である。

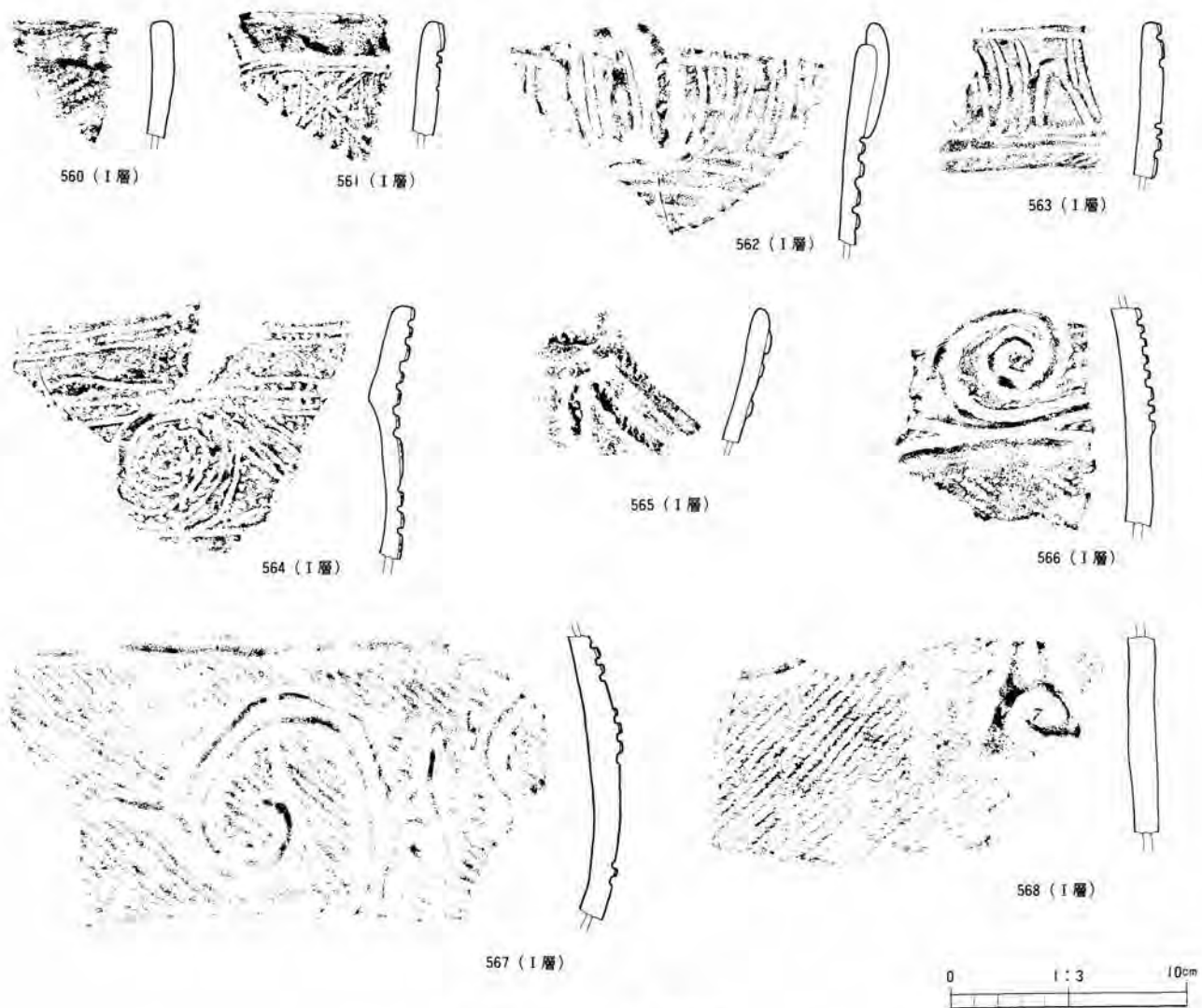
569～572は斧状土製品でいずれも欠損している。570の裏面が欠落しているが、いずれも縄文を施文しており572だけが複節の縄文である。570には穿孔が見られる。

573～581は土製円盤である。いずれも縁辺部を打ち欠き円状に成形しているものである。581は底部片を素材としているものである。

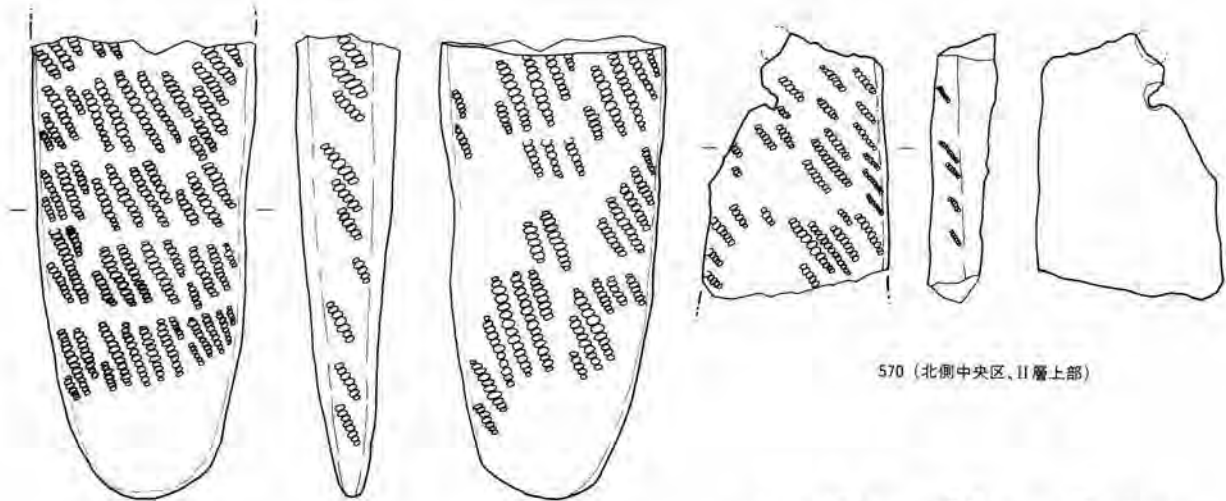
582は塊状耳飾の欠損品と思われるものである。



第84圖 遺構外出土遺物③



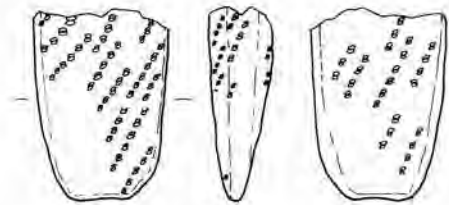
第85図 遺構外出土遺物③



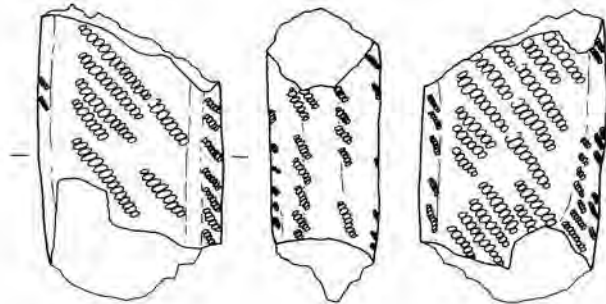
570 (北側中央区、II層上部)



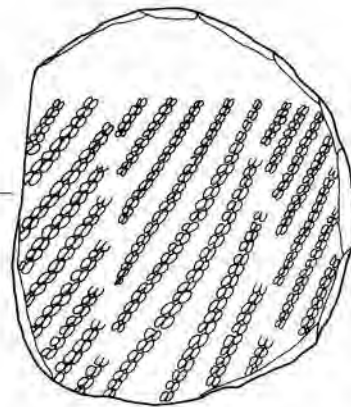
569 (北側中央区、II層上部)



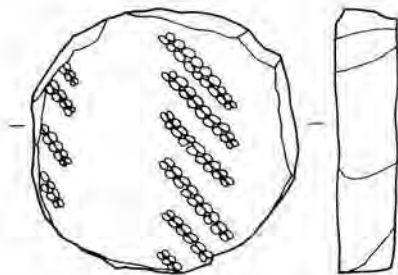
572 (北東区、II層)



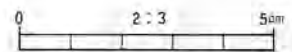
571 (北東区、II層上部)



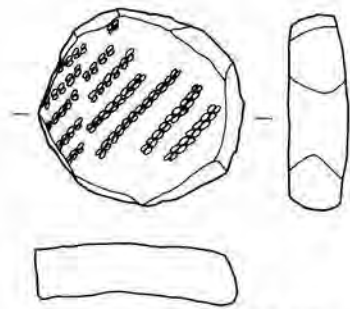
574 (北西区、II層)



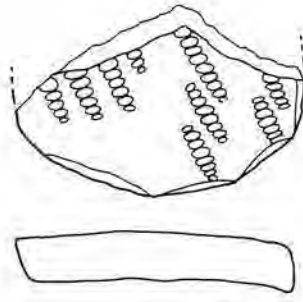
573 (北側中央区、II層)



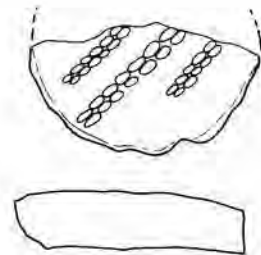
第86図 遺構外出土遺物③



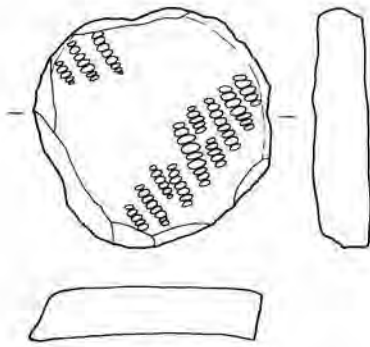
575 (北側中央区、II層)



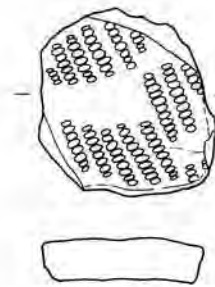
576 (IV層)



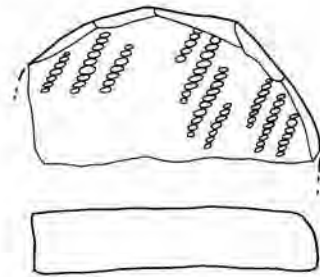
577 (東南区、II層)



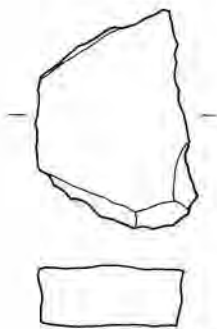
578 (東南区、II層)



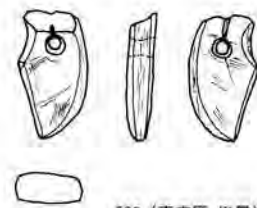
579 (東南区、II層)



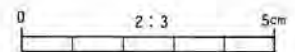
580 (土砂流出跡砂礫層)



581 (東南区、II層)



582 (東南区、III層)



第87図 遺構外出土遺物④

扁平円礫について（第88図～第90図）

『崎山遺跡群Ⅳ、Ⅴ』で注目しているもので、遺跡内（Ⅰ層の整地・盛土層は除く）の土層や遺構内に存在する扁平な楕円形状を呈する自然礫をその長径と重量の対比による散布状態により幾つかのグループに分けられる。

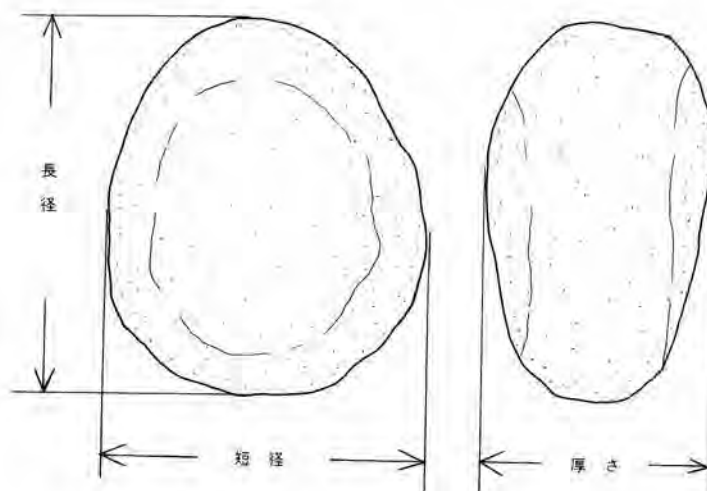
本遺跡の第1次調査においては、確かに『崎山遺跡群Ⅳ』にも記している通りほとんど出土しておらず、海岸部に比較的近い遺跡に特徴的なものだったが、今回の第2次調査においては、石器として使用しているものも含め大から小まで約400点強の出土をみた。これは、後述する調査のまとめにも記しているが、第1次調査地区は竪穴住居跡が存在する居住域ではなかったということによるものと思われる。今後、本遺跡のように海岸部から離れた遺跡の調査結果に注目していきたい。

ここでは、『崎山遺跡群Ⅳ、Ⅴ』に習い分析しその結果のみを記す。第89図は自然礫、第90図は石器として使用されているものの図である。

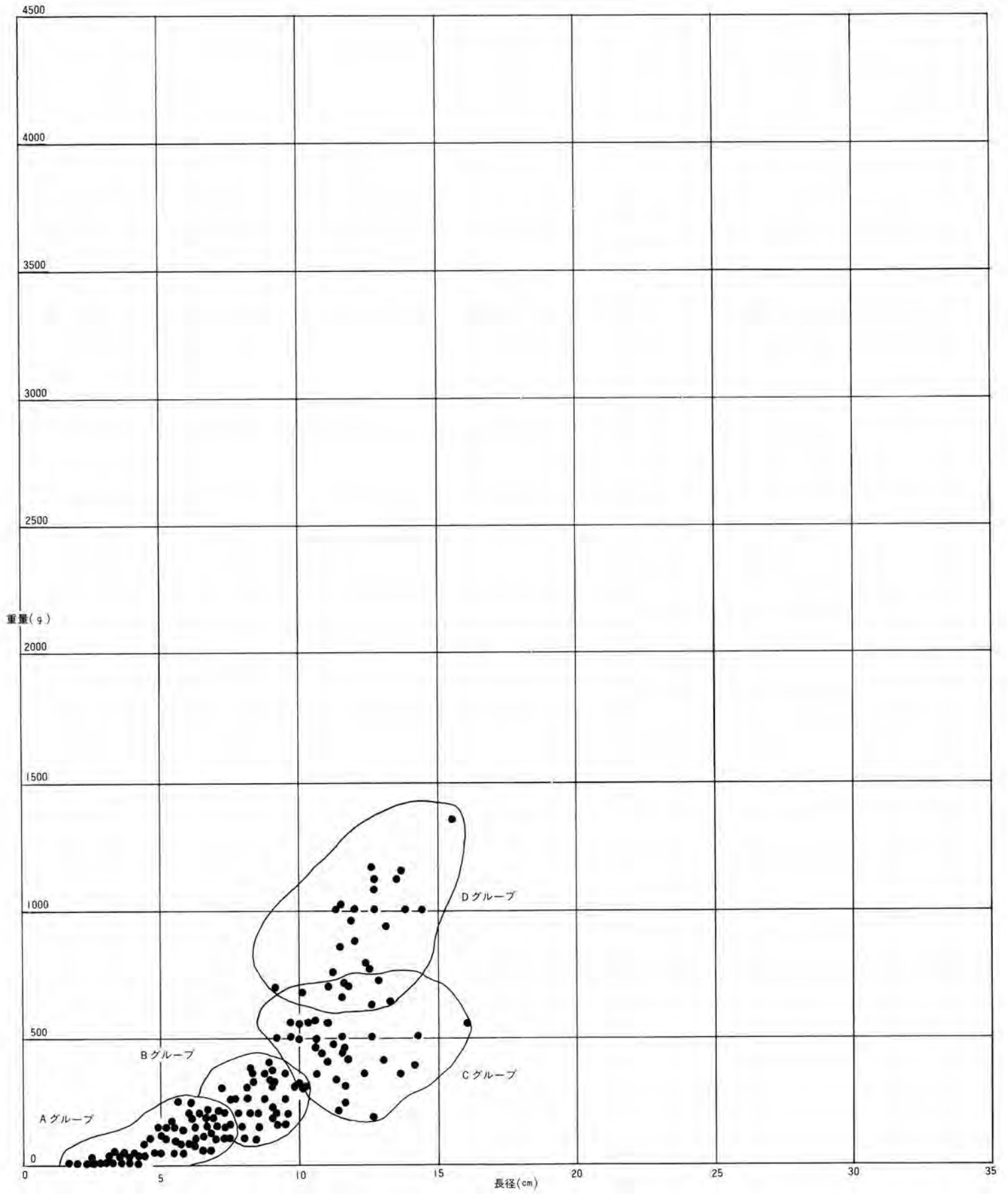
第89図では1点だけ飛び抜けているものがあるが、これを除けばA～Dの4グループに分類できる。

- Aグループ** Aグループは長径5cm前後で重量250g未満の一群である。石器は敲打磨石2点と敲石1点である。
- Bグループ** Bグループは長径5～10cmで重量250～500g未満の一群である。石器はすべて敲打磨石である。
- Cグループ** Cグループは長径10～15cm前後で重量250～750g前後で500g位が中心の一群である。石器は敲打磨石がほとんどで敲石が数点である。
- Dグループ** Dグループは長径10～15cm前後で重量750～1500g前後で1000g位が中心の一群である。石器は敲打磨石である。

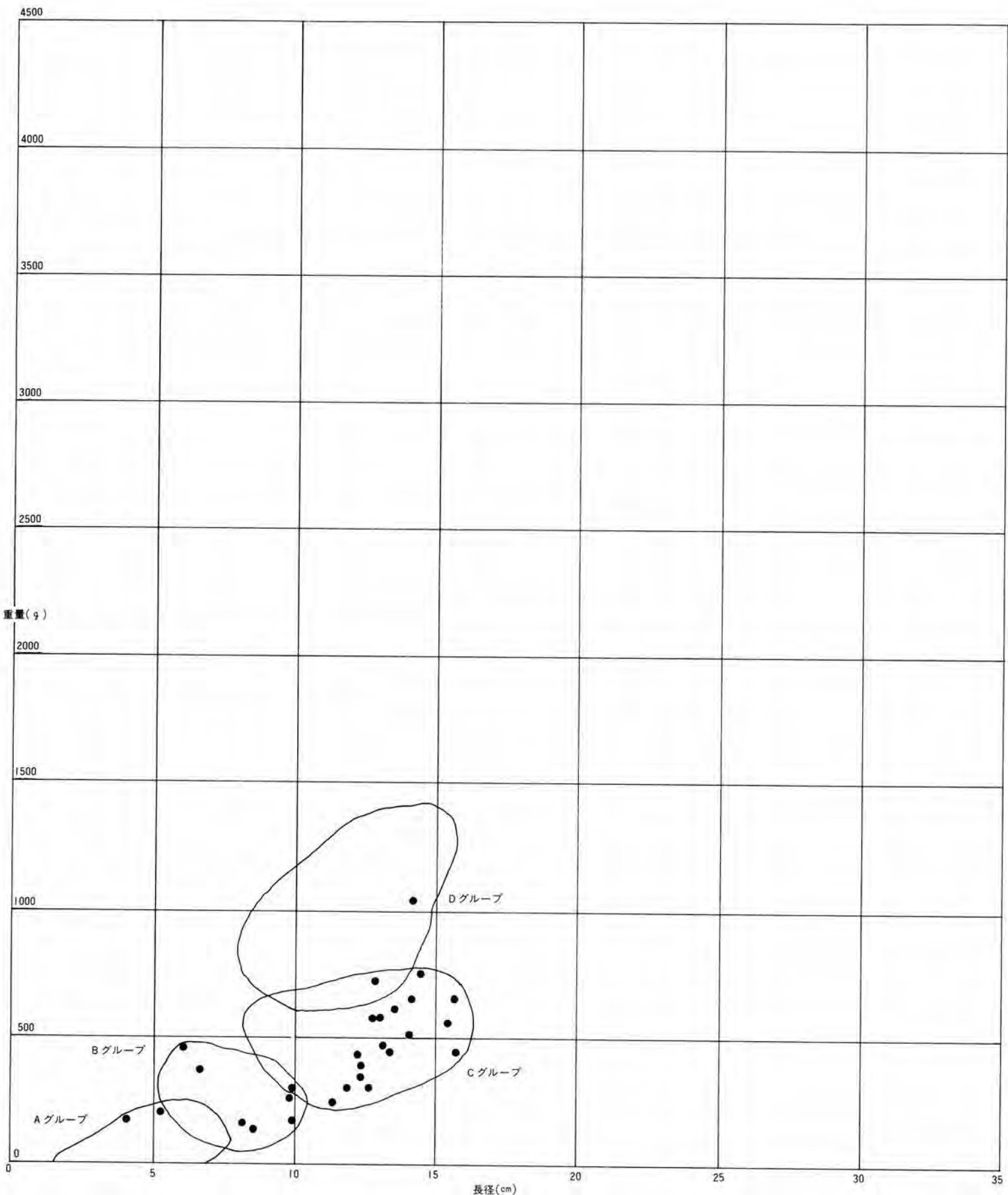
以上、簡単にグループ分けしたが、本遺跡の場合は東隣する山口川より持ちこんだものと推測される。また、崎山遺跡群のものに比較すれば形態が円形よりも楕円形になるものが多いようで、Bグループ、Cグループについては敲打磨石のような石器として使用するための目的が主であるかのようである。



第88図 扁平円礫の計測について



第89図 扁平円礫計測図



第90図 扁平石器計測図

IV 調査のまとめ

今回の第2次調査により検出した遺構・遺物は、以上の通りであった。以下、第1次調査の結果も加味し若干の考察を加え調査のまとめとする。

1. 遺構と土砂流出跡について

竪穴住居跡7棟を検出したが、激しい重複状況にあり第1号竪穴住居跡を除き詳細は不明である。この第1号竪穴住居跡は新旧関係で言えば一番新しいものである。本住居跡は、楕円形プランを基調とし床面中央部に方形の石囲炉をもち、北東壁側に一段高くなる張り出しを有するものである。また、本文中にも記したが土器埋設ピットを伴うものである。時期としては、炉内の火床面上に並べられていた土器（第12図1）や床面上の土器から、縄文時代中期前葉の大木7b式期に伴うものである。

さて、当該期における県内の他例をみてみると中期中葉以降に比較してみても以外と少ない。ただし、県北部における円筒式土器（円筒下層D式～円筒上層a式期）に伴うものは比較的多数検出されている様である。

大木7式前後の集落としては、古くは盛岡市の繫遺跡で大木8a式頃かそれ以前の竪穴住居跡が報告されているが、近年では北上市の滝の沢遺跡、江釣子鳩岡崎遺跡、盛岡市の大館町遺跡などが知られていたが、最近では和賀町の本郷遺跡、紫波町南日詰遺跡などで大木7式期、大槌町の夏本遺跡で大木8a式期の竪穴住居跡などの遺構が調査されている。また、宮古市では崎山貝塚で大木7a式期に伴うと考えられる竪穴住居跡が検出されている。竪穴住居跡以外の遺構としては、大迫町の天神ヶ丘遺跡のフラスコピット、一関市の庄司合遺跡の石造遺構などがある。いずれにしても、中期中葉以降に比較してみてもまだまだ類例が少なく、炉の形態ひとつをみても本遺跡のような石囲炉があったり、地床炉、土器埋設炉や炉のないものなどがあり今後の資料の増加を待ちたい。次に土砂流出跡についてだが、大礫の状況をみてもわかるとおり自然災害の痕跡である。今回検出した竪穴住居跡を破壊していることから当然ながら縄文時代中期前葉以降のことである。この土砂流出跡は基本層序II層（I層は現代の整地・盛土層）以下で検出しており、また、含まれている遺物は縄文時代後期に所属すると思われる2点を除けばすべて縄文時代中期のものであった。よって、積極的に考えるならばこの災害は縄文時代中期後葉の時期となるが、調査区外北側の状況が不明であることや基本層序II層というのは実は表土層であり、しかもこのII層以下が地山となっていることを考えると縄文時代中期後葉の時期と特定するのは危険かとも思う。

2. 高根遺跡の集落について

ここで第1次調査の結果も加味して高根遺跡の集落の在り方をみってみる。高根遺跡は第91図をみてもわかるように東の山口川と西側の山地帯にはさまれ、しかも南北も山地帯の出張りにより断絶した南北に細長い極くわずかな狭い段丘面上に立地している遺跡である。第1次調査の概要は既に記したとおりフラスコピットや集石を伴う土塚跡などを調査しており、時期は中

期前～中葉（大木7～8式）のものであった。今回の調査結果も含めあわせると、第91図のように標高の高い方から竪穴住居跡などの居住域、フラスコピットなどの貯蔵施設群、集石を伴う土壌跡群という集落構造が想定される（竪穴住居跡と集石を伴う土壌跡に若干の時期差があるが）。『高根'89』では断定できなかったが、集石を伴う土壌跡を墓塚跡と考えると遺跡全体の調査でなく未調査部分もかなりあるが、遺跡の範囲内のうちでは最も低く居住に適さない区域に墓域が存在している可能性が高いが、聖域？と居住域などを意識した集落構造になっていると考えられる。

最近の調査では、紫波町の西田遺跡や一戸町の御所野遺跡、宮古市の崎山貝塚などで中期中葉から後葉にかけての同心円的な集落の調査例が報告されているが、いずれも墓域を集落の中心に取りこんでいる。

高根遺跡の場合、この墓域の南側にわずかに段丘面が広がっているが、すでに大部分が人工改変（保育所が建っている）されており竪穴住居跡などの遺構が存在していたかは定かでない。いずれにしても、南北に細長い極くわずかな狭い段丘面上に立地しているという地形的な制約を大きく受けているにもかかわらず、その空間を区切っている可能性が高いものと思われる。

3. 土器について

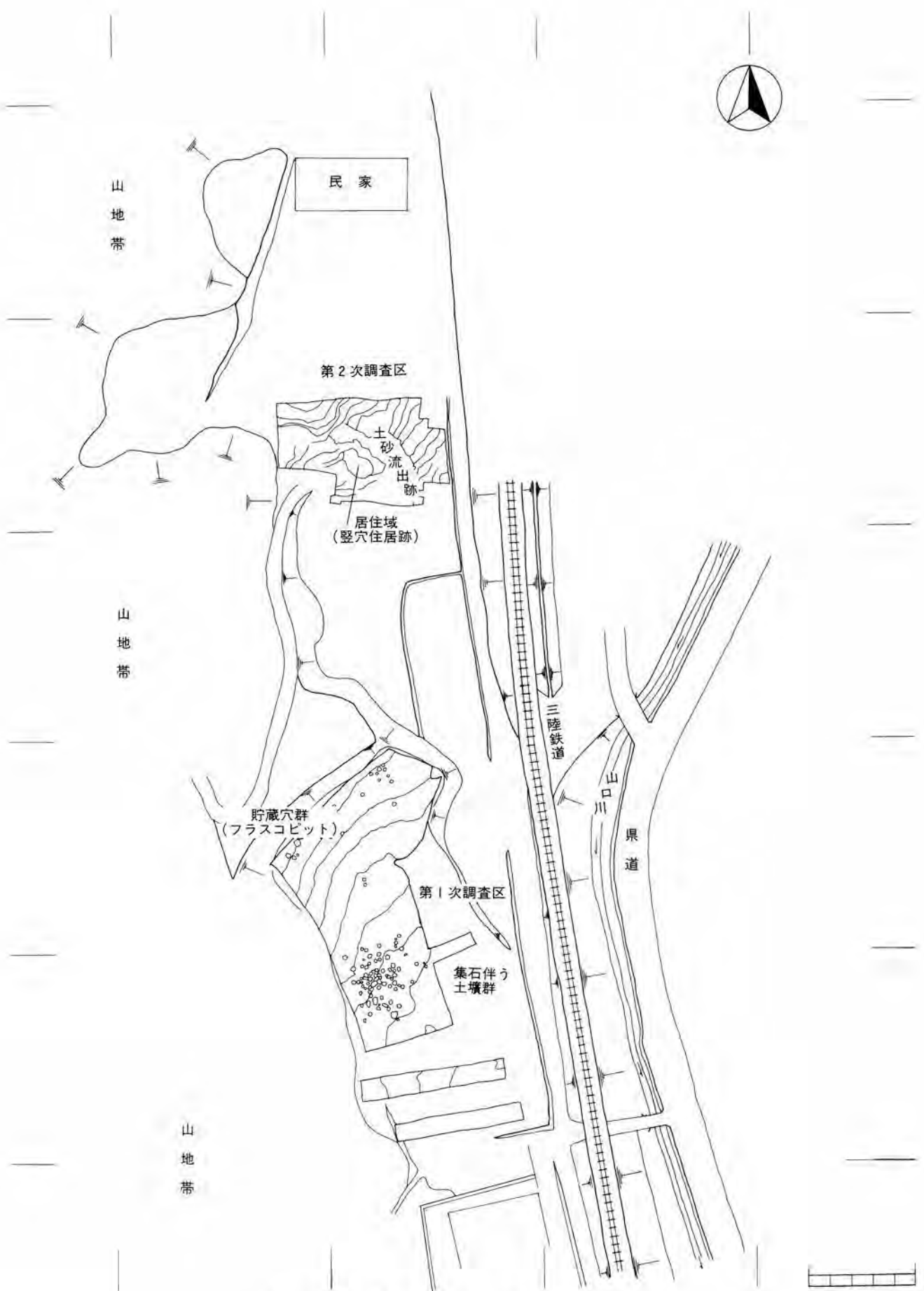
遺構外出土遺物のところでも記した通り、出土土器の大半は縄文時代中期前葉から中葉（大木7～8式）のものである。大木8式土器については、宮古市内を問わず全県的にその出土量・質ともに豊富であり、なおかつ大木8b式については様々な分析がなされており、ここでは大木7式土器についてのみ記しまとめとする。

宮古市内における大木7式土器の資料は、『分布調査1～4』においても散見できるし、また、発掘調査資料としては、崎山貝塚、上村貝塚、重茂館遺跡群などから出土している。特に重茂館遺跡群の調査では層位的に出土している。

大木7式土器については多くの研究者によりなされており、幾つかに細分されるだろうということで見解が一致している。

まず、本遺跡における第Ⅲa群土器は大木7a式に相当するものであるが、調査区の南西区Ⅲb層から出土した第48図10と第49図11を比較しただけでも前記研究者によれば、明らかに2分されているものである。第49図11が所謂棟塚式に近いもので古段階、第48図10が新段階に相当するものと思われるが、この層自体からは次型式の原体圧痕を伴う大木7b式段階のものまで含まれており、層位的に分離できずⅢa層も含め2次的な堆積状態と考えられ本遺跡においては残念ながら大木7a式土器の細分はできなかった。

次に第Ⅳa群土器とした大木7b式に相当する一群だが、第1号竪穴住居跡の炉内のものと床面出土のものと埋土（C層、B層）のものが区分される可能性がある。即ち、埋土（C層、B層）のものには8a式の要素を多分に含むもの（例えばキャリパー状の口縁部を呈する器形の存在や隆線主体の文様要素の付加など）が入っており、かなり8a式に近い7b式と思われる。炉と床面出土のものは従来の7b式といわれるものであるが、実測できた3点（第12図1～3）の深鉢は器形も微妙に違っており、また、圧痕文の使用がみられず刺突や沈線、貼付



第91図 高根遺跡第1次・2次調査遺構配置図

文が主体である。

当住居跡以外の遺構外出土のものも含めて詳細に分析すれば、まだまだ細分可能かとも思うが遺構外出土遺物のところでも記したように層位的な裏付けができるような出土状況であるため深入りせず、ここで滞めることとする。

4. 石器、石製品、土製品について

① 石器

剥片石器、礫石器とも多量に出土しているが、剥片石器では石鏃、礫石器では敲打磨石が特に目立って多い様である。今回は、整理作業に十分な時間がとれなかったことや紙幅の関係上詳細な検討・分析が出来なかった。特に、石器の組成などについては、前述の器種が多いということが、背後にせまる山地帯への積極的な活動を示すものと考えられる。また、第1次調査では、石器自体の出土量も少なく今回の調査では、居住空間であるということも有り比較的石器の出土をみた。また、石鏃以外にも石匙、不定形の削搔器類も出土している。石材という面では黒曜石製のものが数が少ないながらも出土している点が注目された。

② 石製品

わずか1点であるが、玦状耳飾の欠損品と思われるものが1点だけ出土しているが、従来円筒式土器文化圏に特色的なものと言われているが、確かに今回出土した土器の中にも明らかに円筒土器の影響を受けていると思われるものも出土しているが、どの様に関連づけられるのかは今後の課題としたい。

③ 土製品

今回の調査では、土製円盤、斧状土製品が13点出土した。宮古市内の今までの発掘調査では土製品の出土例が少なく、崎山貝塚や白石遺跡などで出土している程度である。特に、斧状土製品は発掘調査による出土は初例である。

5. 調査のまとめ

最初に記した通り、第1次調査の結果も加味し調査のまとめとしたが、膨大な遺物の出土量の整理に追われ、十分な分析・検討がなされたとは言えない。特に、遺物（土器、石器、土製品など）に関しては、筆者の認識不足もあり、今後、まだまだ検討の余地があるものと思う。これらについては、今後の検討課題とし、何らかの機会にまとめてみたいと思っている。

参考・引用文献（順不同）

- 小岩末治 「中期縄文式文化と住居址」『岩手県史』第1巻（1961 岩手県編さん）
- 稲野裕介他 『滝ノ沢遺跡』北上市文化財調査報告33（1983 北上市教育委員会）
- 『岩手県文化財調査報告書第70集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(江釣子村鳩岡崎遺跡 遺物・要約・分析鑑定結果編)』（1982 岩手県教育委員会）
- 八木光則・千田和文他 『大館遺跡群 大館町遺跡－昭和56年度発掘調査概報－』（1982 盛岡市教育委員会）
- 武田将男他 『大館町遺跡－縄文中期集落址1976年度調査報告－』（1978 岩手大学考古学研究会）
- 小田野哲憲他 『本郷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集（1992 （財）岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター）
- 高橋義介他 『南日詰遺跡発掘調査報告書』岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書第136集（1989 （財）岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター）
- 高橋与右エ門・酒井宗孝他 『夏本遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第134集（1989 （財）岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター）
- 相原康二他 『天神ヶ丘遺跡』（1974 大迫町教育委員会）
- 『庄司合遺跡発掘調査概要（第二次調査）』（1977 岩手県一関市教育委員会）
- 武田将男・高橋文明・高橋憲太郎 『柿ノ木平遺跡－昭和50・51年度発掘調査報告－』（1982 岩手大学考古学研究会編 盛岡市教育委員会刊）
- 高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 『岩手の土器』（1982 岩手県立博物館）
- 丹羽茂 「大木式土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』（1981 雄山閣）
- 丹羽茂・阿部博志・小野寺祥一郎 「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』（1982 宮城県教育委員会）
- 熊谷常正 「北上川中流域における大木8 a 式土器」『岩手県立博物館研究報告第7号』（1989 岩手県立博物館）
- 『季刊考古学第7号 縄文人のムラとくらし』（1984 雄山閣）
- 鈴木道之助 『図録石器の基礎知識III 縄文』（1981 柏書房）

写 真 图 版



調査区の状況



同上（遺構集中区）

第2図版



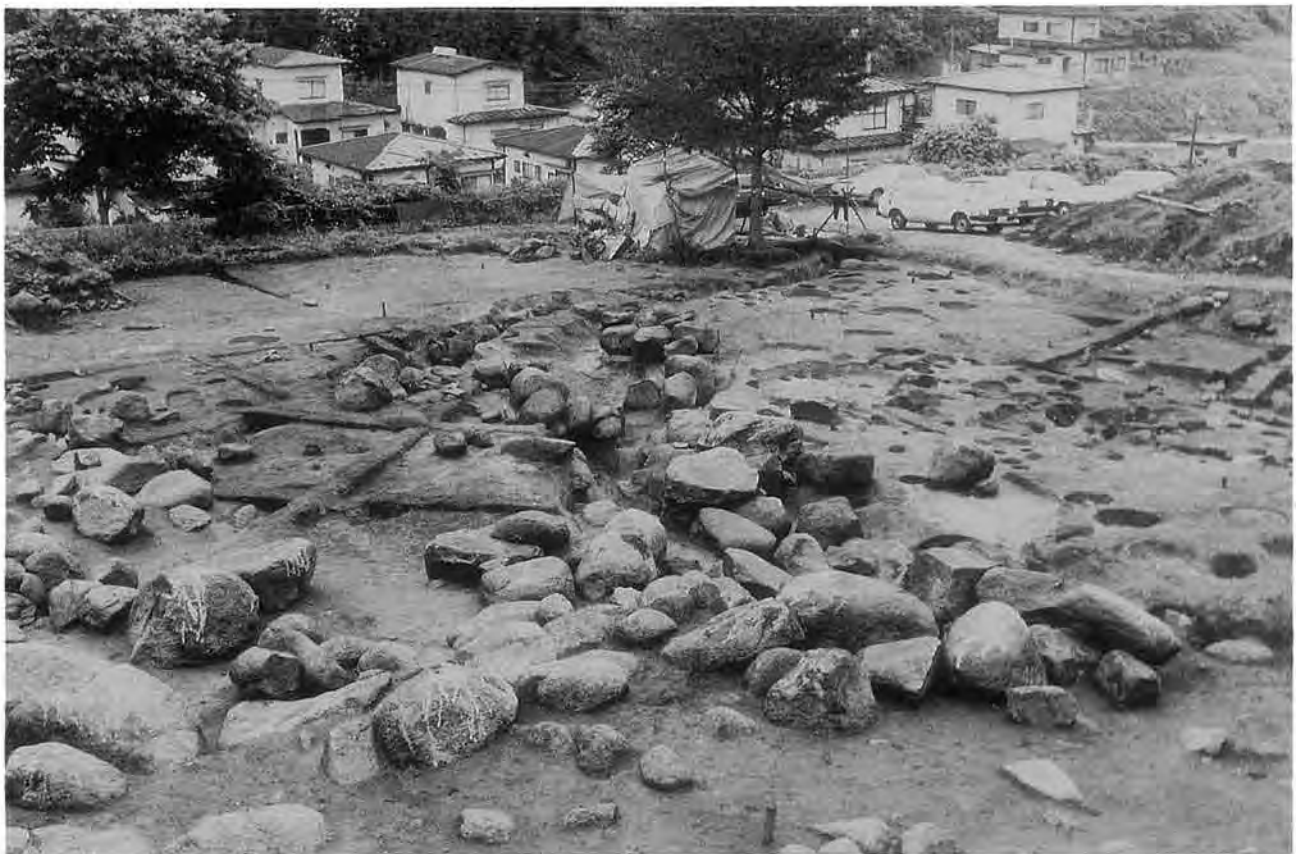
土砂（礫）流出状況（北西区）



土砂流出跡



土砂流出跡と竪穴住居跡



土砂の流出状況（東南区）

第4図版



土砂の流出状況（中央部）





第1号～4号竪穴住居跡（完掘）



第1号竪穴住居跡（完掘）

第6図版



第1号竖穴住居跡（土層断面）①



第1号竖穴住居跡（土層断面）②

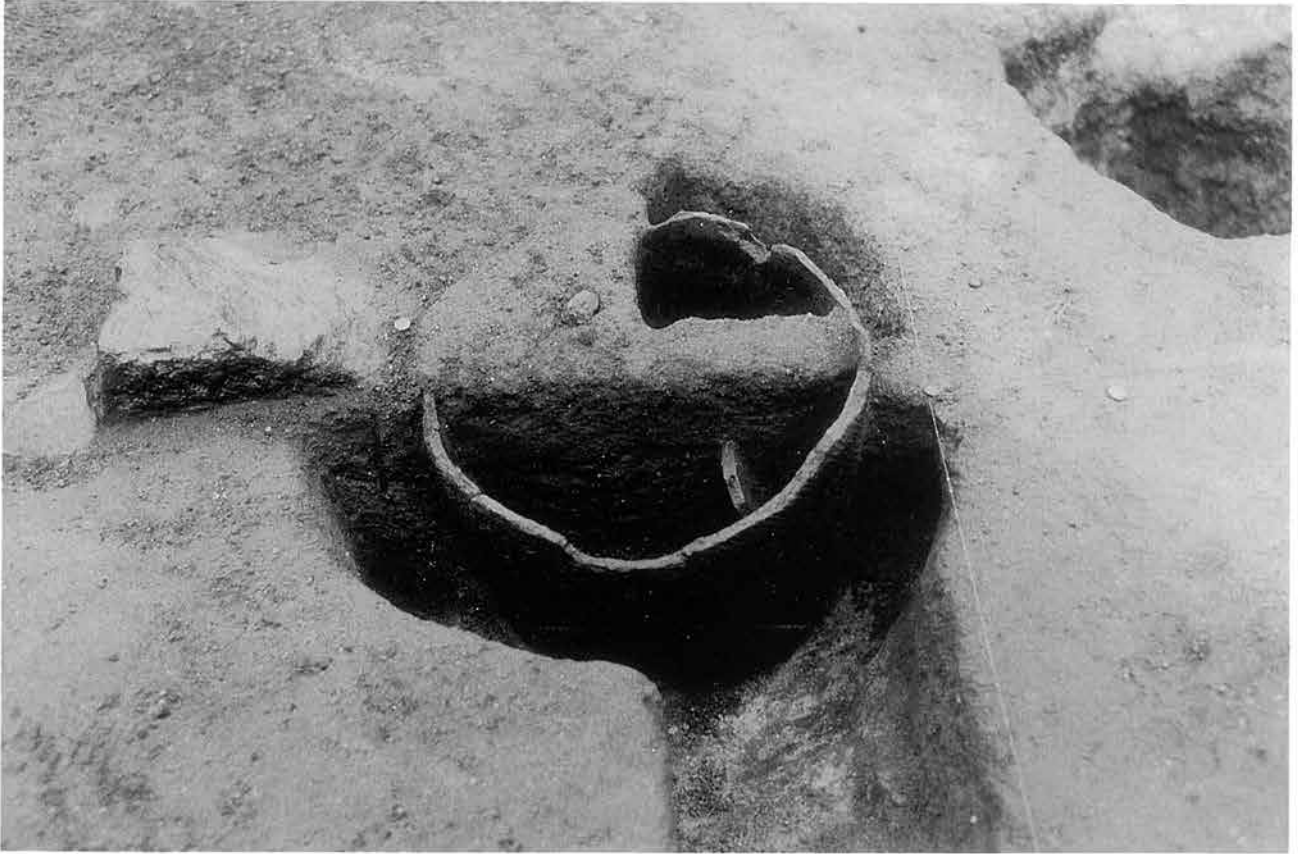


第1号竖穴住居跡石囲炉

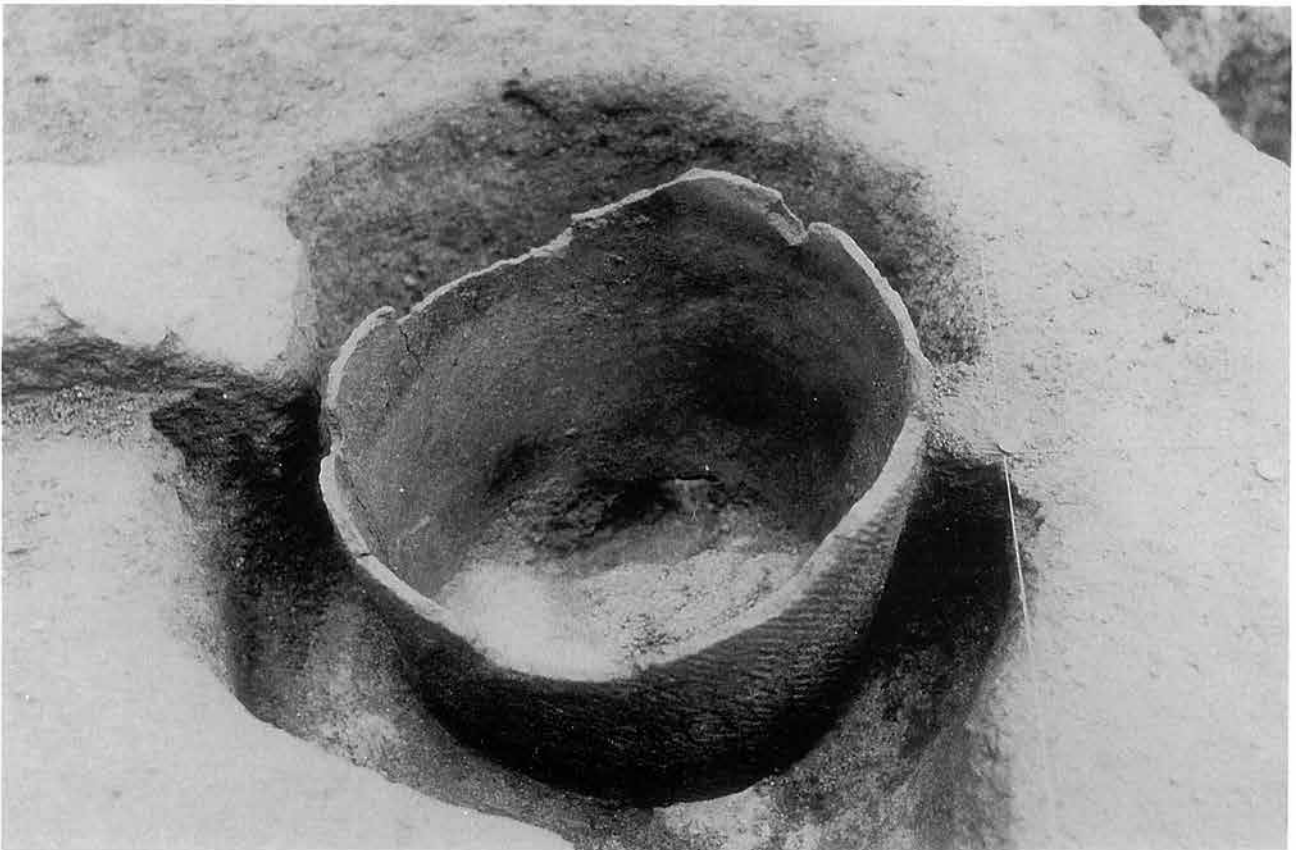


第1号竖穴住居跡石囲炉内の土器片出土状況

第8図版



第1号埋設土器（断面）



第1号埋設土器（完掘）

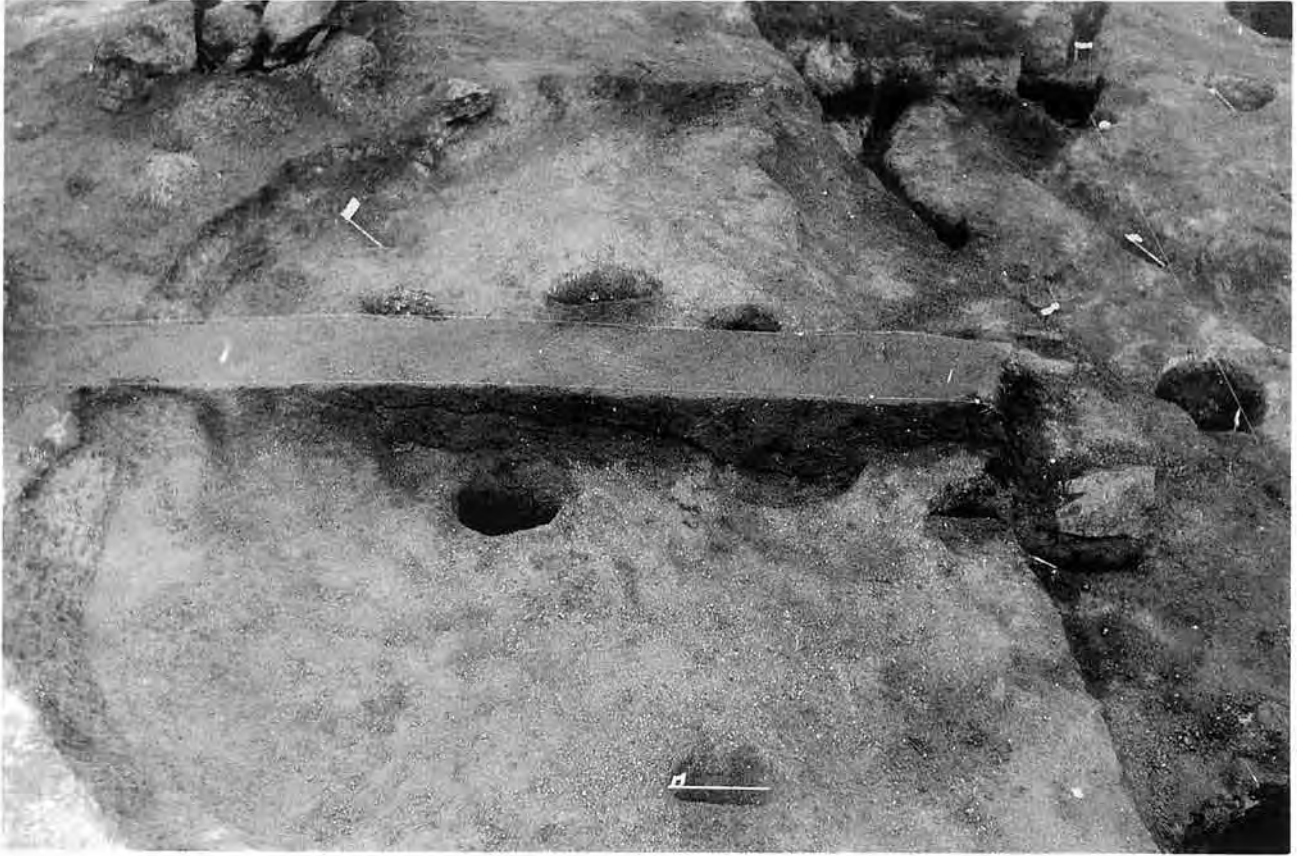


第1号土坑跡（土層断面）

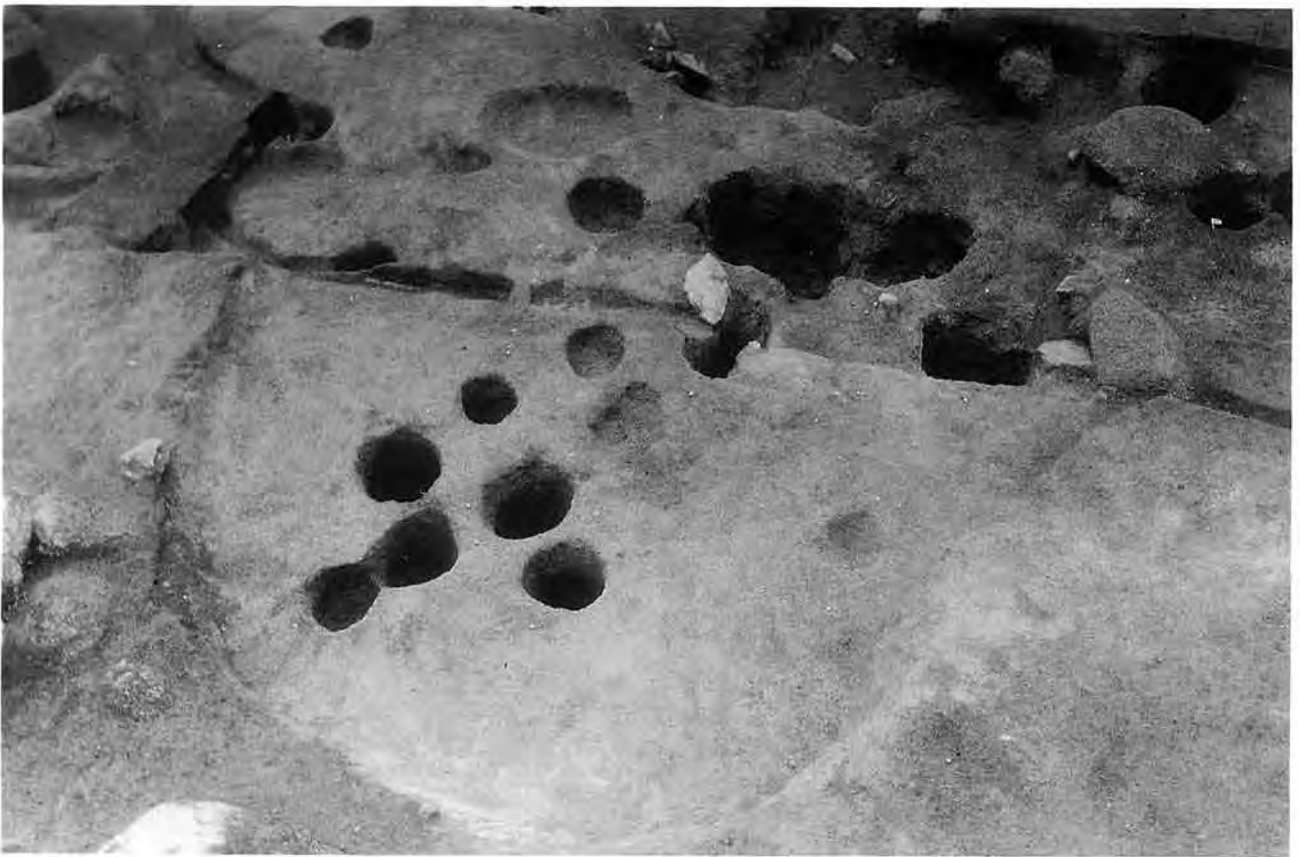


第1号土坑跡（完掘）

第10図版



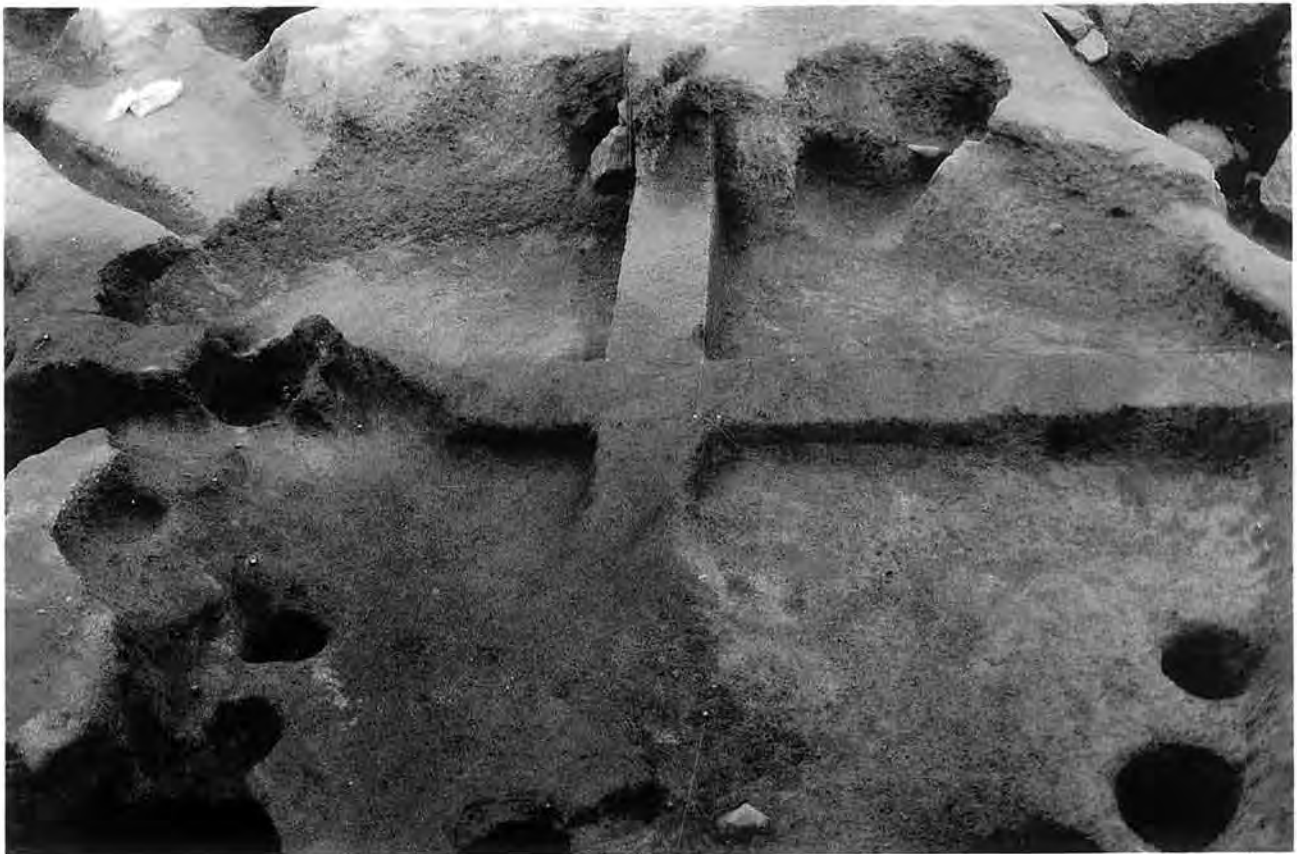
第3号竖穴住居跡（土層断面）



第3号竖穴住居跡（完掘）

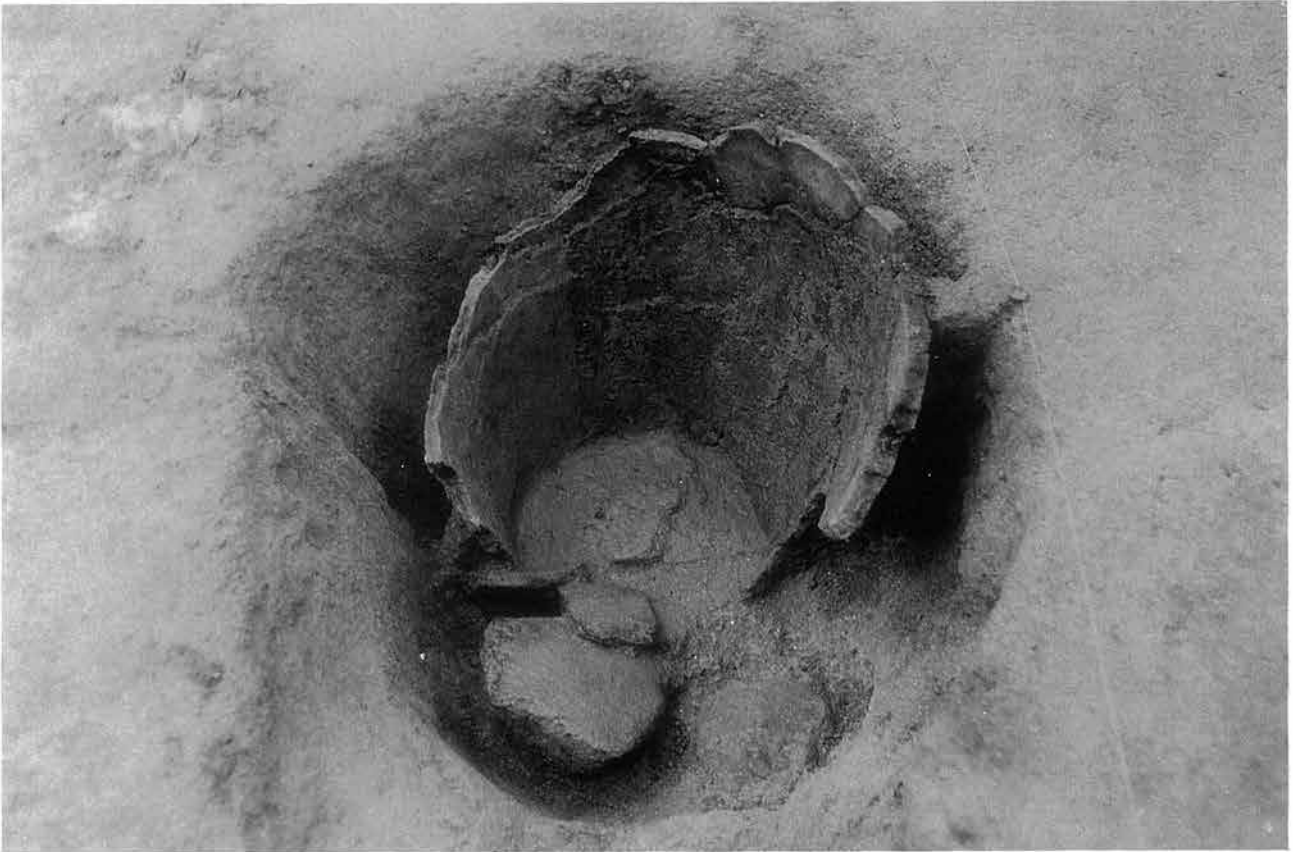


第4号竖穴住居跡（土層断面）

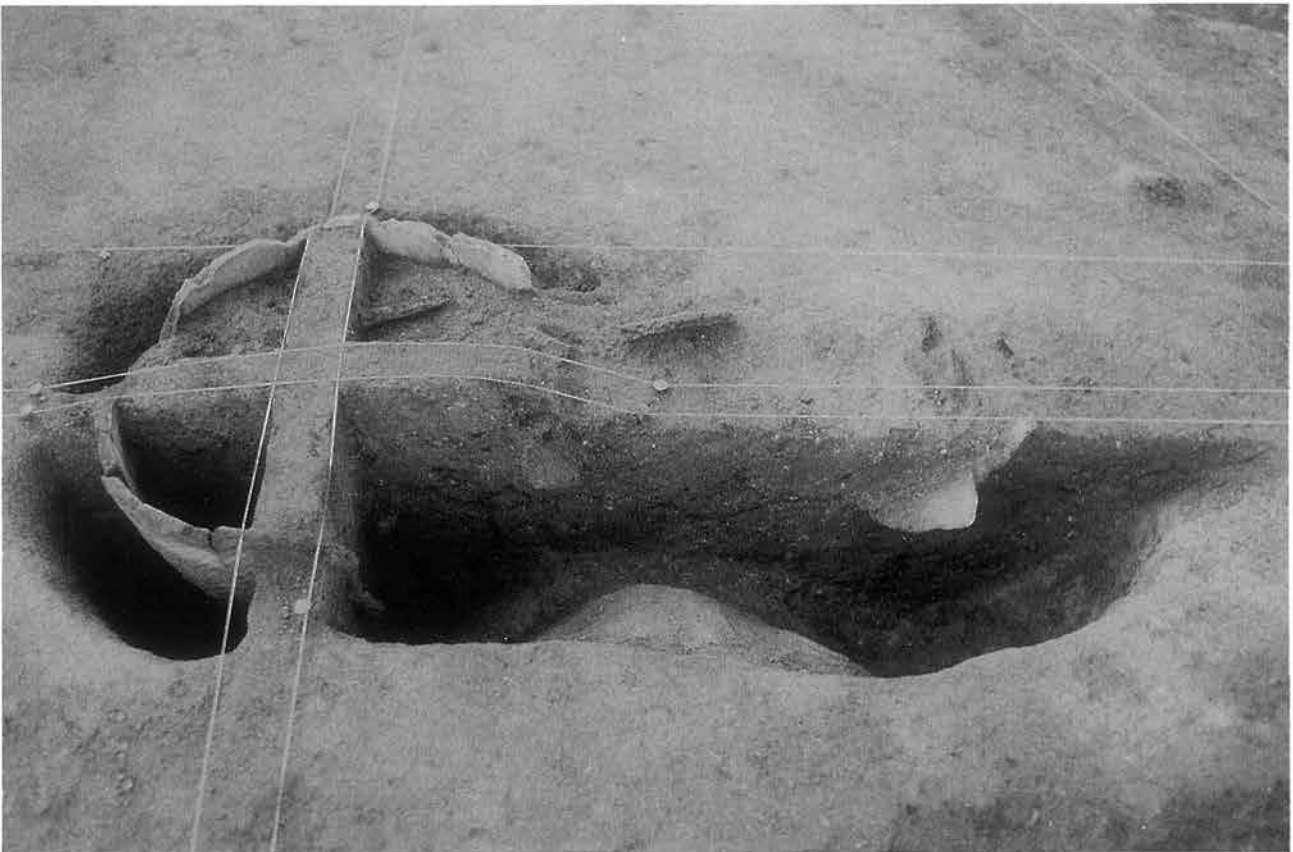


第6号竖穴住居跡（完掘）

第12図版



第2号埋設土器（完掘）



第2号埋設土器（断面）



南西区土器出土状況①



南西区土器出土状況②

第14図版



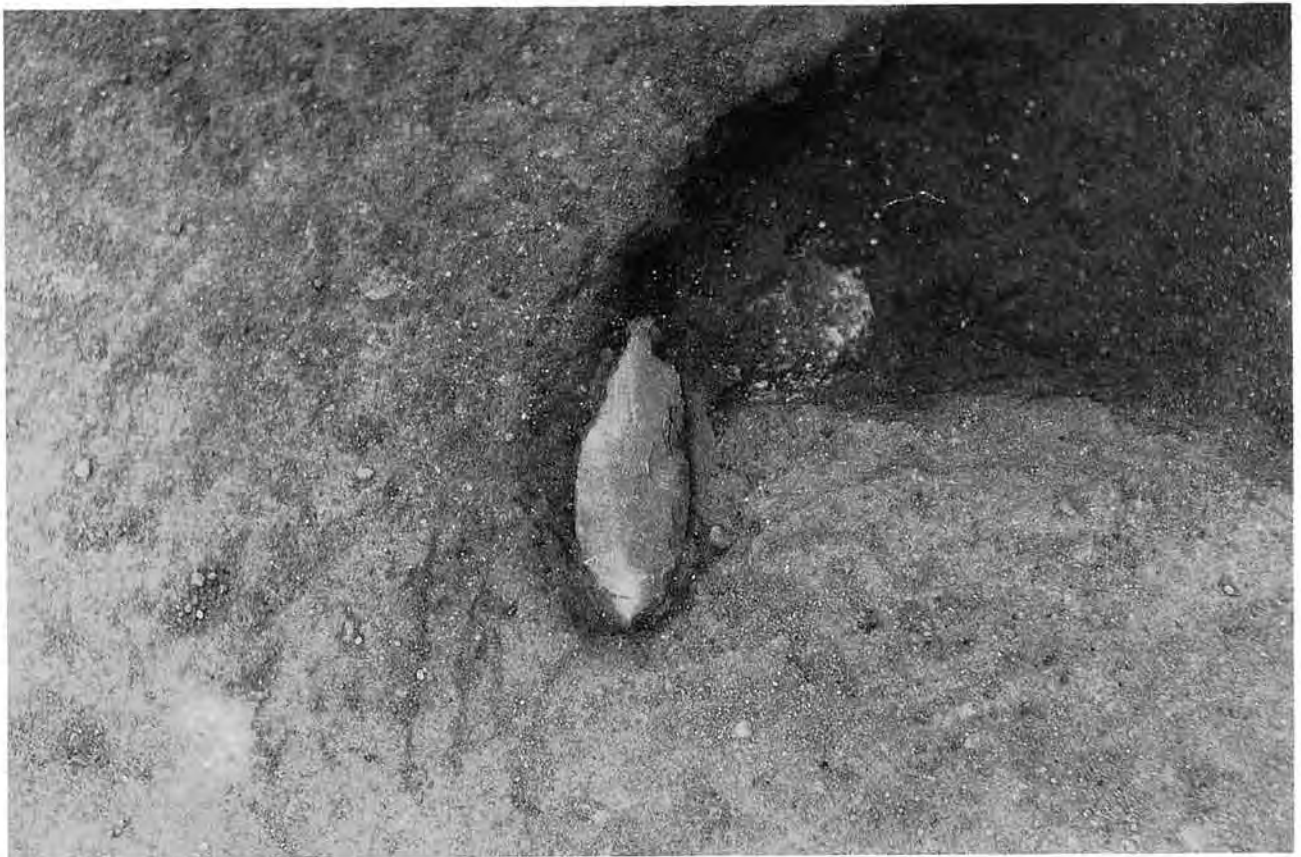
第1号竖穴住居跡出土土器（第12図1）



第1号竖穴住居跡出土土器（第12図2）



第1号竖穴住居跡出土土器（第12図3）



第1号竖穴住居跡出土土器石器出土状況（第16図120）

第16図版



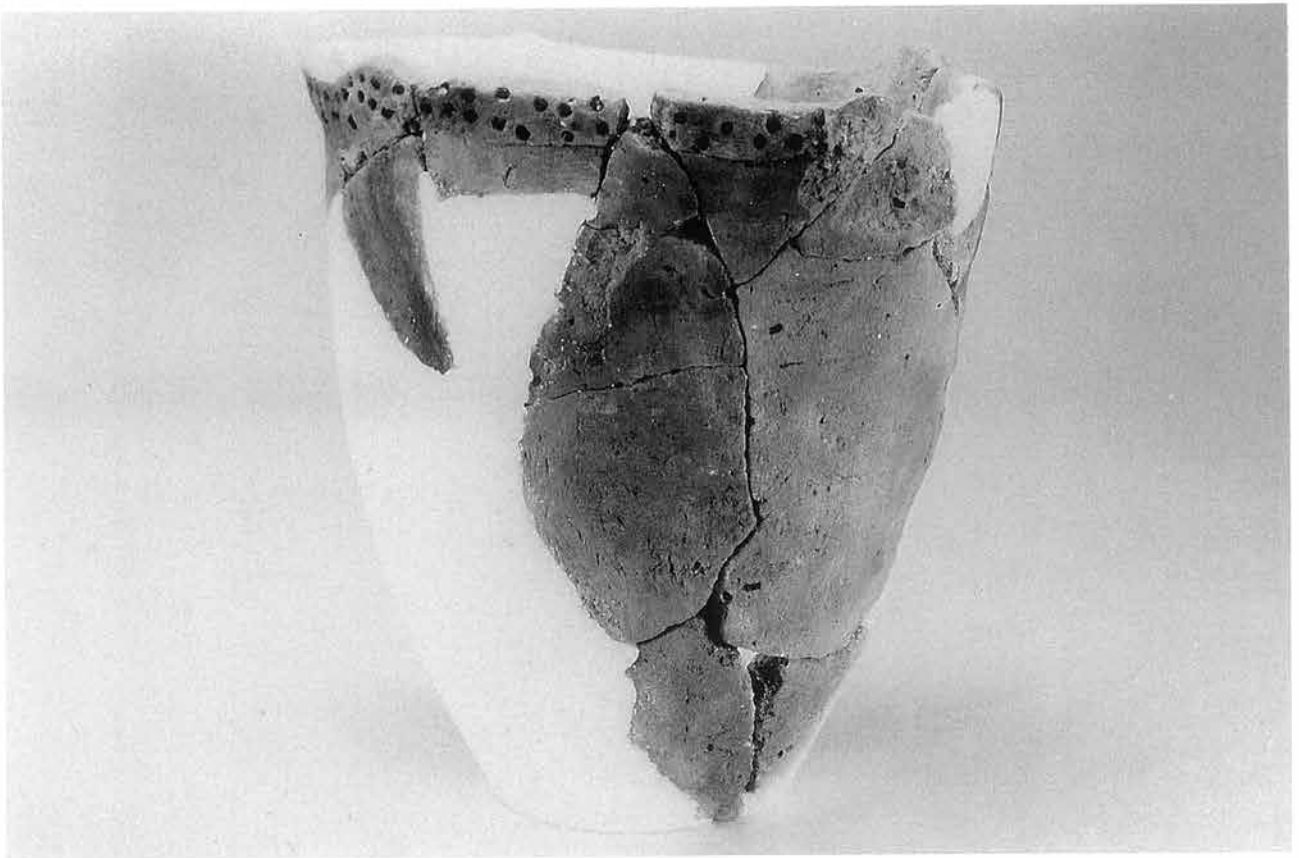
遺構外出土土器 (第48図10)



遺構外出土土器 (第49図11)



遺構外出土土器 (第48図1)

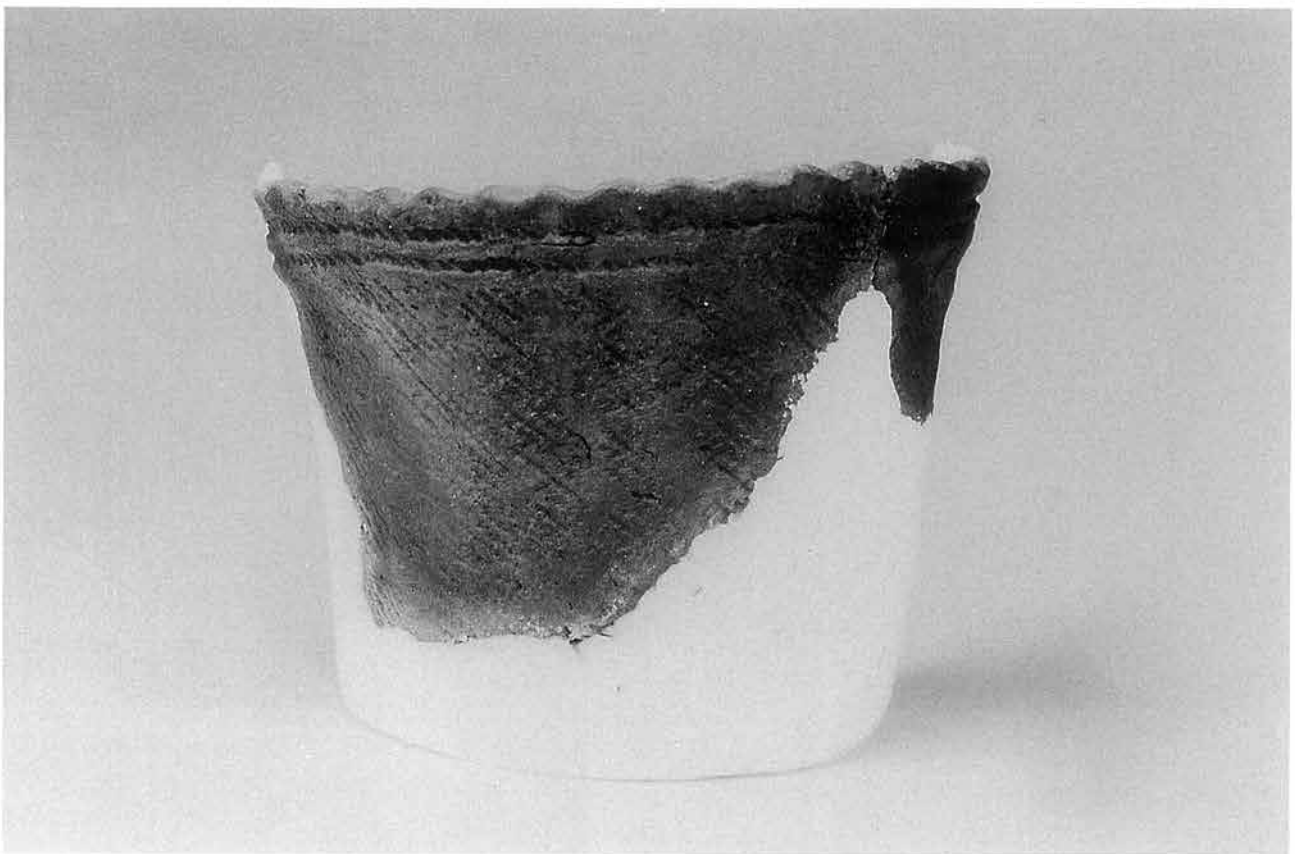


遺構外出土土器 (第60図207)

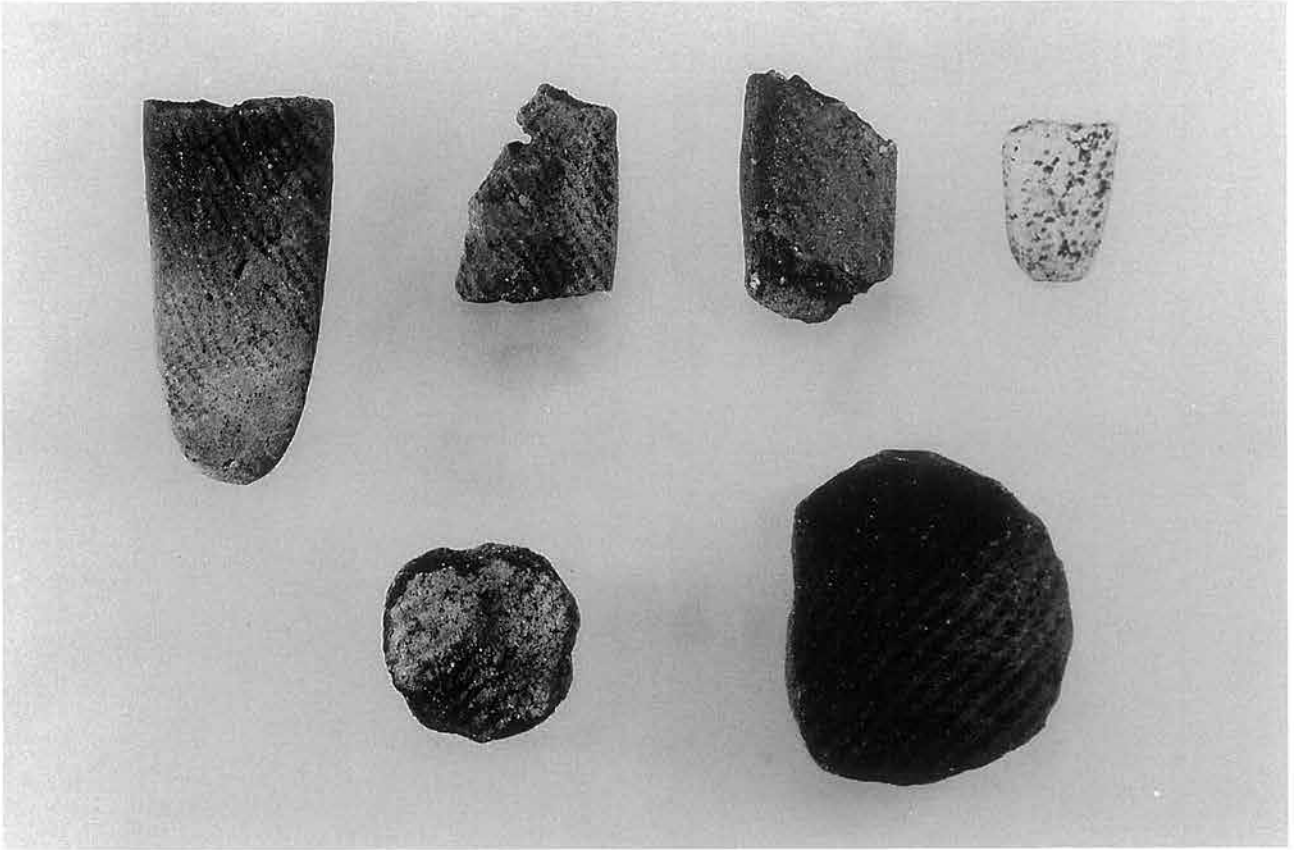
第18図版



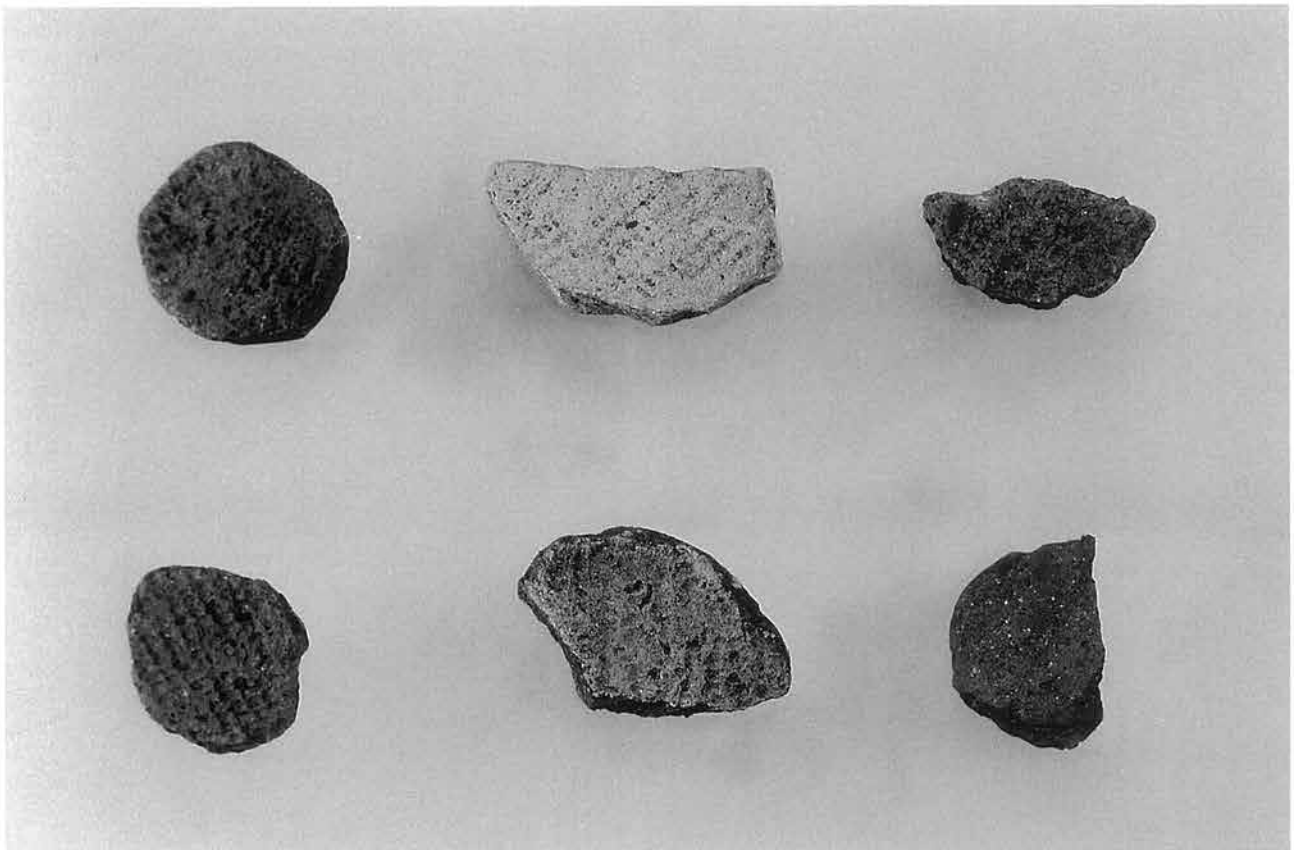
遺構外出土土器 (第56図140)



遺構外出土土器 (第62図246)



遺構外出土土製品 (第86図)



遺構外出土土製品 (第87図)

第20図版



遺構外出土石製品（第87図582）



発掘体験学習風景（山口小学校児童）

宮古市埋蔵文化財調査報告書33

高根遺跡

—平成3年度発掘調査報告書—

1992.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会
〒027 岩手県宮古市新川町2番1号
TEL 0193 (62) 2111

印 刷 花坂印刷工業株式会社
〒027 岩手県宮古市新川町1-2
TEL 0193 (62) 3125(代)